
東方夢月録

ふるべ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方夢月録

【Nコード】

N4833G

【作者名】

ふるべ

【あらすじ】

幻想郷 そこは、忘れられたモノが集まる地。人と妖怪が共に暮らす地。それは、この世界のすぐ近くに在り、そして遙かに遠い場所に在る。ふとしたきっかけで幻想郷に迷い込んだ主人公は、そこで一体何を見るのか。……………多分そんなお話。シリアスだったりそうでもなかったり。原作も軽いノリだし。

序（前書き）

この小説は、同人サークル「上海アリス幻樂團」作成の弾幕STG、「東方Project」を基にしたファンフィクション（二次創作）です。よって、二次設定、キャラ崩壊など、原作では有り得ないようなことが起こるので、そういうのが大丈夫な方のみ閲覧してください。あ、あとオリキャラもいます……。 「こんな駄文ZUNさんの足元にもおよばねえよ!」、とか「こんなの私の好きな じゃ ない!」、という状態になりそうな方は、ご遠慮したほうがよろしいかと思えます…。大丈夫な方は、原作である東方、及び神主のZUN氏に多大な敬意を払いつつ、水羊羹でも食べながらまったりご覧ください。

序

誰かの泣く声が聞こえる

ずっと遠くの方から……いや、すぐ近く……なのか？

かすかに聞こえていた泣き声は、だんだん近くなってきているようだ……

誰の……声だろうか……

どうして……そんなに泣いているのだろうか……

此処は……？

此処には、悲しみが満ちている

此処は………葬式場か………？

そう……とても……小さな式場だ
参列者はそう多くないようだ

壇上には、故人の写真がかけられている……

黒衣をまとった人々は皆、一様に面を伏せている

ところどころで、すすり泣く声が聞こえる

二人ともまだ若かったのに、可哀想ねえ……などと言う声が聞こえた
可哀想……

だが、さっきから聞こえていた泣き声はこれではないはずだ
あの声は、もっと、もっと悲愴な……

式場の中で、一際目立つ者がいる……

どうやら子供のようだ…

亡くなったのは、子供の両親なのか

幼いながらも、両親がもういないことを理解しているのか

それとも、式場に満ちる悲しみを感じ取り、不安になっているのか

子供の泣き声が聞こえる

ああ……さっきから聞こえていた声は、この子のものだったようだ

おかあさん…おとうさん…

どうしていなくなっちゃたの？

どうしてぼくをおいてったの？

一人ぼっちになっちゃうの？

どうしてなにもいってくれないの？

どこにいっちゃったの？

幼いながらも、その子供は両親がもういないことを理解しているらしい

泣き声に交じって聞こえる、悲痛な問いかけ

そこには、ただ一人で残された寂しさと、もう会えないという悲しみしかない

幸せだった小さな世界は、いとも容易く壊れてしまった

その小さな心に、運命は、重く、残酷な傷を残した

もしも……もしももっと幼かったならば

死というものを理解し得なかったならば

ここまでの悲しみはなかったであろうに

泣いていた葬列者の一人が、子供を強く抱き締めた

だが、子供の泣き声は止まなかった……

泣き声が…耳にこびりついて……離れない
何か…悲しみを呼び起こされるような…

誰かの泣く声が聞こえる

あれは

あの 光景は

俺の

一章…とある朝

ピピッ、ピピッ、ピピッ、ピピッ、ピピッ、ピピッ、ピピッ、
規則正しく鳴る目覚ましの音…だんだん音の間隔が無くなっていく。
ピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピ

昨日は寝るのが遅かった…もう少し寝ていたい。

そう思っただけをささる…が、そういえば昨日、目覚ましを筆筒
の上に置いた気がする。

意識はないのだが、どうやら脊髄反射的に枕もとの目覚ましを切っ
てしまうのだ。

そのせいで、最近よく寝坊をするようになってしまった。もっとも、
今みたくただ寝ていたい時もあるのだが。

仕方ない…寝ぼけ眼をこすり、動くのを頑なに拒否する体を何とか
動かして筆筒に向かう。

目覚ましを止めて、布団の上に戻ってきたときには、もう一度布団
に入る気は起きなかった。

布団を片付け、とりあえず朝飯の準備をすることにする。

といつても、昨日の残り物だが。

それを火にかけている間に、洗面所で顔を洗う…冷たい水が、意識
をだんだんはつきりさせてくれる。

いまだ霞がかかったような頭で、ついさっきのことを思い出す。

あの夢……

あれは、俺の小さい頃の光景……だ。

確か…十数年ほど前の出来事だったであろうか

俺の両親は、交通事故で亡くなった。二人の結婚記念日のことだっ
た。

俺を母方の祖母に預け、久しぶりに二人で出掛けていたそうだ。

俺は、あんまり手のかからないぐらいの年になったとはいえ、まだまだ両親に甘えていた気がする。

なかなか二人きりの時間というのも取れなかったであろう。

あんまり遅くならないうちに帰ってくるね、と二人とも笑顔で家を出て行った。

俺が最後に見た両親の顔だ……二人とも幸せそうだった。

帰り道、飲酒運転のトラックと正面衝突した。即死だった。

家に電話がかかってきたときは、よく覚えている。

祖母は泣き崩れていた。

俺には何が起こっているのか理解できなかった……。いや、理解しなかった。

お父さんとお母さんはもう帰ってこないんだよ、と、涙ながらに祖母が教えてくれたとき

そんなのウソだ、と言って信じようとはしなかった。

だが、きつと薄々はわかっていたのだろう……。

しかし、その事実を認めてしまったら、もう本当に会えないような気がしていたんだ。

両親の死を唐突に理解したのは、その式場。

壇上かけられた両親の遺影。線香の匂い。

俺は、火のついたように泣きだした

あの夢は、その時の光景

その後俺は、親戚の老夫婦に面倒を見てもらうことになった。

父方の祖母はすでにこの世を去っていたし、母方の祖母は、事故があった一週間後ぐらいに亡くなった。

祖母は結構な年だったし、おそらく心労が祟ったのであろう。無理もないことだと思う…。家族、と呼べるような近しい間柄の人は、みんないなくなってしまった。

そんな俺を進んで引き取りたがる人はいなかった。その老夫婦を除いては。

今思い返すと、本当にありがたいことだ。これからのことを考えると、お金はもちろんかかる。

だが、それ以上に、事故後の俺の面倒を見るのは相当な心労がかかったと思う。

二人とも、俺の祖母くらいの年だった。そんな年で、俺の面倒を見るのはとても大変なことだったろう。

幸い、両親が遺してくれたお金で、俺を高校、大学に入れるのには困らなかった。

もちろん高校は都立に入った。なるべく負担が少ない方がいい。

俺もバイトなどをして、自分の小遣いは自分で稼いでいた。

大学に入ると俺は、自ら一人暮らしを申し出た。これ以上迷惑にはなれなかった。

二人とも迷惑だとは思っていなかっただろう。けれど、これ以上は甘えていられなかった。

静かな余生を送らせてあげたかった。自分が毎日いるだけで、結構騒がしいだろう。

いつでも帰ってきなさい　　住み慣れた家を出る日に、そう言われた。

今でも、季節の節目には帰るようになっている。あの事故以来、一人になってしまった俺には、あの家こそが帰る家なのだ。

なんて、いまだに少し甘えているのかもしれない。

そして、今。大学二年生になった俺はこうして朝飯を作っているわけ……

「うわっど?!」

まずい、どうやら考え事をしてたせいでカレーを火にかけ過ぎたようだ。

「うあ………焦げてるし………最悪だ……」

焦げてしまったカレーが、鍋にべったりとこびり付いている……

なかなかの力作だったんだが……一晩寝かせた時の味を楽しみにしていたのに……

「仕方ない、おかずは納豆でいいや……」

久しぶりにまともな朝食を食べる、と思ったが、どうやらそうもいかないらしい。

「あの鍋、洗うのめんどくさいな……ボロがきているから、いつそ新しいの買うかな」

「そーいや、ノートがもう一杯だったかな……ついでに文房具屋にも寄って……」

「冷蔵庫の中身もずいぶん寂しくなったし、スーパーにも行くかな」なんて、とりとめのないことを考え、ぼんやりする頭を起こす。

軽い朝食をさっさと終え、着替え、大学に行くための準備を済ませて、住み慣れた部屋を後にする。

狭く、質素な家だが、一人暮らしには十分な家だ。少しぼろいのもなんだか味がある………ように思う。

玄関の鍵をかけながら思うのは、あの夢のこと………ではなく、今朝焦がしてしまったカレーのこと………ああ、さようならカレー。

人間の三大欲の一つを満たせなかった衝撃は結構大きいのだ。ぐだぐだと尾を引くほどに。

「おっと、こっちの道じゃなかった」

くだらないことを考えていると、道を間違えそうになってしまった。

このあたりは道が多少入り組んでいて、迷うととんでもないところに出たりすることがある。

道の両脇は同じような家で囲まれていて、目印にするものがなかなかないのも原因のひとつだ。

越してきたばかりの頃は、よく迷ったものだ……二十分、いや三十分近く彷徨ったこともある。

ここから大学まではそう遠くない……のだが、十分も遅れれば死活問題なのだ、俺にとっては。

だが、この道の真の怖さは、遅刻を招くことではない。

その真価は、夜にある。なんと真つ暗闇の中を歩くことになるのだ。確かにここは都心ではある、が、夜中になると驚くほど真つ暗になり、とても不気味なのだ。

なにせ、街灯が少ない。街頭があってもいいようなところにはないのは、なぜだろうか。

車通りもめつたになく、行き交う人の姿がほとんどなくなる真夜中過ぎの時間は、一種異様な雰囲気さえも漂うほどだ。

闇に飲み込まれそう……そんな錯覚をしたこともある。その時はもちろん家までダッシュしたが。

この世の中において、幽霊異常に怖いものは無い。断言しよう。もしも、真夜中のこんな道で迷ったら……と思うとぞっとする。

そんなことを考えていると、ふと背筋が寒くなってきたので、小走りです学校へ向かうことにした。

光が射していても、怖いものは怖い。

一章…とある朝（後書き）

次回更新は30日を予定しております

二章・日常

ややビビりながらも、なんとか学校に着いたのは、講義が始まる少し前だった。

ふむ、目覚ましがちゃんと働いてくれたのは大きいな……

それなりに広いキャンパスには、すでに多くの生徒が登校していた。都心にある割には、この学校は緑が多いことで有名である。校内の環境もいい。

これから講義のものや、休憩している者など、みんな思い思いの形で過ごしている。

やはり、早めに来ると心のゆとりが違う。遅刻ギリギリのときは周りのことを見る余裕がないし……。

これだけ落ち着いてまわりを観察するのは、なかなかないことだった。

俺はすぐ講義があるので、部屋に向かう……途中、何人かの顔見知りと挨拶を交わした。

部屋に入ると、いつもの席へ。ここだけは譲れない。

しばらくすると、眼鏡をかけた、小柄な男の教授が部屋に入ってきた。

いつも通りの席で、いつも通りの講義を聞く。なにも変わらない。

ほどなくして、後ろの席の生徒数人が小声で会話しているのが聞こえてきた……これもいつものことだ。

そう、いつも通りの毎日……

朝起きて、学校に行き、授業を受け、サークル活動をし、友達と遊び、家に帰り、寝る。

これらの「日常」は定型化し、それは絶え間なく続くもの……と、

つい思い込んでしまう。

そう、みんな、日常は崩れないと思い込んでしまうのだ。

世界は、自分にだけは優しいと。

どんなことがあっても、この日々は崩れないと。

だが、違う。

この世の中に崩れないものなどない。全てのものはいつか必ず壊れる運命なのだ。

そして、世界はそんな崩壊を否定も肯定もしない。

ただ、それらを受け入れるだけだ。そして、在り続ける。

時にそれは優しくもあり……そして、時に何よりも残酷である。

身をもって知っているのだ。俺は、それを。

あの、事故で。

俺の、世界は、崩れた

……講義に出ていながらも、ずっと上の空だ。

思考は常に、あの事故のこと、そしてこの日常についてに向けられている。

例えば、後ろで喋っている生徒が全員退出させられたら？

それは、わずかな綻びでしかないかもしれない。それも「日常」の差異に入れるかもしれない。

関係ないその他大勢の人は、それを変化だとは思わないだろう。もしも、その生徒が退学処分になったとしてもだ。

壇上で熱心に語るあの教授がいきなり倒れたとしたら？

これも、また同じように、「日常」を崩しえるものではないだろう。無関係な人にとっては、ちょっとしたことだろう。

そう、自分の身に直接かわるようなことでないと、「日常」の脆さを知ることはいけないのだ。

退学になった生徒たちはいったいどうなるのだろうか？

倒れてしまった教授の家族は？

昨日までの日々は、もう来ないだろう。

確かに、いつかはその事を受け入れ、また日常は返ってくる。

だが、それは昔とはまったく違う日常
壊れ、再び創られる。

かく言う自分もそうだろう。あんなことがなければ、当たり前の日常を当たり前と感じていただろう。

愚か、というわけではない。それが、普通なのだ。

そして、できればそれは知らない方がいいことでもある。

知っていても、何かを変えることはできない。ただ、心構えが違う、その程度のこと。

何かあった時に、ああやっぱり、と納得できるだけ。それは……
悲しいことだと、思える。

もちろん、これは俺だけが知っている、なんて思いあがるわけでもない。もっと酷い目にあつた人なんてごまんといえるだろう。

それに、俺はこんなことを知りたくなんてなかった。ただ、普通に生きていられれば良かった。

知らない方が幸せ……まったく、その通りだ。

だから、日常の脆さを知ってしまった俺には、この変わり映えのない毎日がともうれしい。

変わらない日常なんてないと知っているから、俺はこの一瞬を大切にしていきたい。

そして、願わくは、この日常が壊れませんか……

柄にもなく、長々と考え事をしているな……と思った。

やはり、朝見たあの夢が影響しているのだろうか。

あんな夢を見たのは初めてだから……

あのことは、自分の中で割り切ったつもりだったが、もしかして俺は

「おい、寝てるのか？ 仁科」

小声で、不意に隣から声をかけられた。ふと、右を見てみると、友人の柿本がいた。いぶかしげな表情で、こちらを窺っている……。

「なんだ、起きてたのか？ それにしてもボーっとしすぎじゃあないか？」

半ばあきれたような口調で、柿本は言う。

「あれ？ 柿本、いつからそこにいたんだ？」

「おそらく、お前が部屋に入ってからすぐだ。まったく気づいてなかったのか？ 確かに、こつちから声は掛けなかったが……」

そんなんで、ちゃんと講義を聞いているのか？」

「失礼な。先生の言葉は一字一句と逃していないぞ？ 確か、さつきはカレーの起源についての話だったよな」

「なんだよカレーって……どこから湧いてきたんだそれは。まあ、起きてるならそれでいい」

「ちなみにカレーってインド固有の言語じゃないんだぜ。知ってたか？」

「いや、知らない。というか、カレーの話はもういい。いい加減講義に集中しろ」

それだけ言つと、さっさと前を向いてしまつ。

柿本 悠

俺の友人の一人。

一年のとき……入学式以来の付き合いだ。なんとなく意気が合ったのだろうか。すぐに仲良くなった。なかなかの美男子で、おまけに頭の回転も速いときたまんだ。まったくうらやましい限りで……

女子が放っておくわけがないんだから。ただ、本人曰く、モテてはないらしい。

とても真面目な性格で、常日頃何かと世話を焼いてもらっている。もっとも、そのほとんどは小言だけだ。

やれ遅刻するなとか、もっと余裕を持てだの、何かとうるさいのである。

確かにありがたいのではあるが……

とはいえ、確かに気を抜き過ぎていた節がある。らしくもない。

不安ばかりじゃあ前には進めないし、実際そのときにならないとどーすることもできないのだ。

そんなときはそんなときでどうにでもなるだろうし……

もともと楽道家なのだ。将来を悲観しすぎるのは性に合っていないのだ。

少し頬を叩いて、気持ちを入れ替える。講義に集中するか……

教授は何やら熱弁をふるっている。相変わらず後ろの席はやや騒がしい。柿本は隣で熱心にノートを取っている……。

ああ、今日もいつも通りの毎日が始まる

二章・日常（後書き）

次回は四月二日です

三章・昼下がり

午前中の講義を終え、ただいま昼の十二時半。

朝食食べたご飯は既に消化を終え、栄養となつて体を駆け巡っている時間だ。

当然、空っぽになった胃袋は食事を要求するわけで…

十一時頃から呻り始めた腹をなんとかなだめ、有難い柿本の小言に耐え……

とうとうこの時間を迎えたのだ！

そして、今。俺は柿本と一緒に学校の食堂にいるのだが

「うーむ……」

そう、悩んでいるのだ。

私は今、非常に悩んでいるのだ。

目の前には、食券の販売機。

食欲をそそる様々なメニューが大量に並んでいらっしやる……

さあ、どれを食べようか。

正直もう我慢の限界で、どれでもいいからとりあえず飯！…と言いたいところだが。

やはりここは慎重に行くべきだろう。

落ち着いて…冷静に見極めるんだ。

焦りはとんでもないミスを生む……先人たちが、それを証明している。

この判断が午後のテンションを決めると言っても過言ではない。

となればこの選択……非常に大きいものになる！考える……考

えるんだ！

まずは、条件の設定から始めることにする。

第一として、腹が膨れるもの。

第二に、ここ最近で食った物は避ける

第三、食いたくないものは食わない……よし、これでいい。

とすると……

ラーメン？いやいや、それはおととい食った。

定食物？いや、今は和食っていう気分ではないな……

パスタか？いや、何となく腹が膨れないような気がする。

いや、まてよ。そうだ、中華という手もあった！

いやでもパスタ食べたいような……

ああやっぱり和食もいいかも。

だが、中華という今の閃きは、もしや天啓ではないか？

くっ、しかしパスタも捨てがたい……

考えれば考えるほど深みに嵌っていく……もはや打開策はないのか。

後ろに並んでいる列もどんどん増えていき、このままではまずい。

嗚呼、俺はいつたいたいどうすればいいんだ！？

「……………」

「……………」

「……」

「遅い」

広い食堂は、既に多くの生徒で埋め尽くされている。

その一角のテーブルを確保している、柿本の第一声がこれだ。

当然ながらの不満顔。

それもそのはず、俺が食物を確保してくるまで、彼はテーブルを確保していなければならなかったからだ。

彼も人の子、当然ながらお腹もすくだろう。

その状態で、食堂に漂う美味しそうな匂いを嗅がされ続けること……それは、さながら拷問のようだと思う。

俺には耐えきれぬ自信は無い……彼だからこそできることなのだ。

「いや、悪い悪い。なかなか決まらなくてさ」

とりあえず謝るところ。

食を断たれる辛さは、十分に理解しているつもりだし。

「まったく……食べ物のことになると急に優柔不断になるんだよな、お前は。で、さんざん迷った拳句の一品は何だ？」

「うむ、和食か中華かパスタか……候補に出たのはこれだけ。そして俺が選んだ一品は！」

「はいはい、で、一品は？」

「カレー」

「……さて、俺も買いに行ってくるかな」

「いやさあ、なんか冷めた態度だけどさあ、美味しいぞ、カレー？」
俺の声を無視して、柿本はさっさと食券を買いに行ってしまった……
しかし、何故はじめからカレーが選択肢に出なかったのだろうか。
朝の出来事を考えると、俺が昼飯にこれを選ぶのは必然である。
ただそれだけが不思議だった。

至福の一時を終え、お腹もなんとか落ち着いた。
やはり、まともな食事はいいものだ。

なんとなく、ストレス発散にもなる気がする……

心地よい満腹感に身をゆだねていながら、そんなことを考えている。
すると、正面にいる柿本が不意に真面目な顔になった。

「そっぴやお前、また人に金を貸したらしいな」

ふむ、昼飯後恒例の小言タイムか……

「ああ、そうだが？」

別に悪いことをしているわけでは無いし、素直に答える。

「そうだが、って……。なあ、もういい加減止めたらどうだ？前の分もまだ返してもらってないだろ」

「何でだよ、人助けじゃないか。それに、まとめてちゃんと返すって言ってたし……」

何故、そうまでも止めることを促すのだろうか？

これは、人助けだろう？

困っているなら助けるのが道理ではないのか。

例えそれがどういうことであつても、だ。

「何でそう素直に信じる？今まで、そう言ってきた奴等から、ちゃんと返してもらってるのかよ？」

「もちろん、ちゃんと返してもらえる時もある」

「時もつてことは、無いこともあるんだろ」

「……………」

「いい加減、利用されてるってことに気づけ。だいたいお前はお人

好しすぎる。……………お前、今まで何件詐欺にあった？

何回騙された？どれだけの損をした？お前ほんとに分かってるのか？つい先月のことだっただろうぞ！

あの時は、俺が近くに居たから良いものの、お前大金を失う所だったんだぞ！」

「そついやそつだつたな」

「お前なあ……………！」

善意で言ってくれているのは、俺にもわかる。

とても気を使ってくれているのも、わかる。

そして、とても迷惑をかけているのも、分かる。

だが。

彼はなぜ、人を信じないのだろうか？

信じることはとても大事だと思う。

相手を信じなければ、そこから先の交流には繋がらない。

相手が信頼にこたえてくれなかった時は……………俺が悪いのだ。

俺の信頼が足りなかったのだ。

ただそれだけのことだ。

そつだ…それに。

先月だつて、結局何事もなかったのだ。

ならば、それでいいじゃないか。

結果として、何もなかったのだ。

大金も失わなかったし、あの事件は先月で終わったんだ。

過ぎたことは、今と関係ない。

そつさ、過ぎたことは、すべて水に流し

『そうやって、また忘れるの?』

「え……………」

それは、突如として湧いた声。

脳に、体に、手に、足に。

自分というすべてを震えさせるような声。

根源を揺らすような感覚。

自我が崩れていくような。

自分と世界の境界が曖昧になっていく

何だ、これは。

頭が、まるで沸いているかのようだ。

何も考えられない。

なにも感じれない。

視界が歪んでいく。

物の輪郭が曖昧になる。

視界に映る全てが、溶けているようだ…

いったい、何だっというんだ…。

今のは、柿本の声なのか？

いや、そんな筈がない。

それは、余りにも昏く、そして、深淵から響くような声。

これは、ヒトのものではない

「くそつ、もう時間か……。まだ言い足りないんだが……。おい、そろそろ行くぞ、講義に遅れてしまう。あと、いい加減金を貸すのはもうやめろ」

そうだ、これが柿本の声。

不意に目覚めたような気がした。

まるで、白昼夢を見ていたような感覚。

そう、白昼夢を

そして、とても悪い夢を。

少しふらつく足取りで、昼食のトレイを戻し、教室へ向かう。

向かう途中の廊下。

なぜか、柿本がとても遠くに見える。

彼と自分との距離は近い筈なのに、その背中はとても遠くへ。

まるで、何か壁があるようだ。

自分とあいつとの間に、絶対的な何かがある、と。

その壁を隔てて、自分はあるひとつと同じところにはいない、と。

例えるなら、動物と人間の差。

理性を持つ者と持たざる者の差。

同じはずのモノなのに、絶対的に違うところがある。

そんな、境界のような壁。

そして、いま自分を隔てているのは……

それは、いったいどんな壁なのか。

さっぱりわからない、わからないのだが……

今、確かに壁があるのだ。

なぜか、そんな気がした。

これは、さっきのせい、か？

不意に湧いたあの声。

深く、暗い声。

「くそっ……！」

かぶりを振って、声を頭から追い出す。

もう、次の、講義が

そして、俺たちは午後の講義を受ける。

暖かな春ならば、ついウトウトとしてしまいそうな雰囲気。

昼下がりの教室は、今の季節でさえ、どこか緩やかな時間が流れている。

さっきまでの感覚は、すでにどこかへ消えた。

眼には、いつも通りの風景が映っている。

柿本は、ちゃんと隣にいる。

そう、ちゃんと隣にいる。

さっき感じたような、遠くになどいない。

やはり、さっきのは悪い夢だったのだろう。

もっと、緊張感を持たなくてはいけない……

たるんでいるから、こんなことになるんだ。

集中しないとな。

……………。

ああ、そうだ、柿本。

ひとつ、言いたいことが、在ったんだ。

俺は、もしかた先月の事件と同じ人に会ったら、その人をまた信じ

るよ。

だってそうだろう？前は俺が悪かったんだ。

俺の信頼をもっと示せたら良かったんだ……

だから、今度は邪魔するなよ。

そしたら、相手が俺を信じなくなってしまうだろう？

でも、きっと、これを言ったら、君はまた怒るだろうね。

どうして怒る？

俺には理解できないな。

だって。

だってさ。

相手を信じるのは、普通のことだろう？

四章：一日の終わり

午後の講義はすべて終わった。

この時間は、帰る人も多いのだろう。

校門を目指す人は、多い。

柿本は、俺の講義が終わるひとつ前の時間に帰ったので、帰りは俺一人だ。

門を出て、自宅とは少し離れた道を歩く。

近くの商店街へ行つて、今朝焦がした鍋の代わりと、雑貨を買わなくてはいけない。

後………ついでに食料品も。

見慣れた道を歩く。

すれ違う人々も、どうやら帰路についているようだ。

サラリーマンや、買い物袋を持った主婦をよく見かける。

時折、子供のはしゃぐ声が遠くから聞こえる。

空は赤く染まり、太陽は西に傾いている。

いきに見上げた空は、既に別のものになっている。

黄昏時。

もうすぐ、夜の闇を迎える。

誰そ彼時

向いからくる人の姿が見えない。

昔の人は、この時間をこう呼んだ。

そう、電気など未だ無かった時代。

道に電灯の明かりはなく、消えゆく太陽が道を照らしていた時代。

赤色の風景に浮かびあがる、誰ともわからぬ影。

私が今行く道の先にいるアレは、何？

見知った人か、家族か、友人か、親戚か

それとも、

人ならざる物か。

妖怪は、この時間によく出るといふ。

そう、姿がちよと隠れるときに。

だが、人にも見えるように。

夜には、人は外に出ない。

かつて、夜は物の怪の時間だった。

だから、きつと妖怪は知っているのだろう。

夜に向かう狭間の時でないと、人間には会えない、と。

夜は、人は暗闇を恐れ、滅多に外に出なかった。

時を逃れば逃るほど、夜の闇は濃くなつていくだろう。

だが、今では。

道には、至る所に街灯がある。

夜の暗さを打ち消し、それは、明るく輝く。

俺が帰る道のりにも、それは言える。

学校を出てから暫くは、街灯が至る所にある。

と言つても、この時間はまだ点いてないことが多いが。

ふと、空を見上げると、僅かな雲の切れ間から、朧げに、月がその

姿を見せている。

幽かに見える月は、もうすぐ満月を迎えるようだ。

おそらく……明日にでも。

満月か……

月には、不思議な力があるような気がする。

人々の心を操るような、何かを。

そついや、何かで見たことがあつたつげ。

満月には、人の精神状態を興奮させる効果があると。

科学的に明確な根拠はなく、実際のところ、そんなことがあるのかはわからない。

もしかしたら、満月の日は、月が一層明るいから、人が、外に出ただけかも知れない。

それでも、何かがある気がしてならない。

L u n a t i c

英語で、気が狂っている、と言う。

西洋において、月は人を狂気に導く。

その力に魅せられるのは、人だけではない。

いや、違うな……

正しくは、人も、その魔力に魅せられるのか。

もともと、月はきつと

うつ、また背筋が寒く……

怖いと思うほど、なぜか余計に考えちゃうんだよなあ。

「とりあえず、今は買い物、買い物、と……」

考え事していると、いつの間にか目的地へ着いていた。

用事を済ませたら、暗くなる前にさっさと帰ろう……

あの通りを夜に通るのは、避けたいところだ。

冗談抜きで怖い。

家に着いたのは、ちょうど日が完全に落ちたころ。

なんとか、日が暮れる前に帰ってこれた。

一安心し、荷物を置いて、とりあえず一息つくとする。

棚から湯呑を出し、お茶を注ぐ。

紅茶も好きだが、やっぱり日本人はお茶だ。

だが、これを言うとジジイと言われるのだが。

旅先でも、着いたらもちろん真っ先にお茶を用意する。

もはや習慣になってしまっている……

これ、お茶切らしたら禁断症状出るんじゃないか？
あり得ないことではない。

ほっと一息つけ、テレビをつける。

これと言って見たい番組は無いのだが、なんとなくつけてしまつて音が鳴ってない又何だか寂しいものだ。

一人暮らしゆえか？などと思う。

適当にチャンネルを変える。

が、この時間はニュースぐらいが関の山か。

お茶をすすりながら、何ともなしに見る。

「流石に少しは見ないと、社会から取り残されるよな……」

ニュースキャスターが、今日の事件などを読み上げていく。

「次のニュースです。本日、午後六時ごろ、新宿駅構内で、男性の変死体が見つかりました。」

男性の名前は穂元武博さん。死因は、脳梗塞です。目撃者によると、新宿駅構内で、突然裸踊りをしたのち、急に倒れた、とのこと。また、男性は、右手にやかん、左手に麦藁帽子を持っており、とても不自然な状況で発見されました。

警察は、これを事故と判断。殺人の可能性は極めて低い、との見解が出されました。

男性は、都内の中学校の教師をしており、今日も、特にいつもと変わった様子はなかったそうです。では、次の………」

なんだか、ずいぶん風変わりな事件だな……」

でも、脳梗塞ならあるようなものかな？

お茶を飲み干したので、立ち上がり夕食の準備をしに、台所へ向かう。

今日の夕飯は、マーボー豆腐だ。

昼飯に食えなかったし、夕飯で食おうと思って先ほど買ってきたものだ。

一から作るのは、とてもめんどくさいので、豆腐を入れるだけのや

つを。

なんというか、本当に便利になったものだ。

夕飯を食べ終わったら、後は風呂に入って寝るだけ。と言っても、寝るまでにだいぶ時間があるのだが…夜更かしをやめれば、早起きはできるんだろうけど、止めれそうにないのが現状です。

おかげで、遅刻ギリギリだったりするんだけど……

おまけに、小言もついてくるんだけどな。

無理なものは無理だ。

パソコンの電源をつける。

独特の音を立て、パソコンが立ち上がる。

そして、夜は更けていく。

けれど、町は闇に包まれることはない。

ネオン、コンビニ、今や至る所に明かりが点いている。

人は、暗闇を偽物の光で照らし、我がものとした。

そこに住まうものを追い出し、そして、無かったことに見えないモノなど、認めない、と。

存在を証明できないなら、無いことと同じだと。

そして、人は忘れていく。

昔、今よりずっと昔から居たモノを。

五章：神隠し

夜を照らす、満月前の月が姿を隠し、朝日が東に現れる。人々は徐々に眠りから覚め、朝が来たことを知る。どこかの家庭では、母親が朝食を作っているころ。

朝早くに出かける父親が、テーブルで朝刊を広げるころ。道路の車も、だんだんとその数を増す。

おそらく、田舎の方では、もう朝は始まっているだろう。街全体、いや、おそらくほぼ全ての所で、人々の活気を感じる始める時間帯。

空は青く、高く、どこまでも澄んでいる。朝を告げる鳥のさえずりが、どこからともなく聞こえてくる。

外は少し寒そうだが、こんな日は朝日を浴びると気持ちよさそうだ。そう、まさに最高の目覚め、と言ったところなのだが……

「う………………。もう……………朝か……。」

今の自分に、そんなものを満喫する余裕はない。

瞼がとても重い……………

気を抜くとすぐに閉じてしまいそうだ。

今も、何とか開いている状態である。

体を起こすことも、ずいぶん時間をかけてゆっくり起こした気がする。

こういう時は、だらだらやるより、むしろ一気に起きた方がいいのだが。

結局、昨日はまた夜更かしをしてしまった。

寝たのは、確か……………四時ぐらいだったような。

昨日よりも遅い時間だ。

とりあえず、目覚ましで起きたのは幸이었다。

下手をすると、目覚ましの音が鳴っていても起きないこともある。

「朝飯……………作らなきゃ……………。ああ……………めんどくさい……………」
台所まで歩くのも億劫だ。

狭い室内、そんなに距離はないが、精神的なものが……………

昨日のうちからタイマーで炊いていた飯を確認する。

よし、ちゃんとできてる。

昨日の夕飯の残りをレンジに入れ、待ち時間で洗面所へ。

蛇口から出てくる冷たい水で、顔を洗う。

いくらかはさっぱりし、瞼の重みも取れた……………か？

小さなテーブルに、ご飯とおかずを置き、テレビをつける。

朝のニュースが映し出される。

「昨日、午後六時ごろ、新宿駅構内で男の変死体が発見された事件の続報です。

死因は、脳梗塞と断定されましたが、男の体はいたって健康で、脳梗塞がすぐ起きるような状態ではありませんでした。

誠に不可解な事件で、これを受けて警察は……………」

いくつかの事件と、昨日テレビで報道されていた事件が報道されていた。

健康体の男性が、急に病気だなんて……………

まさに、その日男性の人生は終わったわけだ。

やはり、常に俺たちは不安定な日常を生活しているのだろう。

今までが健康であっても、一日先、いや、一秒先の健康すら保障することはできない。

だからこそ、今を生きななければならないのだろう。

そう、今日のこの後の講義のことではなく、今のこの眠気を打破するために、もうひと眠りを……………

僕らは今を生きているんだ！

この後のことなんてまだわからないじゃないか。

もしかしたら、二度寝している間に体が勝手に動いて大学まで行ってくれるかもしれない。

「そうだ、だから俺は寝るんだ！」
幸いにもまだ布団は敷いてあるままだ。
このまま布団に潜り込んでしまえば、至福の時を存分に味わうことができる。

さあ、夢の世界へ

「……………なんて、無理だよな……………やっぱり」
あれ、なんだか悲しくなってきたぞ。

結局、二度寝することなく、遅刻ギリギリではあったものの、大学にちゃんと到着した。
もともとチキンだから。
無断欠席なんてできません、はい。

無事に午前の講義を終え、今は昼。

いつもの通り、食堂はとても混んでいたが、何とか席を確保できた。目の前には、昨日と同じく柿本が座っている。

先ほど食事を終え、今日の講義のこと、日々なことなど、とりとめもないことを話している。

「そっぴや、昨日のニュース見たか？」

柿本が、尋ねてくる。

「ああ、見たよ。急に脳梗塞だなんて、やっぱり何かがあるかわからんね」

「あー、まあ、それも不思議ではあるんだが、それじゃあないんだあれ、違ったか。」

しかし、昨日のニュースで他に重大そうな物はあっただろうか……？
「あれ以外に何かあったっけ？聞いているようで、聞いてない状態だったからよく分かんないな」

「あつたんだよ。しかも、それがトップニュースだ。駅の事件も大きかったけど、大半は、トップニュースのことだったな」
少し、興味がわいてきた。

「もったいつけてないで、早く教えるよ」

「ああ。とりあえず、順を追って話そう。その様子だと、なにも知らないようだし。………最近、各地で神隠しが起こってるんだよ」

「神隠しだつて？………えーと、急に人がいなくなっちゃう、アレか？」

「そう、それだ。これは、ここ一ヶ月から始まったんだがな。場所、時間を問わず、様々な場所で人がいなくなっている。

まあ、主に時間は夜だけだな。真昼間にいなくなったやつもいる。で、ここまでは、言ってしまうえば普通の失踪事件の可能性もある。けど、重要なのはここからだ。被害者にあつた人は、皆たつた数秒でいなくなってしまうんだよ」

たつた、数秒で人が消える。

「確かに、誘拐にしては短すぎる時間だな。」

「ああ。それこそ、まるでそこから急に消えたような感じらしい。中には、どう考えても人の手段ではないものもあったそうだ。

それこそ、警察なんかは失踪事件として捜査をしている。だが、マスコミでは『神隠し』として報道されているよ。そして、昨日十五人目の被害者が出た」

ちよつと待て、今何と言った？

俺の聞き間違えでなければ、十五人と………！

「なんだよ……その数……！これじゃあ………本当に………」

「ああ、まさしく、人の為せる事じゃない。数の多さも異常だが、それ以上に異常なのは、それが日本の至る所で起きてるってところだ。狙われる場所、人に一貫性は無し。」

「ほぼ同時に起こった事件もある。すべて同じ状況だ。周りに人がいない状況………それこそ、誘拐犯ですら、な」

「誰もいない所で、突然人がいなくなる。」

「そんなこと、現実に起こるなんて………」

「もちろん、警察は打つ手なし。なんたって、対策の立てようがない。誰も、人が消えるところを見てないんだ。だから、事が発覚するのはだいぶ後になる。そんなこともあって………」

「被害者の遺族からの風当たりも強いし、世論も大荒れ。警察が言えることは、せいぜい、自分の家族から目を離さないでください………」

「………こんなところだ。まあ、それでも防げなかつたんだがな」

「柿本はそう言っつて、椅子にもたれかかる。」

「彼は………このことをどう考えているのだろうか。」

「人ならざるモノがしたことと、考えているのだろうか。」

「そうとも、これは人がやることじゃない。」

「人にそんなことはできない。」

「なあ柿本、この事件………神隠しだと思っつか？」

「まさか！そんな筈がないだろう。どれだけ巧妙であっても、結局は人のやったことさ。だいたい、神隠しなんて起こるはずがないだろう？」

「妖怪とか化け物とかがいるはずないじゃないか。この事件の裏に、大きな犯罪集団でもいるんじゃないか？まあ、いまだ目的は謎だけだな」

「俺の言っつたことを一笑して、柿本は言う。」

「そうかな？事件は、人知を超えた状況で起こってもいるそうじゃないか？それこそ、たった数秒で人を攫うなんて絶対に無理だ。」

「………何が起こっているかはわからない。けど、人のやったことと………」

考えると、解決できないことが起こってるんじゃないだろうか。

お前はいいと言ったけれど、例えば……妖怪とか。じゃなきゃ、説明できない。それに、どうして妖怪がいなくて言いきれるんだよ。

それに、お前が言うような犯罪集団なんて本当にあるのか？」
少しむきになって反論する。

なにせ、妖怪がいらないなんて認めたら、なんだか今まで暗闇を怖がっていたのも馬鹿みたいに思えてくるし。

それに、人知を超えたものぐらいあってもいいじゃないか。

「……………!!」

「?、どうした?」

俺の問いにも答えず、柿本は驚愕の表情をしている。
心底驚いている、と言ったような表情だ。

自分の目の前にいる人が、急に宇宙人にでもなったのを見たかのようだ。

どうしたんだらうか。

妖怪がいるとかいないとか、変な奴とでも思われたのだろうか?

「おーい、急に固まってどうしたんだよ? だってそうじゃないか、妖怪がいらないなんて誰が言いきれるんだよ。」

誰も見たことがないからって、いないなんて判断するのは早計だぜ? 現に、書物には妖怪の姿までのってるし、見たという人もいるんだ。

自分の目で見たものしか信じないって言うんなら、細菌の存在も俺は信じないぞ? なにせ、見たことはないからな。実際に生で。

……………というか、いつまで固まってるんだよ。口が開きっぱなしだぞ」

はっとした様子で、柿本は硬直から抜け出した。

「……………開いた口が塞がらないとは、まさにこのことか。」

柿本は、落ち着きを取り戻した様子で、そう言った。

俺、そんなに変なこと言ったかな…

「いや、別に妖怪がどうかで驚いたんじゃないんだ」

俺の気持ちを讀んだかのように、柿本が言う。

「まあ、大したことじゃない。気にするな」

「そうか？」

「ああ」

大したことじゃないって……そんなわけないと思うのだが。

あれだけ驚いた顔は、俺が柿本より早く学校に来た時も見なかったぞ。

いったい何であんなに驚いたんだろう？

変な話をしたからじゃないとは言っていたが……

さっぱりわからん。

「まあ、それはいいとして、……やっぱり、これは人の仕業じゃないと思う」

「妖怪、か……。神隠しと言ったら、天狗だが……。やはり、信じがたいな」

どうやら、柿本はあくまでも人のやったことだと信じてるらしい

「そうは言うけどな　と、もうこんな時間じゃないか！早く行かないと遅刻する！」

「少し、話しすぎたか……。遅刻はまずいな。まだ議論は終わってないが……行くか」

柿本と俺は席を立ち、急いで昼食の片づけをする。

「トレイは俺が持つてくから、荷物持つて先に外出ててくれ」

そう言つて、柿本のトレイを持ち上げる。

「ああ、すまない」

返事を聞き、トレイを持つて返却口へ行く。

次の授業まであと少し、というこの時間は、学生が揃って食堂を出る時間でもある。

学生の一団が列をなし、慌ただしく出口へ向かう。

「妖怪……か。そんなのいる筈がない……とわかってはいる。わかっ
てはいるが………」

「それでも、これが妖怪の仕業だったなら、どれほど良かっただろ
うか。確かに存在する、という証拠があれば、居ることに確信を持
てるのに」

昼も終わる食堂。

学生たちの足音や、話し声にかき消され、

柿本がつぶやいたその言葉は、誰の耳に入ることもなかった。

六章・丑三つ時（前書き）

更新がやや遅くなりました……続きをどうぞ

六章・丑三つ時

空が赤く染まり、太陽は既に半分見えなくなっている。

学生達は、自分の家へ目指し、帰る時間だ。

誰かと一緒に連れ立って帰るものも多い。

また、サークル活動にいそしんでいる人もいるだろう。

日が落ちていくこの時間は、なんともいえない雰囲気にも包まれているような気がする。

一日が終わったかのような、そんな感じだ。

仕事に出ていた人も、我が家へと帰り、これから一杯なんてこともあるだろう。

そう、そんな時間。

そんな時間、のはずだったのだが

「うっ、もうこんな時間か…。すっかり暗くなっちゃったな」

今、俺の頭上で輝いているのは、落ちかけている太陽ではない。

星空に見事な満月が浮かび上がり、道を照らしている。

もちろん、人通りなど無い。

これから一杯、なんてやってるような時間でもなく、もう終わっている時間だ。

そう、時刻は草木も眠る丑三つ時。

普通じゃ絶対あり得ないような時間に、俺は家へと向かう道歩いている。

何故、こんなことになってしまったのか…

うん、わかりきったことなんだけど。

大学からの帰りに柿本と会い、そのまま飲みに行ったからです。自己責任と言われればそれまでだが、こんな時間になったのはほかに理由がある。

昼食時に話していた神隠し事件についての詳しい概要などを聞いて、色々話し込んでいたからなのだ。ついさつきまでの会話を思い出す

最寄りの駅近くにある、居酒屋。

小ぢんまりとした店内には、客が結構入っている。

柿本と飲みに行く時は、たいていここで飲んでいる。

料理もうまいし、チェーン店の飲み屋みたいな慌ただしさもない。それぞれが思い思いの時間を過ごしている。

そういつたところが気に入り、今や常連になってしまった。

「丑三つ時なんだよ。」

赤い顔をして、柿本が言う。

どうやら、結構酔っているようだ。

本人曰く、あまり酒の強い方ではないらしい。

まあ、現状を見ればよく分かることだが。

酒癖が悪いわけではないが…

いかんせん弱い。

おかげで、ひどい有様になることもある。

対する俺は、いたって平常。

もともと強い方なのだ。

おそらく、酒豪と言える域には達するであろうと豪語して止まないのだ。

といっても、飲むようになったのはつい最近だから、まだそこまでは飲めないが。

「丑三つ時とか、夜中に多いんだよ。神隠しがさあ。だから、今日は早く帰らないと駄目だからなあ。だいたいお前は…」

酔っついても小言かよ……………

「あーそついや昨日の帰り道、不思議な人を見たんだ。大きな日傘をさして、なんか……………よく分かんない恰好をしてたな。顔は見えなかったけど……………」

なんというか、まどつてる雰囲気人間離れしているような……………そんな感じだった」

急いで話題を変える。

とはいえ、これは実際あったことだ。

昨日の夕方の帰り道のことだった。

すれ違つまでは存在に気付かなかつたし、すれ違つた後振り返つたらもういなかった。

何とも不思議なことだな、と思つていたのだ。

「ほんとか？ 買い物帰りのおばちゃんを見間違えたんじゃないか？」
そう言つて、柿本はケラケラと笑つ。

ずいぶん機嫌がよさそうだ……………」

「すいませーん！ 日本酒おかわり！ あとほっけね！」

追加の酒まで注文しやがつた。

まだ飲むつもりなのか。

というか、お前はそんな状態で家に帰れるのか。

……………案の定、潰れてしまった柿本を抱えて、家まで送り届けてやつた。

その結果が、丑三つ時の帰宅、ということだ。

家に帰る道すがら、思わずため息が出る。

このときばかりは、俺が小言を言いたくなる時だな。

まあ、しばらくはこのネタで小言回避させていただこう。
そして。

ただいま通過中なのは例の道。

そう、昼間でさえ迷ったことのあるあの道である。

周囲に明かりはほとんどなく、視界は真っ暗。

携帯のライトをかざしていないと、道が見えないほどだ。

「流石に……怖い。怖すぎる……！」

しかも、ついさっきまで神隠しなんて物騒なことを話していたのだ。恐ろしさも増すじゃないか……！

とはいえ、この道を一年間も通ってきたのだ。

その中には、夜中に歩いたことだって含まれている。

いくらこの道が複雑だからって、そう簡単に迷うわけが無いんだ。

そうだ、きつとそうだ。

現に、後はここをまっすぐ行って、突き当りを右に曲がるだけ。

そうすれば、俺のアパートはすぐだ。

「そうそう、ここを右に曲がって……。よし、そうすれば後は左側にアパート………」が………」

無い。

迷った。

「どろどろどうしよう！…？これはまずい！非常にまずい！…！
こんな時間に迷うなんて…！」

今日は厄日か？

しかも、周りの景色は一度も見たことが無いような感じが。
いよいよもってますい。

なんだってこんな…お約束みたいなことを………！！

「そつだ、とりあえず今来た道を引き返し……って、アレ？どつちからきたんだっ……け……」
最悪だ。

パニックになつて、今来た分かれ道が分からなくなつた！
この辺は、分かれ道の形だけでは判別がつかないのだ。

同じような形をしているのが数多く、目安となるものは周りの風景のの違いだけ。

しかも、今はその判断材料が暗くてよく見えない上に、この辺はまだ見たことが無い……！

さつきまでの道の風景を見ておけばよかつた……

打つ手なし。

まさに八方塞だ。

どの方角へ進んでも、さらに迷うこと間違いなしだろう。

全ての方向に災厄がある。

「くそ……ここでこうしても仕方ない、か……。あたりをつけて歩いてみよう……」

普段歩きなれてるはずの道なのに、今日、しかもこんな時間に限つて迷うなんて。

酒に酔っているわけでもなければ、考え事をしていたわけでもない。確かな確信を持って歩いていたのだが……

狐にでも化かされている気分だ。

仕方なく、とぼとぼと歩き始める。

ある程度行つて、まだ見たことのない道だったら、一回戻れるようにしないと。

周りの風景を確認しながら歩く。

同じような家が多いが、ある程度の特徴をつかめば、なんとか判別できる。

それに、今宵は満月。

都会の空では、満天の星空、美しい月の光なぞ決してありはしないが、それでも見上げた月は輝いている。

月の光が、あたりを薄明るく照らしてくれている。

今日が晴れで本当によかったと思う。

一度パニツクになったが、歩いて行くうちに大分落ち着いた。それでも夜は怖いので、平常の自分とは比べ物にもならない。それに、柿本が言っていた神隠しがよく起こるのがちょうどこの時間帯らしい。

ふと思い出してしまつと、背筋が寒くなつてきた…

嫌な汗も出てきて、とても不快だ。

いま思い出したことを振り払うように、歩く調子を早くした。

今は、家に帰ることだけを考えていよう。

「怖い怖い怖い怖い怖いこわ」

だが、そんなのは無理な相談だ。

だいたい、昼間でさえ怖がっていたような人間が、こんな真夜中に平然と歩けるとでも!?

「とはいえ呪文のように唱えてると、さらに怖くなりそうだな…」
今日一番のため息が出た。

七章：消える灯

「しまった…行き止まりか」

しばらく歩いてみたところ、住宅の密集しているところに出てしまった。

当然、先に進む道はなく、また自分の見覚えのあるところではなかった。

仕方ないので、今来た道に戻ることにする。

早く、ここを去ろう…

俺は、こういつた周りが囲まれているところは好きじゃないのだ。何時からかはわからないが、それは年々大きくなってきている。周りから押しつぶされそうな錯覚を覚えるのだ。

自分を囲む世界がどんどん狭くなっていく。

狭い空間に閉じ込められる。

息苦しさを覚え、なるべく広いところに出たくなる。

かといって、閉所恐怖症ではない……と思う。

エレベーターなんかは普通に乗れる、が、なぜか家が密集しているところは駄目だ。

思わず閉塞感を覚え、嫌な気分になる。

先ほどから風の音もせず、なんとなく変な雰囲気だ。

もうここに用はない、早く戻ろう……

もう一度、この先に道が無いことを確認し、振り返って歩き出す。

が

「あ……………」

一歩目を踏み出した時、眼前に広がる異常事態に、気づいた。

闇が

どこまでも深い闇が。

光など射すことのない闇が。

そこに生命などない。

全てを飲み込み、黒に染め上げる。

どんな輝きでさえも、この闇に入ったら最後、永劫に輝くことは無い。

無だ。

何も無くなる。

絶望的なまでの昏さが、そこにはあった。

今さっき歩いてきた道一杯に、闇が広がっている。

感情などなく……ただ無機質にこちらへ迫ってくる。

ソレがどういったものかは、正確なことはわからない、が。

直感的に、ソレは在ってはならないものだと思った。

全身の細胞が、一刻も早く逃げろ、と伝えてくる。

ソレに触れたら、その先にあるのは……

もしかしたら。

危急存亡の事態において、ふと閃くことがあった。

今まで神隠しは、これが原因ではないか？

皆これと遭遇し、そして……

居なくなってしまった。

やはりあれば、人の仕事ではなかったのだ。

嫌な汗がどつと噴き出し、体から血の気が引いて行く。

逃げなくてはいけないのに、体が動かない。

俺は蛇に睨まれた蛙のように、ここから一步も動くことができない！

そうしてる間にも、闇は広がり、だんだんとこっちへ近づいてくる。

声を出そうにも、口の中がカラカラになり、まともな声が出せない。

ここで叫べば、周りから誰かが来てくれるのに……！

誰でもいい、誰かが来てくれさえすれば、なんとかなる…！
しかし、期待に反して、周りの家から誰かが出てくるような気配は
ない。
このままでは。

死

俺は、こんなところで死ぬのか。
神隠しにあった人のように。
おそらく、今まで神隠しにあった人はもう生きていないだろう。
そして、その遺体が発見されることもない。
そう、この闇の中に溶けてなくなってしまったのだ。
そんなの、嫌だ。
死にたくない。
死にたくない…！
もっと生きていたい。
まだ、人生の半分も生きていない。
もっと色々なことがしたかった。
俺を育ててくれた恩も、返してない。
成人して…普通家庭をもって…それぐらいのことは、夢見て
いた。
それに、悲しむ人が、居るのに……！
それなのに…
もう、今までの日常を味わうことはできないのか。
辛いことはあったが、それでも俺は今を幸福に生きていった。
大学に行き、学ぶ。
友達と、下らぬことで盛り上がる。
朝の空気を味わう。

夕暮れ時の穏やかな時を感じる。

夜空の深さを想う。

太陽の光を。

月の輝きを。

一人の時間を楽しむ。

家族と過ごす。

どれも特別なことなど無い、ありきたりな日々の風景。

だが、それらは確かに大切なものだった。

それが、一瞬で砕け散る。

どれだけ大切に思っていたても。

また、その大切さを忘れていたとしても。

終わりは平等に訪れる。

ああ、やはり

日常は脆く、儚いものだった。

それはまるで一時の夢のようなもの。

覚めてしまえば、理解するのは簡単だ。

どれだけ長い物語も、消えるときは一瞬なのだ。

ソレはもう目前まで迫ってきて、すべてを飲み込もうと

体は少しも動かない。

もう、どうすることもできない。

ああ、闇が。

全てを飲み込む闇が。

少しづつ、俺の体を蝕んでいく。

深淵の中に溶けていき、形がなくなっていく。

何もかもが、溶けていく。

足が、手が

俺の体は闇と一体になる。

もはや、体の半分が無い。

だが、不思議と痛みは無かった。

体の半分が切断されているような状況だが、何も感じない。

そう、なにも。

闇が触れたところから、感覚がなくなっていくから。

何かを考えるのもめんどくさくなってきた。

思考は緩やかに停止していく。

頭の中が、黒く塗りつぶされていく。

何かが、抜け落ちていくような感覚。

死にたくないという思いも消えていく。

もう、どうでもいい。

体は全て溶けだしてしまった。

心さえも、この深い闇に飲まれてしまったかのようだ。

自分と闇との境界はもうない。

いまや、自分が闇そのもの。

視界がぼやけてくる。

もはや、周りの景色も満足には見れない。

目の外側から内側に向かい、黒い物が覆っていく。

その中で、ただ眼に光るもの………

網膜に焼きつくような、輝く光。

ああ、

月が、

綺麗だ

視界が消えるその瞬間。

命が消えるその瞬間。

自分という存在がなくなるとき。

溶けだしてしまった残りの、かすかな心で感じた。

この世界で最後に見た物は

美しく、妖しく輝く満月だった。

八章：どこだここ？

どこか遠くから、誰かの泣く声が聞こえた。

幻ではない。

確かに泣いている。

はっきりとは聞こえないが、そうであると確信がある。

そして、自分はその理由を知っている。

いつまでも泣き続ける、その理由を。

悲しい。

悲しい。

悲しい。

どうしようもない悲しみが胸を埋め尽くす。

こんな悲しい思いはしたくないのに、目の前の現実はそれを許さない。

現実とは、残酷なのだ。

ならば

ん？

自分……………？

自分って何だ……………？

俺は唐突に思い出す。

そう、さっき確かに俺は闇に飲み込まれたはずだ。

意識さえも消えてしまったというのに、なぜ俺はこうして考えることができているのか。

ふと気付くと、闇に飲み込まれ溶けだしてしまっただけの自分の体を、確かに感じる。

手も足もあり、自由に動かすことができる…

だが、目を開けてもそこにあるのは暗闇だった。

体がどうなってるかを見ることはできないが、確かに五体満足なようだ。

今は、まるで海を漂っているような感じだ。

ふわりと体が浮いているような感じ。

母親の胎内にいる子供も、こんな感じだろうか。

いったい、これはどうしたことだろうか？

アレに飲み込まれたが最後、生きてることなんてありえないと思っていたのに。

まあなんにせよ、俺は生きている。

視界は依然として真っ暗でどうすることもできないが、今は生きているだけでありがたい。

しかし、ここはいったいどこなのだろうか。

あの闇の中……………なのだろうか。

いや、今俺がいるこの場所にそんなものは感じられない。

だがしかし、論理的にいくとそういうことになるよな…

うーむ…………

ええい、もうどうでもいいや。

生きているだけで良しとしよう。

しばらく、このまま漂うのに身を任せていよう。

「つつ！？」

何分、いや何時間漂っていたかはわからない。

もしかしたらもっと長かったかもしれないし、もっと早かったかもしれない。

だが、その時間も、急に体に走った激痛によって終わりを迎えた。

「ああああああああああああ！！！！」

何だこの痛みは！

体を外側から刺激されているのでは無い。

そう、内側を直接刺激されているような感じだ。

あまりの痛みに、思わず悲鳴を上げてしまう。

細胞一つ一つが痛みを与えられている。

それが体の至る所に起こっている。

気が変になりそうだ　　！

意識が飛びそうな激痛なのに、気絶しそうになると、その痛みでまた覚醒する。

これじゃあ堂々巡りだ！

いつそ気絶してしまえたらどんなに楽だろうか。

激しい痛みはやむこともなく、気絶することも許さない。

痛みが引く気配はなく、一定の痛みが常に走り続けている。

「ぐっ…………！！！！」

さつきからずっと叫びっぱなしで、喉も枯れてきてしまった。

こんな痛み、今までに味わったことが無い…………

やはり、ここはあの闇の中なのだろうか？

思考を中断させるかのように、先ほどよりも一層強い痛みが走る。
「！！う……あ………」
俺の意識は、そこで途切れてしまった。

眩い光を瞼に感じ、途切れていた意識がゆっくりと覚醒していく。
ゆっくりと目をあけると、そこにあつたのは暗黒ではなく

青空だった。

何処までも広く、深い青色をしている。

昔、田舎で見たような空の色だ。

都会の汚れた空気の中では絶対に見られないような。

少しぼやけた視界が、だんだんと鮮明になっていくにつれ、意識も取り戻していく。

どうやら、地面に横たわっているようだが…

手足を少し動かして、異常がないか確認する。

手足は動く……どうやら、ちゃんと体はあるようだ。

確かにあのときは、体が無くなった気がしたのだが……

体のことは、あつたからまあ良しとしよう。

それよりも……

一体、ここはどこだろうか。

少し、周りを見てみない限りはわからないな。

辺りを見渡そうとして、体を起こす、が…

「痛っ！！」

起き上がるうとしたところで、体中に激痛が走る。

「いったい、どうなってるんだ………」

身体の欠落は無いが、起き上がるうとするとまだ痛みが走る。

何かしらがあつたのは事実だが、何が起こつたのかはさっぱりわからない。

あの闇はいったい何だったのか。

そして、それに飲まれた自分がなぜ生きているのか。
ここは、どこなのだろうか。

……駄目だ、頭が混乱してきた。
不可解なことが多すぎる。

さつき目覚めたばかりで、うまく物事を考えられないせいもある。

「なににせよ、しばらくはこうしているしかない、か……………」

寝転がった状態のまま、空を見上げる。

光る太陽に照らされると、それだけで癒されているような気分だ。
雲ひとつない大空。

自分にもつと語彙力があつたら、この空の美しさを現せるかもしれないが、それはできない相談だ。

ただ、綺麗という言葉しか出てこない。

日本の原風景とはこういうものじゃないか？

雄大な自然に充ち溢れた世界。

その自然それぞれに神様がいて

俺たちは、神と共に生きてきたのだ。

そついった考えが、自然に生まれてくる。

そんな美しさが、そこにはあつた。

首だけを少し動かして、周りの景色を何とか把握してみる。

とはいっても、予測通り。

周りはずつそつとした木々に覆われてるだけで、ここがどこなのか
見当もつかない。

ただ、周りを囲んでいるこの木は、どうやら桜のようだ。

花は咲いてないが、桜の木が辺り一面に広がっている。

だがしかし、桜の木があるだけではここがどこかなんてわかるはず
もなく。

結局、体の痛みが治まるのを待つしか無いのであつた。

気温は高くないが……あの時着ていた服はどうやらそのままのよう
で、そこまで寒くはない。

むしろ、陽の光が降り注いでいて、ちょうどいい感じに暖かい。

なんだか少し、眠くなってきた……
少し寝たら、体の痛みもきつと無くなってるだろう。
こんなところで寝るのはどうかと思うが、もしかしたら道行く人が
現れるかもしれない。
そうしたら、ここがどこか聞くこともできるだろう。
とにかく今は……すこし……寝よ……う……
暖かな日差しの中、意識は眠りの中に落ちていった。

九章：あり得ないモノ

「ん……………」

風が木々の葉を揺らす音で、ふと目が覚めた。
柔らかな日差しに包まれている。

まだ日は昇っているらしい。
どれくらい寝てたであろうか……
体をゆっくりと動かしてみる。

先刻の、あの激しい痛みは感じなくなっていた。
どうやら、少しは回復したようだ。

体を起こして胡坐をかき、あたりを再び見まわしてみる。
傍らに、身につけていたバッグが落ちていた……………が、見つかったのはそれだけ。

やはり周りは森、ぐらいのことしかわからない。
いったいここはどこなのだろうか。

日本ではある、と思うが……

いったいここが日本のどこか？

それは全く分からない。

せめて誰か人がいれば……

「あ、そういえば携帯があるじゃないか！」
そうだった。

今の時代には携帯という便利なものがあるのだ。

これさえあれば連絡が取れるし、最悪時計代わりにはなる。

昔道に迷った人がどうだったかは知らないが、今は道に迷っても警察に連絡すればいいのだ。

文明の利器に感謝。

「しかし、変なものに飲み込まれた後だしなあ……………壊れてませんよ
うに……………」

祈りを込めてポケットから携帯を取り出し、恐る恐る電源を入れる。

これでつかなくなったら、また振り出しに戻ってしまう……
一瞬がとても長く感じる。

頼む！ついてくれ！

「よしついた！これでなんとかなる！」

これで一安心だ。

「それではさっそく連絡を……あ……」

直後、絶望的なことに気づいてしまった。

視線はゆっくりと携帯の左上にスライド。

嗚呼、前言撤回、携帯なんか役に立ちません。

圏外かよ！

いや、予感があったけどさ……

こんな森の中で通じるわけないよね、やっぱり。

携帯をポケットに戻す。

結局振り出しに戻ってしまった。

「やっぱり、適当に歩き回ってみるしかないのね……」

ここがどこかわからないし、じっとしていても何がどうなるわけでもない。

周りに人の気配はないし、こんなところは人も通らないだろうし……
道路に出られれば、車ぐらい通るだろうし、そうでなくともどこかの街にはつながっているはずだ。

そう決心して立ち上がる……どうやら、痛みは取れたようだ。

2、3歩歩いてみたが、痛みはない。

これならなんとかかなりそうだ。

バッグを拾い、土を適当に払う。

この中には、割と大切なものが入っている……お金とか。
自分の体を一通りチェックするが、どうやらなくなったものは無いらしい。

深呼吸して、適当に方向を定め、桜の木々の間を歩いて行く。

もし今が春だったら、さぞ美しいことだったろう。

あと数か月遅かったらな……

そうだったら、心の慰めにもなった。

さすがに、どこだかわからない場所に一人きりは心細い。日もまだ高いが、落ちてきたら真っ暗になりそうだ。

「なんとかして、陽が落ちるまでに道路に出ないとな……」

歩き出すや否や、視界の隅に入るものがあつた。

どうやら、桜の木の陰になってよく見えなかつたらしい。

「なんだこれ……って、これは」

近づいて行つてよく見てみると、それは誰かの墓だつた。

ひどく苔生している……いったい、いつのものだろうか。

形から辛うじて判断はできるが、表面はほとんど苔に覆われていて文字が書いてあるかどうかさえ判別がつかない。

「こんなところに墓なんて……なんだか、薄気味悪いなあ……」

ここで死んだ人のじゃないよな……墓らしいものがたくさん目に入つた。

1、2、3、4……とてもじゃないが数え切れる量じゃない。

さつきは桜にはかり気を取られていたが……こんなものがあつたとは。

だが、少なくともここで死んだ人ではないだろう……いくらなんでも数が多すぎる。

災害だつたとしたら、何かでかい碑を作るだろうし……となる……

「この痛み具合……これって、無縁仏っていうのじゃないか？それがこんなになくさんあるなんて……」。

まさか、ここつて立入禁止だつたりするのかな」

祟り……とかないよな。

無縁仏がたくさんあるところに無断で入つたからって、祟りなんてないよな!？」

「ですよねー！ー！いくらなんでもそんな祟りなんて
「キヤーーーーー！ーーーー！ーーーー！ーーーー！」

「ぎゃああああああああああ！！！！すいませんでしたあああ
あああ！！！！！！！！

もうしないから許してくださいいやほんとわざとじゃないんです
いのまにかここにいただけでそんな墓を荒らそうだなんてえ

………つて違う！今のは人間の悲鳴だ！」

正気に戻った時、体はいつの間にか土下座をしていた。

悲鳴を聞いてから土下座をするまでのその間、わずか0.5秒。

俺こんなに早く動けたっけ……

誰もいないから良いが、今の自分の姿はさぞ滑稽だったろうな。

いや、それどころじゃなかった。

土下座をしていた体を素早く起こし、悲鳴の聞こえた方向を探す。

あれだけはずきりと聞こえたのだから、おそらくここからそう遠く
は無いはず。

声の調子からいって………女性だろう。

相当切羽詰まった声、ただ事ではなさそうだ………！

「確かこつちから聞こえたはずだ………早く行かないと！」

俺は、声のした方向へ向かって全速力で走り出した。

木々の間を縫うように走っていく。

樹木の根に引っかからないようにしながらも、速度を保つ。

何が起きているかはわからないが、危険なことに間違いは無い！

「誰か、誰か助けて！！」

二度目の悲鳴。

声はすぐそこから聞こえた、もうすぐだ！

一層足を速める。

もつと、もつと早く！

木々の間を抜けていくと、突然、広い山道に突き当たった。

声はこのあたりから聞こえてきたはず………どこにいる？

「誰か！」

三度目の悲鳴のした方向を振り返ってみると、果たしてそこに女性がいた。

必死の様子で、逃げているようだ。が……

「なっ……………！！！」

だが、俺はあまりの驚きにそこから動くことができなかった。

いったいなぜ、どうして？ そういった疑問が次々に湧いてくる。

あんなもの、あり得る筈がない！

いや、存在してはならない

女性を襲っている、アレは……………

アレは

鬼だ

十章：迷い

鬼が

鬼がいる。

人の身長をはるかに超える大きさ。

全身が筋肉でできているかのような体は、紅い皮膚で覆われている。鬼の象徴とも言える鋭い角が、頭に一本生えている。

その姿は、文献などで見る鬼の姿よりは、むしろゲームなどに出てくるようなサイクロプスを連想させた。

人を畏怖させるその姿は、人間には遠く及ばない存在だということをも本能で分らせる。

いったいなぜ。

なぜ、あんなものが存在しているのか？

科学が進歩し、人知の及ばぬ存在はすべて否定された時代。

その時代に、いまだに妖怪がいるだって……！？

居ない、と決めつけていたわけではないが……実際に見るとそれを信じることができない。

だが、現にそれは今この場において、俺の目の前で女性を襲っている。さっきのことといい、いったい何が起こってるっていうんだ……！状況が全く理解できない。

いったいここはどこなんだ！

俺はもう死んでしまっていて、此処はあの世だともいうのか！？頭の中がぐちゃぐちゃで、まとまった考えが出ない……

「キヤーーーーーーー！！！！」

女性の悲鳴が聞こえる。

「！こんな状況で……、落ち着けるわけが……！」

俺は、鬼のもとへ全速力で向かう。

今は自分のことなんて……あの人を助けなければ！

どうやら、鬼はこの「狩り」を楽しんでいるようだ。本気で襲うつつもりなら、もうあの人は最初の悲鳴の時点で既に食われているだろう。

その証拠に、鬼は女性をただ追いまわしているだけだ。だが、最初の時点から結構時間が経っている…おそらく、そろそろ体力の限界だろう。

「間に合うか!? いや……………間に合わせる!!」
一層加速する……………が、実際に走ってみると意外なほど距離がある。そうこうしているうちに、女性の走るペースが落ちてきた。助けを求める声も、弱弱しくなっている。

「はあ……………はあ……………」
「グハハハハハ! モットアガイテミセロ、ニンゲンヨ!」
地を震わせて、鬼の声が聞こえてくる。

重く、のしかかるような声だ。
聞くだけで体がすくみ、恐怖に動けなくなるような声。
早く……………もつと早く。

鬼のもとへ一直線、風を切るように駆け抜ける。
ただ、彼女を助けたいという思いで。
だが。

近づくにつれ、自分が相対しようとしているモノの大きさに気づく。
それは、ただの体格差だけではなく。
人をはるかに超える力。

見る者を畏怖させる力。
絶対的な存在としての、鬼。
そして、

『このまま彼女のもとへ行って、いったい俺に何ができる?』

そう……………思った。

いや、そう思ってしまった……………

助けようだなんて……そう、なぜ助けられると思った？

このまま行つて、よしんば間に合ったとしても、いったい俺に何が
できるだろうか。

俺は、ただの人間だ。

襲われている人と何ら変わりもない、一方的に奪われるだけの存在。
相手が人ならば、まだやりようもあつたが、アレは人間ではないの
だ。

鬼に、人が勝てるわけがないし、ましてや、武器も何もない。

人間相手でも、徒手空拳で勝てるほど強くは無いし、武器があつた
としても、妖怪に勝てるわけがない。

人間は弱い。

途端、足が止まる。

もうすぐそこ、眼前で「狩り」が行われている。

今すぐ走り出せば、まだ間に合うはずなのに、絶望的な無力感が、
体をこれ以上進ませない。

鬼の姿を間近で見て、俺の体は恐怖にとらわれてしまった。

恐怖に負け、足が震え出す。

こんなものに、勝てるわけがない。

もし女性を救出できても、二人とも襲われてしまうのがオチだ。
人を抱えてあれから逃げきれぬ自信はない。

ならば、あの女性を見殺すのか？

今から自分だけで逃げだすのか？

そうすれば、確かに俺は助かるだろう。

しかし……そんなこと……

「きゃっ！」

体力の限界だろうか、女性が転んでしまう。

女性が振り返ると、鬼はもうすぐそこまでできていた。

鬼は顔をいびつに歪めた、笑っているのか……

「オニゴツコハ、モウヲシマイカ？」

「いや……いや……」

助けることを躊躇っているうちに、鬼が女性のもとへ近づいていく。女性は地面に座り込んで、後ずさりをしている。

どうやら、転んだ拍子に足をくじいてしまったようだ。

絶望が、その顔に広がっていく。

避けられない死への恐怖。

今なら、まだ間に合うかもしれない。

まだ、助けられるかもしれない。

でも、そうしたらきつと……彼女の代わりに、今ここで俺が死ぬだろう。

そして、俺が死んだ後、彼女が生きられる保証はない。

ぎり、と唇を噛む。

助けたいのに、俺は自分の命が惜しい。

それは当然のことかもしれないけど……とても悔しい。

「ム？ソコニモニンゲンガイタカ。コノムスメヲコロシタアトデ、キサマモコロシテヤロウ！」

まずい、気付かれてしまった！

俺は急いでその場を離れようとして……ふと女性と目が合った。

その時はじめて、その女性の姿をはっきり見た。

長い黒髪、朱色の和服。

綺麗な花の簪をつけている。

年は……15、16と言ったところだろうか。

きつと、普段は可愛らしい表情をするだろう。

だが、その表情は今、絶望に染まっている。

今から自分は死ぬ、という逃れようのない運命。

その女性は、俺を見て、何かにすがるような表情をした。

思わず、目をそむけてしまう。

直視することができない。

自分は、あの人を見殺しにしようとしている……

気づくと、唇から血が出ていた。

いつの間にか強く握りしめていた手は、白くなっている。
思いを断ち切るように、振り向いて走り出そうとした、その瞬間。
とても、とてもかすかな声で

助けて、と聞こえた。

とても弱弱しい声。

木々の音にまぎれ、儚く消えてしまいそうな声なのに……
その声には、もっと生きたいという思いが詰まっていた。
もっと生きたい。

まだ、やり残したことがある。

大切な人がいる。

この思いは、自分も持ったことがあるものではなかったか。

そう、あのとき。

闇に飲み込まれ、死を悟ったとき……

俺は、こんな思いを人にさせたまま放っておくのか。

自分の手で、少しでも変えられることがあるのに、放っておくのか。

そんなこと……

そんなこと……できるわけがない！

俺は、今さっきまでの自分を呪った。

逃げ出そうとしていた足を止め、鬼に向き直る。

今まさに、鬼がその右手を振り上げ、少女を殺そうとしている時であつた。

無駄な時間を使ったせいで、状況は悪化している。

どうにかできるかはわからない……分らないけど。

やはり、見捨てることなんてできない……！

「くっそおお！！！」

一気に間合いを詰め、少女と鬼の間に立つ。

鬼がその右手を振りおろす。

その手はまるで筋肉の塊、まともにぶつかったら人間の体なんて吹き飛ばされてしまうだろう。

風を切つて、鬼の手が体に迫ってくる。

だが、俺の体は、迷うことなくその左拳を突き出していた。

頭で考えるよりも早く、反射的に。

十中八九敵うはずないと分かっているはずなのに……

しかも漫画みたいないなことをしようとしている。

拳と拳をぶつけ合うなんて、聞いたことがないぞ。けど……

「もうどうにでもなれ！」

ウダウダ悩んでいるのが吹っ切れて、なんだか心が晴れやかになつた。

これで死んでも……まあ、いいか。

どうせ、もう一度死んでるような命だし。

左手に力を込める。

さっきまで、少女を見捨てようとしていた自分自身を、殴り飛ばすように。

鬼の筋肉質な右手が迫り、そして

ゴギイ、という歪な音。

相反する力がぶつかり合い、弾けた。

十一章：一陣の風

瞬間、力の奔流が起こる。

俺は、すぐに来るだろう左手の痛みを予期し、思わず目をつぶる。

……が、いつまでたってもその痛みが左手に来ることは無い。

もしかしてこれは、あまりの痛みに痛さを感じなくなるというアレではないか？

そして、今の自分の左手の状況を見た瞬間に痛みがやってくるとい
う……

うわぁ……見たくないな……

恐る恐る目をあげ、左手に視線をやると……そこには、全くの無
傷な左手があった。

「グアアアアアアアア！」

代わりに聞こえてきたのは、鬼の叫び声。

先ほどの攻撃の後、一度距離を取ったらしく、今は数メートル先に
いる。

そして、眼には信じられない光景が飛び込んできた。

鬼が、苦悶の表情を浮かべ、右手を抑えている？

よく見ると、鬼の右手は無残にも潰れ、血が迸っていた。

その光景を見て、困惑する。

アレを受け止めたうえ、さらに相手の手にダメージを与えた……？

こんなの、普通の人間である俺ができる筈がない！

それに……

そもそも俺は、こんなに早く走ることが出来ただろうか？

手が振り下ろされるまでのわずかな間に、数メートル離れた距離を
一気に詰めるなんて。

先刻よりずっと持っていた数々の疑問と重なり、頭がパンクする。

いったい、ここはどこなのか？

何故、あんなものが存在しているのか？

そして

いったい、俺はどうなってしまったのか？

「……っ！！ゲホッ！」

思考は、突如体に走った鈍痛にかき消された。

思わずせき込むと、口を覆った手には大量の血が付いていた。

立っていることができず、その場に膝をついてしまう。

「大丈夫ですか!？」

後ろにいた少女が心配そうに顔を覗き込んでくる。

自身の身に迫っている恐怖よりも、純粹に人を心配している。

とても、優しい子だ。

が、今はそれどころではない……

「大丈夫……夫、今のが、原因じゃ、ないか……ら。それより、早く……

……逃げ……」

無理やり笑顔を作り、少女に答える。

息も切れ切れで、正直自分でも無理な笑顔とは思ったが、少女をい

たずらに不安にはさせたくなかった。

だが、少女はかぶりを振る。

「足が……。もう、一步も動けないんです……」

泣きそうな声で答え、申し訳なさそうにうつむく。

もう、どうしようもない、か……

体の痛みは止むことなく、それは内部でうごめいている。

体中が悲鳴を上げ、意識を持っていくこととする。

彼女を抱えて逃げることは出来そうにない。

痛みは左手からではなく、どうやら今の攻撃が原因ではなさそうだ。

この痛みは、先ほど暗闇の中で味わった痛みに似ている。

やはり、いきなり体を動かしすぎたのが原因だろうか。

あの迷いがなければ、もつといろいろ考えることができたかもしれないのに。

時間が無かったせいで、一番無謀な策を取ったかもしれない。

「キサマ、ヨクモオレノウデヲ……。ダガソノヨウスデハ、キサマノホウガシニソウダナ？」

「だが、ら……。お前に、やら……。れた、わけじゃ、ない……。」

鬼はすでに体勢を立て直し、右手をかばいながら立ちあがっている。数メートル離れた先でも分かるほど、鬼の顔には明らかかな怒りがあつた。

人間ごときに体を傷つけられたことで、プライドをズタズタにされたのだろう。

先ほどよりも強大な気迫で、こちらに迫ってくる。

本気で、仕留めに来るか……

後ろを見ると、俺の背中に隠れるように、少女が居る。

おびえ、不安に充ちた眼が、こちらを見返す。

なんとしても、この少女は、助けたい

正直、もう俺も動くほどの体力は無い。

ましてや鬼の気迫は相当なもので、見ているだけで気が遠くなりそうだ。

怖くて怖くて、逃げたしたいという気持ちは今もある。

けれど

それよりも、自分のことよりも。

もつと、大切なことが ある。

足に走る痛みを無視し、無理やり立ち上がる。

途端、先ほどよりも激しい痛みが体中を駆け巡る。

気を抜くと、今すぐに気絶してしまいそうだ。

だが、ここで倒れるわけには……

後ろの少女を背中に庇うようにする。

この体では、もうさっきのような一撃は受け止められないだろう。

ならば、せめて一撃でも多く、少女の盾になろう。

俺を殺すことで、奴の右手も壊すことができればいい。もしかしたら奴は傷を癒すために帰るかもしれない。そうなれば、彼女だけは守ることができる……なんて。自分でも、都合のいい解釈だということは分かっている。俺は、全くの無駄死になるかもしれない。いや、おそらくそうなるのだ。だが、無駄でも、決して膝をつくわけにはいかない。これがさっきの俺の迷いのせいならば、俺はここで立ち続ける責任がある。

怒りを顔に滲ませ、鬼が一步步近づいてくる。死が、実体を持って眼前に迫ってくる。

……生きている間に、二回もこんなあり得ない状況で死が迫ってくるとは、想像もしなかった。

死を覚悟し眼を伏せ、再び自分の人生を思い返してみる。果たして良い人生……だったのだろうか？

それを知るためにはあと何十年、必要だろうか。人生の最後の瞬間も、結局尻切れトンボだった。

なかなかどうしてうまくいかない……
言いようのない無力感を味わう。

少女を助けに来て、防げたのは一撃のみ。
結局、守りきることは出来なかった。

自分の不甲斐なさに、思わず苦笑する。

なら、最後は真っ直ぐに立っていよう。

せめて死ぬ瞬間くらいは、格好つけても、良いよな

顔を上げ、鬼を睨みつける。

膝が笑い、もはや立ち続けることも危うい。

気を抜くと倒れ込んでしまうだろう。

体を走る痛みは止むことなく、常に身を苛む。

意識が朦朧として、景色が歪む。

今すぐにも気絶してしまいそうなか、それでも、鬼を見据え続ける。

誰にも知られず果てようとも

自分だけは目を逸らさず

刹那、

一陣の風が、吹いた

十二章：幻想郷

鬼が足を止め、空を仰ぎ見る。

その眼は驚愕に見開かれ、そして忌々しげに鬼の顔がゆがむ。

何かに向かって喚いている……が、意識が途切れ欠け、何も聞こえない。

上空にいる何かに向かって威嚇しているようだ。

鬼が左手を振り上げようとした、その瞬間。

突如、天空から何かが物凄い勢いで降り注いだ。

無数に降り注ぐ何かは、正確無比に鬼に向かって飛び、体を穿ち、焼き、刻み、無数の傷跡をつける。

鬼は無事な左手を振るい、抵抗するが……数が違いすぎた。

振るう左手もすぐに傷だらけになる。

たたらを踏み、その場に膝をつく。

そして

目の前に、一人の少女が降り立った。

降り立ったという表現は比喩でも何でもなく

空から、少女が降りてきたのだ。

黒い髪を大きなリボンで結び、赤と白の

巫女服？！

腋が……あれは、巫女服でいいのか？

その少女は、どこからか数枚の護符を取り出すと、鬼と対峙した。

さっきの攻撃はあの護符だったのか……それにしても、なんという威力だ。

鬼が後ずさる。

どうやら、力の差は相当なものらしい。

もしかして……いや、もしかしなくても助かったのか？

守られている、という実感が湧くと共に今まで張っていた気が緩み、力が抜ける。

と同時に、かろうじて支えていた足が折れ、地面に倒れ伏す。冷たい土の感触が、体に広がる。後ろに庇っていた少女が俺の体を揺さ振り、何か言っている。

……良かった、助けることができて……

あの巫女は、いまだ鬼と対峙しているが、おそらく勝負はもうついているのだろう。

もしこのまま俺が死んでも、あとは何とかなると、そう思う。少女に場を任せるというのも、決まりがつかないけれど……まあ、いいか。

安心感と共に、今まで我慢していた痛みが一気に襲ってきた。声にならない悲鳴をあげ、そして……

俺の意識は、闇に沈んだ。

………幻想郷。

人と妖怪が住まう地。

妖怪は人を襲い、人は身を寄せ合って日々の安寧を得ていた。

幻想郷は、妖怪の巣として人々から恐れられていた。

そんな幻想郷が、我々の住む世界と近かったのも、今は昔のこと。

………百年近い昔。

妖怪は自らの安住の土地を得るため、この地と現世を隔てる境界を張った。

博霊大結界。

その瞬間、幻想郷は現世より遠く離れた地になった。

失われ、幻想になったモノ。

人から忘れられ、その存在が無くなったモノ。

幻想郷には、現世から失われたモノが入り込む。

それは、妖怪も同じ。

科学が進歩した現世において、妖怪はその存在を認められなくなつた。

そこで妖怪が取つた手段……

それが、現世との間に結界を張ること。

幻想になつた物が生きていける場所。

非現実、非日常、非常識こそが全て。

それが、この世界の在り方。

………そこまで考えて、急に馬鹿らしくなつた。

今の幻想郷は、そこまで危険な場所ではないのだ。

妖怪が人間を襲うなんて、今では全く無いに等しい。

人はこの狭い幻想郷の中に里を作り、集団で暮らしている。

ただそれだけならば、確かに昔とは何も変わってないように聞こえるが……

里は幻想郷の中で最も安全が保障されている場所なのだ。

妖怪はそこを襲わない。

更に言うなら、里には妖怪の利用する店さえもある。

妖怪と人が同じ里で買い物をするというのだから……

まあ、悪いことではない。

仕事は無いに越したことは無い。

いや、お金がなくなるのは勘弁だけれども。

……さっき考えたもつともらしいことに、今のを追加して適当に説明しよう。

尤も、説明を求められるまでは、特に何も言うつもりは無い。

わざわざ説明するのもめんどくさいし……

御賽銭をたっぷり頂いたら、さつさと元の場所に返してやって、それで終わりだ。

命を助けた見返りにしては、随分安いものだと思う。

そう考えると……だんだん腹が立ってきた。

確かに結界の管理人ではあるが、こういった連中が入ってくるのは大概あいつのせいだ。

冬眠中だろうがなんだろうが、あいつの怠慢なのだから無理やりにも叩き起して、結界を直させてやろう。

いくらなんでもこの状態はひどい。

寝ぼけて結界を緩めてるのではないかと思いたくなるくらいに。

十三章：博麗神社

神社の縁側で少女はお茶を飲み、一息つく。
ここは幻想郷のはずれ、結界の境目に立つ一つの神社。

博麗神社。

厳密に言うと、ここは幻想郷ではない。

博麗大結界の境、つまり幻想郷と外の世界の間点に立っているのだ。

結界を管理し、守る皆。

それがこの神社と、博麗の巫女としての役割なのだ。

幻想郷にとってそれほどありがたく、重要な神社だから、もちろん参拝客もたくさんいて、常に人が絶えないはずだが……

時刻は昼を過ぎたあたりなのに、境内にはだれ一人としていない。

がらんとした境内は、季節も手伝い、なんだかものさびしく見える。賽銭箱もなかなか立派なものを設置してあるのだが、外見に見合った中身が無い。

常に空っぽで、一銭も入ってない。

だが、ここではこれがいつものことなのだ。

何故ここはこんなにも人がいないのだろうか？

まず第一に、人里からの行き難さがある。

少し離れたところにあるのもそうだが、もっと問題がある。

道中には妖怪が出るのだ。

普通の人がここまで来るのは、いささか大変だろう。

尚且つ、安全なはずの境内にも最近では妖怪が出るようになった。

神社に妖怪とは、全く不釣り合いなものである。

そして、何故か湧いた妖怪を退治しない。

いや、正確にはしてるのかもしれないけれど……神社に沸くのは、決まって力の強い妖怪ばかりだ。

それは彼女の仕事である、異変解決とも関係がある。懲らしめたらなんだか顔見知りになって、妖怪が遊びに来ているのだ。

これも、今の幻想郷を象徴することなのかもしれない。

しかしそのおかげで、人里での評判は芳しくない。

妖怪、それも強力なものが境内に出没するのだ。

足が遠のくのは当然のことだろう。

「あの神社は、妖怪に乗っ取られてしまった」

などという風説もあるほどだが……

少女は、我関せずといった様子で縁側でくつろいでいる。

気温は日増しに下がってきているが、雲ひとつない空からは、心地よい太陽の光が降り注ぐ。

掃除の途中だったので、箒が傍らに立てかけてある。

掃除をしても、人なんかほとんど来ないのだが、みすぼらしいのはよくないだろう。

といっても、ほとんどはこうして休んでいるだけなのだが……

またお茶を啜る。

ふう、とため息をつく、思い立ったように空を仰ぐ。

そろそろ来るころかしら？

蒼空は限りなく澄み渡り、天界さえも見上げることができそうだ……

そういえば、あの迷惑な天人はどうしているだろうか。

ふと頭をかすめたが、それは青空に一つの影を認めたことにかき消された。

「やっぱり来たわね……」

一人ごちて神社の中に引っ込むと、湯呑を一つ持って出てきて、また同じ場所に座る。

やや間をおいて、せっかく集めた塵をまき散らしながら、一人の少

女が舞い降りた。

あとで掃除させてやる……………

「よお霊夢。相変わらず暇そつだな」

笑みを浮かべ、少女は縁側に腰を下ろし、先ほど持ってきた湯呑を
ずいっと差し出す。

「それくらい自分でやりなさい」

巫女はぴしゃりと言う。

「これくらいいいじゃないか……………」

少女はぶつぶつ言いながらも自分でお茶を汲む。

「まったく、来るなりお茶をせびるんじゃないかと、たまには御賽銭
でも入れていっただろう？いっつも平気でたかりに来るんだから…
…。」

それに、今は休憩してるだけで、私には掃除という立派な仕事がある
んだから、あんたみたいに年中暇じゃないのよ」

霊夢、と呼ばれた巫女は、ちらと隣に座った少女を見る。

いかにも魔女、と言った帽子に、黒と白の出で立ち。

名前は霧雨魔理沙といい、随分昔からの馴染みだ。

よく神社に来ては、今のようにお茶をせびったり、夕飯時に来ては
飯を食べていき、そのまま神社に泊まつたりもする。

しかし、御賽銭は全く入れていかない。

そこまで勝手をするのだから、たまには、いやむしろ毎日入れてい
くのが当然だと思う。

「まあまあ、昨日の労働の代償って事でいいじゃないか。一人運
ぶのは大変なんだぜ？重いし箒は揺れるし……………しかも、気絶してた
しな。」

落ちないようにするのが大変だったぜ」

魔理沙は、大げさに溜息をつき、肩を回しながら言う。

「仕方ないじゃない。担いで行こうと思ったら、急に飛べなくなる
んだもの……………。まあ、助かったのは事実だし、今日の分くらいはい
いわよ。」

でも、今度から入れてきなさいよね」

「わかったわかった。……しかし、あれは笑えたな。頑張って飛ばうとする姿は、なかなか面白かったぜ」

魔理沙がクスクス笑う。

「う、うるさいわね」

「いや、悪い悪い……。でも、何であんな場所にいたんだ？普通あんなところ通らないだろ」

「それを言うならあなたもね。……最近、あそこに今まで見たことのない妖怪が出るって話を聞いてね。それで、退治を依頼されたのよ。あんな辺鄙な場所だし

襲われている人がいるとは思わなかったけどね。退治しそこなったわ……。また見つけないと」

「見たこともない妖怪、ねえ……。一回見てみたかったぜ。私が通りかかった時は霊夢が空を飛ばうと必死になるとこだったしな。なんだよ、そんなに怖い顔するなって。……ちよつとあの外来人の様子を見てくるぜ。もう丸一日寝てるけど、生きてるのかちよつと気になるしな」

そういつて魔理沙は立ち上がる。

「ついでにお茶菓子も持ってきて。いつものところにあるから」
「うーい」

ひらひらと手を振って、魔理沙は中へ消えていった。

十四章：違和感

魔理沙の背中を見送って後、自分の湯呑に目を落とし、考える。外来人を助けてから、もう一日経つ。

外から人が来るのは、今までなかったわけではない。

ふとした表紙に迷い込むこともあれば、紫の気まぐれ………というものもある。

けれど、最近は少し様子が違う。

時々、結界の歪みを感じる。

それも、ここ一ヶ月になってから、頻繁に感じるようになった。

今までこんなことは無かったし、結界はそう容易く突破したり歪められるものではない。

なにかが、おかしい。

先日対峙した得体の知れない妖怪もだ。

いったい、アレは何だったのだろうか？

今まで、かなりの数の妖怪を退治してきたが、あんなのは見たこともない。

あれだけ堂々と人を襲う妖怪ならば、記録に残らないはずは無い。

そう思っつて、帰ってから少し文献をあさってみたが、どこにも記録がなかった。

一切が謎。

それに、どことなく妖怪ではない様な気もした。

確証は無いけれど………。

かと言っつて、では何か、と問われても全く見当もつかないのだが。

それに、おかしいことといえば、もう一つある。

あの外来人だ。

どこからどう見てもただの人だし、特別な力も全く（・・・）感じなかった。

なのに、彼を担いで飛ぶことはできなかった。

彼から離れて、もう一人の少女を担いだ時は普通に飛ぶことができたのに。

触れることで効果を発揮する何かの能力？

しかし、霊力も、魔力も、妖力もないただの人間に、『能力』を使うことができるのだろうか。

今まで見てきた、『能力』を使える人間は、やはり何かしらの力を持っていた。

能力があつて、霊力なりが存在しているのか、それとも、霊力やら魔力があつて、能力が存在するのか。

どちらが先なのかはわからないが、いずれにせよ彼の状態は変だ。

彼は本当にただの人間なのだろうか。

ただの凡人にしか見えず、能力もない……しかし。

アレの右手を潰したのは彼だ。

現場に到着したとき……アレを見つけたとき、すでに右手が潰れていた。

依頼があつたのは、三日ほど前。

この短期間で何かがあつたとは考えにくいし、何かあつたら連絡が来ることになっている。

それに、手を怪我するほどのことがあれば、妖怪は傷を癒すために姿を隠すはず。

ノコノコと姿を現すはずもない。

だとすれば、右手を潰したのはあの場にいた二人のどちらかということになる。

襲われていた少女に力は感じなかったし、あつたら闘っていただろう。

そして、その少女を庇っていたのが、彼だ……。

とすれば十中八九、彼がやったのだろう。

おそらく、何か畏のようなものでも使ったのだろう。

自分の力だけでやったこととは考えられない、が。

もしも、もし万が一にでも。

腕を落としたのが彼自身の力だったとしたら。
それが、飛べなくなったことと何か関係している……？

考え過ぎだろうか。

いずれにせよ、彼は今までの外来人とは違う。

能力を使える、という点だけなら、そういう外来人は今までにもいたことはある。

しかし、それとも違う。

なんとなくそう思う、でしかないけど……。

これらのこともすべて含め、紫に相談してみよう。

少なくとも結界のことについては、何か聞くことができるかもしれないし。

いずれにせよ、すべてはあの外来人が目覚めてからだ。

そろそろ起きてくれると助かるのだけ。

「おーい霊夢、こいつ、起きたぜー！」
タイミングを図ったかのように、部屋の中から魔理沙の声が聞こえる。

「今行くわ」

手に持っていたお茶を飲み干す。

少し冷めてしまっていた。

湯呑を適当なところに置いて立ち上がり、彼を寝かせてある部屋に急ぐ。

これで少しは進展することがあるだろうか……。

幻想郷は今日もいつも通りの一日だった。

大した異変もなく、変わりようもなく。

しかし……

今、霊夢は少し異変の匂いをかぎつけていた。

十五章：出会い

目を覚ますと、俺は見知らぬ場所で寝ていた。

「ここは……」

一瞬、状況が分からなくなったが、すぐに今までのことを思い出す。そういえば、あのまま気絶してしまったんだっけ。

どこかの部屋の中。

おそらく、運んできてもらったのだろう、迷惑をかけてしまっただろうか。

上半身だけ起こし、あちこち触って自分の体を確認する。

もう、体の痛みはなくなっていた。

むしろ、あれだけ吐血した後だというのに、なんだか体が軽い気がする。

鬼と打ち合った左手にも特に違和感はなく、いつも通りの細腕だ。

体の無事を一通り確認し終え、ぐるりと周囲を見渡す。

畳張りの床、襖、見たところ木造建築のようで、古い日本家屋といった感じだ。

けれどそれにしても、随分質素である。

調度品が少ない……：そういえば、助けに来てくれたのは、巫女？ だったはず。

とすれば、ここは神社の中であろうか。

それならば、質素なものも頷ける。

よく知らないが神職ならば、慎ましく暮らさなければいけないのだろう、きつと。

額縁の中に、「一攫千金」とでかどかど書いてあるのが飾られているのは見なかったことにした。

他に何かないかときよるきよるあたりを見回していると、こちらの方へ近づいてくる足音に気づく。

木張りの床だろう、歩きたびに、キイキイという軽い音が立ってい

る。

ここの主、先ほどの巫女であろうか。

とりあえずお礼を言わないといけない。

それから、いろいろと聞きたいこともある。

話を聞くことができればいいが……。

此処のこと、この世界のことがよく分からなくなった。

今まで妖怪の存在を信じたことは無かったが、目の前で見せられて、その認識も消えうせた。

常識が、根底からひっくり返ってしまった。

そして、先だつて自分に起こったこと……最早、自分のことさえよく分からなくなる。

足元がおぼつかなくて、まるで幽霊になってしまったかのような感覚。

今は、いったい何が起こったのか、何でもいいから情報が欲しい。

足音は、部屋の前まで来て立ち止まる。

襖を開き姿を現したのは　　どう見ても巫女ではなかった。

服装に関して、二度目のショック。

いかにも魔女、と言うべきか　　。

黒と白。

大きな黒い帽子。

ああ、今日はハロウィンだったっけか？

ますます意味が分からない。

「おお！起きたか外来人。調子はどうだ？」

魔女が片手をあげ、気さくに話しかけてくる。

「え？あ、調子は、良くなっただけど……」

急に話しかけられて、呆気にとられつつも、何とか声を絞り出す。

「うん、それは良かった」

魔女がこくこくと頷く。

なんだか、夢を見ているかのようだ。

「おい霊夢、こいつ、起きたぜ　！」

魔女が誰かに向って呼びかける。

霊夢、とはあの時の巫女のことだろうか。

それとも、また別の誰か？

こんな状態で、新しいシヨックを受けたら　　それこそ、もう一度気絶してしまいそうだ。

これ以上の新展開には、もうおそらく付いていけないと思われる。それに、さっき俺のことを外来人だとか言った気がする。

ここは日本ではないのか。

いや、しかし言葉が通じているのにそんな筈は……。

もう、駄目だ、さっぱりわからない。

こういう時は思考することを放棄して、状況に身を任せるに限る。

足音が一つ、こちらに近づいてくる。

魔女は、いつの間にか部屋の中に入ってきていて、胡坐をかいて座っていた。

「あの………」

「ん？どうした？」

「いや、外来人っていったい何のことかなー、と」

「その辺は、今から説明してくれる人が来るから大丈夫だぜ」

「はあ………」

とりあえず待て、ということか。

「あなたが説明してくれてもいいのよ？」

唐突に、襖の向こうから声があがる。

そして、赤と白の　　巫女服を着た少女が、部屋の中に入ってきた。

「いや、霊夢。こういうのはお前の役割だから私はパスするぜ」

巫女は、魔女の隣に腰をおろした。

「さて……、とりあえず、体はもう大丈夫？かなりの量の血を吐いていたみたいけど」

「はい、おかげさまでもう何ともないみたいです。助けてもらって、ありがとうございます」

巫女が微笑みながら言う。

「そんなに固くならなくてもいいわよ、妖怪退治は私の仕事だから……それより一つ、いいかしら。此処がどこだか、わかる？」

神社の中、とかじゃなくて、あなたが今いる世界のこと」

「え……？そう言われても、日本、としか」

「うん、やっぱりね」

巫女は一人分かったように頷く。

何がやっぱりなのだろうか。

「あの、さっぱり意味が分からないんですが……」

「それを説明する前に、あなたに少し聞きたいことがあるのだけれど」

「え、何ですか？」

むしろ、聞きたいことが山ほどあるのはこっちなのだが。

「どうしてあんな所にいたのか。あそこに来るまでの経緯を、最初から最後まで全て聞かせて。それを聞いてからでないと、説明しようがないのよ。……もっとも、概ね予想はできてるんだけどね」

呟くように、最後の言葉を付け足した。

何が目的なのかさっぱりわからないけれど、事の始め 闇に飲まれたところから話し始めることにした。

夜道で、闇に飲み込まれたこと。

死んだはずなのに、生きていて、目覚めたら、一面真っ暗の不思議な空間にいたこと。

体に走った激痛に気絶し、再び目覚めたら見知らぬ場所に寝ていたこと。

鬼に、襲われたこと……。

説明している間、巫女は黙って、言うことに耳を傾けていたが、その表情は険しかった。

一通り説明を終える。

こうして、改めて自分の口から状況を話すと、自分の身に起こったことだという実感が全くわからない。

一つ、また一つと話すうちに、まるで小説を朗読しているかのような気分になる。

「なんだか、想像していたのと違うな。紫の操るスキマは、外の世界ではそんなに気味の悪い物になるのか？」

魔女が、巫女に問いかける。

「いえ、そんなことは無いはず……」

巫女の表情は未だ硬いままだ。

「いったいどういうことかしら。……後で、紫に聞いてみないといけないわね」

そう、呟いた。

十五章・出会い（後書き）

七月の更新が滞り、申し訳ありません。

私生活が若干忙しくなり、まとまった時間をとることができませんでした。

ですが、それも一段落し、これからは今まで通りか、それ以上のペースで更新していけると思います。

拙い文章と、妄想に支配された内容ですが、これからも更新していきたいと思えます。

十六章：非常識な世界

「なあ霊夢、私も一緒に行っていいか？」

「駄目」

巫女は、あつさりとその提案を撥ね退ける。

「えー！それぐらいいいじゃないか」

魔女は口を尖らせて言う。

「あんたが出てくると話が拗れる気がするのよね」

「そんなことないぜ！なー、頼むよ。大人しくしてるからさ」

「性格上、それは無理でしょう」

「いやいや……あ、あれだ、神社が壊されたとき、直すの手伝ってやったる？その見返りって事で」

巫女が、じつとりとした眼で魔女を見ながら言う。

「手伝った。へーえ、天狗や鬼が仕事をしてるのをただ見物してるだけって、手伝ったことになるんだあ？しかも、お茶まで飲んでくつろいでた記憶があるんだけど」

「いや、あれはだな、天狗たちがサボらないで、ちゃんと仕事するかどうか見張ってたんだぜ。つまり、現場監督だ。立派な仕事だろ？」

「へえ？じゃあ現場監督は、常に皆を見張ってなきゃいけないわね。大変な仕事だわー」

「だろ？だったら」

「うちに来た現場監督さんは、仕事中に昼寝をしていた気がするのだけど」

……何だろう、これ。

目の前では、舌戦が繰り広げられているわけだが。

見ていてついつい微笑んでしまうような、そんな光景だが、別にそこは重要じゃない。

完全に、存在を忘れられている気がするのだけれど。

「あの」

思い切つて声をかけてみる。

「仕事の合間には休憩が必要だろ？」

「休憩に半日を潰していたら、おそらく世の商売は成り立たないわね」

「ちょっと」

「なー霊夢ー、頼むよー連れてってくれよー」

「もしもーし」

「駄目だったら駄目。っていつか、露骨に話をそらすな！」
めげそうになつてきた。

目の前で話しかけているのに、このシカトっぷり。
まったく気づかれていない。

僕の存在感はそんなに希薄ですか？

「頼むから、話を聞いてください……」

話が一瞬途切れた間を狙つて言う。

巫女と魔女は、はっとしたようにこちらを見る。

「あー、すまん。忘れてたぜ」

「ごめんなさい、気づかなかつたわ」

「……………」

心が折れてしまいそうだ。

「そ、それで、どうしたの？」

不自然な笑みで巫女が尋ねる。

「少し、聞きたいことがあるんですが。喋つてもいいですか？」

「も、もちろん！」

「そうだけ！何でも聞いてくれ！」

「……………」

まあ、いいけどさ……。

「結局、ここは何処なんですか？」

それを聞いて巫女は、急に真面目な顔になった。

「……………そうね、やっぱり説明しないと納得できないわよね。何も聞

かない、という選択肢もあるのよ？そうすれば、ああ、たちの悪い夢だったー、なんて、思い込むこともできるかもしれない。けれど、知ってしまったら。それこそ、価値観や世界観が一気に壊れてしまうかもしれない。それは、あなたを支えている『幹』がなくなるのと同じだわ。それでもいい、と言うなら全部説明してあげる。あなたの世界を、信じられなくなるかもしれないけど」

確かに、夢だったと思ひ込み、全て忘れてしまうことは楽だろう。知らない方が良かった、なんて後悔はしたくない。

でも、本当にそれで納得できるだろうか。

今この身に起こっていること、この身に起こったこと。

それを知らないでいる方が、ずっとずっと、怖い。

夢だった、なんて簡単な言葉で、忘れることはできないと思う。

「そんなに考え込まなくてもいいんだぜ？きつと霊夢は説明するの
がめ」

「と・に・か・く！話を聞くの？聞かないの？」

魔女の言葉を遮って、巫女が言う。

眼を上げ、真つ直ぐに巫女を見つめ、

「聞きます。覚悟は、出来たから」

そう、はっきりと言った。

「……そう、わかった。じゃあ、まずはあなたが今いるこの世界のことからね」

~~~~~少女説明中~~~~~

「幻想郷。そんな場所が、日本にあったなんて……。自分の知って

いることなんて、本当に少なかったんだな……」  
存在を忘れられ、この世にいられなくなったもの。  
それが実体をもって、今まさに目の前にある。

ただただ、驚くばかりだ。

今まで、信じることの無かったもの。単なる噂話、伝説にしか  
いなかったものが、現実には、この世界にある。

人を喰らう鬼が。

闇に住む、魍魎魍魎が。

「なんか、ずいぶんあっさりした反応ね。もっとこう「そんなこと  
あるはずがない！」とか、拒絶の言葉が返ってくるかと思ったけど」  
巫女が言う。

「否定しようにも、自分で経験したこともあるし、それに自分の世  
界観なんて、所詮身の回りのことだけですから」

それを聞いて、巫女はため息をつく。

「物分かりがよくて助かるわ……。今まで来た外来人の中で、全く  
信じようとしていない人がいたから。それなら、説明しないでさっさと  
帰ってもらった方が楽なのよね。」

「そりゃあ、信じがたいのも分かるけど、事実だからしょうがない」

「そっぴや、随分機嫌が悪いときがあったな。あれか？」

「多分そうね」

「ふーん。外来人の話は私も聞いたことがあったけど、こうして直  
接見るのは初めてだな」

魔女が、まじまじとこちらを見つめてくる。

……少し気恥ずかしい。

「着てるものが特徴的だけで、あとは私たちと変わらないんだな」  
こっちからすれば、あなたたちの方が特徴的なのだが。

そう言いたくなかったが、黙っておく。

「魔理沙が見たこともないのも無理は無いわね。基本的に、さっさと  
元いた場所に帰すもの。それに、来るといつてもごく稀にしか来  
ないしね。紫の気まぐれか、なんかの調子で結界が緩んだときぐら

いかしら。迷い込んできたとしても、無事にここまでたどり着けるかもわからないし」

そうなのか……。

襲われて生き延びれたのは、かなり運が良かったようだ。心の中で、改めて巫女に感謝する。

……というか。

そうだ、そういえば。

何故忘れていたんだろう。

「さつきから何故か流してたんですが、俺、元の世界に帰れるんですか？」

話を聞く限りでは、帰れるようなことを言っていた気がする。

巫女が、今思い出したように言う。

「ああ、そういえば説明してなかったわね。ここと外の境界 博麗大結界の管理人は、もう一人いるのよ。八雲紫、っていう妖怪なんだけどね。基本的に、外との出入りは紫がやっているから。あなたの体調がよくなったら、いつでも帰れるわよ」

「じゃあ帰れるんですか！良かった……」

どうやら、少し先行きが見えてきたようだ。

「ん？ということは、俺がここに迷い込んだのは」

「ええ、そいつのせい、のはずなんだけど……」

巫女は少し顔を曇らせる。

「？どうしたんだ霊夢。やけに歯切れが悪いじゃないか。境界をいじれるのは、あのスキマ妖怪だけなんだろう？」

「まあ、本人に聞けばわかることか。何でもないわ」

「そうか」

「で、とりあえずこれで一通り全部話し終わってたわね」

巫女の言葉に、魔女は少し呆れ気味に言う。

「おいおい霊夢、そりゃあないぜ。私は自己紹介もさせてもらえないのか？」

「あ」

巫女は、しまった、という表情をする。

「まさか本当に忘れてたのか……」

魔女は大げさにため息をついた。

「ちよ、ちよっとうっかりしたただけよ！」

巫女は恥ずかしそうに顔をそむけた。

そのやり取りがなんだかおかしくて、笑ってしまう。

会ってからまだ少ししか経ってないが、この二人の仲の良さはよく分かる。

いつもこうして笑い合っているのだろうか。

想像すると、なんだか微笑ましい。

巫女は一つ咳払いをする。

「私の名前は、博麗霊夢。この神社の巫女で、異変解決、妖怪退治の専門家よ。よろしく。あと、さっきから敬語だけど、普通に喋らない？見たところ年も変わらなさそうだし、私も敬語じゃないし」

「わかった。じゃあ、えーと」

さて、何と呼んだものか。

少し逡巡する、が結局いい案が浮かばない。

こんなことで悩むのは、俺だけだろうか？

「霊夢でいいわよ」

思案しているのを讀んだかのように言う。

「じゃあ、よろしく、……霊夢」

やはり少し気恥ずかしい。

気にし過ぎだろうか？

「じゃあ次は私だけ。霧雨魔理沙だ。普通の魔法使いで、異変解決の専門家だ。よろしくな！あ、魔理沙でいいぜ」

魔理沙はそう言って右手を差し出す。

「よろしく、魔理沙」

握手にこたえると、魔理沙は屈託のない笑顔を見せた。

天真爛漫といった感じで、初対面なのにとても親しみやすい。

笑顔が眩しくて、こっちまで元気が出てきてしまうような。

しかし。

その笑顔を見ていると、もやもやと不安が湧き上がってくる。これから先、彼女に振り回されてしまうような。

いや、そんなことがあるはずないのは分かっている。

元の世界に帰るのだから、あるはずがないんだけれど。

「俺は八代明月<sup>やしろうめつき</sup>。至って普通の人間だ。よろしく」

あれ？

口に出したことに、何か違和感を覚えた。

「さあ、自己紹介も終わったことだし、ちょっと早いけど夕飯の準備をしてこようかな」

違和感の正体をつかむ前に霊夢が言う。

「夕食……」

飯、という単語が出てきた瞬間、腹がとても大きな音で鳴った。

何と節操のない体だろうか、自分で自分に呆れてしまう。

見ると、二人とも笑いを堪えていた。

バツが悪くなって、目を伏せる。

「仕方ないわよ。丸一日寝てたんだから。でも、そんなにお腹が空いてるなら、ちゃっっちゃと用意してくるわ」

部屋を出て行くこうとして、襖の近くでこちらを振り返って、霊夢が言う。

「とりあえず、今日は泊まっていきなさい。紫のところは、また明日にでも行きましょう。今日はゆっくり休みなさい」

「ありがとう、助かるよ」

確かにまだ、本調子ではなさそうだ。

しかし、夕飯をごちそうしてもらった上に泊めてもらうなんて、お世話になりすぎだな……。

「霊夢、私も泊まっていくぜ。外の世界の話を、明月から色々聞いてみたいんだ」

「いいわよ。その代わり夕飯の準備、手伝ってよね」

「わかったぜ」

魔理沙は霊夢の脇を通り、一足先に部屋から出て行った。

「夕飯の準備が終わったら呼ぶから、少し横になってなさい。……  
ああ、あとあなたの持ち物は全部部屋の隅に置いておいたから。た  
だ、上着は血がべつとりで、使い物にならなさそうだったから捨て  
ちゃったけど、大丈夫？」

「うん、大丈夫」

そう答えると襖が閉じられ、霊夢の足音が遠ざかっていった。  
しんとした部屋に一人残される。

いきなり静かになった。

確かこの神社は、里から少し離れているんだっけ。

だから、これほど静かなのだろう。

「さて、と」

部屋の隅にあった鞆を引きよせ、無くなっている物があるかどうか  
確認する。

これと言って大切なものは入ってはいないのだけれど、あんなこと  
があつた後だから一応。

中のものを一つずつ取り出し、畳の上に並べていく。

筆箱、教科書、数冊の文庫本、薬、愛飲しているレモンティーの紙  
パック。

大学帰りの持ち物のままで、どうやら無くなったものはないようだ。

一番危険だと思っていた紙パックにも、特に変わりはない。

軽く振ってみたが、中身が零れることはなかった。

「そういえば、喉が渴いたな」

これ、飲めるだろうか。

開けてみることにする。

匂いを嗅いでみるが、特におかしいところはなさそうだ。

少し躊躇ったが、結局一気に飲んでしまった。

「うん、うまい」

随分喉が渴いていたようで、一分もたたずに飲み干してしまった。  
空っぽになったパックを、畳の上に置く。

「これだけ眺めていると、何も変わりはないんだよな」  
目の前に並んでいるのは、いつもの日常だ。

なんだか、不釣り合いだ。

自分も、これらも。

本当は、これは夢の中のことで、俺は今も寝ていて。

道のと真ん中で、気絶しているだけじゃないのか。

そのうち誰かが起こしてくれて、ああ夢だった、なんて……。

そんなことを考えていると、一段大きな音をたてて腹が鳴る。

その音に、とりとめもない考えは霧散した。

一つ、ため息をつく。

下らない考えだった。

この世界を受け入れたつもりで、どこかこの現実を受け入れられないでいたようだ。

「腹減ったな……」

やはり体はここにある。

腹もすくし、痛みだつてあつた。

畳の上に並べた物を、再び鞆に詰める。

やることがなくなってしまうたので、布団に潜った。

何処からか、良い匂いが漂ってくる。

もうそろそろ、夕飯だろうか。

そんなことを考えながら、まどろみの中に落ちていった。

## 十八章：夜

「あー、疲れた〜」

部屋の中に戻ってくるやいなや、畳の上に体を投げ出した。

「はあ……」

畳の匂いと、感触が心地良い。

すぐ横には布団が引かれているが、今はこの感触を味わいたい。物心がついた頃から、ずっと畳のある部屋で過ごしてきた。

そのせいか、こうして横になるととても落ち着く。

おかげで、フローリングの床には抵抗ができてしまった。

無機質な感じがして、どうにも好きになれない。

こうしてゴロゴロするには、畳が一番だと思う。

手足を投げ出し、リラックスすると、疲れが取れていくようだ。

……夕食を物凄い勢いで食べて腹も一杯になったところで、休みがてらこの世界の詳しい話を聞こうと思った。

しかしその願い叶わず、食後は魔理沙からの質問攻めにあった。

外の世界のことについて様々なことを尋ねられて、ずっと喋りっぱなしだった。

話すことを何でも興味深げに聞いてくるので、こっらもついつい色々話してしまい、気づくと夜。

結局、この世界についての詳しい話は聞きそびれてしまった。

魔理沙が質問をして、こっちがそれに答える、またそれを魔理沙が質問するというふうで、こっちが質問する機会を逃してしまった。

元の世界に帰るのだから、あまり深く聞かない方がいいとも思ったが、どうしてもこの世界に興味があったのだが……。

早く風呂に入れ、と霊夢が声をかけにきたときには、時刻は十一時くらいだった気がする。

魔理沙はまだ質問し足りないようだったが、最終的に霊夢に引きず

られていった。

もしかしたら霊夢は気を使ってくれたのかもしれない。

魔理沙が今から引きずられていったことで、話はそれぎりになった。唯一聞けた話は、幻想郷に現世からいろいろな物が流れていっていること。

なかなか興味深い話で、詳しく聞いてみようとしたが、案の定次の魔理沙の質問にかき消されてしまった。

でも確か、そういう外の世界のものを販売している店があると言っていた気がする。

名前はこう、こう………なんとかだったか、もう記憶が曖昧である。それほど多くの質問をされたということだろう。

そして、風呂の順番まで部屋で待とうと、こうして帰ってきたわけである。

とはいえ、特にすることは無く、寝ころんだままぼーっと天井を見る。

じっと見続けていると、疲れのせいかだんだんと瞼が重く……。

ああ、あのシミ、何だか顔のようだ……。

「明月、風呂空いたぜ………って、寝てるのか？」

魔理沙の声に目を覚まし、体を起こす。

「んー。今起きた」

「起こしちまったか？ 悪いな」

「いや、風呂には入りたかったから大丈夫。わざわざ呼びに来てくれてありがとう」

地面に寝転がったのだから、埃も付いていることだろうし。

「そうか。あ、風呂はここ出て左だからな」

「わかった」

部屋の襖が閉じられる。

また眠くなる前に、早く行った方がいいだろう。  
起きたばかりで若干ふらつく足取りで、部屋を後にした。

「で、なんでここにいるの？」

「さあ……？」

その質問に答える術は無い。

霊夢が呆れ顔をする。

それも当然だろう、何せ今俺がいるのは 台所なのだから。

台所には、晩御飯の片づけをしていた霊夢がいた。

そして、俺が台所に来るのは当然場違いなことだ。

霊夢は当たり前前の疑問を投げかけたのだが、俺にも理由は分からない。  
い。

「確かに風呂に向かったはずなんだけど」

「風呂は逆方向よ……」

おかしい。

何故台所なぞに出てきてしまったのだろうか。

「魔理沙ったら、風呂の場所言わなかったのかしら」

「いや、聞いたよ。それでその通りに着たはずなんだけど」

方向は間違ってたかった、と思う。

「この中で迷うなんて凄いわね……。風呂はここ真っ直ぐ行けばい

いだけだから、今度は迷わないようにね」

「真っ直ぐ、直進、ストレートね。よし」

流石に真っ直ぐ進むだけで迷うはずはない。

そう、さっきはちょっと脇に逸れてしまったただけなんだ。

「あなた、大丈夫？」

「こ、今度は大丈夫！……だと思っ」

「それもあるけど、他にも……そう、体の調子とかよ。どこかおかしいところがあったりしてない？」

「ん……と」

予想外の言葉に、少し言葉が詰まる。

「特に変な感じはしないし、怪我也してない。いつも通りだと思っ  
あるのは眠気ぐらいだが、それは調子が悪いわけではないだろう。」

「そう？ それならいいんだけど。色々あったし、気付かないうち  
に体調を崩すこともあるかもしれない、と思っ  
てね。体は大丈夫で  
も、心の方は自分では意外とわからないものよ」

台所を片づけながら、霊夢が言う。

背中越しにかけられた言葉だったが、それからは確かな思いやりを  
感じた。

「わかった、気をつけるようにするよ。心配してくれてありがとう」

「……ほ、ほら、早く風呂入らないと冷たくなるわよ」

「っと、そういえばそうだったけ」

そう答えて、風呂場に向かうことにした。

風呂を出て、自室への廊下を歩く。

久しぶりの風呂はとても気持ち良かった。

沸かされてから少し時間が経っているにもかかわらず、まだ熱いく  
らしいの温度だった。

少し長く浸かりすぎてしまっただろうか、体が少し火照っている。

廊下のひんやりとした空気が、湯上りの体に心地よい。

自室の襖の前に来たところで、立ち止まる。

……少し、外の空気でも吸ってこようか。

人様の家で深夜徘徊するのはどうかとも思うが、なんとなく外が見  
たい。

そのまま部屋を素通りして、縁側へ向かう。

二人はもう寝てしまっているだろうな。

なるべく音をたてないように、薄暗い廊下を歩く。

一応来た時に神社の中は一通り説明してもらっている。

今度は、迷わずに縁側まで出れた。

というか、風呂に行くのに迷ったのが事故だったんだ。

いつもは方向を間違えたりしない。

そう納得して、適当な場所に腰を下ろす。

澄んだ空気に身を任せる。

辺りは一面の闇で、目が慣れるのに少し時間が必要だった。

境内を外れたところはもう森だが、その先が全く見えない。

暗闇が口をあけているようにも見える。

空を見上げると、一面に輝く星。

夜空を埋め尽くす、大小様々な星の輝き……。

明かりの無い、暗い夜の世界でそれらは一層際立って見えた。

「凄い……」

思わず、感嘆の声が漏れる。

それは、今までに見たどんな星空よりも綺麗だった。

田舎に行った時、都会とはまったく違う星空に感動した。

けれど、今見ている物はそれよりも凄い。

都会暮らしの身にとって、こういうのはなかなか見れない光景だ。

そもそも、都会で星空が見えただろうか？

常にどこかに明かりがある。

高層ビルの明かり、各家の明かり、街灯、その他様々なものだ。

それらは当然必要なものだし、無い方がいいなんて思わない。

実際今日の前は真っ暗でほとんど見えないし、その方が危険は多い。

確かに便利にはなった……その代わり、失ったものがあつた。

この夜空もそうなんだろう。

昔はいつでも、どこにでもあつたはずの夜空。

こうして改めて見ないと、それを思い出すことすら出来ない。

「……こんなこと、いつもなら絶対に考えなかつただろうな」

呟く。

いや、もし田舎に行つて……こんな夜空を見たとしても。

そんなことを考えることはあつただろうか？

多分、それは　　ない。

この世界だからこそ。

明かりもない世界だからこそ、理解できたんだろう。

ここは、とても綺麗だ。

澄んだ空気と、自然と。

それに比べると、外の世界は汚れて見えた。

それを知ってしまった今、今まで通りの日常を送れるのだろうか。

排気ガスに染まった青空で、明りに薄れた星空の下で……。

でも。

それでもいつも通りの日常が恋しい。

ここは綺麗だけど、俺がいる世界ではないから。

溜息をついて、思考を打ち切る。

何を考えているんだろう。

色々考え過ぎて、なんだか自分でもよく分からなくなってしまった。

霊夢に言われたとおり、少し疲れているのかもしれない。

そろそろ寝た方がいいだろう。

立ち上がり、行きと同じくらい静かに部屋に戻った。

## 十九章：少女のこと

幻想郷での一夜、いや正確に言えば二夜が明け、朝。

それだけ寝ていたにもかかわらず、昨夜は布団に入っただけで寝てしまった。

なんとも不思議なものだと思う。

どんなことがあっても、食欲と睡魔には勝てないのだ……。居間には霊夢と、まだ眠り足りないような顔をした魔理沙がいた。

テーブルには朝食の準備ができていて、おいしそうな香りを立てている。

「お早う。ちゃんと眠れたかしら？」

「もう大丈夫。すっかり眠れたし、本当になんとお礼を言ったらいいか」

霊夢がいなければ、まず間違はなく死んでいただろう。そう考えると、いくら感謝をしても足りないほどだ。

「あー、もう気にしない！そういう仕事なんだし」

「それがなきや……人気のない神社のただの貧乏巫女」  
もそもそと飯を食べながら、魔理沙が言う。

ものすごく眠そうだが、一応意識はあるようだ。

「あんたねえ……。と、まあそんなこんなだから気にしない。あ、でもお賽銭は入れてくれてもいいのよ」

「勿論入れさせていただきます。はい」

断る理由もないし、何よりお賽銭という単語に対する彼女の執着のようなものが感じられて、断れない。

しかし、現代の通貨が役に立つのだろうか……。

「さて、あなたが帰る日は明日で大丈夫？」

食後のお茶をすすっていると、霊夢が言う。

「え？ そんなに早く帰れるの？」

「ええ、時間もかからないし、準備も要らないし」  
これは願ってもないことだ。

この世界と現世の間には、複雑な結界が張られているという話を聞いた。

だから、てつきりいろいろ準備が必要で、最低でも一週間くらいはかかるのかと思っていた。

なんにせよ、早く帰れるのはうれしい。

「じゃあその日取りをお願いします。なるべく早く帰りたし」

「そうねえ。向こうでも同じように時間は流れているから、あなたちよつとした失踪者ね」

そうなのだ。

ここにいることはつまり、向こうにいる人ではこっちを絶対に見つけられないということ。

実家暮らしではないから、三日やそこらいなくたってまだ問題はないだろう。

しかし、一週間以上になってくると話は別だ。

いくらなんでもおかしいと思った友人あたりが家に乗り込んで来る可能性がある。

「本当は今日でもよかつたんだけど。結界を越えるのに何もないと限らないし、それに今日は少し用事があるのよね」

「用事？」

「あー、あれか」

魔理沙は知っているようだが、何のことだろうか。

というか、悪態をつく以外で今日初めてまともに喋ったな。

「あなたと一緒に襲われていた人がいたでしょ？ その子のところでやることがあるの」

「まさか、まだ何か危険な目にあつてるとか？」

「違うわ、そんなに焦らなくても大丈夫。事後処理みたいなもんだから。それに、本当に危険があれば、ここに連れて来たわよ」

「そ、そっか」

でも、事後処理とは何だろうか。

もしや、倒した妖怪が幽霊にでもなっ取り付いているとか  
いやそもそも、妖怪って幽霊になるのか？

ああ違う、普通に幽霊が取り付いてるとかか？

「とりあえず落ち着きなさい。よからぬ想像が広がってるみたいだ  
けれど」

「へ？ あ、ああ」

「気になるなら一緒に行く？」

「え？」

「そうだな、明月も来ればいいじゃないか。そのほうが安心できる  
だろ？」

魔理沙がこともなげに言った。

「なんであんたはついてくる前提なのよ」

「細かいことは気にするな。それで、どうする？」

「俺は……」

答えを出そうとして、少しためらう。

会って何を話せばいいかわからない。

彼女に対する負い目のようなものを感じているのかもしれない。

しかし、俺は少し逡巡したのち結局「行く」と言った。

先に席を立った魔理沙に続いて、境内に出る。

「あんまり行きたくない、っていう顔だな」

俺の煮え切らない態度に、箒を弄りながら魔理沙が言った。

「まあ、会いづらいというか何というか」

「なんで？」

「……………先に、彼女が襲われていた。俺は助けようとした。でも、

いざ化け物と向き合ったら、急に怖くなって、それで

そこまで言って俺は口をつぐんだ。

言うのが恐ろしかった。

「逃げた、というわけか」

魔理沙の言葉に、無言のまま頷いた。

「それが普通だよ。目の前にいる他人と自分、どちらが大事かと言えば、当然自分だ。ましてや妖怪なんて、得体の知れないもんに挑む人間なんざいないぜ。それでも明月は、助けに行こうとしたじゃないか」

「そう、なのかな」

「そうだぜ！ ほら、お前が落ち込んでいたら相手が気を使っただろ？ 笑顔だ」

そう言って魔理沙は笑顔を見せた。

「ああ」

俺も笑ってみせた。

取り繕うような笑顔だったかもしれないが、それでも魔理沙は満足してくれた。

先ほどのこと、本当は出会ってすぐの相手に話すようなことではなかった。

それでも話そうと思ったのは、彼女の明るい性格のおかげだろう。

俺は、見知ったばかりの人に助けられてばかりだ。

「準備できたわよ……って、なに笑ってるの？」

「なんでもないぜ」

「……？ まあいいわ。さて、ちょっと明月じつとしてて」「ん？」

霊夢が俺の両肩を掴む。

そのまま少しして「やっぱり駄目ね」と霊夢は手を離した。何をしようとしたか、さっぱりわからない。

一人で唸っていたようにしか思えなかったが、何か意味のあることだったのだろう。

「じゃあこつちだな」

魔理沙が箒をトントンと叩く。

俺は促されるまま、箒の後ろに跨り、柄の部分握った。

「箒より、私につかまったらほうがいいぜ。慣れないうちは揺れのせいで振り落とされるかもしれないぜ」

「ふ、振り落と？ あの、安全運転でお願いしますよ？」

「善処するぜ」

それ、政治家とかがよく使う濁し方だよな。

なんだかとても嫌な予感がする。

「大丈夫、落ちたら拾ってやるから」

「フォローになってないし、落ちるってはっきり言っているよね？」

逆に怖いのですが

「がんばってねー」

先に空中にいる霊夢が、ひらひらと手を振った。

それも、フォローになってません。

それに、頑張つてつてどういう「よし行くぜ！ 全速前進！」

「やっぱりかああああ！！！」

砂埃と叫び声を神社に残し、二つの影は空に消えていった。

神社を出てしばらく飛行し、とても快適な旅を終え、どこかの森の中に着陸した。

地面に立つと、やっと生きた心地が戻ってきた。

「酷い目に遭った……」

「はっはっは。だらしないぜ明月？ これでもかなり抑えたほうだ」「初心者にはちょっときつかったかな……。本当に落ちるかと思つた」

予想はしていたが、それをはるかに超える恐怖体験だった。

足がふらついて、普通に立っているのも難しい。

俺の様子を見た魔理沙はさっきからずっと笑っていて、腹立たしい。何か言おうともしたが、言い合う気力がまったくないのでやめた。

「こつちよ」

霊夢の先導について、鬱蒼と生い茂る木々の中を歩く。

「彼女はこんな森の中に住んでるのか。随分住みにくそうだな」  
木々に触れながら、魔理沙理沙が言う。

確かに、お世辞にもここが住むのに適した場所とはいえないだろう。上空から見ただけでも、周囲は完全に森だったし、今歩いているのも森の中の小さな獣道である。

人一人が通れるくらい細い道は、背の高い木々のせいで薄暗い。

「本人に聞くのが一番早いわね。ほら、着いたわよ」

そこは、小さな丸太小屋のような家だった。

茅葺の屋根、周りの壁は黒ずみ、ところどころ腐食している。

霊夢が戸を叩くと、中から返事があり少女が戸を開いた。

「こんにちは霊夢さん、とりあえず中へどうぞ」

「お邪魔します」

「では、魔理沙さんと、……あつ」

少女と目が合う。

相手は一目で俺と気づいたようだ。

「まあまあ、積もる話は後で。な？」

魔理沙が少女に言った。

「あ、そ、そうですね。中へどうぞ」

「えと、お邪魔します」

俺は魔理沙に続き、小屋の中へ入った。

土間から、簡素な台所、六畳ほどの座敷、全て見渡せる。家というより、やはり小屋と言ったほうが正しいだろう。

およそ、人が定住するような場所ではない。

小さめの卓袱台が置かれている座敷では、既に霊夢がくつろいでいた。

「今お茶を入れますので、適当に座っててください」  
座敷の座布団に座り、改めて周りを見ると、なるほど一応人が泊まれるようになってはいるらしい。

「よくこんなところに住んでるなあ。私も人のことは言えないが、とても人が住むような場所じゃないぜ」

魔理沙の言葉に俺も頷く。

「私も、いつもは人里で暮らしていますよ。今は、ちょっとした理由があつてここに宿泊しているのです」

お茶を乗せた盆を卓袱台に置きながら、少女が答える。

「今度、人里でお祭りがあるんですけど、いわゆる巫女みたいな仕事があるんです。それで、選ばれた人は一週間ほどここで寝泊まりしなければいけないという慣習があるんです」  
なるほど、そういう理由があつたわけか。

それにしてもよくこんなところで一週間も過ごしてられるものだ。もし俺が選ばれたとしたら、二日で怖……嫌になるに違いない。

「そりゃまた難儀な話だな。こんなところにいちゃ、妖怪に襲われるかもしれないじゃないか」

「それは霊夢さんをお願いして、ここの周囲に結界を張ってもらっているんです。今日はその結界の確認に来てもらいました」

「ははあ、つまり霊夢がサボって適当に結界を張ったせいで、妖怪が入り込んできたってわけだ！」

謎は解けた、と言わんばかりに、魔理沙が霊夢を指さした。

「違うわよ！ 襲われた当日にも確認したけど、結界が破られた痕跡はなかったわ」

「じゃあいったいどういうことなんだ……？」  
思わず言葉が漏れる。

「それはわからない。でも、確かにあれはここに侵入してきた」

「はい。外が騒がしいので見に行ったら、あの化け物がいて襲われた、ということか。」

まだ、その時の恐怖が消えないのであろう、少女は両手で体を抱く。

「それで、しばらく逃げた後、彼に助けられたんです」  
少女が、俺に向き直る。

「いや、俺は」

助けることはできてない、と言おうとして

「いえ、あなたがいなければ、私は今ここにはいませんでした。ありがとうございます」

その先は、少女の感謝の言葉に遮られた。

深々と頭を下げる少女に、俺はどうしていいか分からなくなる。

「そうねえ。あなたがいたことに意味があるなら、それでいいんじゃない？」

「結果オーライってことだぜ」

「……………ありがとう」

いたことの意味、その言葉が胸に染みる。

俺はまだ、完全に自分を納得させることはできないけれど、あれは確かに意味のあることだったのかもしれない。

そう思うと、少しだけ楽になった気がした。

「……………それじゃ、お茶飲み終わっただしそろそろ結界見てくるから適当に待ってて」

霊夢はそう言って手に持っていた湯呑を置いて、外へ出て行った。

「なあなあ、人里でやる祭りってどんな感じのなんだ？」

残された魔理沙は霊夢の後を追わず、興味深げに祭のことを少女に聞く。

「どうやら先ほどから興味津津だったらしい。」

「あ、それはですね」

俺は二人の話を聞き流しながら、お茶を一口飲む。

淹れてから随分たつたはずなのに、何故かほんのりと暖かく感じた。

## 十九章：少女のこと（後書き）

とても久しぶりに小説を投稿させていただきました。

まずは、明けましておめでとうございます。

そして、長い間何の音沙汰もなく待っていた方には大変申し訳ありませんでした。

身の周りが急に慌ただしくなってしまったことにより、長らく投稿ができませんでした。

それもすべて自己責任ですが、年を跨ぎやっと一段落したので、投稿させていただきます。

今後の更新ペースについてはっきりしたことは言えませんが、話の長さを考えると週一ペースで投稿できれば……と思っています。

ごく簡単な近況報告で申し訳ありません。

それでは、本年もどうぞよろしくお願ひします。

「ただいま」

祭の話題がちょうど終わったころ、霊夢が戻ってきた。

「お疲れ様です。霊夢さん」

少女が立ち上がりお茶を汲みに行こうとするが、霊夢はそれを手で制した。

「どうでしたか、結界の様子は」

「それが、少し妙なよね」

声の調子を落として、霊夢は答える。

「結界自体が破れてないのは、以前確認した通り。つまり、あれがここにたどり着くには、結界に一時的な綻びができてないと不可能それなのに　　結界には全く異常の痕跡がなかった。にもかかわらず、あいつはここまで来た」

「そんなこと、あり得るのか!？」

魔理沙が声を上げる。

霊夢と長く一緒にいたであろう魔理沙には、彼女の結界がどれほどのものか分かっているに違いない。

その魔理沙が驚くのだから、これは相当の事態であろう。

……結界といえば、俺もゲームなどでよくそれを耳にする。外と内を完全に隔てる境、不可侵の領域。

それを破ることなく中に入り込むとは、いったいどういうことなのだろう。

魔理沙は少し腕を組むと「となると、程度の能力か？　結界を自由に出入りできるようなものか、それとも空間を移動できるか……どつかの誰かみたいに」と言った。

「それが一番有力かしらね。もつともそいつはもう消えちゃったし、心配はないわけだけど。一応、結界の周囲に攻撃用の罫を仕掛けて置いたわ。ただ人にも作動するから、あなたも結界の周りに近付い

「ちゃ駄目よ」

「はい、わかりました」

少女は霊夢の言葉を噛みしめる様に頷く。

「……と、今日はこのぐらいかな」

「霊夢さん、色々ありがとございました」

そう言つて、少女は深く頭を下げた。

「いいえ、最初からこうしておけばあなたも襲われなかった。だから、頭を下げるのは私のほうね」

霊夢が頭を下げたのを見て、少女は慌てふためく。

「い、いえ！ 私はこうして元気ですし、助けていただいたので十分ですよ！」

「……じゃあ、また次の機会。困ったことがあったらすぐに呼んで色々と力になるわ」

「霊夢が真面目に仕事しようなんて、明日は槍でも降ってくるんじゃないか？」

「茶化すな！」

霊夢の拳骨を魔理沙はひらりと避け「それじゃあ、私は外で待つてるぜ！」逃げるように外へ出て行った。

「まったくあいつは……」

そんな二人のやり取りを見て、思わず微笑んでしまう。

それは少女も同じだったらしく、手で口元を押さえていた。

今日、初めて見た少女の笑顔だった。矢張り、笑っていたほうがずっと可愛い。

「ええと、それじゃあ、今日はこれで帰るわね」

咳払いを一つしてから、霊夢は少女に向き直った。

「有難うございました。あ、そうだ！お祭りには是非いらしてくださいね！」

「ええ、勿論」

「明月さんはどうですか？」

靴を履いていた俺の顔を覗き込みながら、少女は言った。

「ああ……そうだなあ。もし機会があったら、その時は行かせてもらおうよ」

「では、もしあったら歓迎しますね！」

行くという答えに満足したのか、少女は嬉しそうに言った。

だが、彼女の期待は裏切ることになるだろう。

俺は一刻も早くここから帰りたいたいと思っていたし、帰る日はすでに明日と決まっている。

けれどそれを伝えるのは、流石に野暮といつかなんといつか。出来るだけ、辛いことは言いたくなかった。

先に外へ出た霊夢を追いかけ、少女と連れだって小屋を出る。

見上げた空はほんのり赤く染まっている。いつの間にか結構な時間が経っていたらしい。

日差しが少し弱まっただけで、眼前の森はより一層その深さを増していた。

小屋の周りはほとんど暗闇に囲まれていると言っている。

やはりここで夜を明かすというのは考えられないな。

もし俺だったら夜が深まると同時に家に帰ろうとして、霊夢の符に攻撃されるだろう。

死ぬほど痛いかもしれないが、死なないなら怖いことよりマシだ。

絶対世の中のすべての人がそう考える。多分。

暗闇に溶け込みそうな黒と白の所まで、少し痺れた足で歩く。

「そうだ、明月さん」

ふと、少女が立ち止る。

「なに？」

声に振り返って見ると、少女は自分の髪飾りに手をかけていた。髪に挿していたそれを外すと、おずおずと俺に差し出す。

「明月さんがお祭りに来なかったら、何もお礼ができないな、と思いでいます。男の人が使うものじゃないことはわかっているんですけど……今はこれぐらいしか差し上げるものがなくて」

少女は困ったように微笑む。

「いや、そんな！お礼なんて貰えないよ」

物が問題ではなく、お礼を貰うのはなんだか違うような気がする。実際、俺は何もしてないに等しい。

「いいえ。迷惑かもしれませんが、受け取ってください」

少女そう言つと俺の手を取り、髪飾りを握らせた。

「もし、もしもまた会えたら。その時はちゃんとお礼させてください」

俺は手に持った髪飾りを見る。

桜の花びらを模った、小さくて綺麗な髪飾り。

それは少女の黒髪を淡い桜色で染めていたもの。

もしかしたら、とても大切なものかもしれない。

これは異人である俺よりも、もっと違う人が持っているべきではないだろうか。

「いや、やっぱりこれは」

「明月ー！そろそろ行く…ぜ、つと、お取り込み中か？」

魔理沙のニヤニヤした顔が見える。

「違う！ちよつとまっつてくれないか」

「ああ、私はいつまでも待つぜ。馬に蹴られたくはないからな」

……これは後できつく言わないと。

とんだ邪魔が入ったが、改めて少女を見る。

「これは貰えないよ。その代わり、お祭りのときに色々してもらつてのじゃ、駄目かな？」

「駄目です」即答された。

「なんとなく、明月さんにはもう会えないような気がします。早く帰りたいと思つていらっしやるのではないですか？」

「それは……」

俺のついた嘘など、簡単に見破られているようだ。

祭の日に、俺は絶対にここにはいない。

「だから、貰ってください」

少女は、両腕を自分の後ろに回した。

意地でも渡す、ということなのだろう。見かけによらず意外と頑固らしい。

「わかった。……ありがとう、大切にするよ」

そう言つて、俺は髪飾りを壊さないように慎重にポケットに入れた。少女は満足げに笑つて、一礼した。

笑顔を後にして、未だニヤニヤしている魔理沙の箒に乗る。

「もう用事はすんだのか？」

「ああ」

ニヤニヤしているのが憎らしく、言葉少なに答えた。

かえつて逆効果だったかもしれない。何か他の話題は

「魔理沙、今度は行きよりもできるだけ遅く飛んでくれないか？」

話を逸らすというより寧ろ重要な問題だな、これは。

「え？ あー、考えておくぜ」

「それ絶対考える気ないよね！」

今度は別の問題が発生してしまった。

魔理沙は一頻り笑つた後、ふと真面目な顔をする。

「ついて来て、良かったか？」

「え？」

「何か変わったか？」

「うーん、思つたより楽になつたかな」

胸のしこりが完全になくなつたわけではないけれど。

「ん、そっか」

魔理沙は薄く微笑んだ。

俺の微妙な反応に気付いただろうけれど、深く聞かれなかったのはきつと彼女の思いやりだろう。

なんだかんだあつても、人がいいのは違くない。

「そついやお前が祭までいたら、歓迎してくれるんだって？ その時は私もついて行くからな！」

「へ？ いやそれは」

「勿論私もついて行くわよ」

いつの間にか霊夢が隣にいた。

「それは俺の決めるところじゃなくてね……」  
まったく遠慮がない人達だよな……。

「じゃあ私は結界を弄るから、魔理沙は先に」

「わかった。明月、落ちないようにな」

箒がふわりと浮きあがり、少しずつ加速しながら地面を離れる。

さようなら、母なる大地よ。しばらくの間、地獄の遊覧飛行が待ち受けている。

と思いきや、先ほどの懇願が通じたか、スピードは非常に遅めだ……

……いや、霊夢が来たらそれも終わりかな。

俺はポケットに手を入れ、髪飾りに触れる。

触れたら簡単に壊れてしまいそうなそれを、そっと握りしめた。

脳裏に思い浮かぶ少女の笑顔。

「ああ……」

そういえば彼女の名前を聞いていなかった。

俺の名前を知っていてごく自然に呼ぶものだから、ついつい失念してしまっていたじゃないか。まったく、どうして俺はこう、抜けているのだろう。

でもきつと、俺が彼女の名前を呼ぶことはない。

それなら名前に意味はなく、きつとこの出会いに、そしてこの髪飾りに意味があるのだろう。

薄紅色の空。日は西に傾き、もうすぐ夜がやってくるだろう。

行きよりもゆつたりしたフライトを終え、神社にたどり着いた。

なぜか魔理沙は、鳥居の前に着地する。

なんでもこうしないと神社に来た気がしないとか……。妙なところでこだわりがあるらしい。

「あれ？ 賽銭箱の所に誰かいるぜ？」

魔理沙が指差す先を見ると、確かに誰かの後ろ姿が見える。

空からはちょうど屋根の影になっていて見えなかったようだ。

今も日差しの影になっていて、輪郭がかろうじて見えるくらいだ。

「参拝客なんて珍しいわね。しかもこんな時間に」

同じく律義にも鳥居近くに着地した霊夢がつぶやく。自分で言うて切なくならないのだろうか。

参拝客と思われる人物は、いきなり神社に降りてきたこちらを振り返ることもなく、賽銭箱の前に立ったまま微動だにしない。

鳥居をくぐりその背中に近付くと、霊夢があからさまな落胆を示した。

「なんだ、久々の参拝者かと思ったら紫じゃない」深いため息をつくのが聞こえる。

それを聞いて、薄い影がゆっくり振り返る。

「自覚があるなら、もっと人を呼び込む努力をしてみてはいかがかしら？」

よく通る女性の声が響いた。だが、姿ははっきりと見えない。それなのに、先ほどから感じるこの視線は何だろう。

「それに、今日は参拝客として来たのよ？ ほら」

そう言っつて、影の手がひらひらと動く。

「逆に怪しいわ。いつもは勝手に上がりこんでいくくせに、どついう風の吹きまわしかしら？」

霊夢が賽銭に反応しない！？

「あら、信じてくれないのね。とても悲しいわ。あまりにも悲しくてこれをしまいたくなりそう」

あ、反応した。わかりやすい。

それに紫は満足したのか、手に持っていたものを賽銭箱に入れた。

「で、本当は何しに来たんだ？」

寶銭箱を一生懸命覗いている霊夢に変わり、魔理沙が尋ねた。

「ふふ、どうかしらね？」

鳥居の近くにいる俺からは、その表情は日にかけて見えない。近づけばいい……のだが。

「なんだそれ……。ま、私は別にどうでもいいけどな。困るのは霊夢だし」

「毎日こうして寶銭がもらえるなら、それでもいいかしらねー。あそうだ、折角来たんなら一寸働いていきなさい」

霊夢は隣にいる紫をびし、と指す。

「私、さつき起きたばかりなのにー」不満を漏らす。霊夢の顔を見るや、冗談ようと言った。

「あそこにいる彼を外の世界に返せばいいのでしょうか？」

「ええ、流石に気づくわね。本当は明日にしようと思っていたのだが、早く帰りたいそうだし、今やってくれないかしら」

なんだか突然だが、早く帰れるならそれに越したことはない。

神社にいたのは偶然なのか、それとも待っていたのかは分からないが、今帰ることができればそう大事にもならなそうだ。

失踪事件なんて報道されることになったら、非常にややこしいことになりそうだし。とりあえず一安心というところかな。

「そうねえ……」

紫が一步前に出る。神社の影から朱色の世界へ姿が現れる。

すらりとした体躯に、少女のような、しかしどこか妖艶な顔立ち。

流れる金色の髪が、赤い太陽の輝きを受けて煌めいている。白地に

紫のドレスをまとい、白い帽子に赤いリボン。

紫、と呼ばれていたがどう見ても西洋人にしか見えない。それともユカリか？ いや、そんな筈はないだろう。

微笑を浮かべているが、どうもただならぬ雰囲気をもっている。

実体が掴めない。いったい俺は何を見ているのか、それさえ分からなくなるようだ。

「じゃあ、さっさと終わらせましょうか。魔理沙、あなたは寶銭箱

の横……あの辺に行って頂戴」

「ここじゃ駄目か？」

「外界に飛び出しても拾いには行かないわよ？」

「しょうがないか。せつかく面白いものが見れると思ったんだが」  
俺のすぐそばに立っていた魔理沙は、しゅしゅと寶錢箱の横まで歩いて行つた。

丁度鳥居の真ん中にいる俺から見て、紫を挟んで魔理沙と靈夢が対象の位置にいる。

これから、ここを外へと繋ぐ儀式でも行われるのだろうか。しかし、そこまで手間はかからないようなことを言っていたような……？

紫は、す、と佇まいを正した。微笑は消え、冷徹な瞳が宿る。

「外来人、八代明月」

「は、はい……」

先ほどとは比べ物にならない迫力にたじろいだ。

刺すような視線に絡めとられ、まるで己の全てを握られているような感覚に陥る。

紫の口から紡がれる言葉を、ただ待った。

「結論から言いますよう」

なぜだ。

どうしてこんなに緊張している？

ただ、俺は帰るだけだ。

こんな非現実から非日常から。

俺のいた現実へ日常へ。

では。

この雰囲気はなんだ。

肌に刺すような痛みが走る。

じわりじわり、臓腑から、体の奥底から滲みでる不安。  
木々のざわめきも聞こえない。  
空の明るみも見えない。  
朱色の太陽が見えない。  
ああ、そうか。

陽は西に沈み、夜が

夜が降りてくる。

何故　　そんな眼をしている。

あなたはここからかえれません。

どっしりしてっ？

くすくす。  
ふふふ。

「あなたはここで、私が殺す」

## 二十一章：振るう手

ころす。

殺す。

その意味を理解するのに、一瞬もかからなかったであろう。

紫が振りかざした手には日傘が握られていて、眼前を覆い尽くす閃光の先には

死しか、見えなかった。

風を切り裂き、低く激しい唸りをあげ炸裂する光弾。激しい音を立てて、神社の石畳が碎ける。

「へえ……まさか避けるとは思ってなかったわ」

俺はぜえぜえと荒い息をつきながら、地面に膝をついた。

後一瞬遅かったなら、おそらくこの身は灰も残らなかったであろう。大きく抉られた地面を見て、ぞっとする。

「本来は見て避けられるものではないのだけれど」

「紫！！ あんたいつたい何をした！」

境内に響き渡る怒声に、紫の声がかき消された。

見ると、霊夢と魔理沙が謎の障壁に囚われている。

なんだあれは！？

光る四角い壁は、薄い膜のような見かけとは裏腹に何よりも強固に見える。例えるならば、檻のよう。

「ああ、それ。あなたたちがいると邪魔だから張らせてもらったわ。人殺しなんて、傍観するわけにはいかないものねえ？」

紫は余裕たつぷりに言う。

「……私の目の前で、人を襲うことなんてさせないわ」

「こんなもの壊してやるぜ！」

二人はそれぞれの武器を取りだそうとする、が「どうぞ攻撃して御覧なさい。その分、痛い目を見るのは誰でしょう?。」

紫の嘲るような言葉に、霊夢の手が止まる。

「魔理沙! 攻撃しては駄目! これはおそろく、普通の結界じゃない!。」

「なっ……! じゃあ、どうすることもできないって言うのか!?。」

霊夢が手を震わせている。

「どうやら今度こそ本当に、助けは降ってこないらしい。幸運はそう続かないということか。」

「そう、しばらく大人しくしてなさい。何もしなければいいのだから。」

二人が手を止めたのを見て、紫が言う。

「後で……覚えておきなさい。」

霊夢はあくまでも穏やかに答えたが、その声は怒りに満ちていた。隣にいる魔理沙も悔しそうに地面を蹴る。

「待たせて悪いわね……。続きをしましょうか。」

紫が言葉を発すると同時に、紫の後ろの空間に切れ目が現れる。気持悪い目が此方を見つめている。

そして、またたく間に無数の光弾が打ち出された。全ての弾が、俺を狙い迫る。

できるだけ広い空間を作り、逃げ場を無くさないように避ける。

先ほどは不意を突かれたが、弾の動きを見れば避けられないほどの速さではない。

バスケットボールほどの弾が地面を抉る。どうやら先ほどよりも威力は落ちてきているようだ。だが、何度も食らえば勿論、死ぬだろう。

あくまで笑みを浮かべる紫だが、そこには確かな殺意が宿っていた。

「どうして俺が死ななきゃならない!。」

当然の疑問を、怒気とともに吐き捨てた。

「それはあなたが一番よくわかっているんじゃないかしら?。」

俺の怒りなど意にも介さず、嘲るように言う。

「よく知ってる……？　　こんな」

次々に打ち出され、俺を殺そうとする弾幕。避けて避けて、転がり土に塗れながらも避け。

「こんな訳の分からない世界に飛ばされて！！　理不尽に殺されそうになって！！　そしてまたあんに殺されそうになって！！」

こんなの、意味がわかるわけじゃないじゃないか……！！」

絶え間なく打ち出される弾を避け、そして叫んだ。

全て俺が悪いかの様な口ぶりに、怒りが抑えられない。

俺は被害者だ。

普通の生活を送って、普通に生きて、普通に死ねればそれでよかった。

大それたことなど望んでいない。ただ、いつもの日常が欲しかっただけなのに……。

それなのに。

「普通……ねえ」

まるで化け物を見るような冷淡な目つきで、紫は俺を見た。

紫の攻撃が止む。

「自覚はないのかしら。いいえ、有る筈ね。現実を見ないのは愚か者のすることよ」

「何が言いたい……」

「あなたがもし普通の人なら、最初の一撃を避けられる筈がない。今、ここまで簡単に私の弾幕は避けられない。これだけでも、既に

異常と言えないかしら？」

「っ……」

突きつけられる現実。

俯いて、紫から眼を逸らした。それでも視線は消えず、まるで体の奥底まで見られているよう。

そう。

わかっていて。わかりきっていたことだ。

頭で理解しても、心は言うことを聞いてくれなかった。

あの時。暗闇に飲まれ、この世界に来るまでに何かがあった。

「足が速くなっただけではない。あの化け物の攻撃にも耐えられるほど、力も上がっているわね」

。

え？

「どうして、そのことを知っている？」

顔をあげ、紫を見た。

口元に笑みを浮かべたまま、彼女は何も言わない。

それを知っているわけがない。あいつはそこにいなかったんだから。

「ふふ。教えて欲しいかしら？ とても簡単なことなんだけれど」  
手で口元を覆い、悪戯がばれた子供のようになんて彼女は笑った。

しかしその仕草は子供の無邪気さとは程遠く、おぞましさしか感じない。

「あれ、私が作った式なのよ」

「よく出来ていたでしょう？」

まさか。

心臓が早鐘を打つ。耳元に届いて五月蠅いぐらいの鼓動。

上手く息が吸えない。

「私が襲わせた。私がアレを結界の中に入れた。だから知っているわ、少女のことも」

ぞっとする様な表情を浮かべる紫。

やはりあれは、人間ではないんだ。

あれが妖怪。

アヤカシ、人を喰らい、人の屍の上に立つモノ。

「人の命なんて、どうでもいいってことかよ！」

「ええ、そうね。妖怪は人を食べ、人に恐れられて生きるもの。それがこちらの世界の理よ。あなたたちが忘れてしまった夜の冥さ」

「誰でもいいってわけか。人をいたぶって、あんな、遊ぶように殺そうとして！」

怒り。

ただそれだけが、体の内から湧き上がる。

「いやね、いたぶったのは私ではなく、私の式だけれど？」

「同じようなもんだろ！」

「そうねえ。申し訳ないと思ったから、一瞬で死なせてから頂いたわ」

「申し訳ないって……！　　は？」

今。

今何と言った？

「どうしたのそんなに呆けた顔をして。せめての慈悲に、殺してから食べたと言ったのよ？」

「……！」

瞬間、頭が真っ白になって……。

次に浮かんだのは、怯えた少女の眼。

あのとき、逃げようとした俺を見た眼。助けて欲しいと、助けてあげたいと。。

少女が喰われた。この妖怪に。こいつに。こいつに　　！

何かが、音を立てて弾けた。

一直線に駆け出す。

「っ　　！」

紫が傘を構えなおすと同時に、背後にスキマが現れ弾幕を放つ。

光弾が無造作にばらまかれ、紫と俺の間を遮った。弾幕の僅かな隙

間からは、俺を追尾する光弾が迫る。

どうでもいい。

目に入るのはあいつの姿だけ。弾幕など、何の障害にもならない！  
前進。

姿勢を低く、体を矢のようにして弾と接触する面を狭く。僅かな隙間をくぐり抜ける。

「許さない」

前進。

意志をもったようにこちらに迫る弾。体を左右にずらし、最小限の動きで避ける。

「許すものか」

頭の中がやけにクリアだ。まるで思考することを忘れてしまったかの如く。しかし、体は自分のものとは思えぬほどスムーズに動く。俺の中のどす黒い何かが、意志をもって体を動かしているかのよう。

前進するにつれ弾幕の密度は上がり、避けきれぬ弾が時折体をかすめる。

腕に、頬に、脇腹に、足に。

それでも、前に進む速度を緩めない。

「へえ。弾を避ける基本は分かっているみたいじゃない？」

猛然と迫る俺を目の前にして、紫はその余裕を崩さない。

「でも早く動けるからって、一直線に動くのは駄目ね」

あと少し、あと一歩で手が届く！

「残念だわ。それじゃあ、さようなら」

紫の手が目の前の空間をなぞると同時に、空間に裂け目が走る。眼前で収束する光が、今まさに放たれようとしていた。

「しまっ……！」

避ける間もなく、溢れだす光の激流に飲み込まれた。

灼熱の炎に包まれたような感覚。

燃える様に体が熱い。一切が白に染まり、何も見えない。

痛みは一気に全身を駆け巡り、意識を刈り取るうとする。薄れゆく意識の中、また、彼女の瞳が浮かんだ。真っ白な光景を黒い何かが染め上げていく。

「あああああ！！！」

仰け反った体を無理やり引き起こす。

ここで倒れるわけにはいかない。

こいつを、今ここでxす。

xすxすxす、xしてやる！

「それでも、あなたの攻撃は届かない」

紫の前に現れる、薄い光の壁。人の手で破ることなど出来はしない。境界。万物を隔てる理。

だが、最早俺の手は止まらない。

軋む腕を振り上げ、僅かに残った力を全て右手に込める。

あと少しの距離なんだ。

あと少しで、手が届く。

だから。

「壊れてしまえ！」

拳が結界に触れた、刹那。

派手な音を立てることも、ぐしゃりという拳が砕ける音もなく。

ただそれが当り前であるかのように、ごくごく自然に結界は消滅した。

「なるほど、それが貴方の能力なのね」

俺の右手が、紫の腹を貫いた。

不気味な肉の感触と、生温かい何か。貫通し、外気に触れた手の

先だけが冷たい。

ぞぶり。

怖気のある感覚に、体中の熱が一気に引いていく。

ずず。

ぐっと腕に力を込め、一気に引き抜いた。

ずるり。

びしゃ。

引き抜いた傷口から止めどなく血が流れ、朱が石畳を染めていく。

紫は 笑っていた。

腹に重傷を負わされて尚、その表情は変わらない。白い肌、口元から一筋の血が流れた。

「う……ああ」

俺は、俺は何をしている。

いや、何をした。

紫の傷を見、右腕を見た。

血だ。血、血、血 血に染まった腕。赤い、紅い。

「あああああ！！！」

ああ、これではまるで。

鬼の手ではないか。

アイツの手だ。赤い手で、人の命を奪おうとした鬼の手だ。

あるはずの無いそれが俺の右腕に重なって見えて……。

ふ、と全てのものが闇に沈んだ。

薄い光が、眼をくすぐる。

混濁した意識の中、俺は目を開いた。

「あ……れ」

目が見える。呼吸ができる。言葉も出る。それにどうやら五体が欠けている様子も無い。

生きている のか？

部屋に差しこんでいる、柔らかな光。どうやら一夜が明けたようだ。

いつの間にか布団に寝かされている。

「あら、気がついた？」

ふと、誰かに声を掛けられた。

「……………!?!」

えーと、とりあえず落ち着こう。

まだ少し頭に靄がかかっているような感じだが、出来るだけ状況の整理をしよう。

「驚いて飛び起きちゃ駄目よ、怪我がまだ完全に治ってないから  
そう言われると少し体が痛い。」

つまりこれは、夢の中ではないということだ。痛みで判断するのは若干心許ない気もするが、今はそれくらいが精一杯だ。

布団から上体だけを起こす。支えについた右手が少し痛んだ。

「あ、お茶飲む?」

「ああ……………。けど、急須を直接口に押し当てようとしなくて欲しいな。ちよつと荷が重い」

つていやいやいや。

冷静になっている場合じゃない。いや、冷静になるのはいいことだがそうじゃくて、突っ込むところが違うだろう俺。

「な、なんで紫がいるんだ!?!」

目が覚めたら紫の顔。

何とか冷静になろうとしたが、今の状況が異常過ぎてもう意味がわからない。

「あら酷いわ! 今まで手当てをしていた人に向かってそんな言葉を言うなんて……………!」

よよよ、と泣き崩れるふりをする紫。

「あ、いやごめん……………じゃなくて! ど、どうして……………! え、えーと、手当って、俺を殺すつもりじゃなかったのか!?!」

「……………そんなこと言ったかしら?」

「は!?!」

どう見ても慌けている。

「まあまあ、お茶でも飲んで落ち着きなさいな」

「ちよつと待て、話を逸らすな! あれだけ殺気を放っておいて、

その上あんたは彼女を食べたと言った。それで、恍けようなんて  
！」

「そうね。紫、そろそろ本当のことを言ったらどう？」

言葉を継ごうとしたとき、紫の後ろの障子がガラリと開き、霊夢が部屋に入ってきた。

「霊夢！？ け、結界に囚われていたんじゃない？」

「あなたが気絶したら紫が、ね。とりあえず一発殴った後、話があるっていうからあなたが起きるまで待つていたわけ」

何事も無かったかの様子で紫の隣に座る霊夢。

どうやら怪我はしていないみたいだし、良かった。

「痛かったわね、あれは」

頬をさする紫。あまり痛そうには見えないが。

「もう一発いつとく？ そろそろ話してくれないと、今度は思わず足が滑りそうだわ。彼もこうして起きたわけだし、彼を襲った理由と、嘘をついた理由。全部聞かせてくれるわよね」

霊夢は淡々とした口調で、紫に言う。もしかしたら、まだ怒っているのかもしれない。

しかしそれよりも、一つ気になることがあった。

嘘。

嘘とは、なんだ？

「……霊夢、最近の結界の揺らぎに気付いたかしら？」

紫は、ゆっくりと口を開く。

「ええ、ここ最近何度か頻発してあったわね。規模の大きなものはなかったから、特に気にしてはいなかったけど。それがどうかしたの？」

「いずれも結界自体には影響を与えるほどのものではない。ただ、余計なものを引き込むには十分だったわ」

紫の顔が曇る。

「まさか、俺のほかにも外来人が？」

俺もその結界の揺らぎとやらに巻き込まれてやってきたのだろう

か。

「そう、十五回の揺らぎがあつて、ここに来た外来人が十五人いたわ」

いた？

「ちよつと待つて紫。十五人だつて？ そんなに人が入り込んでいたら、一人くらいはここにたどり着いてもおかしくないはずよ。それが一人も姿を見せてないなんて、どういうことかしら？」

「あなたが知らないのも無理は無い。なぜなら彼らは全員 死んでいるのだから」

「なつ……！！」

場の空気が凍った。霊夢も驚きをありありと浮かべている。

俺の前に来た人が全員、死んでいる ！？

「そんな！ 十五人全員が妖怪に襲われたとでもいうの……？」

「違うわ。おそらく全員が、ここに来たと同時に死亡している。つまり、結界を乗り越える段階で死亡しているのよ」

紫の言葉に、霊夢が絶句した。

「驚くのもわかるわ。結界自体に人を殺す作用は無い。ということ は、結界の内側に人を送り込んだ何者かがいて、そいつの移送手段の不備によつて殺された、と考えるべきね」

「紫、外来人が現れた時に既に死んでいたのは確かなの？」

「ええ、四回目までは少し時間が空いてしまつたけど、それ以降は すぐに向かつたわ。全員死亡していたところを見ると、入ったときには死んでいたとみてほぼ間違いないと思うわ」

「そう……」

霊夢は手を組んで俯き、何かを考えている。

死んだ人数は十五人。

その数に、何か引つかかるものがあつた。いつかどこかで聞いたことがある気がする。

「ああ、ニュースだ！ ここ一カ月で突如失踪した十五人。全員、幻想郷に来ていたのか！」

俺の言葉に、紫が振り向いた。

「向こうでも流石にニュースになったのね。確かに異常事態ですもの」

つまり、俺が今生きているのは、偶然だということだ。

もし犯人が今回も失敗していたら……？ そう考えるとぞつとする。

「その状態で、十六人目が現れた。しかも生きて最後まで顔を伏せていた霊夢が呟き、紫のほうを向く。

「あんたは、この異変の黒幕を明月だと考えたのね」

「……そうよ」

「俺が黒幕！？」

見当違いもいいとこだが、どうということだろう。

「もしあなたが普通の人間だったなら、私も疑いはしなかったわ。

ただ、あなたは少し違っていた。並はずれた身体能力とその存在に、黒幕の可能性を捨て切れなかったのよ。もしかしたら本性を隠しているのかもしれない。そう思って、あなたを襲った。私の言葉にどんな反応をするかも試させてもらった。……ごめんなさい」

申し訳なさそうに、紫は頭を下げた。

「明月、あの子は生きているわよ。あれは紫の言った嘘」

紫の後を継いで、霊夢が言う。

「え？ そんな」

右手に甦る、あの感触。

俺は怒りに溺れて、真偽も確かめずに人を殺めようとしていたのか。

どう黒い感情に支配されたあの時。自分が自分で無くなるような感覚。

もしあれが紫では無かったら。もしも妖怪では無かったら。

俺は、命を奪っていたんだ。

馬鹿だ。

俺はなんて馬鹿なんだ。

「ごめん、なさい」

いつの間にか、口が開いていた。

「え？」

紫と霊夢が、きよとんとしてこちらを見る。

「嘘を吐いたのは私よ？ それに、あなたに向かって攻撃をしたのも私。それでも、謝るの？」

「お互い様だよ。どっちが先とかじゃなくて、俺も怒りに我を忘れて、紫に酷いことをしてしまったから……。だから、ごめん」

一瞬の静寂。

紫は呆けた表情を浮かべた後、くすくすと笑い始めた。

「あ、あれ、何か変なこと言った？」

「なんだか恥ずかしい。思ったことを口にしただけなんだけれど。」

「それが貴方、ってことなのね」

むっ、まだ笑っている。腹に響いて痛くないのか？ それとも、もう完治しているのだろうか。

「変なのは元からのね……。でも、有難う」

紫は一頻り笑った後、俺に向かって微笑んだ。

その笑顔は、今まで感じていたような不気味なものではなく、俺は初めて、ただ純粹に美しいと思った。

「ほ、ほら、話の続きをしよう！」

真正面から見られるのがなんだか気恥かしくて、話の続きを促す。

「そうね。結局明月は犯人ではなかったわけだし……。となると、やつと移動に成功した貴重な人材をこのまま放っておくわけがない。

彼がここに来てからもう四日目だし、そろそろなんらかのアクションがあるんじゃないかしら」

逸れかけた話を霊夢が元に戻す。

「対策を立てようにも、相手の意図もわからないし、向こうから来るのを待つしかないわね」

向こうのニュースを信じるならば、被害者に共通点はないということだった。完全に無作為に送りこんでいるらしい。

「待つしかない、ってことね。はあ……こつちから何もできないのはもどかしくて嫌だわ」

霊夢が大きなため息をついた。

しばしの沈黙。めいめいがこれからのことを考えている。

「あ、そういえば紫」

何かを思い出したか、霊夢が口を開いた。

「明月が狙われている以上、元の世界に返すのは危険よね。相手の接触を待つならしばらく時間もかかるだろうし、いったん彼を返して向こうのことを処理させて、それでまたこつちに戻す、というのはどうかしら」

「ああ！ そういえば。俺としてもそのほうがありがたいな」

一番大切なことなのに、あのとときの衝撃が大きすぎて、元の世界に帰るということを完全に忘れていた。

「周りに適当に言っておけば、しばらくいなくなるぐらいなら大丈夫だと思っ」

山奥に旅行に行つて連絡が取れなくなるとも言えはいいだらう。今のこの状態だと帰った時に非常にめんどくさいことになるし、周りにも心配をかける。

「いや、それがねえ……」

だが紫は、その提案を聞いて顔を曇らせた。

「実は、出来ないのよ」

「へ？」

二人分の変な声が部屋に響く。

「どういうこと？」

怪訝な表情を浮かべる霊夢。

「言葉通りよ。実際に見たほうが早いわね。明月、ちょっとこれに頭を突っ込んでみて」

そういうと紫は、いつの間にか手に持っていた扇子で何も無い空間をなぞる。すると、扇子の先が触れたところから空間が切れていき、ぼつかりと穴が開いた。

言つては悪いが正直不気味だ。

何故か端っこにリボンが結んであるのだが、一体どこからきてどこへ還つてゆくのだろうか。

じつと紫を見る。

「大丈夫よ。安全だから、ほら」

紫が空間に右手を入れると、するりと空間が手をのみこんでいく。勿論、空間の後ろ側に手は突き抜けていない。

「私の能力は境界を操る力。空間にスキマを開けて、別のところと繋げたりもできるのよ。今は現世に繋げているわ」

つまり今紫の右手は現世のどっかに現れているということか。もし人が見たら卒倒するだろう。俺はする。事件的にも心靈的にも。

紫は隙間から手を抜くと、俺を促した。

目の前にあるスキマをじつと見つめる。害は無いことはわかったが、やはり少し不気味だ。

仕方ない、腹を括ろう。

目をつぶり、頭から一気につつこんだ。

「あ、そんなに早くやると!」

ごん!

「~~~~~つつ!」

堅いものにぶつかつた様な鈍い音と、頭部にくる鋭い痛み。

頭を押さえてしばらく悶えた後。

無言で、きつ、と紫を見据えた。

「このように、何故かスキマに入れないのよ。寝ている間に一回試したんだけど、その時も同じような状態だったわ」

視線を宙に泳がせながら言う。

「ふ、ふふっ……これは確かにおも、いや不可思議ね」

恨みがましい目を、笑いを堪える霊夢にも向ける。さつと目線を逸らされた。

「出来れば、どうなるか先に言つて欲しかったなあ!」

「ま、まあ落ち着いて。あ、お茶飲む?」

場を取り繕うように、紫がお茶を勧めてきた。急須で。

「だ！か！ら！急須から直接は荷が重い！湯吞でっ……！あれ、湯吞が無い」

「ん？」

見ると、さつきまで俺の前に置いてあった未使用の湯吞は、まるでそこに在るべくして在るかのようには、霊夢の手中に収まっていた。今のやり取りなどどこ吹く風、お茶を啜っている。

「いつの間？」

「ついさつき」

「どんな早業だというのか。」

「じゃあ仕方ないわね、はい」

苦渋の選択をした、と言わんばかりの顔を作り、急須を顔面に持つてくる紫。

だがその顔も一瞬で、すぐに溢れんばかりの笑顔になった。

「ちよつと紫、まだ私も飲むんだから全部飲ませないでよ」

「いやいや、そこ気にする所じゃないでしょう！？」

我関せずと、霊夢はお茶を啜る。俺の突っ込みは見事に無視だ。

「ほら、口開けて。あ、まだ動いちゃ駄目よ。傷口が開くわよー」  
傷口をつつきながら、依然として急須を口に近付ける紫。これは間違いなく脅迫だと思っ。

凄く楽しそうな紫と、眼前でゆっくりと傾けられていく急須……。

……そして。

人生で初めて、急須から直接お茶を飲むといういかにも粗野な、風情のかけらも感じられない飲み方をした。

口の中を火傷した。

多分、泣いてもいい。そう思った。

## 二十二章：魔女のお茶会

とある昼下がりに。

雲一つない空は、どこまでも青く、深く、限りなく広がっている。夏のようなむせ返る暑さも無く、冬のような厳しい寒さも無い。少し冷たい清涼な空気と、太陽の温かさが丁度いい温度を保ち、とても爽やかな昼下がりにだった。

世間では丁度昼食を終え、少しうとうとし始める様な、そんな時間。ゆつたりとした雰囲気はこの爽やかな空気は良く合う。事実、ここ幻想郷もそんな温かな雰囲気に包まれていた。

「はあ〜」

そんな温かな雰囲気を一瞬で吹き飛ばすような、大きなため息が一つ。

縁側に一人、胡坐をかいて座っている。傍らには熱いお茶の入った急須と湯呑み。

温かな日の光がたつぷりと差し、澄んだ空気が時折吹きぬけては、暑さを取り除いていく。

少々殺風景とはいえ、目の前には大きな庭が広がり、木々がそれを彩っている。

昼をまったりと過ごすにはこれ以上ないくらいの環境。凡そ全ての人が羨むシチュエーション。もっとも身近にある幸福と言っても過言ではない。

「つつはあ〜」

もう一度、今度は先ほどよりも大きなため息を吐いた。環境に不満は無い。むしろ一度は体験してみたいと思っていたことでもある。

しかし。

「あれからもう……四日か……」

紫との会話から、四日目の昼。

ここに来てから四日目ではなく、紫のスキマに頭をぶつけてから四日目だ。あの日からずっと、気を張り詰めて犯人の接触を待った結果。

すぐ来ると予想されたそれは一向に姿を見せず、もう四日が経った。

俺がこつちに来てからもう八日。もう間違いなく現世で騒がれているところだ。

「失踪事件の事後処理ってどんな感じなんだろうなあ。面倒だろうなあきつと。しかも『別世界にいました！』なんて正直に言ったら、精神鑑定とかになるよなあ。何も覚えていませんがどこまで通じるかな……」

最高のロケーション？ そんなものは目にも入らない。帰ってからのことを考えると、自然とため息が出るといふものだ。

「うわっ、なんでそんな死んだような顔しているのよ。溜息ばかりついていると幸せが逃げるわよ」

ゆっくり右を向くと、顔をしかめた霊夢がいた。霊夢は持ってきた煎餅と湯呑みを縁側に置き、隣に腰かける。

「逃がした幸せが仲間を連れて戻ってきてくれるさ、きつと。それまではしばらく待つているよ」

霊夢の湯呑にお茶を注ぎながら言う。

「そんな顔で言われても説得力に欠けるわよ。確かに、こんなに動きが無いとは私も思わなかったけどね」

煎餅をかじりながら霊夢が言う。俺も皿から煎餅を一つつまみ、かじる。

「結局スキマに入れない原因も分からなかったし、本当に待つだけしかないのかな」

「そうねえ。動かないのが一番安全だしね」

何もせずここに、か。

「……なあ霊夢、それについてなんだが」

実は最近、思うところがある。

これは決して文句があるとか不満があるとかそういう話ではないむしろ神社に置いてくれてかつ食事と風呂を提供させてもらっている身分つまり居候である以上気にはいけないことかもしれない。だが、あえて言うならば。

ご飯の量が減ってきた。

目に見えてというわけではないが、二日目朝、昼、夕、三日目朝、夕と段々量と品目が減っている。

三日目に至っては昼がなかった。そして今日も無かった。代わりに今煎餅が出てきたわけだ。

「どうしたの？」

煎餅をかじりながら、きよとんとした顔をする霊夢。

俺は少し躊躇いがちに、霊夢を見ないで言った。

「もしかして、お金と食料の備蓄が無くなってきてたりしてないか？」

言って、ちらりと霊夢を見た。

煎餅を食べていた霊夢がぴたりと止まっている。

「……………」

「……………」

静寂。

霊夢は口に煎餅を加えたまま、ピクリとも動かない。だがその沈黙は何よりも雄弁に今の状況を語っていた。

見つめることができなくなって、目を逸らして正面を向いた。

嫌な想像が胸を支配する。

言うんじゃなかった。

「紫から……貰った賽銭……………」

霊夢は口から食べかけの煎餅を離し、ポツリポツリと話し始めた。

「あれが、丁度二人の二日分の食費だったわ」

霊夢が食材を買いに行ったのが、紫と話した日。

そしてその次の日は朝から魔理沙がいた。

「つまり、もう食材が……？」

ない、とは言えなかった。少しの可能性にすぎりたかった。しかし霊夢は、俺の言葉にこくりと頷いた。

「そっか……」

「ええ、もうそろそろお金も無いわ……」

色々な希望が打ち砕かれる。

ただ、金に関してはほぼ俺のせいだ。少しの滞在とはいえ、いつまでも同じものを着ているのはよくないと言って、霊夢は男物の着物を三着ほどどこからか調達してきた。

貰いものだと言っていたが、おそらく一着は間違いなく買っている。値札が思いつきりついていた。

悪いと思いつつ、その好意に素直に甘えさせてもらった結果がこれだ。

爽やかな空気、穏やかな午後の陽ざしの中。

俺たち二人の周囲だけは、暗く澱んだ雰囲気か漂っていた。

長い長い沈黙。

沈黙。

静寂。

風の音。

何かが手を振りながらこっちに近付いてくる。

「よーっす！ 二人とも……、って、なんで二人揃って死にそんな顔をしているんだ？ 死神が寄ってくるぜ？」

風を巻き起こしながら、箒に乗った魔理沙が目前の庭に着陸した。沈み込んだ俺たちを前にして、戸惑いの表情を浮かべている。

できるものなら、この暗い雰囲気も吹き飛ばしてほしい。

「死神はサボリ魔だから来ないわよ……」

「それはどうでもいいが、その表情でこっちを見ないでくれ。二人分のその顔はちよつと怖いぜ。いったい何があつたんだ？」

霊夢と顔を見合わせ、

「何も無いのが……」

二人で大きなため息をついた。

「なるほど。それであんな人生に疲れた顔をしていたわけか」

霊夢の隣に腰を下ろして煎餅を貪っている魔理沙は、合点がいったと頷く。

俺たちの昼飯なのに……。

「進展も無い、しかも紫も顔を見せないし、正直手詰まりね」

霊夢は腕を組んで唸る。

「珍しいな、いつもは異変にもあんまり関心がなさそうなのに、今回は随分苛立っているように見えるぜ」

その様子を見て、魔理沙がからかう様に言った。

「だってまだ異変解決の最中でしょう。始めたらさっさと終わらせて平和に過ごしたいのよ」

「巻き込んだような形になってしまっただけで申し訳ない……」

俺は目を伏せた。

「いや、あなたは気にしなくてもいいのよ。被害者は貴方なんだし、この異変にかかわったのは私だからね。……ただ、八方塞なのはどっしりうしろもないわねえ」

「そうか？ まだやれることはあるじゃないか」

よっ、と魔理沙は縁側から立ち上がると、くるりと回転して正面に仁王立ちする。

「相手が来ないなら、こっちから行くだけだぜ！」

びし、と指を立てる魔理沙。

「……どこへ？」

そんな魔理沙とは対照的に、冷静に返事をする霊夢。

「……………」

魔理沙は腕を組んで考え始めた。

「どうやらとりあえず言ってみただけらしい。

しばらく頭を捻ったのち、ポンと手を叩いた。

「手始めに、明月が元の世界に変える方法を探そうぜ。異変の黒幕を倒しても、元の世界に帰れるようになるかはわからないだろ？

もしかしたら、今すぐ帰れるような方法が見つかるかもしれないし」「でも、明月を一人で残してどこかに行くわけにもいかないでしょう。彼を抱えると飛べないのは変わらないし」

「だから私がいるんじゃないか！」

腰に両手を当て、ぐっと胸を張る魔理沙。

「私が明月を連れ回せばいい話だろ？」

「本当か！？ そうしてくれるとありがたいけど、また迷惑をかけることになるな……」

「なあに、気にするなよ。色々面白そうだし、乗りかかった船つてやつだぜ」

この提案は非常に魅力的だった。

魔理沙が付いていけば危険も無いし、いざとなったら箒で飛べる。このままここに居続けるのはよくない。いつまで続くかもわからないし、何もせずにお世話になっているだけではいられない。食費的にも。

それに、何もせずに過ごしているのは嫌だった。

「でもね、あの事もあるし」

霊夢はまだ何かを決めかねているようだった。

あの事、がいったい何かはわからないが、どうやらそのせいで俺を外に出したくないらしい。

「霊夢、もうそろそろ限界だぜ。いつまでもこのままじゃ駄目だ」

「……そう、ね」

魔理沙の説得を受け、霊夢は決心したように言う。

「じゃあ魔理沙。もしものことがあったら色々と宜しく頼むわよ」

「まかせろって」

へへへ、と笑う魔理沙。

どんなやり取りが交わされたかはわからないが、なんにせよ話は纏まったようだ。

「それで、どこへ行くかは決めてあるの？」

「こういうときは、先人たちの知識を借りる時だぜ。そうなりゃ行く先は一つだ」

「ああ、あの引き籠りの家ね」

霊夢は納得したように言った。

「善は急げ。早速行こうぜ明月」

「あんまり話が読めないけど、行く先に関しては任せるよ」

俺が気にしてどうなる話でもないし、道中で詳しく聞けばいいだろう。

言葉通り、いそいそと箒に跨る魔理沙。

俺も湯呑みを置き、脱ぎ捨ててあつた靴を履いて縁側から立ち上がる。

「明月、くれぐれも気をつけて。絶対に無茶はしないこと。それと魔理沙から絶対に離れないようにね」

「わかった。気をつけるよ」

魔理沙から離れて一人になったところを襲われる可能性もある。

十分に気を張っていこう。

箒に後ろに跨る。

ふわ、と箒が浮かび、地面から徐々に離れていく。

後はこのまま徐々に加速していくだけ。

「明月、飛ぶのはもう慣れたよな？ いや慣れたな。というわけで行くぜ！」

「え」

「うう。」

ぐん、と体が後ろに倒れた。

「！」

魔理沙は俺の返事も聞かず、一人で勝手に納得して一気に加速させた。

「まりさあああ！ もっとおそく！ おそくううう！」

あらん限りの声で必死に叫ぶが、ごうごうという風の唸りにかき消され、俺の悲痛な叫びは魔理沙には届かない。

魔理沙が楽しそうなのは気のせいだ。

きつと光の加減でそう見えるだけだ。

「本当に大丈夫かしら……」

突風のように飛び去り、急速に小さくなっていく二人分の影を見送りながら、霊夢は小さく呟いた。

「それで、結局どこに向かっていているんだこのスピード狂は」  
しばらく飛び続け、ある程度移動した所で魔理沙がスピードを落とした。

現在、鬱蒼とした森の上空を飛んでいる。

「紅魔館、っていう洋館だぜ。その地下にでかい図書館があるんだ」

俺の言葉を軽くいなし、魔理沙は前を向きながら答えた。

「ごうまかん……」

この世界に洋館とは珍しい。てっきり、昔の日本のような家屋しかないと思っていた。

「幼い吸血鬼が住んでいる館で、魔女やら妖精メイドやらもいるぜ。まさしく悪魔の館だな」

「ああ、それで洋館なのか。やっぱり西洋の妖怪もいるんだ」  
この四日間の間で、この世界のことをさらに詳しく聞いた。  
失われたもの、妖怪、化物、妖精、精霊と言ったあり得ないもの  
とされた存在のための世界。

ここはそういう世界で、なら吸血鬼がしようと妖精がしようとメ  
イドがいようともう驚きはしない。

……メイド？

「それより、そんなところに行つて大丈夫なのか？ 血を吸われた  
りしない？」

「なに、この世界にいるのは皆のんきなやつらばかりだぜ。怒ら  
せたりしなければ大丈夫。人間と接するように普通にしていればい  
いんだ。まあ、一部の奴らは見境なく襲いかかってきたりもするが」  
「なんだか恐ろしいことが聞こえた気がするけど、今から行くところ  
は一応大丈夫つてことか」

「あ、でもな」

魔理沙はこちらに振り向き、真剣な表情で言った。

「図書館は地下にあるんだが、その階より下には絶対に行くな！  
階段でもスロープでもなんでも、下に行くやつには近づくなよ」

「あ、ああ」

突然のことに少し驚いたが、素直に頷いた。

「よし。まあ私から離れなければ間違いは無いぜ」

「勿論そうさせてもらうよ。頼りにしているぜ、魔理沙」

俺の返事に満足し、魔理沙はニツと笑った。

地下に、よっぽど恐ろしい何かがあるということだろう。

世の中には、三種類の人間がいると思う。そうした危険に進んで  
近づく人と、巻き込まれてしまう人と、忌避する人だ。

勿論俺は最後のそれであり、魔理沙に釘を刺されなくとも近づく  
ことは無かつたであろう。触らぬ神に祟りなしだ。変な所で死亡フ  
ラグを立てる必要は無いのだ。

「お、見えてきたぜ」

魔理沙の声に、眼下に目を落とした。

「おおー！」

森を抜け、眼下に広がるのは一面を霧に包まれた湖。上から見るとそこまで広くは見えないが、霧の中にうつすらと見えるそれहतても幻想的に見えた。

魔理沙が言うには、この湖は一年中霧に閉ざされているらしい。ここに来てから若干肌寒い気もする。

ただその霧のせいで、こうまかん、と呼べるような建物を見つけることができない。

「……どれ？」

「後ろからだと見にくいか？ ほら、丁度あの辺にあるんだが……」  
魔理沙が指差す先をじっと見つめる。

霧に包まれた湖の畔、少し霞んでいるが赤い建物が見える。

「あ、あれか」

近づくにつれ、紅魔館がはっきりと見えるようになってきた。

「うわ、見事に真赤だな」

「あれは館の主人の趣味だ」

見渡す限り赤。赤紅朱。外壁は深紅に彩られている。

二階、いや三階建てくらいの高さだろうか。窓は少なく、閉鎖的な印象を受ける。ああでも、目を避ける吸血鬼なら当たり前かもしれない。

周りを囲んでいる塀までも赤じゃないのが何よりの救いだ。館の正面、塀が途切れている部分に門らしき物も見える。

こんなところにぼつんと一つだけ立っている赤い館。そこだけ一種異様な雰囲気醸し出している。お兄さんあすこに見えるは悪魔の館だよ、と通りすがりの人に教えられても信じられるような雰囲気だった。

館のほぼ正面まで接近して、そしてそのまま塀の上を飛び越えて敷地内へ。

「あれ、正面の門から入らないの？ あそこ誰か立っているように

見えるんだけど」

「いいのいいの」

魔理沙は振り向きもせず筭を直進させ、屋敷の裏側に着地する。紅い壁の間に木製の戸があるが、どうも館の雰囲気合わない。急ごしらえで取り付けたように見える。

魔理沙は躊躇いもせず戸を開け、中に入るように促す。本当に大丈夫なのかと思いつつも、俺はそれに従い中に入った。

一歩足を踏み入れ、あまりの驚きに一歩踏み出したまま足が止まった。

絨毯、壁、一面が深紅に彩られている。中は一般的な洋館の作りだが、色が一般的とは程遠いものになっている。

「これも館の主人の趣味だぜ」

「へ、へえ〜」

俺の顔を見て魔理沙が言った。俺はよほど変な顔をしていたんだろう。

恐る恐る足を踏み入れ、魔理沙と並んで赤い館の中を歩く。

どこまでも赤。

ときどき飾ってある調度品が普通の色をしていても安堵した。

ただ、しばらく歩いてみたが、不思議と目に痛くは無い。目に鮮やかことは確かだが、目がくらむような派手さは無く、どこか気品を感じさせるような

「いやそれはない」

……何故か声に出して自分で突っ込んでしまった。魔理沙が怪訝な顔をするのを笑って誤魔化する。

多分他に色が無いからそう思うんだろう。外に出た時のことを考えると少し怖い。

「そ、それにしてもさつきから人がいないな。メイドがいるんじゃないかってっけ？」

魔理沙の視線を、話題を出して避けることにした。

「妖精メイドは役立たずだからなあ。裏口辺りはこの時間は人が少

ないってのもあるけどな」

「でも、サボっているって言う割には、綺麗に見えるけどなあ」

床と壁の設置面なんて特にホコリが溜まりそうなものだが、そんなものは見えない。

「優秀なメイド長がいるからな。基本的に館のことはメイド長が一人でやっているんだぜ。まあ、優秀すぎるのが玉に瑕だが」

「優秀なのはいいことなんじゃないのか？」

「融通が利かないのは困りものだけ。私が本をパ……借りていこうとしたり、食料を少し分けてもらったりしようとするだけで追いかけてくるからな」

「そっかー。どうやらメイド長は常識人のようで安心したよ」

「おいおい、それじゃ私が非常識みたいじゃないか。言っておくがメイド長もかなりの曲者だぜ？」

侵害だ、と言わんばかりの表情で反論する魔理沙。

「分かった、そういうことにしとく」

この話題はきつと終わらない。そう考えてさっさと話を打ち切ることにした。

「分かればいいんだぜ」

分かってないからな、と心の中で言った。

「ほら、次はこっちだ」

分かれ道があっても、魔理沙は迷わずにずんずん進んで行く。

右に曲がり左に曲がり、途中で下に行く階段を下りた。俺はもう自分がどこにいるのかが分からなくなっている。

「広くて複雑なのに、良く迷わずに進めるな」

「本を借りに良くここに来ているからな。どこに何があるかは大体把握しているぜ」

魔理沙は頭をトントンと叩く。

記憶力に感心しかけたが、良く考えればそれは盗みの副産物だ。やっぱり止めておこう。

館の主に合掌。

「やっぱり魔道書を盗……借りていくのか？」

「それもあるが、他にも色々。本当にでかい図書館で、魔道書以外にも色んな種類の本があつて、外の世界の本もあるんだぜ。見たら間違いなく驚く」

魔理沙は少し楽しそうに話す。やはり魔法使いに本は必須なのだろう。

「外のものまであるのか。でも、そんなに立派な所なら尚更主に挨拶したほうがいいんじゃないか？」

「いや、あいつは今寝ている時間だ。無理やり起こすと機嫌悪いし、それにこの図書館の主は別にいるから、そいつに挨拶すれば大丈夫さ。図書館に行けば間違いなく会えるから、一直線に向かうだけだ」

そうしてしばらく歩くと、大きな両開きの扉が見えてきた。

「ほら、ここだ」

扉の大きさから中を推測するのは間違っているかもしれないが、そこまで大きいようには見えない。

魔理沙が扉を開いた。

……前言撤回だ。

視界に見える範囲にあるのは、すべて本。

整然と幾重にも並んだ本棚には、隙間なくびっしりと本が詰まっている。部屋の壁でさえ本棚。それらの高さも相当なもので、俺の身長の三倍、いや四倍ほどはあるだろうか。

まさしくここは知識の山だ。古書、新書、魔道書、外の世界の本、ありとあらゆる本が誰かに読まれるのを待ち、ここに眠っているのだ。

むせ返るような本の匂いと、閑とした静寂。

なるほど、確かにここなら元の世界に戻る方法も見つかるかもしれない。

入口の正面の通路は大きく作ってあるが、この道を少し外れると人が何とか二人通れるくらいの通路になっているようだ。これだけ本があると、押し潰されてしまうような感覚を覚える。

というか、もし小路で本を探している時に自信があったら、間違いない本に圧殺されるだろう。

魔理沙の後に続き、正面の大きな通路を歩く。少し先に、ちよつとした広間が見える。

広めの机に、本が所狭しと積み重ねられている。うず高く積んである本の隙間から、誰かの横顔が見えた。

扉が開く音は聞こえたはずだが、部屋に入ってきた二人を気に留めることも無く、何かに集中している。ここからでは見えないが、おそらく本を読んでいるのだろう。二人分の足音に混じって、ぺら、ぺら、という小気味のよい音が聞こえる。

ぺら、コツ、ぺらり、コツ、コツ、ぺら、ぺらり、パタン。

そうしてデスクの正面まで歩いて、この図書館の主と対面することができた。

「いつもこれぐらい静かならいいのに。あなたが騒ぐと埃が舞うのよ」

「全く、メイド長が掃除をちゃんとしないからだな？ 私が歩くだけで埃が立つなんて、あいつもまだまだだな」

それを聞いて、主は深いため息を吐いた。多分、朝の二人分の溜息よりも重い、色々な思いが詰まっているそれだと感じる。

合掌すべきは、館の主では無く、目の前にいる図書館の主だったようだ。

心の中で合掌。

「それで、何の用かしら。本を返しに来てくれたの？ それともまた本を持っていく気？」

主は椅子から立ち上がり、こちらに歩み寄ってきた。

福の真ん中に紫と白のストライプ、薄紫色のゆったりしたローブを着て、月を模ったアクセサリが付いた帽子を被っている。

病的なほどに白い肌、鮮やかな長い紫色の髪を、胸の辺りのリボンで纏めている。

「いや、今日は私の用事じゃなくてだな」

「あら、見知らぬ人がいるわ。本の影で見えなかった。御機嫌よう。主は軽く会釈をした。

「ご、御機嫌よう?」

つられて俺も同じようにするが、若干滑稽に見えたと思う。

御機嫌ようなんて、昼ごろのテレビ番組でしか聞いたことが無い。

「そう、今日の用事はこいつに関する事なんだ。えーとな……」

「ちよつと、挨拶ぐらいはさせてあげなさいよ」

魔理沙の言葉を遮って主が言う。

「おっと、そうだった。ささ明月、自己紹介自己紹介」

それもそうだと、魔理沙は俺に自己紹介を促した。

「えつと、八代明月って言います。外から来た人間で、元の世界に変える方法を探しているんです。それで魔理沙に連れられてここに」

「外来人?」

その単語に、主が鋭く反応する。

俺に急に近づくと、体の至る所をじつと見つめている。正面、側面、後ろ、とそのままぐるりと一周。

珍しい客だと自覚はしているが、凄く恥ずかしかった。

「なるほど、外見と構造はそう変わらない。本に書いてあった通りだわ」

主は一人納得し、机の上にある紙に何やらメモをした。

「これでよし、と。ああそういうえば、私が自己紹介をしていなかったわね。私はパチュリー・ノーレッジ。この図書館の管理をしているわ」

「管理って言うか住処だろ。お前ここから出てこないじゃないか」

魔理沙が突っ込みを入れた。

「最近は何と外出してる」

「まあそれは別にどうでもいい。本題に入ろうか」

「自分で逸らした癖に良く言うわ。で、なんだっけ？」

「実はこの世界に来たのは事故の様なものなんです。それでこの世界から外の世界に戻る方法を探していて、ここなら何か分かるかも」と

かいつまんで事情を説明する。

「なるほど」

パチユリーは腕を組み、何かを思案する。時折こちらを眺めては、独り言を呟きながらさらに深く思考している。

「そうね……。立ち話もなんだし、とりあえず、その椅子にでも座って。誰かさんはもう勝手にくつろいでいるしね」

考えが纏まつたらしく、こちらを見て椅子をすすめた。自分も先ほど座っていた椅子に座る。

俺は言われた通り魔理沙の隣に腰掛ける。魔理沙はいつの間にか椅子に座っていて、ちゃっかり机の上にある本を物色していた。

「結論から言いますよ」

一息ついて、パチユリーはゆっくり口を開いた。

「私では貴方を元の世界に戻すことはできない」

「……そんな」

これだけの本、これだけの知識を持ちながらも、元の世界に帰ることは出来ない。

期待していた分、失望も大きい。

「一人一人の転移くらいお前なら簡単だろ。なんか出来ない理由があるのか？」

二の句を告げないでいる俺に代わり、魔理沙が問う。

「時間はかかるけど、外の世界に出すことだけならできるかもしれない。ただ、送る場所を正確に指定することは出来ないし、移動中に何が起こるかもわからない。送り出すだけならできるわ。ただ、それが普通の健康な人間だった場合の話」

「俺は普通の健康な人間だけ？」

確かに、俺の体は外の世界にいたときとは違う。身体能力が異常

なほど上がっているが、しかし頑丈ならばそのほうが成功する確率は高いのではないか。

「いいえ」

だが、パチュリーは首を振った。

「明月、だったかしら。そう、あなたの体は、今」

パチュリーが何か言いかけたその時、扉がきい、と音を立てて開いた。

カチャカチャという音と、一人分の靴音。

誰だろう、と思っていると、魔理沙とパチュリーは机の上の本を隅に寄せ始めた。

「もうこんな時間だったわね。話の続きは後にして、ティータイムにしましょう」

「明月、今はとりあえず紅茶でも飲んで落ち着こうぜ」

一番いい所で話が終わってしまい、少し後ろ髪を引かれた。

俺の体に何か異常でもあるのか？

並はずれた身体能力の他に何かあるのだろうか。

でも、どんな理由があっても帰ることはできないのだ。

なら、居直ってしまえ。

俺は思考を打ち切った。

少々短絡的だが、そうだ、そのほうが遥かにいい。

そう、元々当ての無い探索だったのだ。ここで駄目でも、もしかしたら次があるかもしれない。

これだけ大きな図書館とたくさんの本を見ただけでも眼福だし、洋館のティータイムに同伴できるなんて希有なことだし。

そう自分を納得させ、二人と一緒に本を片付けていて、ふと気になったことがあった。

「でもいいんですか？ 急にお邪魔したら用意も出来てないんじゃない？」

俺の言葉を聞いて、パチュリーの動きが止まった。驚きのあまり、手に持っていた本を落としかけていた。

その大げさな反応に思わず俺も手が止まる。

「魔理沙。あなた少し彼から礼儀を見習ったほうがいいわ。いいえ、大いに見習いなさい」

「んー？ はてなんのことやら。私はいつも礼儀正しいぜ」

「へえ」

黙々と本を片付ける魔理沙を、パチュリーは怨みのこもった目で見る。

「ああいや、俺はちよつと人見知りして相手に遠慮するから、魔理沙はこのくらいで丁度良いんじゃないかな……？」

「良くない！」

なんとか魔理沙をフォロしようとして、パチュリーに軽く睨まれた。アレは多分、相当色々なことをされてきた目だ。

これに関してはもう、魔理沙をかばう理由が見当たらなくなってしまう。まあ、元々ないに等しいのだが。

図書館の主にもう一度合掌。

「パチュリー様？ 誰か他にいらっしゃるのですか？」

俺は声がするほうを振り返った。

ティースタンド、ティーセットが乗ったワゴンを押すメイド。

本棚の間からひよこ顔を出して、先ほどパチュリーが上げた叫び声に、怪訝そうな表情を浮かべている。

「おおー」

俺は彼女を見て、小さく呟いた。

これぞまさしくメイドというべきか、ワゴンを押す姿が凄く絵になっっている。

肩まで伸ばした銀髪に、カチューシャを付けている。勿論メイド服だ。

というか、本物のメイドをこの目で見ることになるとは思わなかった。本職の方はもう現世にはいないだろうし。

まあ、大衆娯楽としてのメイドは秋の原っぱにたくさんいるが。因みに俺は行ったことは無い。

「お客様がいるぜ」

何故か偉そうな魔理沙。

「パチュリー様、このネズミはいいとして、こちらの方は……？」

魔理沙は椅子からがくり、と崩れた。それを意に介さず、パチュリーが答える。

「こっちはお客様よ。咲夜、追加をお願いするわ」

「畏まりました、パチュリー様」

咲夜、と呼ばれたメイドはワゴンを机の前まで近付け、本の隙間にティースタンドを置き、パチュリーの前にティーカップを置く。慣れた手つきでカップに紅茶を注ぐ。湯気が立ち上り、紅茶のいい香りが広がる。

「前、失礼しますね」

俺の前のカップにも、紅茶が注がれる。

アッサムティーだろうか。少し赤みがかかっていて、鮮やかな色をしている。とても美味しそうだ。

「……って、あれ？」

ワゴンに乗っていたティーセットは一つ。カップは一つ。

だのになぜ、俺の前にもカップがあるんだ？

「タネも仕掛けも有りませんわ」

俺の様子を見て、咲夜はにっこりと微笑んだ。

「凄い……」

賞賛の言葉を贈る。

彼女はメイドであり、手品師なのだろうか。かなりハイスペックなメイドさんだ。

「どうせいつものやつだろ」

魔理沙がぼそりと呟いた。

「あんたは自分で注ぎなさいね」

咲夜は魔理沙の前にカップだけを置いて、冷たく言い放つ。

「なあ、なんか私と明月の扱いの差がありすぎないか？」

「日ごろの行いのせいでしょ」

パチユリーは紅茶を飲みながら、横目で魔理沙に言った。

魔理沙は口をとがらせ何かぶつぶつ言いながら、自分でポットから紅茶を注いだ。

「お客様、紅茶の味はいかがでしょうか」

「ああ、凄く美味しいですよ。このお茶菓子も美味しいです」

俺は素直な感想を述べた。何か教養があればもっと深いことを言えただろうが、ただ美味しいとしか言えない。

その言葉に、咲夜は笑顔を見せた。

「うちの自慢のメイドだからね。咲夜の入れる紅茶はいつも美味しいわ」

「有難うございます、パチユリー様」

「えーと、咲夜さん、って言うんですか？」

「あ、申し遅れました。ここ紅魔館でメイド長を務めております、十六夜咲夜と申します。以後、お見知りおきを」

咲夜は優雅にお辞儀をした。流れるような所作は、まさに完璧と見えよう。

「俺は八代明月って言います。急な訪問で申し訳ない。でも、紅茶美味しかったです。ありがとう」

「いえいえ、いついかなる時でもお客様をもてなし、主人に忠誠を尽くすのがメイドの仕事ですので。明月様はお気になさらずに」

……なんて出来たメイドさんだろうか。原っぱにいる大多数の方にも見習ってほしい。いや、行ったことは無いから実際がどうなのかはわからないけど。

ただ、様付けで呼ばれるのはかなり気恥かしい。

そこまで敬われたことは今までに経験が無く、面喰ってしまっ。

「できれば、明月と呼んで貰えないですか」

おずおずと申し出ると咲夜は少し考え、

「では、明月さんとお呼びします」

本当は様と呼ばなければならぬところ、さん付けでなんとか妥協した、といった様子。

メイドとしての矜持を曲げさせるのは忍びないが、様付けは流石に気恥かしい。

「明月、様付けも今のうちだけだぜ？ 何度も会つとそのうち本性を現すからな」

咲夜はぎろりと魔理沙を睨んだ。刺すような目線に、魔理沙は目を逸らして紅茶に口を付ける。

「それではお二人とも、少し仕事がありますので、私はこれで失礼いたします。終わる頃にまた来ます」

冷たい目から一転、頬笑みを浮かべて咲夜は優雅にお辞儀をし、ワゴンを押して部屋を出ていった。

「癖はありそうだけど、やはり魔理沙よりよっぽど常識人の様な気がする」

俺は咲夜の姿を見送りながら、思ったままのことを口にした。パチューリが無言で頷く。

二対一の状況に不利を悟ったか、魔理沙は本を読むふりをして、わざとらしく顔を隠した。

## 二十二章：魔女のお茶会（後書き）

機会があったら前半部分の大幅訂正をするかもしれません。根本は変わりませんが、文章的にはだいぶ変わると思っているので一応報告です。

## 二十三章：逃げるごと、闘うごと

それからしばらくの間、紅茶の最後の一滴が終わるまで三人でとりとめのない話をした。

ここに来た経緯、それから外の世界の話、幻想郷の話などなど。パチュリーはどこかずれている外界の知識に苦笑しつつ、色々なことを話した。

時折交わされる魔術的な会話に混ざることとは出来なかったが、俺はそれを楽しみながら聞いていた。

夢の中、ゲームの中、現実ではないどこかでしか交わされることの無い話。

まるで本の中の魔女のお茶階に迷い込んでしまったかのようなだった。

本だらけの無機質な机の上を華やかにしていた洋菓子もすっかり無くなり、ポットに残った紅茶も無くなったころ。

「……やっぱり、このままじゃ納まりがつかないわ」

パチュリーはカップに残った紅茶を飲み干すと、宣言するように言って、椅子から勢いよく立ちあがる。

「なんだ？ 外界では本を読む人が少なくなってきたって話か？」

「違うわよ！ それも確かに問題はあるけど 今はそれじゃなくて、明月を元の世界に帰す方法。少し本棚を調べてみようかと思つて。もしかしたら、何か私の知らない方法があるかもしれない」

「本当か!？」

俺は思わず身を乗り出した。

どんな方法でも、今は少しの可能性に賭けてみたい。

「力になれるかはわからないけど、やるだけやってみましょう」

「そうこなくっちゃな！ 明月、私たちも手伝おうぜ」

「勿論。食後の運動に、本探しといこう」

魔理沙の後に続き、俺も椅子から立ち上がる。

「私はちよつと外に出るから、二人で先に探しといて。場所は……」  
「ああ、あつちだろ？ 知ってるぜ」

魔理沙が途方も無い数の本棚を指しながら言う。これだけの広さ  
で、良く即答できるものだ。

「話が早いのはいいけど、何か釈然としないわ」

「気にするなつて。ほら、早く行って早く戻つてこい」

ひらひらと手を振る魔理沙をやや不服そうな顔で見送り、パチユ  
リーは部屋を出て行った。

きい、と戸が軋む音がした後、部屋に静寂が戻る。

俺は魔理沙について、本棚の間、細い通路を歩く。

等間隔で本棚が並び、所々で本棚が切れ、通路側にアルファベツ  
トと数字が刻印されている。おそらく、種類ごとに本を分けてある  
のだろう。一般的な図書館の並びだ。

その中を、魔理沙は少しも迷わずにどんどん歩いて行く。紅魔館  
に入ってから感じたが、彼女はこの中を知りすぎていると思う。

様々な装丁が並んだ本棚の間を歩く。所々ごっそり本が抜けてい  
るのは、おそらく、魔理沙がこの館を知り尽くすに至った理由だろ  
う。

「なあ魔理沙、あそこは……」

かなり派手に抜けているところがあったので、一応聞いてみる。

「あそこの本は使えなかつたから、近々返却予定だ」  
なるほど。

そうやって偶に本を返すことによって、機嫌を取っている、と。  
うまい。

……いやいや、なんで感心しているんだ俺は。

「えーと、確かここから……。そうだ、ここだな」

一つの本棚の前で立ち止まる。

「ここと、向かいのこの本棚。で、こっから向こうの三つ目の端ま  
でがそうだな」

魔理沙は遙か向こうの本棚を指さした。三つ目とはいえど、どうやらかなりの距離がありそうだ。先が見えない。

「流石に凄い本の量だな」

少し歩いて、棚の本の量に驚く。量の少ない種類の本もあるはずなのに、見る限りではどこも隙間なく本が並べられている。

「まあ、明月はこのメモに書いてある本を探すだけでいい。ここから選別するのは私たちの仕事だからな」

魔理沙から一枚のメモを手渡される。綺麗な文字で三つの本の名前が書かれていた。

「よし、わかった」

この本の中から探し出すのは、なかなか難しそうだ。

「それで、ちよつと一人で探していてくれないか？ 私もすぐ行くからさ」

「え？ 何かあるのか？」

「まあちよつと用事がな」

言葉を濁しつつ答える魔理沙。

その反応で、何となく理解した。

「ほどほどにね……」

「ああ、さつさと終わらせてくるぜ」

魔理沙はすまん、と手をあげ、足早に去って行った。

ほどほど、とは主が返ってくる前に、とかそういう意味ではなく、泥棒家業をほどほどにしろという意味で言ったのだが。

まあ、一応注意はした。後は知らない。

仕方なく、メモを見ながら、一人で本を探すことにする。

端から見ていくと、どうやら本は名前順に並んでいるようだ。本棚の上から下、そして対面の棚の上から下。

これなら、目当ての物を探すのはそう難くなさそうだ。

メモに書いてある本があると思われる棚の前まで行き、本の背表紙を一冊ずつしっかりと確認する。こつこつ本が詰まっていると、流し目だと飛ばしてしまいそうだ。

「お、あった」

メモにある本を見つけ出した。

がしかし、お目当てのものは棚の遥か高くにあり、つま先立ちしてもジャンプしても届きそうにない。まさか、足を掛けて棚を登るわけにもいかないだろう。

仕方ない、ある場所をチェックしておこう。これ以外にはどうしようもない。

しかしこつとも高い所に本があると、首が痛くなってくる。空を飛べる人が羨ましい。

次の本の名前を見るためにメモに目を落としたとき、扉の開く音が聞こえた。音の方を振り向く。さっきまでいた広間から大分離れたはずなのに、図書館の静けさのせいか戸の音が良く響いた。

一人分の足音に混じり、カラカラという音。おそらく、咲夜さんがティーセットを片付けに来たんだろう。

引き続き本を探そうとして棚を見、正面に目的の本を見つけた。これで二冊目。

なかなか幸先がいい。これなら魔理沙が来る前に見つけられそうだ。メモを見ると、次の本は大分離れたところにありそうだ。

長い長い通路を歩く。

色取り取りの本を横目で見ながら、赤い絨毯の上をひたすら歩く。赤一色のこの館の中で、この色使いは目に優しくありがたい。

しばらく歩いて、目的の棚に到着する。歩く方が時間かかっているような気がする。

何にせよ、探し物はこれで最後だ。

上から順に本を見ていき、丁度目線の高さで目当ての本を見つけた。

手の届く位置にあったのは幸運だ。そう思いながら、人差し指で背表紙の上を軽く引く張る。

……ビクともしない。

相当ぎつちり詰まっているようだ。横から指を入れる隙間も無い。

背表紙を持って、今度はしっかりと力を込めて一気に引っ張る。目当ての本と一緒に、横にあった本が数冊ドサリと床に落ちた。まずい、高価なものとか呪われそうなものだったりしたら大変だ。本は学術的価値の高い物も多い。ましてや魔術書ともなれば個人の書いたものもあり、世に二つともない物もあるだろう。俺は焦って身を屈め、本を手に取るうと、

ヒュン

風を切る音と、首筋に走る鋭い痛み。

「痛っ！」

小さく呻き、指をあてて見ると、薄らと血が付いていた。

何かの気配。

本を手放し、反射的に後ろに飛び退く。と同時に、身をかがめていた場所に二本のナイフが深々と突き刺さった。

薄暗い図書館でさえ、鋭く、銀色に輝くナイフ。

背筋に寒気が走った。

「咲夜……さん？」

ナイフの飛んできた先に、咲夜がいた。両手にナイフを持っている。

「咲夜さん！」

俺の問いかけには答えず、咲夜はゆっくりと腕を上げていく。

どうも様子がおかしい。

何かに耐えるように顔を歪ませていて、動かす腕が震えている。嫌な予感がする。

「て」

苦しそうにしながら、咲夜はか細い声で何かを言った。

「え？」

図書館はこんなにも静かなのに、良く聞こえない。

俺の心臓が五月蠅いのか、咲夜の声が小さいのか。

## 逃げて

声は聞こえずとも、今度ははつきりと見えた。  
ナイフを持った手がだんだんと、振りかざされていく。

このままでは殺される。

背を向け、弾かれた様に走り出す。  
本棚の間を、全速力で駆け抜ける。

ひゅう、と言う風を切る音。

横の通路に飛び込んだ。まさに間一髪、ナイフが数本、体の端を  
通り抜けていく。

急いで立ち上がり、また走る。本棚の間をジグザグに、出来るだ  
け姿を隠すようにして逃げる。

ナイフの射線に入らなければ大丈夫だ。

背筋にまとわりつく寒気を感じながら、一心不乱に走り続けた。

背中に無数のナイフが刺さる姿を幻視し、それを振り払うように  
走る。

十分な距離を取っただろうと思いつ、ある一角の本棚に背を預けて  
息を整えた。

落ち着くんだ。

目は常に咲夜のいた方向を見続け、奇襲に備える。

咲夜の意志に反して、体のみが動いている。

動きを鈍らせることはできるようだが、それも苦痛を伴うようだ。  
何かに操られていると考えるのが妥当だが、正体はさっぱりわか  
らない。目的は俺を殺すことか、もしくは目についたものを殺すこ  
とか。

逃げている時には感じなかった疑問が次々と湧き上がってくるが、

満足な答えはでない。

そうして消えていく疑問の後に、魔理沙の姿が残った。

「……そうだ。魔理沙！」

ここに至るまで気づかないなんて、俺はなんて馬鹿なんだ。

今は、魔理沙を呼んで咲夜を止めてもらうしかない。原因の究明は後。

どうせ考えたって俺には理解できないものだ。

「魔理沙！ 咲夜さんが」

どこかにいる魔理沙を呼ぼうとして声を上げ、そして途中で止まった。

目の前の本棚の上。

跳躍している咲夜の手に、無数のナイフが握られている。

とっさに、前の本棚の影に頭から飛び込んだ。頭上を勢いよくナイフが掠めていく。

しまった。

最悪だ、失敗だ！

心の内で悪態をつきつつ、また走り出した。

彼女もまた、霊夢や魔理沙の様な人間なのだ。

棚の上を真つ直ぐ直進できる咲夜と、本棚の間を走る俺では圧倒的にこちらが不利。

しかも、上からならほぼどこからでも俺をナイフの射線に捉えることができる。

距離を取ったせいで魔理沙と合流しづらくなった。完全に裏目に出ている。

背を向けて逃げるのは終わりだ。今度は、出来るだけ本棚の影を盾にしなれば。

「明月どうした！ どこにいる！」

魔理沙の叫び声が聞こえた。

正確な位置はわからなかったが、案の定どこか遠く離れた場所にいるらしい

「こつちだ魔理沙！ とにかく早く来てくれ！！」

居場所を伝えようと上げた叫び声に、上空の咲夜も反応してこちらを狙ってくる。

空から降り注ぐナイフを、後ろに大きく飛んで避けた。本棚の間は狭すぎて、横に避ける隙間が無い。

どこに隠し持っていたのか、咲夜は次々にナイフを取り出し、投げる。

面で降りかかってくるナイフを、後ろに飛んで避けていく。

「魔理沙あ！」

その間も、常に叫んで魔理沙に場所を伝え続ける。

叫び、避けることに集中していた俺は、一つのことを忘れていた。とん。

背中に、何か固いものが当たる。

「あ……」

行き止まり。部屋の端。

足がもつれて、一瞬反応が遅れた。

咲夜の投げた無数のナイフが迫る。

横に避ける？ もう遅い。

死ぬ。

串刺しにされて、死ぬ

「明月！ 出来るだけ伏せろっ！」

空から響く魔理沙の声に、急いで身を伏せた。

星符「メテオニックシャワー」

空気を震わせながら、目の前の絨毯に降り注ぐ星の大軍。赤い絨毯が抉れ、埃と土煙が立ち込める。

着弾とともに巻きあがった風で、ナイフは全てはたき落されたよ

うだ。金属の擦れる音が聞こえた。

「無事か!？」

煙幕の中から、箒に乗った魔理沙が現れる。

「なんとか。助かったよ、魔理沙」

「遅れて悪いな。で、これは一体どうなっているんだ?」

魔理沙は煙幕の向こうを指さす。

「わからない。咲夜さんが急に襲ってきて……。様子がおかしいんだ。まるで何かに操られているようだ」

「うーむ、それだけじゃ私にもわからないな。とりあえず広間に行こう。あそこなら逃げやすい」

俺は魔理沙の箒に飛び乗る。

「横を突っ切るぜ。なるべく姿勢を低くしてな!」

そう言うと、立ち込める煙幕に向かって突進した。超加速に振り落とされそうになりながら、箒に必死でしがみつく。

本棚の上にあった咲夜の横を、全速力で通り過ぎた。だが、咲夜はそれにすぐ気付くと凄く速さで追いかけて来て、ナイフを投げる。

驚くべきことに、魔理沙はそれを後ろも見ずに避けた。

「凄い、一体どうして避けられるんだ?」

「なに、これぐらいなら適当に動いてれば避けられる。どうやら、本調子でもないようだしな」

続けて放たれるナイフを悠々と避け、あっという間に広間にたどり着いた。ちらりと見ると、机にはティーセットが乗ったままである。

箒から降り、二人で本棚の上に立つ咲夜と対峙した。

「さて、これは一体どういうことだ?」

魔理沙の問いかけにも、咲夜は答えない。

何かを喋ろうとしているが、声がうまく出せないようだ。ナイフを持った手が徐々に上がって行くが、

「意識はあるみたいだけど、体が勝手に動いているみたいだ。最初に、逃げてと言っていた」

俺は襲われた瞬間のことを魔理沙に説明する。

「しかし、パチュリーと一緒にいた時は何も無かったんだよな。となれば、そこから外に出た時に何かされたか、もしくは時限式の暗示か？」

魔理沙は腕を組んで言う。その間も、咲夜はナイフをゆっくりと振り上げている。今すぐにもナイフが飛んできそうだ。

魔理沙は咲夜の様子を見て、懐からミニ八卦炉を取り出した。

彼女が持つマジックアイテムの一つで、調理用の火から湯沸かし、強大な破壊魔法にも使える優れものらしい。

「自身では跳ね返せない、か。こうなったら、術者自身を止めるか、こいつを気絶させて様子を見るしかないな」

箒に乗り、八卦炉を構える魔理沙。

「明月、しばらく隠れてろ」

「いや、俺も手伝う」

俺だって、陽動くらいにはなるかもしれない。

だが、魔理沙は首を振った。

「駄目だ。徒手空拳で相手ができる様な奴じゃないぜ。霊夢から頼まれたんだから、努めはしっかり果たさなきゃな」

「で、でも！」

「なあに、私なら大丈夫さ」

俺の心配をかき消すように、魔理沙は笑顔を見せた。器用に箒に立って上昇し、咲夜と対峙する。

「さあ！ まずは私が相手だぜ」

威勢よく声を出すと、ミニ八卦炉を突き出す。

八卦炉に、光がどんどん収束されていく。小さな八卦炉が、輝く光で覆われ見えなくなり、魔理沙の手が光を纏っているようだ。

咲夜も、ナイフを構える。耐えるのももう限界、と言った様子だ。

魔理沙の手に集まる光が一際大きくなり、白く輝いた。

「いくぜ！ マス」

魔理沙が必殺のスペカを唱えようとしたその瞬間。  
「 Bannon! 」と図書館の扉が派手な音を立てて大きく開かれた。

「私の屋敷で暴れている曲者はどいつかしら?」

ゆったりとした足取りで、赤い絨毯の上を歩く人影。

まるで玉座に向かう王のように悠然と、自らの威厳を示しながら。  
朱色の衣を身に纏い、漆黒の翼を揺らめかせる。

館の主のお出ましだ。

「レミリア! お前なんでここに?」

吸血鬼は、この状況を目にして尚威風堂々と歩く。

「それは私の台詞だ! パチュリーに呼ばれて来てみれば、これは  
一体何の騒ぎ? また魔理沙が本でも盗んだのか? 咲夜」

レミリア。

この屋敷の主。

俺が想像していたのとは遥かに違うその姿に驚いた。

容姿端麗な男の吸血鬼かとも思ったのに、目の前にいるのはどう  
見ても幼い少女だ。

だが。確かにその身からは発する雰囲気はやはり人のそれとは違  
う。

小さな体に不釣り合いな大きな黒い翼も、人外としての風格を漂  
わせていた。

「本が盗まれてもお前は痛くも痒くも無いじゃないか。いやいや、  
今日はそれどころじゃないんだぜ。お前んとこのメイドなんだから、  
お前がなんとかしてくれないか」

魔理沙は八卦炉を下ろし、レミリアに向かって言う。

「あー? 咲夜がどうしたって? おーい咲夜。私の声が聞こえないの?」

レミリアは翼を靡かせて飛び立つと、硬直している咲夜に近付き、  
頬をぺしぺしと叩いた。

「お……………」

主の登場に、何とか声を出そうとしている咲夜。だが、やはり掠れた息しか出てこない。

「なるほど、性質の悪い物にでもとり憑かれたのかしら」

レミリアは咲夜から離れ、魔理沙に近付く。

「うちのメイドが迷惑をかけたのかしら？ その人間にも」

「ああ、今回ばかりは完全な被害者だぜ。下にいるあいつは殺されそうになった」

「ふうん……………」

レミリアが上から俺を見下ろす。

俺はどうしたらいいかわからず、ぎこちない笑みを浮かべた。

「うん…………？ 貴方、少し違うわね。面白そう」

レミリアは不気味な笑みを浮かべた。それを見て、得体の知れない寒気が走る。

「な、なんすか…………？」

「いいえ、貴方とはまた今度」

そう言うとレミリアは咲夜と向き直る。

「全く、こんなときにパチユリーはどこへ行ったのかしら。まあ仕方ない、咲夜を治さないといけないし、今回は私が直々にやるう」

レミリアの右手に、赤い光が収束していく。

肌でも感じられるほどの威圧感を纏わせ、紅いオーラが次第に大きくなり、何かを形作っていく。

あれは、槍か？

先端部を特に濃い赤色のオーラが覆っている。

「おいおい、そんなものぶつけて大丈夫なのか？」

魔理沙が心配そうな顔で咲夜を見た。

「大丈夫よ。この私に使えるメイドなのよ？ これくらいなら平気でいてもらわないと困る。それに今の状態じゃ、生半可な攻撃じゃ動きは止まらない」

レミリアは真面目な顔で言う。

最初の理論はめちやくちやだが、後半は的を射ているような気がした。

魔理沙もそれに同意したのか、成り行きを見守ることにしたようだ。

レミリアは、先ほどよりも大きく、長く長い槍を構えた。

膨大な圧力が槍の先端を形成し、図書館の空気を震わせる。

これが妖力と言うものだろうか。

その槍の力に圧倒され、俺は思わずじりじりと後ずさりしていた。

「いくわよ、咲夜」

レミリアは渾身の力を込め、槍を振りかぶった。

神槍「スピア・ザ・グングニル!!」

紅い魔力を込めた槍が、一直線に放たれた。

俺の体に向かって。

紅い閃光が迸り、視界を埋め尽くした。

轟音と、立ち上る粉塵。

見ため通りの破壊力。大きく抉れた床がそれを証明している。

まだ、生きている？

視界はレミリアの魔力の残滓で紅く染まっているが、俺の体から紅い色は出ていない。

破壊された床から飛び散った破片で細かい傷は付いているが、体に大穴が開いていたりはしていない。

心臓は激しく鼓動を打つ。この動きは、生の証だ。

「おい！……に……だ！」

「ちが……らだ……い！」

なんだ？

何が起こった？

レミリアが槍を投げようとした瞬間。

ぐるりと体を反転させ、目標を俺に変えた。

……それで？

浅い呼吸を繰り返す。腰が抜けてしまつて、体が言うことを聞かない。

そう、だ。

槍が迫つてきて、俺の眼前の床に突き刺さつた。

奇跡的に？

違う、槍に圧倒されて後ずさりしたおかげで、狙いがずれたんだ。こんなところで臆病が役に立つとは思ひもしなかった。

「畜生、お前もかよ！ 明月、返事しろお！」

「なによこれ！ 私の体を勝手に動かそうなんて！」

「何とか止められないのか……よつと！」

「無理！ うー、イライラする！」

二人の争う声にハツと我を取り戻す。

そうだ早く、早く逃げないとまずい。

いやそれより魔理沙に無事を伝えないと、ああいや、そんなことをしたらすぐに見つかつてしまう。

とにかく、立ち上がらなければ。いつまでも腰を抜かしているわけにもいかない。

震える足に無理やり力を入れ、よろめきながら立ちあがった。

断続的に聞こえる炸裂音と、金属の音。それと同時に、図書館が激しく揺れる。

煙幕から微かに見える赤と銀と虹。

まだ粉塵は残っている、これの向こうがどうなっているかは分からないが、今はまだ大丈夫だ。

俺は自分に言い聞かせ、今にも崩れ落ちそうな体を支える。

煙にまぎれ、なんとか近くにあった本棚に隠れた。

逃れた、と思った瞬間、膝の力が一気に抜けてその場にへたり込んだ。

本棚に背を預け、乱れた呼吸を治そうと努める。しかし、息をすればするほどその乱れは大きくなっていく。

「魔理……沙！」震える声を振り絞り、本棚一つ裏の戦場に声をかける。

「明月！？ どこだ、無事なのか？」

轟音の中に混じり、魔理沙の返事が聞こえた。

「なんとか、大丈夫だ。本棚の影に隠れている」

「じゃあ、静かになるまで隠れてる。こっちは私が何とかするぜ」

声に続き、一際激しい音が響いた。図書館が大きく揺れる。

後ろでいくらか火花が散るうとも、この本棚は壊れない。生半可な攻撃では崩れないようになっていられるらしい。

ここにいる限り、俺の安全は保障されている。

外で魔理沙が闘っているから。

激しい音の残響を耳に残し、本棚の影に隠れて一人。

「本当に、これでいいのか」

自分自身に問いかけるように呟く。

魔理沙が一人で闘っている。

闘いが長引けば長引くほど、魔理沙も傷つく。

それでも、彼女は一人でもこの闘いを収めるだろう。

嫌だ。

無様に逃げてきた俺に、何かを助けられるとは思わない。

妖怪が相手だから仕方ないなんて、言い訳を言う気はない。

たとえ相手がなんだろうと、俺の心は弱い。

それでも。

震える足に喝を入れ、本棚を支えに立ちあがった。

あの時と似ているな。

あ の 時 刻。

少女の瞳に見たものは、後ろめたさだったか、偽善だったか、信念だったか、正義だったか。

今となつてはもうわからない。

深呼吸を一つ。

怖い。

ここから出れば、危険にさらされる。

どうしようもなく恐ろしい。

恐怖を手のひらに。

それを潰すように、拳を固く握りしめた。

それでも。

助けたいと思った。

ただそれだけを、強く思った。

それだけは、本当のこと。

助けられるか？

違う、そうじゃない。

可否は重要じゃない。

助けたい。

俺が出なくても。彼女は疵を負つてこの闘いは終わる。

俺が出なくても。彼女は疵を負わずにこの闘いを終える。

俺に出来ることが無くても、目を逸らすのは嫌なんだ。

誰かが傷つくのを見過ごすことは出来ない！

弾幕飛び交う広間に躍り出た。

「お前、なんで！」

魔理沙がすぐに俺を見つけ、怒鳴る。

「もう、逃げたくないんだ」

決意を込め、魔理沙の目を真っ直ぐ見つめた。

一度目は迷ってしまった。

今度はもう、中途半端はしたくない。

魔理沙は厳しい顔をするが、レミリアと咲夜が俺に気付いたのを見て、諦めたように言った。

「わかった。その代わりに一つだけ約束しろ。

絶対に死ぬな」

背中を向け、レミリアと対峙して魔理沙が言う。

まったく、難しいことを簡単に言うものだ。

でも、その約束は絶対に守る。

「わかった」

魔理沙には見えないけれど、深く頷いた。

「よし。じゃあ 派手にいこうぜ！」

魔理沙は八卦炉をつきだし、大きな閃光をレミリアに打ち込む。その輝きと熱量で、俺とレミリアの間を遮った。

「明月、咲夜の相手を頼む。追い詰められないように気をつけるよ！ こっちの吸血鬼は」

閃光を避け、目にも止まらぬ速さで突撃してきたレミリアを魔理沙は紙一重で避け、

「私に任せろ！」

叫び、カウンターで星屑の大軍を打ちこんだ。

近距離で放たれた大量の流れ星にも怯まず、レミリアはそれを器用に避け、再び突撃する。

レミリアの注意は完全に魔理沙を向いているが、あくまでも二人の狙いは俺だ。

不意を突かれられないように気を付けるとして、当面は目の前の相手に集中しよう。

咲夜に向き直る。

紫の時を思い出すんだ。

魔理沙からの攻撃が無くなると同時に、咲夜は一直線にこちらに向かってきた。両手にナイフを持ち、投げる。

右に僅かに動いて避ける。

俺を狙う弾、ナイフは僅かな動きでかわせる。

続けて、俺のいる空間を切るように無造作に放たれたナイフを、今度は左に飛んで避ける。

面を狙われた時は、左右に避け、詰められないように。

落ち着け。

後退することはできない。

いくら大きさのある広間とはいえ、すぐ近くではレミリアと魔理沙が闘っている。少しでも後ろに下がれば、また柵に背をぶつけるか、本柵の迷宮に迷い込むだろう。

距離を詰めてきた咲夜がナイフを振るう。半身で避け、そのまま後ろに回り込む。

咲夜は前に跳躍すると同時に、前宙をしながらナイフを投げた。上体を逸らしてそれを避ける。

咲夜はきれいに着地すると、こちらを振り返ると同時にナイフを投げた。

まるで曲芸師の様な動きだ。

けれど、狙いが正確すぎる。言いかえれば無駄が無さ過ぎる。

機械的に放たれるナイフは正確無比だが、その分普通の人間を相手にするより行動が読みやすい。

咲夜は両の手に持ったナイフを一度に投げた。また横に飛んで避ける。

一度に放たれるナイフも、両の手に収まる数だ。弾幕とは違う。

咲夜を中心にして、円を描くように動き続ける。

接近された時も、あくまで後退はしない。

次々と繰り出されるナイフを避ける。

そうして避けることに集中して、それに気づくのが遅すぎた。

「明月、避けるお！」

突如聞こえた魔理沙の声に後ろを振り向き、戦慄する。空に浮かぶ紅い槍が、俺を狙っている。いつの間にか、俺はレミリアの正面まで来てしまっていた。迂闊。

左右には、紅い魔法陣が展開していて、蝙蝠を模った弾幕が放たれていた。

後ろには咲夜が迫っている。

「畜生……！」

逃げ場は、無い。

前後左右を詰められた。

どうする。

この状況の最善解はなんだ？

生きるためには？

悪態をつく暇があったら、この場を切り抜けるすべを考える。

どこに逃げて、レミリアの槍からは逃げられない。

逃げられない。ならば一か八か。

攻撃を封じるしかない。

後ろを振り向き、咲夜に向かって突進した。

避け切れなかったナイフが首筋を掠めたが、構わず咲夜のナイフの間合いに飛び込む。

咲夜がナイフを振るうが、一瞬遅い。腕を少し切られたが、何とか抜けて咲夜の後ろに回り込むことができた。

レミリアの槍の間に、咲夜を挟んだ。

これなら、レミリアの攻撃は止まるはずだ。

「くそっ！」

魔理沙の焦り声が聞こえた。

振り返り、考えの甘さを思い知る。

止まらない。

咲夜の肩越しに、紅い槍を振り上げるレミリアを見た。

レミリアの顔に浮かぶ、焦りと恐怖。

「な、なんで？ 止まれ！ 止まりなさい！」

レミリアは必死に声を張り上げるが、お構いなしに体は動く。

手に持った槍は先ほどよりも禍々しい紅色を纏っている。おそらく、アレは本気の一撃だ。

破壊力を幻視し、血の気がさつと引いて行くのがわかる。

赤い槍に釘づけになって、目を離すことができない。

咲夜を巻き込むのは明らかなのに、レミリアの手は止まらない。

二人を呪ったものを、甘く見過ぎた。

目的を遂行するためなら、例えその道に何があっても止まらない。それこそ機械のように。

「うおおおお！」

魔理沙は箒を急加速させ、捨て身の突撃をする。

流れ星のような速さで一気に距離を詰めた。

直撃。

レミリアはそれを避けることもせず、魔理沙の突撃をもろに受けて吹っ飛んだ。

だがもう遅い。

一瞬早く、槍はレミリアの手を離れていた。

紅い死が周囲を血の色に染め上げながら近づいてくる。

今すぐ横に飛べば避けられるかもしれない。

でも、咲夜はどうなる？

振り返りながら、ナイフを突き出す咲夜。

その体制から避けることはできない。

どうして、そんな顔をしているのか。

死を背中に感じながら、彼女は諦めに似たような顔を浮かべていた。

目が合った。  
にげて。

彼女の唇が動くのを見た。

主に殺されるならそれでいい、と？

「駄目だ」

咲夜の言葉を強く否定した。

必死に手を伸ばし、咲夜を引き寄せる。

ナイフが肩に突き刺さるが、痛み動きを鈍らせるわけにはいかない。

歯を食いしばって耐え、そのまま庇うように咲夜を抱き寄せ、力の限り横に向かって飛んだ。

直後、轟音とともに紅い槍が地面に突き刺さった。

紅い魔力が弾け飛び、周囲にあるものを壊し、吹き飛ばす。

床が崩れ、はがれ飛び、その勢いに吹き飛ばされ転がる。

本棚に背中を強く打ちつけて、やっと止まった。

痛い。

痛いと感じられるぐらいの意識は、まだ保っている。

腕の中の咲夜を見る。軽い裂傷はあるが、大きな怪我はないようだ。

安堵のため息が漏れる。

「う……」

咲夜は小さく呻くと目を開き、がば、と起き上った。

「貴方……！ ちょっと、大丈夫！？」

「なんとか」

俺は体を起こしながら答えた。

肩の痛みによるめくが、咲夜がそれを支えてくれた。

「あれ、動けるの？」

「え……？」

咲夜は立ち上がり、手を振ったり握ったり、回転したりと体の様子を調べている。

「動ける……！ 貴方一体何を？」

「いや、俺にもさっぱり？」

咲夜と顔を見合わせるが、二人とも首をひねるだけだ。

強いシヨック、のせいだろうか？

「おーい、大丈夫か！」

こちらに飛んでくる魔理沙に、座ったまま左手を振って答える。

魔理沙はすぐそばに着地し、咲夜の様子に気づく。

「咲夜？ 自由に動けるのか？」

「ええ。何があつたかはわからないけど、もう大丈夫そう。お嬢様は？」

「直撃したおかげで気を失っているらしい。しばらくは大人しいと思うぜ」

魔理沙の見るほうを咲夜も見る。多分、どこかの本棚の間に倒れているだろう。

これで呪いが解けてくれるとありがたい。

「二人には迷惑をかけたわね。御免なさい」

咲夜は俺たちを交互に見、頭を下げた。

「吃驚したけど、俺は特に気にしてないよ。怨むなら咲夜さんを操っていた誰かだ」

「なあに、いつもより遥かに優しい弾幕だったしな。明月も無事ならそれでいいじゃないか」

「そう言って貰えると助かるわ。……ありがとう」

咲夜はそう言つともう一度頭を下げた。

「さて、一件落着……とはいかないよな。レミリアがどうなっているか」

「やっぱり、一悶着あつたようね」

声のした方を振り返ると、パチュリーが息を切らし、本棚に手をついて立っていた。

「パチュリー様、大丈夫ですか？」

咲夜が駆け寄って手を貸す。

「全速力で移動したら息が……。も、もう大丈夫よ」

「日ごろの運動が足りないんだよ。来るのも遅いぜパチュリー。もう粗方片付いちまった」

「そのようね。あとは……魔理沙、レミイはどこかしら？」

「多分向こうの方にはいるはずだ。案内するぜ」

魔理沙が飛び立つのに続き、パチュリーも空を飛んで本棚の向こうに消える。

二人を見送つたのち、咲夜に肩の様子を見てもらった。

肩に刺さったナイフは抜かずにそのままにしている。

見ため痛々しいが、確か抜かない方が良かったはずだ。

「良かった、傷口は深くなさそうね。これくらいなら処置できそう。確か医療セットが机にあつた筈だわ」

傷の手当てまでこなすなんて、この人は一体どこまでできるんだろうか？

しかし相当深く刺さつたように思えたが、意外とそうではなかったらしい。

「立てる？」

咲夜が手を差し伸べてくれた。

「ありがとう……」

感謝しつつ、素直にその手を取る。

立ち上がり、着物についた埃を払った。

「……お礼を言うのは私の方よ。ありがとう、明月」

「え？」

顔を上げて咲夜を見る。

今、名前で

「それはお客様から、何になったのかな？」

何となく俺は嬉しくなって、僅かに笑いながら問いかける。

「命の恩人、ですわ」

咲夜はそう言うと、にっこりと笑った。

その笑顔が、あまりにも綺麗だったから。

「……そんな大層なものじゃないけどね」

俺は少し気恥ずかしくなって、頬を書きながら笑った。

もし、あの時逃げていたら。

俺に向けられるこの笑顔を見ることは多分なかっただろう。

それも嬉しいし、何より

少しだけでも、役に立てた。

今は、それが一番嬉しかった。

## 二十四章：能力と霊力

派手に壊れた図書館を補修することと、場所を移して紅魔館のとある一室。

広い部屋をゆったりと使い、豪華そうな調度品や家具が並べられている。

まさにイメージ通りの洋館だ。それも貴族の所有する屋敷のイメージ。

ぐるりと部屋を見回す。

四人で使うには少々広すぎるほどの部屋だ。俺の小汚い家とは大違いの広さに少し妬ましさを覚えるくらい。

しかし、これだけの部屋があの外観のどこに収納されているというんだ？

この屋敷には収納の達人でもいるのだろうか。

まあ、外と中で全く変わらないものもあるが。

そんな部屋の一角、封印式を組まれたレミリアを中心に、その周りを四人で取り囲んでいる。

パチュリーのそばに積み重ねられている七冊の本。それらがレミリアの封印式を構成しているらしい。レミリアの周囲を七つの小さな光球が回っている。

レミリアは目を覚ましてから、ずっとむくれていて、誰とも目を合わせようとしない。

まあ、気持ちはわかる。

パチュリーの組んだ術式は短時間で出来るものにしては相当強力らしく、レミリアは今や自力で表情を変えるくらいが精一杯だそうだ。

そんなわけで。

図書館から、文字通り運んでくる途中、魔理沙にこそぞとばかりに相当弄られていたのは言うまでも無い。

変なポーズや恥ずかしい格好を取らせてみたりと、実にやりたい放題だった。

咲夜はそれを睨んではいたが、時折にやけるあたり、主人の痴態を楽しんでいたようだ。さらに言えばパチュリーも止めようとしなかった。

誰も止めようとしなない辺り、何ともいたたまれない。

かく言う俺も楽しませてもらったので、あまり強くは言えないのだが。

最初感じた威圧感や高貴な感じはどこへ行ってしまったんだろうな……。

もう一度、目の前にいる少女を見つめてみた。

ゆるくウェーブした薄い青色の髪と、人間で言えば10歳くらいの容姿をしていて、淡い紅色のドレスを身にまとい、背中からは大きな黒い翼が生えている。

見た目だけで言うなら、やはり幼い少女に見える。

何もせずにいるなら、やはり風貌も大事だということなんだろうな、これは。

「それで、これからどうする？」

笑いをこらえつつ、魔理沙が話を切り出した。

「なんとかして治すしかないでしょう。気絶させても駄目ってことは、何かしらの手法を踏まないといけないわね。ただそうになると、咲夜が治った理由が気になるわ」

パチュリーは咲夜を見てから、俺に視線を移した。

「私には、あなたが何かしたとしか思えないのだけれど」

「やっぱり俺、なのかな？」

そうは言っても、心当たりが全然ない。

状況的に見れば俺が一番怪しいのだが、何をしたかわからなければどうしようもない。

「あなたが咲夜をかばった時のことを、最初から言ってみてくれる？」

「ええと……」

目を瞑り、あの子のことを思い出す。

とはいえ、なにしろ必死で、どこをどうやったかなかなか出てこない。

しばらく悩んだ末に、やっとあの時の情景が心に浮かんできた。

「槍から咲夜さんをかばおうとして、腕を掴んで引き寄せて、思いっきり横に飛んだ。あとはナイフが肩に刺さったくらいかな？」

右肩に巻かれた包帯を見る。

咲夜の処置は手早くとても丁寧で、包帯もかなり綺麗に巻かれた。そのおかげか、今はもう痛みは感じない。

まさか、刺されたから目標達成、なんて物騒な話ではないだろうな？

「刺して傷ができたから完了、とかか？」

「違うでしょうね」

魔理沙が俺の思ったことを口にするが、パチュリーはそれを即座に否定した。

少し安心する。

「仮にも吸血鬼を操る様な術よ。こうして封じるとはわけが違う。おそらくそんな適当な目標では終わらないでしょうね」

「となると明月が何かしたってわけか」

「明月、腕を掴んだって言うていたけど、それはどの辺を掴んだのかしら？」

「うん？ どこだったか……」

あの時のことさえ曖昧だったのに、どこを掴んだかなんて詳しく覚えていないはずもない。

「肘の少し先、だったと思いますよ」

頭を捻っていた俺に代わり、咲夜がその場所を掴みながら答える。「うん、確か服は掴まなかったからその辺かな。でも、それが何か

あるのか？」

「肌に触れた、ね。多分それよ」

「はい？」

それ、とは腕を掴んだことか？

パチユリーはそばに置いてあった七冊の本から一冊を手に取り、俺に手渡す。すると、本に触れたと同時にガラスが割れたような音がした。

「え、え、これは？」

見ると、レミリアの周囲を回っていた玉の一つが砕け散り、キラキラした光の砂が舞っている。光の残滓は段々薄れていき、最後には見えなくなつた。

「玉が弾けた？ おいパチユリー、一体どうなっているんだ？」

魔理沙の質問に答えずパチユリーは俺から本を取ると、なにやら呟き、頷いた。

「やっぱり、『程度の能力』ね」

「程度の能力？ 何それ？」

今までの滞在で、幻想郷に関してのある程度の知識は得ていたが、これは初耳だ。

「やっぱりこうなるよなあ。出来れば隠しておきたかつたんだが」程度の能力、という言葉聞いて魔理沙が大きなため息をついた。

「魔理沙？」

「隠そうとしていたの？ まあ理由はわかるけど、ここまできたらもう無理でしょう」

魔理沙は困つたように頭をかいた。

「だよなあ。一応霊夢と紫からも口止めされているんだが……もうこうなつたら仕方無いか」

「俺の体は、他にもおかしいところがあるのか？ それが元の世界に帰れない理由なのか？」

隠されていた、ということに怒りは感じない。

ここに馴染み過ぎること。

つまりそれは元の世界の常識から外れてしまうことだ。その点では、寧ろ三人の配慮に感謝すべきところではあるだろう。

だがこうして誰かから命を狙われた以上、俺は自分のことだけでも知っておきたい。

もし俺が誰かに迷惑をかけるというなら

「いや、おかしいつてわけじゃないぜ。私にも程度の能力はあるし、霊夢にもあれば咲夜にもある。ただ人間が能力を持っているのは稀、それだけのことだぜ。別に体に悪影響を与える様なものじゃない」

魔理沙は手を振って俺の言葉を否定し、話を続ける。

「一人が持てるのは大体一つの能力。たとえば私なら『魔法を使う程度の能力』。程度の能力は足が速いとか、力が強いとかそういう個人の特徴の様なものだ。例えばそうだな……」

そこで、魔理沙は咲夜を見た。

「咲夜の持つている能力は『時を操る程度の能力』なんだが、言葉通り、時間を止めることができる。これを私やパチュリーが魔法でやろうとすると、大がかりな下準備と膨大な魔力がいる。さらに止められる時間もごく僅かな間のみだ」

「あなたはどうせ破壊しかできないじゃない」

ぼそりとパチュリーが言った。

「うるさいぜ？」

ぎゃーぎゃーと口論が始まってしまった。

そんな二人に溜息をついて、咲夜が話し始める。

「私が時を止めるときに使う霊力は微々たるもので、発動も一瞬。効果範囲も時間も思うがままよ。魔理沙が『特徴』といったのはここね。例えどんなに力が弱くても、能力の行使にはあまり関係しないの」

「まあ、霊力が高まれば能力の範囲が広がったりはするがな。咲夜なら霊力の続く限り時間を止めていることも出来るだろうし」

何事もなかったかのように魔理沙が後を継いだ。

パチュリーがやけに悔しそうなのは、もしかしたら本を人質、い

や本質か？ に取られたからかもしれない。

「なるほど、能力についての大きかたはわかった。それで、俺にもその能力があるってことなんだよね？」

「そうね。間違いないと思うわ。あとはそれがいったい何かということだけど」

能力。

それが貴方の能力なのね

紫の言葉が脳裏に浮かんだ。

「そうか……あの結界も」

あの時は疑問に思う余裕も無かったが、今思えば確におかしい。いくら身体能力があるとはいえ、単なる腕力だけで結界を破れるはずがないんだ。

「そういや明月、あのとき紫の結界を容易く破っていたよな。結界を破り、咲夜にかかっていた魔術を破り、パチュリーの組んだ封印の一つを破った。となると……何かを破壊する力か？」

「魔理沙、それは多分違うわ。現状から考えると、明月はまだ能力を制御出来ていない。もし破壊する力なら、咲夜の魔術のみを壊すなんてことはできないでしょうね。間違いない咲夜も危ないわ」

「彼に触れたことでどこかがおかしくなった、というのはありませんでした」

「ううん？ じゃあ結局俺の能力って何だ？」

壊れてしまえ なんて叫んだこともあったが。

パチュリーの言うとおり、何かを破壊する力ではない気はする。

うまく言い表せないが、もっと違う何か。相手に直接危害を与える様なものではない様な

パチュリーは目をつぶり、人差し指を立てながら歩く。

まるで探偵が推理を披露しているかのようだ。

「咲夜にかかっていた魔術を解除した。私の組んだ封印式を解除した。スキマ妖怪の結界を解除した」

パチュリーはさらに雄弁に語り始める。

「咲夜にかかっていた魔術という異常を解除し、通常の状態に戻した。本が発動し、封印式が組み立てられている状態を解除した。結果も突き詰めれば、通常の空間を外と内で分ける境界を上書きしているともとれる。それを解除し、通常の状態に戻した。こう考えれば、破壊する、と言うより筋が通るんじゃないかしら」

パチュリーは立ち止まって目を開き、俺を指さした。

犯人はお前だ！ とでも言われた気分だ。

「なるほど。そうになると、明月に触れた時に霊夢が飛べなかったのは、程度の能力を『解除』されたってことになるのか？」

「私はそれを見てないけど、おそらくはそうでしょうね。あとは、能力が発動する条件だけど、これはおそらく『明月が触れているもの』ね。体の一部でも、どこかが触れれば『解除』されると思うわ」「つまり、明月の能力は『解除する程度の能力』ってことだな」「解除する程度の能力……」

その瞬間、自分の中で何かが固まった。解除する程度の能力。

体の内に漂っていた何かが、名前を付けられて初めて形を持ったような、そんな気分。

目に見えない力の手綱を、今ようやく握ることができたということか。

「つまり、お嬢様に触れれば魔術は解除される、ということですか？」

「勿論。明月、レミリアには色々聞きたいこともあるから、早速試してみてください。あ、服じゃなくて一応素肌に触って」

パチュリーに急かされ、レミリアの前に一歩踏み出した。

解除される、という言葉を書いたおかげか、いくらか機嫌も直ったようだ。目が早くしろ、と訴えている。

「因みに、もし能力が発動しなかったらどうなる？」

「その場合は封印式が崩れないから大丈夫よ」

その言葉を聞いて安心した。

最悪の場合、真つ先に攻撃されるのはレミリアの前にいる俺なのだから。

「よし、じゃあ……」

自分の中にある能力のスイッチを、オンにするイメージ。

自分の中にあるそれを、自然に外に出すだけだ。集中することなんてない。

むしろ他のことを考えていたほうがいいような気さえするので、余計な企みに気を回そう。

さて、今からレミリアの魔術を解除するわけだが、どこを触ろうか。

肌が露出しているのは、腕か首から上、もしくは足だが、正座しているレミリアを倒してまで触ることは無い。

ていうか、そんなことしたらただの変態じゃないか。

この広い世の中に数多生息している男性諸君の中には、幼女や少女にしか興味がない、そんな趣向を持つ不逞の輩もいるかもしれないが、世の中の一般人同様私にそんな趣味は無いのだ。

それに怪しいそぶりを見せたら咲夜に刺される。間違いない。

妥当な線は腕に触れることだろう。

しかし、それでは面白くない。こんな場面はこれから先おそらく無いわけだし、折角だから何か記憶に残る様な事をしよう。

俺はゆっくりと手を伸ばし、レミリアに触れた。

ぶに。

「たてたてよこよこまるかいて、……っと。」

あえてちょんをせず、頬をつねったままで止める。

一瞬の静寂ののち、回りの三人からそれぞれの反応が返ってきた。

大笑いをする者、幸せそうな顔をする者、下を向いて肩を小刻みに震わせる者。

そして、拳を震わせて怒りに狂う者。

「いやーほら、小さい頃流行ったなあ、って思ってね？ 折角だから……」

ギロリと俺を睨みつけるレミリア。

身の危険を感じ、そっと頬から手を離す。

「ほ、ほら！ 今回のことはこれでチャラってことで！」

チャラ、という言葉にピクリと反応し、下を向くレミリア。

「……そ、そうねえ。……じゃあこれで一切無しよ！ わかったな！」

レミリアは叫ぶように声を上げた後、俺の返事も待たず一直線に咲夜に駆け寄り、抱きついた。

咲夜と目を合わせ、何も言わずただ頷き合う。それだけで意志の疎通は十分だ。

「はいはい。話がついた所で、今回の騒動の原因を探ってみましよう」

パチュリーは何事もなかったかのように、冷静に言い放つ。笑いは抑えられるほうらしい。

一方魔理沙は一度笑い始めるとなかなか止まらないのかもしれない。

「そこまで笑うようなことでもないような……？」

自分がやったこととはいえ、流石に笑いすぎでは無かるうか。

そろそろ終わらないと、レミリアの機嫌が一巡してまた怒り始めてしまいそうだ。

「とりあえず、その黒白が黙るのを待ちましょうか……」

「……とまあレミリアが面白かった、と」

「……」

「はあ、と霊夢はため息をついた。

「別にそんなのが聞きたいわけじゃないんだけど。というか、その様子だとまた無茶してきたみたいね」

「いやいやとんでもない！ 寧ろ無茶したのは明月。私は何もやってないぜ」

お茶を飲む手を止め、霊夢がジロリとこちらを見る。

「ちょ……！ 俺一人に罪を擦りつけようとするな！ 魔理沙だってかなりの傍若無人だったじゃないか！」

「進んで危険にあいに行つたのでしょう？ 貴方の方がよほど無茶をしていると思うのだけれど」

「それは……」

紫の反論に、返す言葉も無く黙り込んだ。

確かに、隠れていると言われたのだから俺がこのこ出ていく通りは無かった。俺が出なくとも魔理沙一人で何とかなつたのだろう。

「全く、無茶するなつて言ったのに。肩に怪我までしてきて！」

魔理沙から、一人で咲夜の相手をして怪我をしたことを聞いて以来、霊夢の怒りは収まらない。

「それは、その……ごめん。心配かけて、ごめんなさい」

魔理沙とともに神社に戻ってきたとき、出迎えてくれた霊夢に会うなり肩の怪我に気付かれてしまった。流石に着物では肩に巻かれた包帯を隠し通すことはできない。

怪我の具合を見る霊夢の心配そうな表情に、申し訳ない気持ちで一杯になった。

詳細を尋ねられ、その顔に嘘をつくこともできず、ありのままを正直に話した。

結果、無茶したことをさんざん叱られた後、こうして紅魔館でのことを詳しく話しているというわけだ。

神社には紫もいて、四人でテーブルを囲んで話をすることとなった。

テーブルの上には四人分の湯呑みと、急須と煎餅が置かれている。

「まあ、それに関しては私にも責任があるんだし、明月一人を責めないでくれよ。ほら、私だってあのまま戦いが長引いていたら怪我したかもしれないだし、明月だって色々考えがあって出てきたんだ」

魔理沙なりに責任を感じているのかもしれないようで、フオローを入れてくれる。

彼女には感謝しなければならぬ。

俺の我が儘に付き合ったせいで、魔理沙も同じように霊夢から怒られたのだ。

「それはわかるけど……」

霊夢は顔をしかめ、口ごもる。

「ふふ、霊夢からこんな心配されるなんて、二人とも本当に愛されているのねえ。私が怪我しても全く心配なんてしなかったのに、わざとらしい紫の演技に、霊夢は顔を真っ赤にした。

「わ、私は別にそんなつもりじゃ……！ ああもう、それで！ 次はどうなったの!?!」

無理やり話の続きを促す霊夢。

紫を見ると、俺と魔理沙を見てにつこりと笑った。

……紫にも、後で感謝しなければならぬ。

魔理沙は紫の優しさを若干不審がっていたが、霊夢に促されるままに話の続きを始める。

「お、おう。そこから全員で今回の騒動の発端を考えたわけだ。一人を操る魔術だ。術者はおそらく近く近くにいて、更に被害者に一度でも接触し、被害者の体の一部、例えば毛とかだな。それを採取したと見て捜査を始めたんだ」

「捜査つたって、被害者が生きているんだから犯人なんて丸分かりでしょう?」

霊夢が当然の疑問を投げかけた。

「いやそれがな。 たった一人を除いて、誰も怪しい人物に遭遇してないんだぜ」

「は？　じゃあ犯人はそこにいなかった　いや、一人会っているということはそこにいたのに誰も気づかなかった？　どういうことなの？」

霊夢は首をかしげ、矢継ぎ早に質問する。

この疑問はもつともなものだ。

犯人はいかにして二人から体の一部を採取したか？

「そこにいたのに誰も気づかなかった。つまり、そこにいてもおかしくない人物が犯人だった。そして、そのたった一人はおかしくない人物のおかしな所、偽物であることに気付いたわけね」

紫は手に持っていた扇子をぱちんと閉じ、魔理沙を見る。

「その通り、犯人は紅魔館の人間になり済ましていた。咲夜にはレミリアの姿で、レミリアには咲夜の姿で。二人の証言には食い違いがあったぜ。多分その時に会ったのが偽物だったんだろっな」

「ちよつと待って、じゃあその犯人は二人の人物に完璧になりすましてったこと？　そんなこと魔法で出来るのかしら」

「それは難しいでしょうね。ここは犯人の能力だと考えるべきだと思うわ。姿と声を完全に似せることができる能力。でも、その人の外見は似せられても、中身までは似せられないようね？」

霊夢の疑問に紫が答え、更に魔理沙に問いかける。

紫は魔術にも造詣が深いらしい。

流石は、妖怪の賢者と謳われているだけはある。まあ、賢者云々は本人談だから真偽のほどはわからない。

それはともかく、そう、中身の違いに気付いた人物がいたのだ。

「パチュリーが、俺と魔理沙が二人と闘っている間ずっと、レミリアになりすました犯人と会話していたんだ。途中、図書館の大きな揺れと、レミリアの様子がおかしいことで気付いたらしい。その偽物のレミリアは窓をつき破ってどこかへ逃げてしまつて、今はどこに行つたかさっぱり」

「体を操っていたのももしかしたら能力だったかもしれないわね。話を聞く限りでは、相当難しいことをやっているみたいじゃない」

霊夢が全員を見回して言う。

「そう……なのかも。とまあ、それが今回の騒動の流れだよ」

そこで一息つき、俺はお茶を啜った。

「まあその後、レミリアが犯人に対して怒り狂っていた。プライドとか、面子とか沽券とか言っていたが、紅魔館は犯人探しに首を突っ込んでくる気らしいぜ？　なんだかパチュリーも珍しくやる気を見せていたな」

魔理沙がレミリアの話を補足する。

そうなのだ。

体の自由を奪われた揚句、魔理沙に好き放題弄られ、俺にはほつぺたを抓られたレミリアの怒りは、全て犯人の方向に向いた。いや向いてくれた。

犯人を絶対に見つけてやる、と躍起になっていて、早速咲夜に何やら命じていた。しかも、こちらと協力する気は無いらしい。

絶対お前らより先に見つけてやるからな、とレミリアはまるで一昔前の悪人のような捨て台詞と共に、咲夜と連れだってどこかへ去っていたので、今回はお開きになった。

因みに一連の流れを見守っていた咲夜さんは、レミリアの様子を見て終始幸せそうな顔をしていた。

「あの幼い吸血鬼のこと。どうせすぐ飽きるでしょう。助力は期待できないわ」

紫はあまり興味なさそうに言う。

「まあこれで、相手の目的がある程度わかったわけだけど。どうやら明月が生きているのは条件じゃないらしいわね。体だけ回収できればいいのかもしれない」

紫は霊夢を見、魔理沙を見て、最後に俺を見た。

「ころしてもうばいとる、か。でも、この体にそこまでの価値は無いと思っただけど」

程度の能力にしたって、この力は誰かを攻撃するための力ではない。

身体能力は俺も把握しきれてはいないが、普通の人間と比べて優れているくらいだと思う。

「そつだ、結局パチユリーから元の世界に帰せない理由を聞きそびれた。三人とも、今度は教えてくれるんだろう？　せめて自分の体のことだけでも、今は知っておきたい」

しばしの沈黙の後、紫がゆっくりと口を開いた。

「身体能力の向上、程度 of 能力の習得。それ以外にも、あと一つあるわ」

そこで紫は一端言葉を切る。

俺は口をつぐみ、緊張と共に次の言葉を待った。

「……貴方の体は今、非常に不安定な状態にある。魂魄の結びつきが、通常の人よりも遥かに弱くなっているわ。そして更に、自然のものには必ずあるはずの霊力が、貴方にはほぼ全くない」

「魂魄？　霊力？　……どういふことなんだ？」

重大そうな話なのは分かるが、中身が理解できない。

「魂魄とは、それ自体で人間の魂を現す言葉。魂は人間の精神、魄は人間の肉体を司る。つまり、貴方の魂を殺せば、例えば魄が生きていても貴方は死ぬ。そして、貴方の体に残っている魄と誰かの魂が融合すれば、その誰かが貴方の体に乗っ取れるの。おそらく犯人の狙いはそれね。今の貴方の身体能力なら、魄さえ残っていれば致命傷以外なら傷は治っていくでしょう。つまり、魄に死んだとさえ理解させればいいのよ。そして、霊力の方なんだけど、こればかりは理由がさっぱりわからないわね。力のない普通の人間でさえ、微量の霊力を宿しているし、自然にある全てのものに霊力は宿っているわ。イコール生命力と捉えてくれてもいい。それが貴方には超微量しかない」

なんだか、とんでもないことを言われた気がする。

そんな僅かな生命力で、何故俺は普通に生きているんだ？

それに、魂魄の話。

つまり俺の体に乗っ取って自分のものにするのが犯人の目的だ  
というのか？

「紫に言われるまで、私も気づかなかったわね。何となく違和感  
感じていたんだけれど……」

霊夢の言葉に、魔理沙も頷いた。

「それは仕方ないわ。こういうのは人よりも妖怪の方が敏感だもの」  
「その……霊力がほとんど流れていない、っていうのは、起こりう  
る話なのか？」

生きているけど死んでいる　なんて、それはもう既にゾンビの  
ような体だ。

「残念だけど、これに関してはさっぱりわからない」

紫は隠し事をしていているというより、本当に知らない風に見える。

「今の時点では、人よりも幽霊に近いのかもしれない。でも確かに  
貴方の体は生きている。生きているのが重要なよ。幽霊にしる死  
霊にしる、例えば肉を持っていてもその体はもう死んでいるのだから」  
「ってことはつまり、明月を外に帰せないのもそこら辺が理由なの  
か？」

魔理沙はお茶を飲み干すと、紫に向かって尋ねた。

しかし、紫は今の俺の体の状態を知った上であのスキマを出した。  
ということとは

「いいえ、私のスキマには入れなつた理由も謎のままよ。紅魔館の  
魔女は、確かに今言ったことが原因だけど。私のスキマは手間がか  
かる様な代物ではないわ」

紫の反応はやはり予想通りのものだった。

厭味に関しては予想外だったが。

「今の言葉、パチュリーが聞いたら怒るだろうな」

紫の小馬鹿にしたような態度を見て、魔理沙が苦笑する。

「と、これで今の明月に関することは全てよ。隠していたのは謝る  
わ」

紫は申し訳なさそうに目を伏せる。

「いや、いいよ。隠しておいた方が良くのことくらい、俺だってわかる。知らない方が元の世界に馴染みやすいこともわかる。でもこうして帰る手段も無く、更に相手が殺しに来た以上、もう逃げることはしたくないんだ」

そう、これ以上、誰かの迷惑にはなりたくない。

心配してくれる気持ちはわかるけれど、何もしないままではおそらく解決は無いのだ。

こうして神社に隠れていれば確かに安心だけど、それでは多分駄目なんだ。

相手は危険を冒そうとしない。あくまで誰かにその役目を与え、自分は陰に隠れている。

いつかまた、今回と同じような目に会ったら。

例えば霊夢が操られてしまったら。

きつと今度は、誰も助けしてくれる人はいない。

今回の騒動は、咲夜の本来の能力が使えなかったから無事だったようなものなのだ。

時を止めた状態で配置される無数のナイフと、時間の加速とスロ―モーションを駆使した戦闘になれば、いくら身体能力が高くなっているとはいえ、全く近づくことも出来ずに終わっていただろう。

「だから、せめて自分を守るだけの力が欲しい。ここでの身の守り方を教えて欲しいんだ」

俺は全員を見回して言った。

「そうねえ。それぐらいは必要かもしれないわね。皆操られてしまったら、どうすることも出来ないのだし」

「それは……そうだけど」

紫は同意してくれたが、霊夢は少し不満顔である。

今回俺が無茶した結果、肩を怪我して更に命の危険にも遭った。

霊夢が危惧しているのは、力を得た俺が無茶をして命を落とすこと。博麗の巫女としてこの異変に関わっている以上、死人が出るなんて以ての外だろう。

「例え力を持って、今回みたいな無茶は絶対にしない。進んで危ない事には首を突っ込まない。約束する」

半ば土下座する様な形で、霊夢に懇願する。

「……………わかったわよ。但し、絶対にさっきの約束は守ること」  
そう言って、霊夢は諦めたように溜息をついた。

「勿論！ ありがとう、霊夢」  
力を持つこと。

身を守るだけのものとはいえ、今までの俺には無かったものだ。  
日常から。

非日常へと。

でももう、その区切りさえどうでもいいのかもしれない。  
結局のところ、現実が現実であると判断するのは自分で。  
夢が夢であると思うのもまた自分なのだ。

例え今、この非日常に身を浸っていたとしても、現実の自分を見失わなければ、いつだって帰れるはず。

「さて、そうと決まれば！」

魔理沙はすっと立ち上がり、拳を握りしめたまま　そのまま、  
硬直する。

「　どうする？」

首をかしげる魔理沙に対し、何も言わず深いため息をつく霊夢。  
「なんだよ霊夢。そこは古典的なアクションを返すところだぜ？」  
魔理沙はやれやれ、と肩をすくめる。

「わざとか！ ……あのねえ、立っているならまだしも座っていたらそんなリアクションは取れないでしょう」

「あ、気にする所、そこなんだ……………」  
なんか間違っている気がする。

「はいはい、小芝居はいいから話を続けましょう」  
紫はぱんぱんと手を打ち、逸れかけた話題を元に戻す。  
立っている魔理沙も、すんと腰を下ろす。

「でも実際どうするんだ？ 霊力が無いんじゃ弾幕も打てないぜ？」

「あんたが持っている爆発物でもあげればいいじゃない」

「あー、それは構わないが、持ち歩くのに不便じゃないか？」

魔理沙はごそごそとスカートを探ると、不思議な色をした液体の入った瓶を取り出し、テーブルに置く。結構な大きさで、とてもじやないが携行できそうにない。

「あんだとの付き合いも長いけど、どうやって入れているのか未だに謎だわ……」

霊夢はテーブルの上のそれを弄りながら呟く。

「スカートの中には乙女の秘密がいっぱいなんだぜ」

「ふーん」

「反応薄いな……」

魔理沙は霊夢から瓶を取り上げ、またスカートの中にしまう。

ふと疑問に思ったのだが、そんな所に入れて誤爆とかしないんだろっか。

篝の後ろに跨っている時に爆発でもされたら怖いなんてもんじゃない。

空の上＋爆発のショック＋落下で間違いなく精神的に死ねる。

「とはいえ、マジックアイテムを持つというのが一番良いわ。単なる武器じゃ弾幕には対抗できないし、本人の霊力に関係無しに発動できるような何か、それも何回も使えて持ち運びの便利なもの……」

三人とも腕を組んで何かを考えている。

「家には何も無いわねえ」

「私は持ってない」

「私の家にあるのは高張るものしかないな」

ほぼ同時に三人から絶望的な答えが返ってきた。

「じゃあ、どうする？」

「こついつとときに行く先は一つ。香霖堂だぜ」

その名前には聞きおぼえがあった。

そう言えば前に一度、話を聞いたことがある気がする。

確か、外の世界のものを売っている店じゃなかったか。もしかし

て、専門店と言うよりは雑貨屋みたいな感じなのだろうか。

「霖之助さんの所なら何かしらありそうね」

魔理沙の提案に、霊夢も頷く。

「よし、じゃあ早速」

と言つて立ち上がり、走り出そうとした魔理沙を、

「待て。もう夕暮れ時でしょ？ そろそろ夕飯だし、明日にしまさ  
い」

霊夢が腕を掴み、無理やり座らせる。

「今出てつてもいいけど、その場合二人の夕飯は無しね」

「何!？」

「いや、俺は行かないよ?」

紫がにやりと笑いながら言う。

「なんで紫まで食べてく気なのよ。食事を出すだけでも?」

霊夢がぼつさりと切り捨てた。

涙目になる紫を無視し、夕飯の支度をするために立ち上がり、障  
子に手を掛ける霊夢。

「霊夢、私は手伝うわ。今日の夕飯は確か三人分だったわね? 式  
たちに夕飯いらなくて言っちゃったのよね。だからその黒白  
と違って家にご飯が無いの」

「あ? こんなときだけ調子がいいなスキマ妖怪。お前んとこの優  
秀な式ならすぐ美味しい食事を出してくれるだろうよ。博麗神社の  
夕飯は 私のものだぜ!」

魔理沙は、だん、と机に足を掛けると、八卦炉を取り出して紫に  
突き付けた。

それを受け紫は立ち上がると、怪しい笑みを浮かべながら扇子を  
構える。

居間に走る緊張感。

食事を食べることを前提に来ている紫とか、他人の家なのに私の  
夕飯だと言いきった魔理沙とか、そういうったものはどこかに吹き飛  
んでしまふ。

睨みあい、お互いの動きを探る二人。  
どちらかが動けば、始まる。

そう、今まさに。

夕食をめぐる弾幕勝負が行われようと

「もしここで暴れたら、一そのときは分かっているでしょうね」  
………《

しなかった。

背中越しでもわかる霊夢の威圧感。

言われた後、二人とも構えを解くのがすごく速い。

静かになったのを確認し、霊夢は居間から出ていった。その後を追って、自身の飯を確保するために紫と魔理沙が出ていく。

後には、静寂。

ぼつんと一人、居間に残された。

「……俺も行こうかな」

騒がしいところから急に静かになると、少しものさびしい。  
立ち上がり、霊夢たちの後を追うことにした。

怪我人は動くな、と言われて結局居間に戻ることになった。

## 闇：いつかの夜と

夜。

既に日を跨いでいる。 深夜だ。

夜の闇が一番濃い時間。

幻想郷の夜は深く、暗い。

ここにあるのは失われた夜だ。

人が手に入れることのできなかった物。

だから、人はそれを欲しがり、そして忌避した。

手に入らぬものは美しい。

しかし、恐い。

恐怖と畏れと、好奇心。

手に入れることができなくて、手に入れようとして光を造る。

闇を見通すために。

そしてその掌の中に収めた瞬間、夜はその美しさを失った。

そして、人の興味はまた移る。

移り移ろい、手の届かぬものを追い求めて。

また手に入れ、懐にしまいこんで

目の前に広がるのは、きつとそんな風景。

いつかの日と同じように縁側に腰掛け、外の暗闇をただ、ぼっと  
見ている。

目が慣れようと、前にある木々の先は見えない。

それどころか、今腰掛けている縁側さえも夜の暗さと溶け合って、  
境を無くしている。

夜の闇が体に纏わりつき、自身の境界さえ、無くなってしまいそ  
うになる。

でも、不思議と嫌な感じはしない。

自分の体が自然に還っていくような、元いた場所に帰るような、

そんな気分。

ここには自分一人しかない。  
自分と、夜しかない。

紫も魔理沙も霊夢もない。

魔理沙と霊夢はもう寝入っている。紫は夕食を食べた後、自宅に戻っていった。

今は、紫やレミリア　妖怪たちの時間か。

紅魔館では、レミリアが犯人探しに躍起になっているだろうか？  
それに付き合わされているパチュリーと咲夜の姿が目に見え、  
思わず微笑む。

紫は　何をやっているんだろう。

何かをしている姿があまり思い浮かばなかった。

それはきつと見に纏う胡散臭い雰囲気とか、半日は寝ているという証言とか、そういった諸々のせいだと思う。

とはいえ幻想郷の境界の管理者の一人であるわけだし、きつといる忙しいのかもしれない。あくまで俺が想像できないだけだろう。

……妖怪、か。

いるかもしれない、いて欲しいなんて思いながらも、夜の世界の住人なんて所詮絵空事だ、と黙っていた。

でもこうして、ここには妖怪が生きている。

人と妖怪が、笑い合っている。

襲い、退治されるのではなく。

夕食の話題で争ったり、吸血鬼の主人に使えたり、メイドに甘えたり、　日々を、分かち合っている。

夢のような世界の中で。

彼女たちは、確かに生きている。

生きて笑い合って 想像も出来なかった世界だった。

強くイメージに刷り込まれたのは、人を襲う姿。

ここに来て初めて感じたような、恐れ。

恐怖。

死と隣り合わせの世界。俺の日常と遥かかけ離れた、暗く、恐ろしい世界。

そう、思っていた。

はずだった。

それなのに俺は、いつの間にか……。

213

この夢のような世界を。

少しだけ、羨ましく思った。

奥の方から聞こえてきた足音に気付いて、顔を向ける。

行燈の明かりが一つ、足音に合わせて揺らめいていた。

「誰がいるの？」

廊下の向こう、暗がりから聞こえる声。足音はゆっくりと、縁側に座る人物を警戒するように近づいてくる。

誰だろうと思っただけで目を見つめると、暗闇の中ぼんやりと、白い寝巻を着た人影が歩いてくるのがわかる。

「……まだ起きていたの？」

そこにいたのは霊夢だった。

俺の姿を認めると、安堵したように肩を落とした。

目を擦りながら、一つ欠伸をする。きつとトイレにでも起きてきて、縁側に誰かいることに気づいてここまで来たんだろつ。

「紅魔館で借りてきた本を読んでいたら、いつの間にかこんな時間になっていてね。寝る前に外の空気でも吸おうかと思って」

外の世界の本を少し借りてきたのだが、以前から読みたかったものなどがあり、ついつい夜更かしをしてしまった。本当にあの図書館の蔵書量には感服する。

霊夢は行燈を置き、隣に腰掛けた。

行燈の光が辺りを照らし、霊夢の姿を映す。

暗闇に慣れた目に、その光は少しだけ眩しかった。

「……………肩」

眠そうな声。

「肩？」

「……………肩の怪我。ちゃんと寝ないと治らないわよ」

「それがもう痛みも無いし、傷口も塞がっているんだ。咲夜さんの処置が良かったのかな」

俺は右肩に手を置く。

紅魔館を出るときには、痛みはすっかり取れていた。身体能力の向上と共に、治癒力も高まっているのかもしれない。傷口も、驚いたことにさつきこっさり見たときにはもう塞がっていた。

「流石にメイドらしいことをするわね」

そう言うと霊夢は、また欠伸をした。とても眠そうである。

戻ったほうが良いのではないか　　と思っただが、あえて口には出さなかった。

「優秀なメイドさんのおかげで助かったよ」

「ん……………」

それぎり、霊夢は口を閉ざした。  
何を話すでもなく、ただ、ぼうとしているだけだ。  
優しい静寂が訪れる。

霊夢は頬杖をつき、ただ前を向いて外を眺めている。  
俺もそれに倣い、外の暗闇を眺める。

別段話すことがあるわけではない。それになんとなく、このまま  
こうしていたかった。

不思議と、沈黙は苦にならない。

ただ外を眺めるだけで良かった。

何が見えるわけではない。

そこにあるのはただ風の音。

夜の音。

縁側に二人、何も言わずに夜を感じている。

「ねえ」

透き通るような声が聞こえた。

闇の中、まるで世界から語りかけられているような錯覚を覚える。

「どうして」

そこまで言っただけで、言葉を選ぶかのように目を伏せた。

言いたいことは、すぐに理解出来た。

簡単な言葉。

でもそれ故に、あらゆる疑問を孕むことができる言葉。

霊夢はどうして、と問う。

どうして、あんな無茶をしたのか。

どうして、あなたが傷つく必要があったのか。

どうして、目の前のことを見過ごせないか。

どうして、と。

「魔理沙に任せておけなくなったわけじゃない。俺が出なくても、あの闘いは終わっていったんだろう。でも」

そこで一端言葉を切り、空を見上げた。

「目の前で、誰かが傷つくのは見たくなかった。それをただ見ているだけの自分が嫌だった。もしも、俺がいることで変わることがあるなら、変えてみたいと思った」

変えられるかどうか、それは俺には分からない。でも、何もしいのは嫌だった。

あの時魔理沙達を見てそう思った。

「俺には大それた力はないよ。でもそれならせめて、目の前にいる誰かを助けたい。その結果、その誰かが負うべき傷が俺についてもそれを俺は受け入れる。それがきつと、力のない俺にも出来る、『助ける』ってことだから」

自分も、相手も。誰も傷つかない終わりが一番良いに決まっている。

でも、それが出来るのは一握りの英雄だけで。

目に見えない誰かを救おうと思えるほど、俺は出来た人間じゃない。

でも、目に見えた誰かの痛みを、見過ごすことは出来なかった。

義務感、なのか。

責任感、なのか。

偽善、と笑う人もいるだろう。

でも、助けたいと思ったんだ。

力なんて無くても、ただ助けたいと。

だから俺は、安全地帯を飛び出した。

でも俺は、示した通りに英雄じゃない。

力を持たない俺には、誰かの代わりに怪我をする選択しか出来なかった。

それで魔理沙やレミリアや咲夜が傷つかないなら、それでいいと思っただ。

「……もつとも今回は、俺が出ていったせいで咲夜さんを危険に晒してしまったわけだけど」

頭をかいて苦笑しながら、縁側に目を落とす。

「それは違うわ。きつとあなたが出ていかなくても、他の誰かが傷を負った」

隣に座る霊夢を見た。

行燈の明かりにかすかに照らされた、霊夢の横顔が見える。

「……ありがとう」

「事実よ」

「それでも、だよ」

当たり前のことだ、とばかりに霊夢は淡々と言っけれど、嬉しいのは確かだった。

そしてまた、沈黙。

俺の答えに果たして霊夢は満足しただろうか。

霊夢にしてみれば、怪我をさせずに、元のまま外の世界に送り返すのが仕事なのだ。

凄く自分勝手なことをしているのは分かっているけれど

「やっぱりまだ怒ってる？」

恐る恐る、霊夢を横目で見つつ聞いてみた。

さつきから霊夢は前を向いたままで、少しも顔を合わせようとしないでくれない。

行燈の明かりでは、闇に紛れる彼女の表情を読み取ることはできない。

「そうね。心配させたことに、すこし」

果たして、予想通りの言葉が返ってきた。

「その……ごめん。」

「あなたの体はあなたの物だけど、あなたが傷ついたり、死んだりしたら、悲しむ人がいる。そのことをどう思う?」

霊夢はあくまでも淡々と言い放った。

だからこそ、心に強く響いてくる。

「……それは」

言葉に詰まり、俺は霊夢から目を逸らした。

俺を育ててくれた人たち。

友人。

そして、霊夢や魔理沙、まだ幾許も経っていないけれど、ここで出会った人。

そんな人達が、頭に浮かぶ。

「あなたが助けようとした誰かも、もしかしたらあなたと同じ考えだったかもしれない。そうしたら、堂々巡りにならないかしら」

「……そう、だね。でも、だからこそ俺は、自分を守る力と、目の前にいる誰かを守るだけの力が欲しいと思っただ。俺だって、死にたがっているわけじゃない。力さえあれば傷つかなくて済む、というわけじゃないのは知っているけど、力があって出来ることもあると思うんだ」

俺だって、痛いのはいやだ、と、少しおどけて笑い、顔をあげ、霊夢を強く見据えた。

霊夢は俺を見ていない。

ただ、厳しい目で虚空を見つめ 何かを吐き出すかのように、長いため息をついた。

目を伏せる。

「……わかったわ。もう、止めない」

諦めたように肩を落としながら言う。

「でも、あなたを心配する人がいるということ。それだけは絶対に覚えていて」

「分かった。約束するよ」

力を持つことが、良いことなのかは分からない。

でも、もう嫌なんだ。

あの時の様に、途中で投げ出すことも。  
目の前のことを、ただ見ていることしか出来ないのも。

「でもね、少し安心したわ」

「……え？」

霊夢は行燈を持って、立ち上がりながら、言う。  
行燈からこぼれる光が揺れ、霊夢の姿を、はっきりと照らし出した。

そこでようやく、目が合った。  
怒っている、と思っていた。

霊夢は　　少しだけ微笑んでいた。

「あなた、今度は自分から助けに行ったのよ。義務でも責任でもない。後ろめたさでもない。それは、誇っていいこと」

霊夢の言葉に、俺は絶句した。

「どう、して」

その単純な言葉を言うことさえ難しかった。

霊夢にそれを言ったことは無い。

魔理沙は人に軽々と秘密を言うような性格ではないはず。  
ならどうして、霊夢がそれを知っている？

「あなた　　助けた少女の心配をしなかったじゃない」

ああ。

「私たちが言うまで、一度も。本当に命を掛けて助けようとしたな

ら、それは少しおかしいでしょう？」

「こともなげに、霊夢はそう言った。

最初から全てばれていた。

それも、当然だったんだろう。

意識していたわけではないけれど、俺は少女の話題を出そうとはしなかった。

無意識のうちに、その時の事を触れられるのを嫌がっていたのだろう。

やましいことが、後ろめたさがあったから。

「……本当、うまくいかないな」

呟き、自嘲するように笑うと、霊夢はゆっくり首を振った。

「卑屈になることはないわよ。後ろめたさじゃなくて、あなたは本心から人を助けることが分かったし。それはきつと貴方の性格よ」

少しお人好し過ぎるけれど　と付け加え、諭すように言う。

そして霊夢は、急に真顔になって、人差し指を立てながらさらに続けた。

「でも！　重ね重ね言うけど、あんまり危ないことはしないこと」

一気にまくしたてると、行燈を俺の顔の前に近付けた。

「分かった？」

「……眩しい。」

まるで取調室で自白を迫られているかのようだ。

でも今は、進んで自白しよう。

「ごめん、という言葉を口に出そうとして、そのまま閉じる。

間違えそうになったしまった。

今言うべき言葉は、謝罪の言葉ではなかったな。

「ありがとう、霊夢。俺も重ね重ね言うさ。約束は守る。絶対に無茶はしない」

心からの感謝を口に。

腹の底に澱んでいたものが綺麗に取り除かれたような気分がする。霊夢は俺の返事を聞き満足そうに頷くと、くるりと背中を向けた。

「それじゃ私はもう寝るから、あなたもさっさと寝なさいよ」  
そう言うのとまた欠伸をし、歩き始める。

わざわざこの事を言うために付き合ってくれたのだろう。  
ありがたいというか、申し訳ないというか。この先頭が上がりそ  
うにない。

「わかった。もう少ししたら大人しく寝るよ」

微かに見える霊夢の後ろ姿に向けて言う。

行燈の明かりが揺らめく。

微かな灯りが遠のいていき、辺りをまた暗闇が覆い、その姿を曖  
昧に溶かしていく。

しかし、俺の目には明かりが見えた。

確かに感じる。

網膜に焼きついた光が、微かに宿った。

彼女の持つてきてくれた明かり。

ゆらゆら、ゆら。

もうほとんど見えない行燈の明かりが、不意に動きを止めた。

「やるじゃない、明月。見直したわよ」

微かにそんな言葉が聞こえた後、すぐ光は見えなくなった。

何だろう。

心の中に、何かが溢れて

不思議な穏やかさに満ちている。

……縁側に一人。

この前と同じように座っている。

暗闇の中、輝く星をたたえる空を見上げて。

……縁側に一つ。

この前と違う心が座っている。  
暗闇の中、確かな灯りを感じて。

「  
ありがとう」

誰に聞こえなくとも、今はただそれだけが言いかった。

## 二十五章：香霖堂へ

「いやしかし、歩かなくて良いというのは気分が良いねえ」

遙か眼下の田園風景を見ながら、そう呟いた。

秋晴れの空、吹き抜ける風が気持ち良い。

魔理沙の箒にまた乗せてもらい、今、香霖堂への道のりを飛んで向かっている。

神社のある小高い山を抜けてすぐの道からずっと、田舎の農村の様な田園風景と、木々に彩られた山々がずっと広がっている。

遙か向こうに見えたとても大きな山は、妖怪の山と言っらしい。そういえば、前回紅魔館に行った時もあの山が前にずっとそびえていた気がする。

ただ、前回行った時は周りの風景をゆったり眺めるなんて余裕は無かった。

今になってようやく、この世界、幻想郷の大体の風景を見ることが出来た。

「……もう少し速度上げてもいいか？」

「すいませんでした」

間髪入れず、前に居る魔理沙に謝る。

「しかし、空を飛ぶのも随分慣れてきたな。減らず口を叩く余裕があるなんてなあ。今、初めてお前が空を飛んだ時と同じ速度だぜ？」

「そうなのか？ やっぱ慣れてくると違うものだね。でも魔理沙の普段の速さはまだ無理だから前かがみになるのは止めて頂けないでしょうか！」

前傾姿勢を取り、加速しようとする魔理沙を必死で止める。

そもそも、人は単体で空を飛ぶようには出来ていない。

少なくとも俺の常識はそれだ。

魔理沙は舌打ちをすると、元の姿勢に戻った。

「早く着けば着くほど、物を探す時間が増えるぜ？」

「そんなに急がなくてもいいでしょう。店にある大半のものは見てすぐに使えないものだとわかるわよ」

隣を飛ぶ霊夢が諫めるように言う。

もつとも、こう言う時の彼女は大体ゆっくりしたい時らしい。

この天気はこの風なら、その気持ちはよくわかる。

「いやいや、あれで中々量はあるんだぜ？ 店先に出てないものもあるしな」

「そうなの？ あそこにある物の量なんて、台所にあるお茶とお茶菓子の量しかわからないわ」

「旬は少し過ぎたが、まだ栗羊羹くらいなら残っていたはずだな。今日で食べ切らないとそろそろ悪くなりそうだな」

突っ込むべきか、突っ込まざるべきか。

逡巡し、一応聞いてみることにする。

「……一つ確認していい？」

教室で質問をする生徒のように手を上げ、二人に向かって問いかけた。

「どうした？」

「その、香霖堂というのは人様の家で、二人の別宅とか二人が経営している店ってわけじゃないんだよね？」

「当たり前だろ？」

何を言っているんだお前は、と言わんばかりの表情で俺を見る二人。

「あーいや、なんでもない。忘れてくれ」

きつと今おかしいのは俺だったんだ。

こう言う時に突っ込んではいけないんだ。もう何も言うまいと固く心に誓った。

しばらく飛ぶと、眼前に鬱蒼とした森が見えてきた。

遙か向こうまで広がる一面の緑。

こうして上から見るのでさえここまで広いのだから、実際端から

端まで歩いたとしたら途方も無い距離を歩くことになりそうだ。

しかも、どうやらただの森林と言うわけでもないらしい。

空から一望すると、木々の緑だけでなく、何やら不気味な深みを帯びている場所も見える。

「ここが魔法の森だ。人体に有毒な瘴気が舞っていて、普通の人間には耐えられないが、私たち魔法使いにとっては最高の場所だ。私の家もここにあるぜ」

こちらを振り返りながら魔理沙が説明する。

「魔法専門、霧雨魔法店に御用の方は此方へ。頼まれれば異変解決もお手の物、日常のあらゆる事も引き受けます」

宣伝文句を唄う様に口にする魔理沙。

「辿り着くまでが困難で、店に行ってもほとんど留守だけだね」

それに、霊夢が横槍を入れた。

「開店休業状態と言ったところか。」

「家に誰か来ればわかるようになってるんだよ」

「霊夢の疑いのまなざしを受けつつ、魔理沙は段々と高度を落とし、丁度森の入口の辺りに着地する。」

「ほら、ここが香霖堂だぜ」

目の前にある建物を見た。

目の前にあるそれを、何と形容すればいいのだろうか。

まごうこと無き店である。

木製看板に、達筆な字で香霖堂とでかでかと書いてある。

見かけは少し西洋風の建築が入っているが、基本は和風建築である。

「どうした、入らないのか？」

それらを弄りながら、魔理沙は俺に問いかけた。

「いや、あまりにも雑多過ぎて驚いている途中」

例えば、香霖堂の扉の右側を見てみよう。

屋号から下に目線を持っていくと、まず目につくのはモリ

ーグルトというステッカー。それに続き、訳のわからないシールやらステッカーやらが壁にべたべたと貼つてある。そして、店の前には土産屋によくあるタヌキの置物。あれは、信楽焼だったか？ いやそんなことよりもだ。その後ろにはサーフボード、その隣には一輪車が、店の前の階段に寄りかかるように打ち捨てられている。更に右。古ぼけたタイヤに壊れた洗濯機に壊れたエアコンに破けたクッション。そして極めつけは車両通行止めの標識。こんなところに車は来ない。いや気にする所が違う。少しこの店の雰囲気呑まれている気がする。

そして、店の左側。

横にされて置かれた冷蔵庫の上に、古いアナログテレビと、傘の部分が壊れた電気スタンド。冷蔵庫に寄りかかるように置かれているゴルフクラブ、適当に置かれた三輪車、サッカーボール、公衆電話、プロパンガスと書かれたボンベ。これはどうやら使用中らしい。この店は確かに外の世界のものが大量に置いてある。だが、この外観はいくらなんでもないだろう。

……雑多だ。

感動、というよりは最早呆れに近い。

不思議さ半分、胡散臭さ半分と言ったところだ。

こんなにもたくさんのもものが幻想郷に流れて来ていることに驚き、呆けたようにそれらを眺めていると、背中を霊夢に押された。

「ほら、もうそろそろいいでしょう。どちらかと言うと中の方が面白いわよ」

「え、これよりも？」

ぐいぐいと背中を押され、抗う術なく不思議な店の扉を開ける。

軽やかな音を立てて、扉が開いた。

「いらっしやい」

店の奥に座っている店主は、扉の音に本を閉じて顔を上げると、

客の姿を認めてそう言った。

銀色の髪に眼鏡をかけ、青色を基調とした珍しい和服を着ている若い男だった。

ぐるりと店の中を見回す。

霊夢の言葉は、間違っていない。予想通りと言うより、予想以上だった。

古い物から新しい物まで、色々な外の世界の物がここにはあった。果たして幻想になったものか、幻想になってはいない様なもので紛れ込んでいる。

棚に無造作に置かれている諸々の品々も気になるが、店主の近くの机の上にあるパソコン、テレビなどが更に目を引く。店の隅に置いてあるガスストーブに至ってはまだ現役のようにも見える。

「見ない顔だね。……珍しい。ゆっくり見て行って、気になることがあつたら気軽に訪ねてくれていいよ」

店主はそんなことを言うと、また本を開いてそれを読み始めた。

「は、はあ……」

客商売で初めての客に珍しいというのはどうなんだろう。

お世辞にも愛想がいいとは言えないが、性格が悪いというわけではなさそうだ。

そうでなければ

「よう香霖。邪魔するぜ」

ずかずかと店内に踏み込むなり、その辺の椅子に腰かける魔理沙。

「霖之助さん、お邪魔するわ」

扉を閉めるなり、勝手に店の奥へ消えていく霊夢。

こんなふうにならないだろう。

店主はまた本を閉じ、嘆息した。

本を閉じ、思わずため息をつく。

「全く君たちは……。それで、今日も冷やかしかい？」

僕は机の前に座っている魔理沙を横目で見る。

二人はこの店の数少ない『常連』であるが、決して『常連客』ではない。ふらりと店にやってきては、お茶やお菓子を平らげては帰っていく。

ここ、香霖堂は古道具屋であって、喫茶店や休憩所ではないはずだ。

それだというのに。

「霖之助さん、お菓子が無いわよ」

奥の台所の方から、霊夢の不満げな声が聞こえた。

「一応僕の店の物だからね。昨日全て食べてしまったよ」

うめき声が聞こえたが、無視する。どうせお茶だけは持ってくる気だろう。それだけ飲ませておけば後は大人しいものだ。

「君も そんなところに立っていないで、取り敢えず入ってきたらどうだい？」

所在なさげに扉の前に立っている、見知らぬ男に声をかけた。

男は軽く会釈をすると、店内の物に注意を払いつつ歩く。

青色の着流しを着ていて、年は霊夢や魔理沙とそう変わらないように見える。外見だけで言うなら、僕も彼と同じ年齢に見えるだろう。

しかし

近くにあった折りたたみの椅子を引っ張り出し、男に勧める。彼はまた会釈をすると、椅子を不思議そうに眺めながら座った。

まるで幽霊のようだ。一見してそう思った。

改めて男の様子を見る。

線が細く、柔和な雰囲気を与えているが、どこことなく頼りなさげだ。人間の里の人にしては、浮世離れしているようにも見える。

店内に置かれている物を見る目は、恐れや警戒と言うよりも、好奇心や懐かしさ、何よりここにあることが不思議だ、と伺える。

「もしかして、外人かい？」

単なる思い付きだったが、男は僕の言葉に心底驚いたような表情をする。

僕の観察眼も捨てたものじゃないということか。

「ど、どうしてわかったんですか!？」

慌てぶりがなかなか面白い。

「勘だよ。僕は 森近 霖之助。ここ香霖堂で主に外の世界の物で商売をしている」

「おい香霖、折角の客を警戒させてどうするんだ」

「そんなつもりはないよ。見て感じたままを言ってみただけさ

それで、用があるのは君かい？」

彼女たちが用も無しに客を しかも外人を連れてくるなんてことは無いだろう。

夢の中で見たことはあるが、こうして外人と直接話すことは初めてだ。僕に力になれることなら良いが、はたして彼の望む物がここにあるかどうか。

「八代 明月と言います。外人人で、とある事情で外の世界に帰れなくなつて、その上誰かに命を狙われていて　それで、何か身を守るものを探すために来たんです」

「それはまた　」

難儀な話だね　。こんな言葉が口をついて出てきた。型通りの言葉とはいえ、言わずにはいられなかった。

八代 明月……か。思った以上に大層な問題を抱えた客がやってきたものだ。こんな辺鄙なところに迷い込んだ揚句、おそらく妖怪に目を付けられたのだろう。

彼女たちが来るといつも騒がしくなる。

「ええ、全く。今までは何とかなつたんですが、犯人がとうとう行動を起こしてきたので、いざという時に身を守れないと怖い、とい

うことでここへ」

彼は困ったように笑う。

「武器が欲しいなら、人間の里に行ったほうが良かったんじゃないかい？　ここにあるのは、外の世界の物ぐらいなものだよ」

それも僕が適当に拾って来たものだ。

名前と用途は勿論分かっているが、使用方法の分からないものも多い。

「それが……」

今度は本当に困った顔をする。

「いや、ただの剣とか槍とか、弓や鍬や鋤や鎌じゃ駄目なんだ」

言葉を選んでいる明月に代わり、魔理沙が答えた。

「最後の方はただの農具だろう。もっとも、昔の人はそれらを武器にして戦っていた時もあったようだけど。それで、その武器じゃ何が駄目なんだい？」

「襲われているのは、弾幕持ちの妖怪だね。最低でも、弾幕が放てるような武器じゃないと駄目だ。それも、自分の霊力を使わなくても良いやつ」

「それはまた」

難儀な話だね　と。

言いたくもなるものだ。

「魔理沙、その条件はかなり難しいよ。弾幕を放てる、つまり外に魔力を放出出来る代物、まあそれくらいならあるさ。でも、使用者から魔力を補充しなくても、それ単体だけで魔力を回復できるなんて、うちにそんな伝説の武器クラスのものはない、と言おうとして口を閉ざした。」

あつた。

草薙の剣。

魔理沙が持ってきたガラクタの山から見つけ出した神器。

あれなら、それくらいの芸当は出来るかもしれない。

「もしかして、心当たりあるのか？」

魔理沙が首をかしげながら尋ねてくる。

「いや、ない」

少し上ずった声を出してしまい、魔理沙から疑いの目を向けられた。

「ない、と答えたのには理由がある。決して所有欲というわけではない。」

明月をちらりと見る。

彼はどう見ても普通の人間だ。いや、寧ろ他の人よりも霊力が少なく見える。

それ自身が強大な魔力を持つ武器となると、勿論所持者もそれ相應のリスクを背負うこととなる。よほど特別な武器でない限り、使用者の霊力がなければそんな高位の武器は使いこなせない。

草薙の剣なんてものを持たせたら、逆に彼の方が影響を受けてしまう可能性がある。

「そうですね……」

明月はあからさまな落胆の表情を浮かべた。

「香霖、何とかならないか？ 私の八卦炉を作ったみたいになさ」

「それは難しいね。単体でそこまで強力な武器は人の手で作れるものではないよ」

確かに彼女の八卦炉を造ったのは僕だが、あれだって既存の物を改造した物だ。

しかもあれは彼女の魔法をサポートするものだし、今回必要としているものとはわけが違う。

「霖之助さんの持っているものは今ここにある物だけなのかしら？」  
店の奥から霊夢が出てきた。手には自分専用の湯呑みを持っている。

自分の分しか持ってきてないことに文句を言おうとも思ったが、彼女の言葉に一つ思い出したことがあった。

「そつだ、まだあれがある。可能性は低いけど、見てみるかい？」

僕は椅子から立ち上がり、明月に向かって言う。

つい最近魔理沙が持ち込んだガラクタの山。

今回はいつもと違い、本当にガラクタばかりに見えたので、適当に見て二束三文で買ったのだ。そして雑務に追われていたらいつの間にか見るのを後回しにしてしまっていたというわけだ。

つまり、そこだけは僕も把握しきれていない。もしあるとしたらその中ぐらいだが、可能性はいつもより低い。しかし、往々にして良品と言うものはそういった山の中に埋もれている物。その点では期待できるかもしれない。

ついでに、それらの整理も手伝わせるというのも良い。品代はそれで良いだろう。

「是非お願いします！」

明月は即座に返事をする、椅子から立ちあがった。

「さ、こっちだ」

店の奥、台所や居間とは別方向へ進み、ある部屋の扉を開けた。

途端、むせ返るような埃の匂いが鼻を刺す。そろそろ空気を入れ替えたほうがいいかもしれない。

「この部屋は、普段店に並べない物、非売品、未だに使い方が分からない物を保管しておくための部屋だね。中に入って、そこで少し待っていてくれ」

扉のすぐ前で明月を待たせ、先に中に入り、その周辺を先に片付ける。

保管物が陽に焼けてしまわないよう、普段からここは薄暗い。物も多く、整理しなければ僕以外では容易く転んでしまうだろう。

「わ、わかりました。……それにしても、凄い物の量ですね」

見ると、早速転びそうになっていた。

「外の物は結構流れついてくるからね。嘆かわしいことにあまり買っていく客もいないし、溜まる一方だよ」

目当ての一画への道を切り拓きながら、手に取った物を眺める。

価値のある逸品ばかりなのだが、どうも理解してくれる人は少ない。「よし。道が出来たから、今僕が通ってきたところを辿ってきてくれ。なるべく気をつけるようにね」

そこまで壊れやすい物が置いてあるわけではないが、何せ使い道が分からない物もある。うっかり発動してしまったら危険な物もあるかもしれない。

明月は頷くと、慎重に擦り足で歩いてくる。

「あ」

その方が危ないような、と言い掛けて、

「うわっ！」

もう遅かった。

支える間もなく、明月は派手な音を立てて頭からガラクタの山に突っ込んだ。その衝撃で山が崩れ、頭の半分近くが埋まる。

「だ、大丈夫かい？」

僕は恐る恐る明月に声をかける。

「すみません！ 俺は大丈夫です、それより物は大丈夫ですか！？」

明月はすぐに謝ると、自分の頭の半分を埋めている物を指した。

「あ、ああ。今どけるから」

幸いにも壊れ物は混ざっていなかったが、用心して一つ一つ取り除いた。

全て取り除き、明月に手を貸す。明月はゆっくりと、山を崩さないように起き上げる。

「すみません、ありがとうございます……」

彼は苦い表情をすると、深々と頭を下げた。

「まあ、そう気にすることではないさ。ところで、何に躓いたんだい？ 見える限りの物は片付けたはずだったのだけど」

まさか何も無い所で転ぶ特殊能力を持っているわけでもあるまい。「えっと。これ、ですかね？ 薄暗くて何だかよくわからないんですが」

明月は床をあさると、一本の棒らしきものを取り出した。おそら

く黒色をしていて、うまくこの闇に溶け込んでしまっているのだらう。

全体的に反りがある。下の方には複雑な模様をした裝飾が僅かに差し込む太陽の光を受け、一瞬何かが煌いた。

「うわあ！」

明月がその場を飛び退く。次いでゴトリと言う音と、響く金属音。抜き身の日本刀が、音の残響を響かせながら転がっていた。

あと少し明月が退くのが遅かったら、足を切っていたかもしれない。手で胸を押さえ、荒い息をしている。

「これは……？ 草薙の剣ではないし、見たことが無いな。こんなものうちにあつたかな」

僕はその剣を手に取り、刀身を隅々まで見る。白刃が、またきらりと輝いた。

草薙の剣は古代の剣だ。このような日本刀らしさは無い。

「打刀にしては少し長い。三尺くらいかな。先反りで反りは少なめ、鑄造り。鍔は黒色、模様は他に類を見ない物だ。柄は普通だが、柄頭に紐飾りが付いている」

僕はざつと刀の特徴を口にした。

「森近さんは刀の鑑定も出来るんですか？」

明月は落ち着きを取り戻したらしい。感心しながら、恐る恐る日本刀を眺めている。

しかし、森近さんとは。

初対面の相手に敬語は常識かもしれないが、逆に違和感を覚えた。そんな名前で呼ばれるのは久しく無かった。

「基本的なことならね。……しかし、どう呼ぼうと君の勝手だが、畏まる必要はないよ。好きに呼んでくれて構わないし、敬語を使う必要も無い」

「そうですか？ じゃあ、えーと………香霖堂、と呼ぶことにします」

「香霖堂？」

普通なら、名字、名前の呼び捨て。もしくは魔理沙の使う香霖、と来るところだが、予想の遙か斜め上をいく答えに少し驚く。

屋号そのままという呼ばれ方は斬新だった。

「やっぱり駄目ですかね？ 誰かを『なんとか堂』と言うのは少し憧れだったんですよ」

明月は悪戯じみた笑顔を浮かべた。

「いや、構わないよ。少し予想外だったのでね」

「それじゃあ、そう呼ばせてもらいます」

敬語は抜けないようだ。

「さて、刀に戻るうか」

僕はまた、刀に目をやった。そして、あることに気付く。

「……おや、この刀、銘が無いね」

「え？」

「ほら、あるべき場所に何も無い。これは珍しいね。普通、作者は自らの作品に名前をつける。これは何も刀に限った話では無く、誰かが意図を持って作った物全てに言えることだ。名をつけることはこの世に生まれ出た物を『定義』することに他ならない。僕らも名付けられ、この世界で生きているね。特に刀は、作者の名前を彫りこむことによつて、腕前を世に知らしめているようなものだ。妖刀と呼ばれた刀であっても、それには必ず銘が付いていた。与えられた名前かたちのない、不定形な刀。ただの刀じゃ無さそうだ」

「な、なるほど……」

面喰う明月を余所に、僕は刀を両手で握る。

愛を以て。物を見つめ、物に見つめられ、記憶を探る。

「……わかった」

僕は抜き身の刀を下ろすと、明月の手から鞘を取り、丁寧にしまった。

「え？ 何がですか？」

明月は更に戸惑いの表情を浮かべる。

「そうか、まだ説明していなかったね。僕は触れただけで物の名前

と用途が分かる。まあ、使い方はわからないけれど、用途さえ分かればほとんど問題は無い。それで今この刀の名前と用途を調べたんだ。どうやら、君の望みの物は見つかったようだよ」

「この刀、ですか？ 見た所、至って普通の刀ですけど……」  
明月は不思議そうに刀を覗き込んだ。

「外見で物は語れないよ。君たちの世界の物だつて、いや高度な技術を持つ君たちの世界こそ、外見とは想像もつかない用途をする物があるだろう？ そういうことだよ」

だからこそ、使用方法が分からなくて苦労するのだ。

外の世界の物など、幻想郷では僕くらいしかまともに扱えまい。

「それはまあ、そうですね」

「さて、こいつの能力を詳しく説明するから、二人の所に戻ろう。

僕はここに鍵を掛けるから、先に戻っていてくれ」

明月は頷くと、今度は忍び足で部屋を歩き、無事に部屋を出て行った。

彼の足音が遠ざかるのを確認し、僕は手の中の刀を見た。

「身を守るための力がよりによって刀、か」

刀は力だ。

身を守ること即ち、相手の命を奪うこと、ではない。

しかし、刃は使う物に相応の代償を強いるのだ。

人を斬る。

例えば己が身を守るためであっても、刃は嫌でも人の肉の感触を味わせる。

弾幕で相手を傷つけること、直に人を傷つけること。どちらも人を傷つけることに変わりはないが、おそらく、違うのだ。手に伝わってくる感覚はきつと、弾幕のそれより重い。

僕は明月の姿を思い浮かべ、一抹の不安を覚える。

外来人である彼には、過ぎた力になるのではないか。

外の安寧に暮らす彼に、この力は重大な変化を与えてしまつのではないか。

もう 戻れなくなるのではないか。

僕は思考を止めると刀から目を離れた。すぐ近くの棚に置いてあった鍵を取り、扉に手を掛ける。

……それを決めるのは彼だ。

刀は斬るために生まれた物、しかし、物をどう使うかはそれを持つ人に委ねられる。

僕がどれほど心配しようと、彼が力を望む以上は詮無いこと。しかし、

「願わくは」

血の流れぬように。僕はそう呟くと、薄暗い部屋に鍵をかけた。

話が長くなりそうなので、人数分のお茶を持って店に出ると、霊夢と魔理沙は店内の物を物色していた。

明月はというと、困った様な呆れたような顔を浮かべている。まあ、彼に二人の相手は難しいだろう。

「あまり勝手に物を持っていかないでほしいね」

店に並べている中でお気に入りの物は少ないが、それでも大切なものに変わりはない。

「お、戻ってきたか。……なんだそれ？」

魔理沙は目聡く刀を見つけると、僕の手から奪い取る。

魔理沙は腰に刀を差すと、左足を下げ、柄に手を掛けた。

「私に斬れない物などほとんどないぜ！」

誰かの真似をしながら、躊躇うことなく刀を一気に引き抜いた。

中々様になっている。

しかし、勢いよく閃いた刀には 刃が、無かった。

恰好をつけたはいいが、柄が虚しい音を立てながら空を切っただけ。引き抜いた体制のまま固まる魔理沙。

非常に滑稽である。

それを見て霊夢は吹き出し、明月は顔をそむけて笑いを堪えている。

「おい香霖……」

怒りと羞恥で顔を赤らめながら、魔理沙は僕に詰め寄る。

「ま、まあ落ち着いて。ちゃんと刃を出す方法はあるよ。もっとも、僕らでは使えないけどね」

「……どういうことだ？」

魔理沙は振り上げかけた手を下ろし、手に持った刀に目を落とすた。

…… なんとか、興味を逸らすことができたか？

僕は魔理沙から刀を受け取り、パソコンやらが置かれている大きな机の上に置く。霊夢も近寄ってきて、それを興味深げに眺めた後、刀を抜いた。

僕の予想通り、霊夢が抜いても刃は無かった。霊夢は怪訝そうな顔をして、刀を元の場所に戻した。

「さて、どこから説明しようか」

三人が集まったところで、皆を見回しながら言う。

「まず、この刀だけど、見ての通り刃が無い。けれど重量は確かにあり、こうして鞘に刀がしっかり収まっているんだ」

そう。刃が本当になければ、こうして鞘に納まる筈が無い。

「確かに私が持った時もしっかりした重さを感じたぜ。ってことは、不可視の呪文でもかかっているのか？」

「いや、これは魔法とかそういう類の物ではないんだよ、魔理沙。

存在しているのかしていないのか、曖昧な状態を保てる呪文なんて、少なくとも僕は知らないし、あるとも考え難い」

魔法と言う物は、実にさまざまな種類がある。

しかし、存在を操る魔法なんてものは聞いたことは無い。

もしあるとしたらそれは……外法だ。禁呪とも言えるだろう。

しかし、今はそういった話ではないのだ。これは、後付けで成されたものではない。

「つまりこれが、この刀の『能力』なんだよ。『夢現を操る程度の能力』だ。だからこそ、この刀には銘が無いし、名前も無かったんだ。名は物を定義する。定義されてしまったら、これは夢に溶けてしまうことなんてできないのだから」

しかしそうになると、この刀は一体どうやって出来たのだろう。

「ゆめうつつ……。それ、本当に使える能力なの？ いまいち良く分からないんだけど、刀に刃を無くす能力なんて、意味が無いんじゃないかしら」

霊夢が不思議そうな顔で刀を見た。

僕はどこから説明するべきか迷い、言葉に込められた意味を口にする。

「夢現。夢と現実。夢とも現実とも区別がつかない状態。また、ぼんやりしているさま。そのままの意味だけど、この刀は人に夢を見せるような力は持っていない。刀が夢現になるんだ」

「えっと、つまり？」

明月もいまいち理解してないらしい。

「この刀は、夢現に溶けて、どこにでも存在することが出来る。夢になり、こうして」

僕は刀を取り、鞘から引き抜く。

勿論、柄の先に刃は無く、鞘から抜いた瞬間に重さは消える。僕は刃があるべき場所で手を振った。

「消えてしまうことも出来る。そして」

僕は明月を見、そして刀を彼に差し出す。明月は「え？」ときよ

とんとした顔をした。

「君が持つんだ、明月。刀が『ある』と思いながら、少しだけ抜くんだ」

「俺がやるより、香霖堂さんがやるほうがいいのでは？」

「今この場にいるものでは君にしか使えない。使い方が分からないから条件も分からないけれどね」

条件があるのかどうかさえ、本当は分からない。

しかし一つだけ分かっていることがある。

彼なら、抜ける。

彼ならば、刀身をこの世に現すことができる。

「わかりました。じゃあ、いきます」

明月は目を閉じると、刀を眼前に掲げた。柄に手を掛けゆっくりと抜いていく。

「な……！」

魔理沙が驚きの声を上げた。明月も目を開け、困惑の表情を浮かべる。

それも無理は無い。

明月の手に握られた刀。

白く輝く刃が、少しずつ、鞘からその姿を現していく。

「こうして、現になることが出来る」

夢に溶けた刀が、また現に戻ってきたというわけだ。

「凄い……！ それで、この刀は他にどうやって使えばいいんですか！？」

明月は刀を鞘に収めると、興奮気味に問いかけてきた。

「あー、えーと、それはだね……」

僕は頬を掻き、口ごもる。彼には残念だが……。

「香霖は物の名前と用途は分かっても、その使い方はわからないんだ。中途半端な能力だろ？」

「使い方が分からなくても、用途さえ分かれば大抵の物は何とかなる。この場合は物が規格外すぎるよ。それでも、多少は推測が利く」

「例えばなんだ？」

「試すような口調で魔理沙は言った。」

「僕らが触った時は刃が消えるだけだったが、おそらく柄も、鍔も消すことが出来るだろう。でも、鞘は多分消すことは出来ない。鞘も消えてしまったら、刀が刀であることさえ曖昧になってしまうからね。逆を言えば、鞘さえあればその刀はどこにでも現れることが出来る」

今のところ、能力から確信を以て推測できるのはこれくらいだ。

だが、その刀にはもっと多くの力が隠されている、そんな気がする。

夢現。

曖昧として、僕でも今一つ能力が掴みにくい。

「やっぱりその能力の何が強いのかよく分からないわね。取り出し自由、嵩張らなくて便利なのはわかるけど。それで、弾幕も放てるのかしら？」

「勿論。自ら霊力を持ち、自ら霊力を回復する。これだけでも強力だが、夢現の能力を応用して色々できそうだね。とはいえ、使い方は分からないから実際に使って試してみるしかなさそうだけれど」  
身も蓋も無いが、本当に分からないから仕方が無い。

定義があいまいな能力ほど、使い方もさっぱりわからなくなる。

しかも、形状から使い方を推測できないのも問題だ。

「分からないことは多々あるが、とりあえずこの刀さえあれば目的は達成ということだな」

魔理沙は机に置いてあったお茶を一息で飲んで、立ち上がった。

「ああ。本当は僕の手元に置いておきたいほどの一品だが、使えなければ仕様がなし、見つけたのは明月だ。その刀、どうやら見つかからないように封印がしてあったみたいだね。君の能力で解除されたというわけだ」

僕が入ったときは、存在云々ではなく単純に見えなかったのだ。

「あれ？ 俺の能力のことは教えてないはずじゃ……」

明月は面喰った顔をした。

「人も物もそう変わらないよ。さて、その刀の代金だが……」  
「ツケで」

代金、と言った瞬間霊夢が即答した。

しかし、これに関してはツケを決め込まれるのは困る。

「そうは言っても、彼が突然帰ることになったら払うのは霊夢になるよ?」

「う、そう言えば……」

霊夢はちっ、と舌打ちをした。

「じゃあ無料で」

今度は魔理沙だ。

どうしてこの二人はこうも無茶な要求ばかりするのだろうか。

「あのね……お金が無いのは知っている。だからその代わり、明月に頼みごとを聞いてもらいたい」

元々金銭的な要求をする気はなかった。

「俺、ですか? 出来ることなら何でもしますけど……何ですか?」

明月は少し不思議そうな顔を浮かべた。

「君は外の世界の人間だろうか? この店には、名前と用途が分かっても使用方法の分からない物がある。その使い方を、僕に教えて欲しい。それで、代金はチャラだ」

一般的に見れば、物に似合わない破格の条件だ。

しかし、僕からすればこの店に眠っている物の使用方法が分かる方が価値になる。

それに物は使われた方が良い。ならば、しかるべき人の手に渡るのは当然だろう。

「俺の分かる範囲でいいなら、是非その条件でお願いします!」

「よし、商談成立だね。じゃあ早速手伝って欲しい……、と言いたいところだが、刀の使い方を確認したいだろう。次回、暇な時にも来てくれればいいよ」

彼がいつ帰ってしまうのかは分からないが、事実上無料であげた

ようなものだ。

刀を持つということ、彼はすでに十分な重さは背負っている。だから、他に特に条件は付けない。

「ありがとうございます。香霖堂さん」

明月は深くお辞儀をして、椅子から立ちあがった。それに続き、霊夢もお茶を置いて立ち上がる。

……というか、まだ飲んでいたのか。我が家で一番お茶を消費しているのは間違いなく彼女だろう。

「それじゃあ霖之助さん、お茶少し頂いて帰るわね」

「あ、おい」

僕の言葉など聞かず、霊夢はさっさと戸を開けて出て行ってしまった。あの分だとおそらく、ごっそり持っていかれたに違いない。

物の被害なら魔理沙だが、食べ物の被害なら彼女の方が上だ。

「それじゃあ香霖。また来るぜ」

そういうと魔理沙は、店の中に置いてあった物を一つ掴んで、そのまま外に出ようとする。

「ちょっと待て魔理沙、その手に持っている物はなんだい？」

僕は慌てて止めようとするが、もう遅かった。

魔理沙は僕を一瞥すると、

「乙女に恥をかかせた報いだ」

言い捨てて、乱暴に戸が閉まった。

どうやら、先ほどのアレをそらすことは出来ていなかったらしい。こうしてまた一つ、僕の店から商品が消えた、と。何を取られたのか、確認した時のことを思うと気分が重い。

「……えーと、その」

明月は苦笑しながら、頭を抱えて落ち込む僕を見、そして、

難儀な話ですね。

そう言った。

## 二十六章：この世ならずの

きいきいと、櫂の音が聞こえる。

櫂の軋む音は常に一定のリズムを刻んでいる。  
音に合わせるように水面が揺らぎ、船がゆっくりと前に進む。

小船に乗っている。

船は、櫂が動くと共にゆらりゆらりと揺れる。

「……………でねえ……………なんだとさ」

船の乗客は、俺のほかに船頭が一人いるだけだ。

船頭は櫂をゆっくり動かしながら、何かしきりに話している。

「……………それで……………」

俺はゆっくりと周りを見渡した。

先刻まで視界を覆っていた深い霧はいつしか晴れ、時折白い霧の残滓が流れていくだけ。

船の周りは一面の水と、ごつごつと隆起した、苔むした岩が突き出しているばかりで、他には何も無い。

水は深い黒色を帯びていて、どれほどの深さがあるのか想像もつかなかった。

もしかしたら深いかもしれないし、本当は浅いかもしれない。

空の色も、同じように黒い。まるで、水面がそのまま天蓋に映り込んでいるようだ。

船はゆっくりと、黒い景色の中を進んで行く。

そうだ。

確かに進んでいるはずなのに、水音が全くしない。

それどころか、何も、何も聞こえない。

まるで、死んでいるようだ。

こここの空気は死んでいる。こここの水は死んでいる。こここの空は死

んでいる。

空気中を漂う埃も無い。水に浮かぶ微生物も無い。

かといって、誰かを死に誘うようなものではない。不気味さは無く、恐怖も無く。

無、と言った方がいいのかもしれない。

一切が清浄で、生物が入り込む隙間が無い。

「……………」

船頭の声と、きいきいという音だけが、本当の静寂の中に響く。

俺は船端に肘をのせ、頬をつきながら見るとはなしに風景を見ている。

「……………」

何故。

何故俺は、こんな所にいるんだろう。

「…い、おーい。あたいの話、ちゃんと聞いてるかい？」

船頭はいつの間にかこちらを振り返り、俺を見ていた。

返事をほとんどしなかったせいだろう。正直返事をする気も無かったのだが、ここは仕方ない。

「ああ、釣り好きの酒飲みの話だろう？ 酔って湖に映った魚を手

で取るうとして、溺れて死んだ」

俺は気だるさを隠そうともせず、船頭に向かってぞんざいな返事をした。

「そうそう！ なんだい、憂鬱そうでもちゃんと聞いているじゃないか」

……………うわあ。

口から出まかせを言ったのだが、どうやら奇跡的に合っていたようだ。

船頭は嬉しそうに笑うと、前も見ずに船を漕ぐ。依然として俺を

見たままだ。

「人の姿のままここに来る奴は久しぶりだからねえ。あたかも反応がある方が楽しい。あんたが大悪人なら尚良いんだけど。そのほうが、この川は長くなり、話も長くなるってわけだ」

「……そうですね」

気のない俺の返事に、船頭は少しつまらなそうな表情になった。

「なんだい、つれないね。お客さん、いつまでも未練を持ったままじゃ地獄行きになるかもよ？ この担当の閻魔様はあたいの上司なんだが、それはそれは厳しい人でねえ……あたしも何度不当な仕打ちを受けたか分からないほどさ」

船頭はころころと表情を変えながら一人で延々と話し続ける。

その様は非常に楽しそうで、それが更に俺の気分を暗くさせた。暗くなるのには、一つの理由がある。

それは決して船頭の話が詰まらないとか、船頭が嫌な人だからとかそういう訳ではない。

船頭は綺麗な女性だった。寧ろその点では、健全な男児的には喜ばしいこともある。

緋色の髪をツインテールにして纏めている。肩にかかるくらいの長さだ。髪の色と同じ緋色の目をしていて、青色を基調とした……和服？ を着ている。それにしてもスカートのようにも見えない。

平素ならその陽気さと親しみのもてる雰囲気から、話していればすごく楽しいだろうな、とは思う。しかしそれも、平素なら、だ。

今の俺には、逆効果。

なにせ彼女こそが 俺をこの船に乗せて、この川を渡らせている張本人なのだから。

この川？ それは

「それでお方は」

このままでは多分、目的地に着くまで話は終わらないだろう。俺

は強引に話に割り込むことにした。

「なあ、ちよつと俺の話も聞いてくれないか？　すごく大切な話なんだけど」

これからが面白いんだけど　と、話の腰を折られ、船頭は少し不満げにする。

「まあ、いいや。それで話ってなんだい？　生前の所業を話したいとか？　いいねえ、面白い話なら大歓迎だよ」

やはり、最初から嘯み合ってない。

「だからその、生前<sup>まへ</sup>ってところがおかしい。そもそも、俺はまだ死んでないってばー！！」

三途の河の中心<sup>てはな</sup>いで生を叫んだ。

そつ。

俺が船に乗って、渡っている所。

三途の川。此岸と彼岸を隔てる川。行っては戻れぬ川。

ここで勘違いしてはいけない。俺はまだ生きているのだ。

それなのに、生身の状態<sup>まへ</sup>で俺はこの川を渡り、今まさに死人の仲間入りしようとしている。

何故。

どうしてこうなった。

と、そんな俺の必死な叫びも虚しく、船頭はやれやれと首を振った。

「だから、最初は皆そう言っただって。特に生前の姿を持ったままの奴がそうなりやすい。しかし、ここまで進んだら普通はそろそろ気付く筈なんだけどねえ。あんた、このままだと本当に良いこと

ないよ？」

船頭は憐みと、本当に心配している目をしながら俺に言う。  
美人に心配されるのはありがたい。だが、ベクトルが違う。成仏の心配などされたくは無い！

「どう見たって生きている体だろう！？」

「どう見たって死んでいる。そんな状態で生きている人間なんていやしないよ。ちょっと活きの良い幽霊、つてところが精々だね」

船頭はひらひらと手を振った。全く話が通じそうにない。

彼女は何か早とちりをしているのではないか？

そもそも、乗船の時点で慌ただしかった彼女だ。ノルマ云々と呟いていたのだったって聞いた。

それだけでもう怪しい。

「なあ、なんか焦って仕事してないか？」

「はい！？ いやまさか、三途の水先案内人と呼ばれた私が、雑な仕事をするわけがないじゃないのさ」

あっはっはと、乾いた笑い声をあげながら、船頭は前を向いた。

「いずれにせよあんたが死んでいることに変わりはないよ」

どうあがいても、話は通じない。

ならば仕方ない。こうなれば閻魔のもとに出向いて、直接事情を説明するしか手は無い。

いくらなんでも閻魔様なら、生者と死者の区別くらいできるだろう。

……しかし、区別がついた所で此岸に戻れるのかは分からない。

ま、まあでもきつと、特例扱いできつと戻れる筈だ。……………多

分。

先のことを考える度、心の底からなんともいえない憂鬱な気分が染み出してくる。

深いため息をついた。

本当に

何故、こんなことになってしまったのだろう。

話は、少し前に遡る……。

紫は幻想郷で、妖怪の賢者と呼ばれている。

長い時間を経た膨大な知識と、単純に妖怪としての知力。加えて能力ゆえの、外界についての知識も豊富である。

彼女は確かに賢者だった。

一を聞いて十を知ることさえも可能であろう。

しかし、如何なる知識を以てしても、零から十を知ることが出来ない。

存在を知らなければ、それが有ることは絶対に分からないのだ。

彼女の誤算は、ただ一つ。

初めて行った場所。

例えそこが屋内であろうと屋外であろうと、見晴らしの良い平原だろうと霧深い森の中だろうと、遙かな広さがあるのとあばら家の様に狭かろうと。

そこに、分かれ道さえあれば。  
たったそれだけのことで、彼は迷子になることが出来た。

刀を振るう度に、何か心がの中に溜まっていく。

一振り。

一つ。

得体の知れない物が、少しずつ心に蓄積されていく。

一振り。

一つ。

それを振り払うようにまた刀を振るい、そしてその都度見えない何かは心に澱み、奥深くに沈んで行くのだ。

堂々巡りを繰り返す。

しかし、それ以外の術を知らなかった。

どうすればこの感覚は消え去るのか、わからない。

だからまた、刀を振るった。

そしてまた、澱みは消えることなく増えて行く。凝り固まることはなく、じわり、じわりと染まっていく。

神社の裏、誰もいない中で、ただひたすら刀を振るう。  
型なんて知らない。精々、授業で習った浅い剣道の知識があるくらいだ。

それでもただ、思いつくままに刀を振るった。  
がむしゃらに、やみくもに振るうから、澱みは増えていくわけではない。  
はない。

それは別の所にある。

そうして、腕に張り付き、足を絡み取り、体にのしかかる。その澱みの重さに耐えられなくなって、刀を振るうのを止めた。キン、と小気味の良い音を立てて、刀が鞘に収まる。気付けば、体中に汗をかいていた。風が吹く度に、冷たさが全身を巡る。

身じろぎもせず、目を瞑り深呼吸をする。

晴れ。雲一つない日差しを受けた、爽やかな空気が体に染み渡る。それでも、心は晴れなかった。

ゆっくりと吐きだした空気が、まるで深い溜息のように聞こえる。「どうしたものかなあ……」

俺は空を見上げ、太陽の眩しさに目を細め

「何が？」

「うわあ!？」

突然後ろから聞こえた声に驚き、俺は思わず飛び退く。

「そこまで驚かれると、逆にこっちが吃驚するわね」

「ぎゃああああ! 悪霊退散! 悪霊退散!」

声の主を見た。見て、更に驚き絶叫してしまった。

生首が、空中に浮かんでいる!

神社なのになんでこういうのが出てくるんだ!?

そりゃあ確かにここはそういう世界だが、ビジュアル的に心に悪影響を与えるのは良くない!

見知った顔が、首だけで、宙に、何も無い所に、飛んで……! !

……見知った顔?

「まるで化け物を見るような顔ね」

その見知った顔は、少し不機嫌になりながらそう言った。生首だ。

確かに生首だが、その生首は自らが作り出したスキマから首だけを出していただけだった。つまり、それは偽物の生首であり、生首であって生首ではないのだ。

「紫……あのね……」

要するに紫の悪戯にまんまと嵌ったのである。

しかも当然の本人は悪びれることも笑うことも無く、寧ろ俺が期待以上の反応をしたことにやや怒り気味である。

なんとも自分勝手なことだ。

「一心不乱に刀を振り回していたから、少し気分転換を、と思ったのだけだ」

紫は姿を現すと、出てきたスキマに腰掛ける。

空中に腰掛けることも出来るとは、全く便利な能力だ。

「気を変えるどころか、気を失う直前だよ！」

気分転換なら、飲み物を持ってきてくれるとか、食べ物を持ってきてくれるとか、もっと平和的な方法があるはずだが。

話に来てくれるだけでも勿論良い。しかし、もっとまともな登場をしてほしい。

「驚かすのは駄目なのね。もしかして、怖いのは苦手かしら？」

凶星だった。

「いやあ？ そんなことは全然ないよ？ あまりにも突然だったから驚いただけで、特に恐いのが苦手とか幽霊が怖いとか暗い所が怖いとかそういう恐怖を感じたことは全く無いなあ？」

俺は心の動揺を必死に隠しながら、努めて冷静に答える。

もしこのことが知れ渡れば、何か大変なことになりそうな気がする。

「ふーん」

紫は一瞬含み笑いをしたのち、すぐに真顔になって問いかける。

「まあ、それは置いといて。それで、何をお悩みなのかしら？」

最初から見られていたなら、隠す必要もないだろう。

俺は、ありのままを話すことにした。もしかしたら、相談に乗っ

てくれるかもしれない、と淡い期待を込めて。

「……これのことで、ちょっとね」

手に持った刀を見せた。

「刀を持ったことは聞いていたけど。……迷っているの？ それとも」

恐いの？

紫は俺を見据え、手に持った扇を刀に向けた。

流石は紫だ。心にあるもやもやしたものが、いきなり現実味を帯びて襲いかかってくる。

俺はそれに答えず、ただ黙って手中の刀を見た。

今は鞘に収まっていて、その刃も見えない。……しかし。

確かにこれは、『斬る』ための物だ。

気を付けたほうがいい

香霖堂の言葉が脳裏に甦る。

思えば、違和感を覚え始めたのはそのころからだったろう。

何かを得るには、それ相応の対価が必要だ

「わかっていたことだよ」

自分に言い聞かせるように呟いた。

そう、わかっていたことだ。

俺が欲しがったのは身を守るための力。でも力はそのまま、相手を傷つけることにも繋がるのだ。

そのことから逃げることは出来ないし、逃げるつもりは無い。

それを背負わずに自らを守ろうだなんて、自分勝手も良い所だと

わかっている。

「それでも……」

怖いと思うのは、悪いことなのだろうか。

矛盾しているのだろうか。

逃げないと決めたのに、やはり怖いと違ってしまふ。

いざ、刀を抜く瞬間になったとき、俺はその重さを握り続けていられるだろうか？

「明月」

いつの間にか、紫はすぐ近くにいた。スキマから降りて、俺の前に立っている。

「それはおかしいことではないわ」

宥めるような、諭すような口調。

「外の世界、平和な世からここに来て、躊躇いもなく刀を振りおろせる人がいたら。私は、その方が恐ろしいと思うわ。例え守る物があつたとしても、抱える思いを一刀のもとに切り捨てられる人なんていない」

それは妖怪も同じ、と紫は言葉を結んだ。

「でも、このままじゃ」

この重さに縛られている今では、自分の身も守れない。ましてや、この刀が意志に反して人を傷つけるかもしれない。

咲夜と闘った時、俺の手にもしも刀が握られていたら。最悪の展開になっていたかもしれないのだ。

感情と局面に流されること。その恐怖はもう、十分に味わった。

目の前にいる、優しい表情を浮かべている妖怪を見る。

「まあ、確かにそうよね。……となると、こう言う時は、やっぱり師匠が必要かしら。武術と言えば師匠よね」

紫は一人頷くと、おもむろに地面にスキマを開く。

「え？ 何を……って、もういないし！」

突然の出来事と、一人で話を進める紫に呆気にとられる俺を残して、紫はその中に飛び込んで消えてしまった。

出てくるのも、消えてしまうのもあつという間。霊夢が、紫を神出鬼没だと言ったのにも頷ける。

何か解決策でも浮かんだのだろうか？ 師匠とか言っていたような気もする。しかし、後半の呟きは良く聞こえなかった。

紫がどこかへ行ってしまった以上、何処かへ行くわけにもいかない。

とりあえず刀を社に立てかけ、俺も神社に背を預けた。そうしてしばらくその場に突っ立っていると、突如再び空中にスキマが現れ、その中から紫がまた姿を現した。

何処へ行っていたんだ、と言おうとして、

「さて、話は通したし、後は行くだけよ」

紫の言葉に遮られた。

「話？ 一体なんのことだ？」

状況が良くわからない。

当事者である俺を置き去りにして、紫は何やら話を進めているよ  
うだが……。

「剣の師匠よ。こう言う時は先人に教えを請うのが一番」

その言い分は確かに理解できる。が、嫌な予感が拭えないのは何故か。

俺はじりじりと後退し、紫から距離を取る。

目の前の少女には善意しかない。それはわかる。

だが、突拍子のなさや危険さと胡散臭さにかけては随一だ。と、  
魔理沙から聞いた。彼女はやや誇張気味な節があるが、八雲 紫を  
言い表すに於いては全面的にその表現を支持しよう。

「と言う訳で、冥界に行ってもらおうわ。大丈夫、スキマを通った後  
は何があっても真っ直ぐ真っ直ぐ、直進すれば大丈夫。そうしたら  
門が見えてくるから、御免下さいとでも言いながらノックすればい  
いわ。門の中に入ったら多分迎えがいるはずだから、用向きを言っ  
て、はい弟子入り、と」

紫は一気に捲し立てると、わかった？ と問う。

「ああまあ、道程は確かに分かったけど、いくらなんでも急過ぎやしないか？」

ほとんど有無を言わさない雰囲気には気圧されながらも、俺は言う。善は急げと言うが、それは魔理沙の専売特許ではないのか。俺はそこまで焦って物事を進める性質ではない。

いや待て、それ以上に大事なことがあるはずだ。

紫の言葉に何かとても不穏な成分が混入していたような気がした。「一寸待て。今、冥界って言わなかった？」

「言ったわよ」

さらりと言う紫。

そんな軽さで行くような場所ではないと思うし、そんな軽々で行きたい場所でもない。

しかしそんなことはお構いなしに、紫は話を続ける。

「ああ、そうだ。ついでに、渡してほしい物があるから、これお願いね。潰れさえしなければどれだけ激しく動いても大丈夫よ」

紫は小さなスキマを開いて手を突っ込み、小さな何かを取り出した。

そしてまた新しいスキマを開くと、その何かを持ったまま手を突っ込む。すると、俺の目の前にそれを持った紫の手が現れた。

紫色の生地に、白い蝶の模様があしらわれている風呂敷に包まれた、小さな四角い包みだった。つい反射的にそれを受け取ってしまい、激しく後悔する。

これで、冥界に行く準備は整ってしまったということだ。

「それじゃあ、行ってらっしゃい」

瞬間、足元の感覚が消えた。そして段々視線が低くなる。低く、紫の腰くらいの高さに。

「うわ、うわわわわ！」

紫のスキマが足元に広がり、ずぶずぶと俺を飲み込んでいるのだ。つた。

紫を見た。俺の焦りようなど気にもかけず、のんきに手を振って

いる。その間にも俺の体はどんどん沈んでいつて、もう肩まで飲み込まれてしまった。

「ちょ、ちょっと待って！ まだ心の準備が出来てないし、それに」  
刀が  
と。

叫んだ俺の言葉は、神社裏ではなく霧深い何処かで木霊した。

そこでぎゃあぎゃああと野鳥の群れが飛び立ったり、木々がざわざわと揺れたり、という展開があれば良かったかもしれない。

しかし、現実にそんなことは無く、静けさの中で俺の声が虚しく響いただけであった。虚しいし、実に滑稽である。

がくりと肩を落として、嘆息する。

「ここは……」

何処に移動させられたのだろうか。

周りを見渡そうとしても、深い霧に阻まれて先を見ることが出来ない。

土を踏む感触はあり、木々の影もうつすると見える。何処かの田舎道か、はたまた、

冥界、か。

その方がしっくりくるかもしれない。

なんだか周りが静かすぎて、生きている気配と言う物が感じられない。もしかしたら霧のせいかもしれないが、それにしても静かすぎる。

とにかく、移動するしかない。

ここが冥界なのかどうかは分からないが、紫の言う通りにすれば誰かに会うことは出来るだろう。

その誰かも、幽霊なのかもしれないが。

とぼとぼと、前に向かって歩き出す。

直進すればいい。道程は確かに楽だ。単純明快、分かりやすく

踊り出しそうだが、全く。

分からないのは俺の行く先だ。

冥界がどんな場所なのか。

生者の行っていい場所なのか。

そもそも誰と会えばいいのか。

何の説明も無いままに放り出され、何処かも分からないところを一人歩く。

そんなことを考えていると、また気分が深く落ち込んで行く。

足取りは重い。

弟子入り、とか言ってたっけ。

そのこと自体は確かにありがたいのだが、その人の元に直接行くことはできなかつたのだろうか。

いや、そんなことはない。いや、行っただは...話をつけるときに、俺も連れてけば良いじゃないか。それに、この風呂敷包みもその時に渡せば良いじゃないか！

右手に持った風呂敷包みに重さは感じないけれど...なんか、癩だ。刀も置いてきてしまった。あれは何処にあらうと取り寄せることが出来ると言っていたが、まだ試したことも無い。

不安に肩を落しながら歩く。今この姿を誰かが見たら、間違いなく死人だと思つたろう。

ざ、ざ、と土を踏みしめる音のみが響く。顔を伏せ、起伏のない平坦な地面をただ見つめている。

これでは本当に、死人が冥界を目指しているみたいだ。ただ一人、先の見えぬ場所へ。

それともここは、他にもそんな人が歩いているのだろうか。生気のない、やつれた顔で。

白く、霧に溶けてしまいそうな着物を着て。もしかしたら、すぐそばに？

不意に薄ら寒さを覚え、その気味の悪い想像を振り払った。

駄目だ。やはりこの空気は何処となく気分を沈ませる。

早くここを抜け出したいのだが、何時になつたら門が見えてくるのだろう。距離感は今全く掴めないが、ここに来てから結構歩いたはずだ。

それに、

俺は顔を上げ、目を凝らして霧の向こうを見る。

なんだか、周囲の雰囲気が変わってきている。

着いたばかりは明るかった空が、段々と黒を帯びているし、眼前の風景も、霧の合間からうつすら黒さを見せている。

「真っ直ぐだよ……。合ってるよな……」

一度疑いを持つと、どんどん不安になってくる。

霧の中、もしかしたら道を間違えたのではないか？ 門など見えないし、先ほどいた所とは明らかに雰囲気が違う。

進むたびに、黒色が世界を覆っていき、深い霧も少しずつ薄くなっていく。

少し歩くと、ついに辺りは黒に閉ざされた。けれど足元は見えず、薄く纏わりつく霧も見える。……その先から微かにのぞく、人魂のような灯りも。

霧の向こうから、何か聞こえてくる。

不安どころの話ではない。

俺はもう、恐怖さえ感じ始めていた。

これはこの世のことならず

こっぴん。

いつの間にか、俺は地面を踏む代わりに、砂利を踏みしめていた。いつからだったかはつきりしない。ただいつの間にか、砂利を踏

んでいた。

恋し恋しと泣く声は

こっ、こっ。

俺の目の前に、大きな川が広がっている。  
水面には何も映らず、ただその黒さだけが目に見えた。  
死んでいる。何故か直感的にそう思った。  
この川は死んでいる。

一重組んでは父のため

こっ。

がら、がらがら。

子供が数人、石を真っ直ぐ組み立てながら、小さな声で歌っていた。

それは歪な塔のように見えた。

石で組んだそれは土台が不安定で、すぐに崩れてしまう。それでも、子供らはひたすら繰り返し返している。

「 帰ろう」

口にしようと思ったのではない。勝手に滑り出たのだ。  
それほどまでに、ここは異質だった。

ここにいてはいけない。

今すぐにも戻らなくてはならない。

川を渡った先にある所は、絶対に行ってはならない場所だ。

踵を返し、来た道に戻ろうとして 足を止めた。

……どう、やって？

ここを戻って何処にたどり着くわけでもない。俺の出発点は紫のスキマだし、それもすぐに消えてしまった。

あの深い霧の中、紫の言っていた門を探し出す自身も無い。つまり、どうすることもできない。

迷った。

完全に迷った。

俺は道に迷った挙句、三途の川にたどり着き、そこから帰ることが出来なくなってしまったのだ。

最悪だ。

最悪の状況だ。

あまりの展開に何も考えられなくなり、その場に突っ立ったまま川を見続ける。

帰ることも出来ず。

進むことも出来ず。

俺は目の前に流れる川を、呆然と見続けた。

石塔が倒れ、擦れるような音が立った。  
その音に、はっと我に帰る。

「……いやいや」

何とかするしかない。

この場で突っ立っていても、どうせ何も変わらないのだ。ならば  
当てが無くとも動きまわったほうが得策ではないか。

俺はとにかく、川に沿って歩くことにした。

おそらくここは賽ノ河原だろう。親より早く死んだ子供が石塔を  
積み上げるといふ場所。ならば、それを崩しに来る『鬼』もいる可  
能性がある。

それに、三途の川を渡る船も何処かにあるかもしれない。ならば、  
船頭がいるはずだ。

本当は、出来れば会いたくない。

咎められる可能性は無きにしも非ず。まさか、取って食われるな  
んてことは無いだろうけど……。

そんなことを考えながらふと前を見ると、霧の向こうにつつすら  
と何かの影が見えた。

俺の足音ではない、砂利を踏む音も聞こえる。

そして、

「ああー！！」

流れのない川に大きな波紋が立つほどの、叫び声が聞こえた。

俺は驚きのあまり、今の叫び声が迷惑になったのでは、と意味の  
ない心配をし、四方八方を意味も無く見回した。……俺の声でもな  
いし、周りは誰もいないのに。

霧の向こうの影が段々はっきりした形を持っていく。どうやら声

の主は俺に近付いてきているらしい。

「ちよつとそこの幽霊！ 何処ほつつき歩いていたんだい？ ほら、ぐずぐずせずに乗った乗った」

良く通る声が聞こえ、霧の向こうから、一人の少女が姿を現した。秀囲気に合わない、派手な少女だった。

「え？ 幽霊って」

少女はいきなり俺の手を掴むと、有無を言わさず何処かへ引きずっていく。

「全く、さっき呼ばれた時に来ないと駄目だろう？ あたいも仕事があるんだし、あまりうるうるして未練を育てるのは、あんたのためにもならないよ」

「仕事？ 未練？ ちよ、ちよつと待つて！ 一体なんのこと？」

少女は見かけによらず凄い力で手を引き、俺は体制を崩さないようにするのが精一杯だった。

まさか彼女は、俺を三途の川を渡る幽霊だと勘違いしているのか？ しかし、説明も出来ず、抗うことも出来ず、ずるずると引きずられ、「ほら早く乗る！ まったく、こんなんじゃまた映姫様に叱られちまう」

あれよあれよという間に、俺は小さな舟の中に押し込まれていた。人二人がやつとこさ乗れるような木の舟で、年期の入った物のようだ。所々がささくれ立っている。

少女は倒れ伏した俺を飛び越えると、器用に舳先に着地した。

どうやら彼女が船頭の様だが、このまま舟を出させるわけにはいかない。

「待つてって！ 話を聞いてくれ」

櫂を持ち、今にも舟を漕ぎだそうとする彼女を焦って引き止める。「なんだい？ あんたは死んだんだ。ここまで来た以上、もう現世に戻ることは出来ないよ」

船頭はなにやら焦っているように、足をトントンと踏み鳴らす。

「俺はまだ生きているってば！ 冥界に行こうとして、間違ってこ

ここに出てきただけで……。とにかく、ここを渡るわけにはいかないんだって！」

「生きているう？ どう見たって死んでいるよ、あんた。死神のあたいが言うんだから間違いないさね。お客さん、そのまま妄念を抱き続けると、輪廻から外れることになるよ。それに、冥界だって？ 仮に生きていたとして、何をしにそんな所に行こうってのさ。それこそ生きた人間が行くべき場所じゃない」

話は終わりだ、と言わんばかりに船頭は俺から視線を移し、舟の止め具を外している。

ああ、くそ。話が全く通じない！

ちゃんと順を追って話さなければ、確かに全く要領を得ない話だ。それは分かっている。

しかし、始まりから今まで、あらゆることが急に起き過ぎていて、俺の入り込む隙間が無かったんだ。

「とにかく、俺は生きているんだって！ もっとちゃんと見てくれればわかる！ その、体質で」

俺が言い終わる前に、舟は岸を離れ、ゆっくりと進み始めた。

船頭はただ前を向いて、櫂を動かしている。

「ちよ、あああああ！」

俺は素っ頓狂な声をあげ、岸に向かって手を伸ばした。

勿論届く筈も無く、ゆっくり、ゆっくりと現世への道が離れていく。岸が離れていくのをすっかり見たせいで、否応も無く実感した。

……もう、戻れない。

「止めて！ 戻ってくれ！ この川渡つたら戻れないだろ！？」

俺は必死に船頭に頼み込む。が、船頭は射るような目線で俺を見つめてきた。

「あんたは死んだ。もう、戻る必要はないのさ。暴れるか？ なら舟から降りるか？ この川は 人を飲むよ」

「っ……」

船頭の脅しともとれる言葉に、俺は黙るしかなかった。

見かけは少女だが、力も強かった。俺みたいな奴よりもよほど性質の悪い幽霊とも渡りあつたこともあるのではないか？

言葉と、その力強い眼は、只者では無いことを容易に想像させた。船頭は俺が黙つたのを見ると、にこやかな笑顔を浮かべた。

「わかつたならそれでいいさ。あたかも喋れる相手に乗せるのは久々だからねえ、ついついはしゃいじまつた。許しておくれよ。なにせこれから、永いか短いかはわからんが、川を渡りきるまでは一緒だからね。それじゃあ、お客さんの人生分、お付き合い致しましよるか」

俺に乗せた船が、櫂の動きに合わせ、ゆらりゆらりと揺れる。

こうして俺の、勘違い一方通行の旅が始まつてしまつたのだった……。

花の匂い。

ありとあらゆる花の匂いが、漂ってくる。

生者には、少しその匂いは辛かった。

「おや？ もう着いちまつた。あんた、余程の善人だつたんだね。年若そうだが、やっぱり良い人ほど早く死んじまうのかねえ」

乗る前こそ先は見えなかつたが、乗つてからの行程は想像以上に短かつた。

船頭は目を細めて、舟の行く先に広がる花畑を見ている。

黒一色だつた景色も今や、鮮やかな花と暖かさに包まれている。

日差しとはまた違う、不思議な暖かさだつた。

これが、彼岸。

死者の世界。

まさか、生きてまますることになるとは思わなかつた。

「とうとう着いちゃった、か」

舟が一艘やつと入るくらいの小さな船着き場に、軽い衝撃と共に舟が止まる。

「はい、彼岸に到着、と。足元に気を付けなよ、こんな所で落ちたら洒落にならない」

船頭の手を借りて、俺は小さな棧橋に飛び移る。

「あたいはここまでだから、後は他の死神の言うことをよく聞いて裁判を受けるんだ。誰かが呼びに来るまで、その辺で待っていていればいい。少し退屈かもしれないけどね」

船頭は一気に捲し立てると、すぐに舟を動かし始めた。彼女の姿が、すぐに遠ざかっていく。

「……また会いましょうね！」

俺は遠ざかっていく船頭に向けて、少し語気を強めていった。

その言葉を聞いて、船頭は少し 悲しげな顔をした。

予想外の反応、だった。

……そうか。彼女はもう何人も、ここに人を送り出してきたのか。もう、戻らない。一期一会の船路。

少し、胸が痛んだ。

出来れば、またね。そう云って、船頭は悲しげに笑うと、一度だけ、手を振った。

そしてすぐ、川にかかる霧の中に消えてしまった。

「……いや、どうせまた会うんだ」

閻魔様のもとに行けば、俺が生者であることぐらいすぐにわかるだろう。そうしたら、俺をここに渡らせた彼女は当然呼ばれるわけだ。

その時に、文句を言って。

その後に、謝ろう。

俺は棧橋を後にして、何処までも続く花畑の中に足を踏み入れる。

むせ返りそうな花の匂い。生者には、少しだけきつい。

鼻をつまみ、きよろきよろと辺りを見渡すが、どこもかしこも花だらけで、どうやらこの匂いから逃れられる所は無いらしい。しかも誰もいない。普通なら、ここは誰かしらいるものじゃないか？

何も、することが無い。

諦めてその場に座り込み、迎いの死神を待つことにした。

しばらくは、ここで待つしかない。

何時来るのかもわからない。来ても、裁判が何時になるか分からない。そして、幻想郷に帰れるかもわからない。

頭の中で、解決できない問題がぐるぐると廻る。

「本当に……どうなるんだろう」

溜息とともに、そんな言葉が漏れた。

## 二十七章：幽冥行脚

この冥界にも、現世と同じように四季がある。

春には見事な桜が一面に咲き誇り、夏には青々と生い茂る鮮やかな緑が、秋には燃えるような紅葉が、冬には白く清浄な、美しい雪が降る。

この冥界にも、現世と同じように生物がいる。

鳥も獣も虫も、現世と同じように存在している。

しかし、それら全ては、死んだものであった。木々も鳥も獣も虫も、一度は死し、そして冥界へ辿り着いたものである。

活き活きと映える自然の中に、どこか胸を締め付けられるような切なさを感じるはそのせいだ。

だからこそこの自然は、現世には決して無い美しさを持っている。

そんな冥界の儂い美しさを、贅沢にも一か所に集めたような場所  
白玉楼の庭で、西行寺 幽々子は、色鮮やかな紅葉を見ているのであった。

広い庭の一画に莫塵を敷いて、一面に広がる様々な木々の紅葉を眺めている。

莫塵の傍らには、お茶と団子。

そして、その後ろには幽々子の従者である、魂魄 妖夢の姿があった。正座をして、少し心配そうな顔で控えている。

「……幽々子様、あまり食べ過ぎるとお夕飯を美味しく頂けなくなりますよ？」

次々と団子を口に放り込む幽々子を見て、とうとう妖夢は声をかけた。

幽々子は口に入れかけた団子を止めると、振り返り頬笑みを浮か

べて言う。

「だって、折角妖夢が作ってくれたお団子だもの。残さず全部食べたいじゃない？ 紅葉も綺麗だし〜」

そしてまた、団子を口にした。お皿からこぼれ落ちるほどたくさんあった団子も、いまや量の手で数えるほどしかなかった。

妖夢は自分の作った料理を誉められたことを嬉しく感じつつも、主人の食欲に嘆息した。

「幽々子様……それは食後にお出しする分も一緒に作ったんです」「そうなの？ じゃあこんなに持ってきちゃ駄目じゃない」

「待ちきれないからって、幽々子様が勝手に持って行ってしまったんじゃないですか！ もう、夕食後の分の材料はありませんよ？」

妖夢は、口を尖らせる幽々子を諷める。

台所に侵入してくるのは良くあることだが、まさか丸々一皿持って行かれるとは思ってもいなかったのだ。

「ええ〜？」

食材が無いと聞き、幽々子はまるで子供のように駄々をこね始めた。

「今日はもう駄目です。それに、いくらなんでも食べすぎですよ」「そんな幽々子に辟易し、妖夢は、いつの間にか空になっていた団子の皿を見ながら言った。

量を食べる幽々子のために作った大量の団子も、妖夢が口にしないくとも一人で平らげてしまう。

朝昼晩。食後の甘味に、おやつ。亡霊の体にもかかわらず、幽々子は人一倍食事を楽しんでいる。

千年を、冥界の主として過ごした亡霊姫。

普段は飄々として捉えどころのない人だが、食事の時は、年頃の少女のような無邪気な表情を見せるのだ。

妖夢は、主のそんな表情を見るのがなんだか嬉しくて、ついつい作りすぎてしまうのであった。

「それにもう、作ろうと思ってても材料が無いんです。諦めてくださ

い

そのたびに毎回、こうして後悔することになるのだが。

「じゃあ、買ってくればいいのよ。夕飯までまだ大分時間もあるし。ね?」

幽々子は、ぽんと手を叩くと、満面の笑みを妖夢に向けた。

「いえ、今回はその手には乗りません! 駄目なものは駄目です」  
妖夢は頑として主の要求を退ける。

すると幽々子は、わざとらしく泣き崩れ、着物の裾を目に当てた。  
「そんな……。私から日々の楽しみを奪うのね、妖夢」

「……………」

泣きつ、そしてちらちらとこちらの様子を見、変化が無いと分かるや、また泣く。

例えかなりの鼻屑目を入れようと、誰がどう見ても分かるくらいの、酷い嘘泣きだった。

妖夢はだんまりを決め込むことにした。口で勝てる相手では無いことは知っている。

「一日の終わりを、妖夢の美味しい甘味で締めようと思ったのにー」  
美味しい、という言葉に少しだけ妖夢は反応した。

それが煽っているとわかってはいても、反応せざるを得ない。  
しかしまだ、妖夢の表情は崩れない。

「妖夢の作ったお菓子が食べたいな?」  
「……………」

幽々子は嘘泣きを止めると、ずい、と妖夢に近付いてきた。作戦変更、という訳だ。

艶やかな吐息が顔にかかる。  
妖夢は赤面し、思わず下を向いた。

「駄目?」

幽々子は更に妖夢に近付き、下を向いた妖夢の顔を覗き込んだ。  
二人の顔はもはや、重なるほどの近くまでにある。

そして、そのまま固まる二人。

「……………わかり、ました」

ついに折れ、妖夢はがくりと肩を落とした。

そんな妖夢と対象に、幽々子の表情が、まるで花が咲いたように  
ぱあっと明るくなる。

幽々子はさっと身を引くと、急かすように手を振った。

「それじゃあ、行ってらっしゃい」

妖夢は渋い顔をして立ち上がると、傍らに置いてあった二振りの  
刀を背負う。

結局、こうしていつも通り。

私がこうだから、幽々子様もだらけてしまうのではないか、と妖  
夢は思った。

でもそんな心と裏腹に、こんな関係を妖夢は少しだけ嬉しいとさ  
え思っている。

二人は確かに主従関係にある。

でも、それ以上に『家族』であった。

「それでは、行って参ります……………」

とはいえ、こき使われていることに変わりはない。

蚊の鳴くような声を出して、妖夢はふわりと飛び上がる。

「あ、妖夢。今日はちょっとお客さんが来るから、早く帰ってきて  
ね」

「そうなんですか？ ……もしかして、紫様ですか？」

妖夢は目を丸くして驚く。そんな話は初耳だった。

お客様が見えるのなら、もてなしの用意をしなければならぬ。  
それにもし紫様が来るのなら、今家にある食材だけでは十分なも  
てなしが出来ない。なにせ紫様は幽々子様の古い友人なのだから。

出来ればもっと早く教えて欲しかった、と妖夢は思ったが、今か  
ら買い物に行くのでこれはこれで丁度良いのかもしれない。

「いえ、ちよつと珍しい『お客様』よ。妖夢、頑張つてね」

幽々子の含みがある言い方に、妖夢は首をかしげた。

頑張つて、とはどういう意味だろう？

「ほら、早く行かないと遅くなっちゃうわよ」

頭を捻る妖夢に、幽々子が声をかけた。

「あ、はいっ！ それでは、出来るだけ早く戻ってきます！」

きつと、お持て成しの料理のことだろう。妖夢はそう結論付け、

幽々子の見送りを受けながら、風のように飛び去って行った。

肌に刺すような冷たさを感じながら、俺は長い廊下を歩いていた。  
まるで牢獄の様だ、と思う。

無機質な壁。

無機質な天井。

そして、それらに刻まれた単調な模様が、より一層冷たい印象を  
与えている。

それもそのはずだ。ここはもう、冥界ではないのだから。

花の中に座つて、程無くして死神らしい死神が、俺を迎えにやつ  
てきた。

黒衣のマントを被り、でかい鎌を持ったおどろおどろしい骸骨、  
という絵にかいたような化け物ではなかったが、少なくともあの船  
頭のような親しみは持てなかった。でかい鎌を持っていたのは想像通  
りだったが。

聞いてみたら、客へのサービスらしい。腑に落ちなかったが、別

に気にするほどの事でもない。他に言うことも無いので、黙ってその死神についていくことにした。

と、そんな死神に連れられ、何やら大きな建物の中に通されて。

きわめて事務的な死神の対応を受け、一人　　と言っているかはおぼろしいが、一人の死神に先導され、裁きを受けるために、閻魔の元へ薄暗い廊下を歩いている。  
そう。

想像していたよりも、ずっと簡素で、凄く事務的なものであった。俺はもつとおどろおどろしく、良く絵に描かれているような地獄を想像していた。

例えばかがり火がそこらに焚かれていて、周りは高く、隆起した山に囲まれている。罪人を閻魔のもとに引っ張るのは鬼。至る所から地獄に落ちた罪人の嘆きや呻きが聞こえて来て、六大地獄を一望することができる。そして恐ろしい顔をした閻魔のもとに一人、また一人と送られていき、地獄行きが決まったら後ろに控える罪人に見せつけるかのようにその場で地獄に落とされる。いざ順番が来たら、この世のものとは思えぬ表情をした閻魔によって、過去の所業を洗いざらい調べられ、舌を抜かれて喋れなくなり、弁解も出来ぬままに地獄の亡者の仲間入り。

……なんて、花畑の中でそんな恐ろしい想像を働かせていたのだけれど。

実際はそんなこともなく、まるで役所の様だとさえ思って拍子抜けしてしまった。予想が裏切られて嬉しい反面、何処か物足りなさを感じてしまうのは何故だろう。

しかし、こうしていざ自分の順番になり、誰もいない冷たい廊下を歩いていると、空恐ろしくもなってくる。

例え恐がらせるための何かが無くとも、寧ろその事務的な、淡々

とした冷酷さに恐怖を覚える。

この廊下の冷たさも、そういつた冷酷さの表れかもしれない。善悪は、絶対化することが出来るものではない。……少なくとも、人間には。

しかし、閻魔は人を裁かなくてはならない。そしてそれは、人が人を裁くと同じであってはならない。

例え何があるうとも、例えいかなる理由があるうとも。

現世の法が許しても、閻魔の法は許さない。

罪は、罪でしかない。

曖昧な善悪を見極めるためにも、こんな冷酷さが必要なだろう。そんなことを考えながら、ひたすら廊下を歩く。所々に木の扉があり、おそらくそこも法廷の一つだろう。

俺が向かっているのも、この中のひとつなのだ。扉が見えてくるたびに軽い緊張を覚え、それらを通り過ぎるたびに、つかの間の安堵を感じる。

そんな生殺しを幾度も繰り返して、とうとう、先に行く死神が一つの扉の前で立ち止まった。

死神に促され、扉の前に立つ。俺は深呼吸をひとつして、ゆっくり、出来るだけゆっくり扉を開け、そして出来るだけゆっくり中に入った。

扉が、やけに大きな音を立てて閉まる。俺は一步を踏み出して

目を疑った。

大きくも小さくも無い広間に、現世の裁判所にあるような証言台が一つ。正面の一際大気な場所が、裁判官のいるところだ。

だが俺は決して、現世と似た法廷に驚いたわけではない。むしろここまでは予想済みだった。

俺は目の前にいる人物が信じられなくて、ゆっくり歩いていたことも忘れ小走りに証言台に近付いた。

厳粛な顔をした書記が左に。右には誰もいない。本来は誰かいてもおかしくは無いが、今はそこは問題ではない。

俺の正面。

裁判官の席に座っていたのは、緑色の髪をした　どう見ても可愛い少女だった。目をつぶり、複雑な模様のついた笏を胸の前で構え、厳として佇んでいる。

確かに、得も言われぬ雰囲気纏ってはいる。いるのだがしかし、この中に入ってからというもの、予想を超えた現実に、想像にひびが入るほど驚かされてはきた。

しかし、今とどめを刺された。

この閻魔様を見て、俺の抱いていた想像が粉微塵に破壊されたのであった。

俺は証言台に着くと、当初の予定も忘れて、食い入るように目の前にいる少女を見つめた。

閻魔の目がゆっくりと開いていく。俺の視線と、閻魔の鋭い視線が　交差した。

途端。

瞬間。

刹那。

「はあ!？」という閻魔の鋭い叫び声が聞こえ

そして、閻魔は席からずり落ちそうになるほど前のめりになって俺を見た。

先ほど俺が閻魔の姿に驚き、食い入るようにつめていたのならば、閻魔は俺を穴があくほど見つめている。

そして、ドスンと乱暴に席に着くと、何かを堪えるようにふるぶると震えだした。

俺はどうすることも出来ずに、ただ、頭をかいて苦笑いを返す。

どうやら気付いてもらえたようだが、何やら様子がおかしい。

閻魔は何か言葉にならないことを口早に呟いている。書記はおろおろと、様子のおかしい閻魔と俺を交互に見比べるばかりであった。そんなことがしばらく続いた後。

「どうして」

閻魔が、やっと聞き取れるほどの小声でぼそりと呟いた次の瞬間、

「…………… どうして誰も気付かなかったのですか！！ この者はまだ生きていますか！！！！！！」

隣の隣の隣の法廷にいた全員が、突然の怒声に驚くほどの、大きな声が響き渡った。

怒髪天を衝く、という言葉がある。

読んで字の如く。あまりの怒りに頭髪が逆立ち、天にまで届くありさま。まあ、所謂比喻である。

しかし、もしかしたらこの少女は本当に怒りで天を衝くことが出来るのではないか。

狭くも広くもない法廷に、雷鳴の様な雄叫びが上がると共に、空気を切り裂くほどの鋭さを持った音が響き渡り

続いて。

きゃん、という少女の、これまた鋭い叫び声が上がった。

それはそれは見事なフルスイングだった。

ある晴れた日。降り注ぐ太陽の光の下で、しばらく洗濯していなかった布団を、これでもかと日ごろのストレスを発散されるかのように叩く主婦の様に。はたまた大リーガーの、見る物を魅了する、洗練された美しいフォームで。

閻魔は、船頭の少女の尻を笏で打ったのであった。

「こ、の……！ 貴方という人はどうしていつもそうなんです！」  
尻を押さえて、兎のように飛び回る船頭。しかし閻魔は追撃の手を止めず、防ぎきれない尻をばしばしと叩きまくる。

「仕事をさばるに飽き足らず、今度は生者を渡らせるなど！ 前代未聞です！」

ばしばし。

「え、映姫様、そのですね……」

「問答無用！」

口を開きかけた船頭だが、その前に閻魔の笏が尻に当たり、代わりに叫び声が出るのみだ。

「しかもまたサボってしまいましたね！ 午前分の死者がついさつき渡ってくるなど、いくらなんでも遅すぎます！」

「や、それは中々集まってくれなかったか」「言い訳無用！」  
ばしばしばし。  
と。

俺は目の前で繰り広げられる惨劇を、半ば呆然と見ているのであった。

怒髪天を突く、という言葉があるが、地獄から髪が伸びた場合は、地上に出てくるのだろうか。そこから更に天に昇るとしたら、地上に居る時の二倍の怒りが必要だ。

と、そんな益体も無いことを考えてしまつぐらいには、呆然としていた。

ほんの一分前に苦笑いで入ってきた件の船頭は、いまや鬼と化し

た閻魔に叩かれ続けているのだ。

予想できない、とまでは言わない。

呆然とくらはするだろう。

「そも、渡し賃を貰う所で気付くはずでしょう！」

「あ」

船頭は俺を見た。勿論だが、渡してなどいないし、話にすら出ていない。

「こ、ま、ちいいい！」

その一言で更に閻魔の怒りは燃えあがる。追求されればされるほど、言えは言うほど、状況は悪くなるのであった。

ぎゃん、という少女の鋭い声上がる。

ばしばしばし。

ばしばしばし。

すぱーん。

そろそろ止めないといけないような気がしてきた。

「あ、あのー、とりあえずそこら辺にしておいたらいかがでしょうか？」

俺は阿修羅のごとく怒る閻魔に怯えつつも、話をきりだす。

途端、船頭の少女は俺の後ろに隠れた。

閻魔がぎろりと俺を見た。正確には俺の後ろにいる船頭を見据えたわけだが、この際それはどうでもい。

恐い。

凄く怖い。

閻魔に睨まれつつ、俺は会話の糸口を探す。

「え、えっと……っほら！　そろそろ帰りたいな、なんて思いましてですね」

「……はっ！？　そ、そうですね、今はそっちの方が先決でしたね」  
閻魔はやっとなにに返ったようだった。咳払いを一つして、居住まいを直す。

それを見た船頭も俺の後ろからそろりと身を出したが、また閻魔に

睨まれてさつと姿を隠した。

「八代 明月でしたね。こちらで行った手続きは解除しておきますから、すぐに此岸へ帰しましょう」

「あ、いや。そうじゃなくて……」

口ごもる俺に閻魔は首をかしげた。

「そもそも、三途の川に出てしまったのも、冥界に行こうとしていたのが原因なんです。それで、出来ればここから冥界に行きたいんですが……」

「はい？ 冥界……と言ったのですか？」

閻魔の目の色が変わった。

至極当然の反応だろう。そもそも生者が冥界を目指すなんてありえないことだ。

もしあるとすれば。

「え、ええ。その、ちよつとした理由で」

「ちよつとした理由で行けるような場所ではありません！ 心の内にやましいことが無いならば、事の委細を語りなさい」

ちなみに嘘は通じません、と、閻魔はきっぱり言い切り、睨むような目をした。

やましいことは無いのだが、身がすくんだ。これはおそろく、道端で警察官に呼び止められた時に感じるアレと同じだと思う。

「あんたまさか、死人に会いに来たのかい？」

後ろから声がした。

俺は首を振ってそれを否定する。

閻魔にじつと見つめられ、更に船頭に見つめられている。嘘をついたらまずばれるだろう。

まあ、嘘をつく必要は全くないけれど。

しかし。

「話すと長くなるんですが……」

簡潔にまとめきれぬ自信が無いのは何故だろう。

「それにしてもあなた、随分と酷い目に会ってきたようですね……」  
一面の花畑の中。先を歩く閻魔が、沈痛な面持ちで振り返った。  
俺はそれに苦笑いで答える。

「なんだか幸薄そうなのは、体質のせいなのかねえ。それとも元からかい？」

俺の隣に歩く船頭は、両手を後ろ手に組みながら言った。

「ここに来てからだよ。ここまで何かに巻き込まれたことは一度も無い」

「その一環に小町の責任が含まれていることは自覚していますね？」  
「も、勿論ですよ映姫様」

閻魔に軽く睨まれ、船頭は一步後ろに下がった。

「……な、怖い人だろう」

船頭が俺にこっさり耳打ちする。

「いやま、確かに怖そうだけど」

目前であんな惨劇を見せられたら怖くないなんて言えない。

こうして普通に歩いているだけなら、外見は幼い少女にしか見えないが、身にまとう雰囲気は常に威厳を纏っているというべきか。

格が違うなあ、なんてことを思うのだ。

「でも結局冥界に行くのも許してもらえなし、固いだけの人じゃないように思えるけどね」

「ああ、その点はね。なんだかんだ人が良いのさ」

なんとか掻い摘んで今の自分の状況を説明したところ、閻魔は俺の境遇を一頻り嘆いてくれたあと、快く冥界行きを承諾してくれた。まさかあそこまで同情されるとは思ってもみなかったが、冷静に

考えると酷い状況の中にいるのかもしれない。

どうも最近、次から次へと色々なことが起こりすぎて感覚が麻痺しているようだ。

「そうだなあ。そういう良い人に出会えているおかげで、なんとか生きている感じなのか」

「三回……いや、こつちに来る原因も含めれば四回だっけ？」

一回目はあの黒い玉。二回目は鬼。三回目は紫。四回目は紅魔館。わずか一週間足らずの間に四回も死にかけた、でも、こうして生きています。

運がいいのか悪いのかわからん。

「でも、あの妖怪や巫女たちと出会ったのは運が無かったねえ」

そう言って船頭は笑った。

「そうですね。良くも悪くも彼女たちは全ての渦中にいます。特にあのスキマ妖怪などは！ 全く、人様に余計な迷惑をかけてばかりです！」

閻魔はこくこくと頷く。

「ははは……。でも、今回に関しては俺の相談に乗ってもらいましたし、色々便宜を図ってくれたみたいなので。その点では感謝していますから」

俺は一応紫の弁護をしておいた。

話が早すぎてついていけない所はあるが、それでもちゃんと相談には乗ってくれていたのだ。

「そうですか？」

一応納得はしながらも、「何か裏が……」とそれでも閻魔はぶつぶつ呟いている。

「そう言えば映姫様、この地獄から、明月がいた外の世界に帰すことは出来ないんですかい？」

船頭の問いかけに、閻魔は歩きながら顔だけをこちらに向けた。

「いえ」

一瞬目を伏せ、俺を見ながら言う。

「おそらく、無理でしょう。あの妖怪の力は確かなものです。その境界を操る力を以てしても、彼を外に帰すことは出来なかった」

「やっぱり無理ですか……」

地獄の閻魔　つまり、神の力を以てしても、俺は外の世界に帰れないらしい。

「もしかしたら、あなたと幻想郷の間に、因縁めいたものが結ばれてしまったのかもしれないね」

「因縁？」

耳慣れぬ言葉に首をかしげた。

「ええ。例えば、怨霊や亡霊と呼ばれる者たちは、死して尚何かに囚われているのです。それは人であったり、場所であったりする。そしてその因縁が解れぬ限り、成仏することは出来ない。あなたもまた、生きながらにして幻想郷、もしくはそこにいる何かに縛られているのかも知れません」  
なるほど。

確かにそう言う考え方もあるかも知れない。しかし、では

一体何が、誰が？

俺は知らず知らずのうちに誰かと因縁を思ってしまったのだろうか、それとも、この地に？

それとも俺をここに呼んだ奴が、俺をここに留めているのか？

うん、こっちの方がしっくりくるな。

「ということはつまり、その原因を取り除かない限り、俺は元の世界に帰れないんですね」

「じゃあ尚更、冥界に行かないと、って奴だ」

船頭の言葉に頷く。

いつかは、相見え無ければならない。

ならばその時まで出来ることをしたい。

例えそれが、俺の日常とかけ離れたことであっても。

「それでは小町、あなたは冥界の入口まで付いていきなさい。私はここらで戻りますから」

と、閻魔は足を止めて振り返った。

見ると、一面に咲いていた花はまばらになり、少しずつ霧が出始めていた。

「あれ、映姫様はいらっしゃらないんですか？」

「私は誰かさんのおかげで増えた書類を片付けなければなりませんので」

船頭はさつと目を逸らした。

閻魔はやれやれと首を振った。そして、俺に向き直る。

「それでは、八代さん。この先色々なことがあるでしょうが、自分の信じた道を忘れることのないよう。あなたの迷いが晴れることを願っていますよ」

「色々ありがとうございます」

閻魔は一礼をして、花畑の中へと歩いて行った。

「それじゃ、行こうかね」

船頭の言葉に振り返り、霧の先へと並んで歩き出す。

ここを進んで行けば、目指す冥界にたどり着けるらしい。土の地面に霧、所々の花と木々、自分一人だったらまた迷うところだが、隣には『船頭』もいることだし安心だろう。

「あ、そうだ。ねえ、舟に乗せられてからここまででどれくらい時間が経った？」

隣を歩く船頭に尋ねる。そうだねえ、と指折り数え、

「一時間半ぐらいかな。それがどうかしたのかい？」

「いや、冥界に来たら迎えが居るって話だったんだけど、悪いことをしたと思って」

迷っていた時間と呆けていた時間を足せば、二時間くらいは行くだろう。

迎えが出てくるという話だったが、流石にもう帰ってしまったか。  
「冥界も広いからなあ。白玉楼から門までとなると、あの階段もあるし……。でも多分、一回戻っていると思うよ」

「はくぎよくろう？」

これまた耳慣れぬ単語だった。

確か……古代中国、優れた文人などが死んだ時に行くと言われる、天上の楼閣、と何処かで聞いた覚えがある。

今は地続きなのか。

「そう、白玉楼。冥界の主である亡霊姫、西行寺 幽々子の住まいなんだ。お前さん、刀の師匠を求めてきたんだろ？ なら多分、その西行寺お抱えの庭師、魂魄 妖夢の事だと思っよ」

紫の交友関係の広さにも驚かされるのだが、今気になったのはそこでは無かった。

「庭師？」

庭師というと偶に見る。枝切りばさみかなんかで、良くある日本家屋、それも中々に広くて立派な家屋の、庭の松の木やらをちよきちよきやっているアレか。

いや、実際詳しくは知らないけれど。

「そう、庭師兼剣術指南役の、魂魄妖夢。まあ多分、見ればすぐわかるさ。冥界で刀なんて持っているのは一人くらいしか居ないさね」  
「まさかとは思っただけど、その刀で庭師の仕事をしていたりかはしないよな」

予想では、まさかそんな……なんて言って、笑って手を振ってくれることを期待していたのだが。

船頭は腕を組んで考え始め、

「いや、確か庭師の仕事をしている時に思いついた技がどうかか、聞いたことがあるね」

難しい顔をしながら頷いた。

信頼できそうな様子なだけに何か凄く嫌だ。

「なんか心配になってきた……」

まあその、刀をどう使うかは人それぞれだけど。

「いやいや、根は真面目な奴だから大丈夫さ」

そう言っつて、船頭は快活に笑った。

「真面目な人ほど……というのもあるけど」

「刀を持つ心構えはちゃんとあるさ。だから大丈夫だつて。きつと、お前さんの役に立つはずだよ」

「そうだな……。俺の中で、踏ん切りがつけばいいんだけど」

まだ、良く分からない。

決意はしたつもりだ。でも、果たして体が動いてくれるのだろうか。

「お前さんは心配性だねえ。だーいじょうぶだつて！ 閻魔様のお墨付きまで貰ったんだしさ」

そして、船頭はまた、太陽のように笑った。

……不思議だ。

それを見てみると、根拠も無いのに大丈夫な気がしてくる。

「何がだい？」

いつの間にか、俺は口に出して呟いていたようだ。船頭が不思議

そうな顔をこちらに向けていた。

「なんとなく大丈夫な気がしてくる笑顔、つてことだよ」

根拠は無いし、楽観的だ。

でも偶には、そういうのもいい。いや、そう言う所が良いのかも  
しれない。

「なんだい急に、煽ても船賃くらいしか出ないよ」

出るのか。いや、しかもそれ一番出しちゃ駄目なものだろう。

船頭は少しだけ照れながら笑った。

「いや、煽ててないつて。本当にまた会えてよかったと思っただ  
し」

あの時は謝らせるためだったが、今は違う。

こうして話すだけでも楽しいし、おかげで刀の事から少し考えを  
離すことも出来た。

「ああ、あの時のアレはそういう……」

「ああ、でも……少し軽率すぎた。ごめん」

俺は目を伏せる。

「何言ってるんだい！ 謝るのはあたいのほうだろ？ 早とちりが原因だったんだしさ」

「いや、それももういいよ。さつき謝ってもらったし」  
それに。

あの惨劇を見せられたら、怒れるやつはいない。もしいたとしたら、余程の性悪かドSかどっちかだ。

自分が怒られているわけでは無いのに、周りまで叱られている気分になるのは何故だろう。それも閻魔のなせる技か。それともあの少女の技か。

「いや！ それじゃあたいの気が済まない」

しかし小町は、片手を開き俺につき出して言った。

「い、いや、本当にいいって」

俺は手を振り、首を振って全身でそれを拒むが、小町は片手を出したままもう片方の手を額に当て、何か考えながら歩みを強めていく。

多分、聞いていないだろう。

前へ進んで行く小町を目で追っていくと、気付けば、薄い霧の中に大きな門の姿が見えた。

四、五メートルほどの高さの、両開きの朱塗りの門。簡素な装飾だが、それがなんともいえない威圧感を醸し出している。

おそらくこれが、地獄と冥界を隔てる門、そして境界なのである。門の左右からは、何処までも高い塀が伸びていた。目には見えないけれど、結界も張ってあるのかもしれない。

門の前で船頭は立ち止ると、くるりとこちらを振り返った。

「よし決めた！」

「え？」

何を、と言いかけたが、

「今、誰かに狙われているんだろ？ なら、あたいが力になるよ！」

そう言っつて、船頭は腕を組んで門の前に仁王立ちした。笑顔が眩しい。

……眩し過ぎるほどに。

「え、ええ〜」

思わず苦笑いを浮かべてしまった。

「なに、そう心配しなさんな。こう見えてもあたいは割と役に立つよ？ なにせ死神だしね。困ったときは頼ってくれて全然構わないいや、そういう心配ではないのだが。」

確かに気持ちは嬉しいけど、その。

「その間の仕事は？」

「割と暇だから、空いている時間に、つてことさ。」

俺はその言葉を聞いて、更に唇の端を釣り上げた。

いやいや。

俺としては、船頭の仕事の方をしっかりやってほしいわけ。

寧ろそっちが本業だし、俺は彼女が仕事を全うにやっていてくれた方が逆に安心する。今回の件的にも、だ。

いや、確かにありがたいんだけどね？

でもねえ……。

それに、暇な時にちよいと出てこれるほど近い場所でもないと思う。

などと。

言いたいことは割と沢山あるのだが、確かにその心遣いはいがたいし、その好意をむげにすることも出来ず。

「……わかった。それじゃあ、宜しく願いますよ」  
結局、こうなるのであった。

船頭はにこりと笑ないが、満足げに頷いた。

「よし！ じゃあ、つと……そういや、まだ名乗っても無かったね」

船頭は手を差し出した。

「あたいは小野塚 小町。三途の川の渡し死神さ。これから宜しく頼むよ」

「ん？ 小野……の、ではないんだね」

あと一文字なのに。

「塚、だよ。まあ、絶世の美人と言われるのはありがたいけどね」

「小野塚、ね。わかった。もう知っているとは思っけど、俺は八代明月。宜しく」

少し不安だけど。

俺は差し出された手を握り返した。

「それじゃ早速、力になるとするかね！」

小町は俺の手を握ったまま、門を勢いよく開ける。そして、手を繋いだままいきなり走り出した。

「ちよ、ちよつと！ こつから先は俺一人で……って話じゃなかったのか！？」

小町に手を引かれ、前のめりになりながらも言う。

「一足早いお役立ちって奴だ。本当に一足早いよ？ いや、一足どころか千足かけても、あたいの足には及ばないけどねえ」

小町は意味のわからないことを言いながら、少し速度を緩めた。

「何言ってるんだ？ それより、これからの仕事はどうするのさ！」

「いや、これも仕事のうちさ」  
もしかして。

都合のよいサボリ口実を与えてしまっただけなのではなかるうか？

「急に走り出したのはなんで!？」

「今に分かるよ……と」

小町が言ったその瞬間。

体が宙に浮かんだような感覚が走り、いきなりものすごい速さで飛び始めた。木々の間を駆け、土の上を走る。

「……………!」

いや、違う。

周りの景色が急速に後ろに流れているんだ。

まるでスライドショーを見せられているかのように景色のみが動いていて、俺たち二人は全く動いていない。

ベルトコンベアか、動く歩道の様だ。しかし速度が比じゃない。流れる景色は目で追うことさえ困難で、前を向いていると速さの錯覚で頭がくらくらしてきた。

おそらく、十秒と経たなかったであろう。

唐突に景色の流れが終わった。小町から手を離す。慣性は無く、前につんのめることも無く、すたん、と足が地に着いた。

「ほら、着いたよ。ここが白玉楼前の階段さ」

小町の声に視線を移し、見る。

一度視線を外し、

もう一度、見る。

思わず、げえ、と声を漏らした。

……とても長い階段だ、と思った。

……登るのが面倒そうだ、とも思った。

上が見えない。白玉楼に用のある人は、皆これを登って行かなくてはならないということか。

「これ、生者用には出来てないよね」

ゆっくりと小町の方を向く。

「ん？ ああそうか、お前さんは歩いて登らなきゃいけないもんなあたいや幽霊、他に奴らは飛べるから使わないけど」

けらけらと笑う小町に恨めしさを覚えた。修行修行、なんて笑いながら言っている。人ごとだと思って……。

まさかここに来て靈力不足を嘆くことになるとは思わなかった。

いや、普通の人間なら飛べるはずもないし、もう少しバリアフリーに気を使ってほしい。

「で、さっきのは何だったんだ？　なんか、周りが動いていたように見えたんだけど」

「距離を操ったんだよ」

俺の質問に、小町はさらりと答えた。

「……？　つまり、この階段とさっきの場所の距離を縮めて、一瞬で移動したってこと？」

「そういうとき。便利だろう？」

つまりそれが彼女の能力だということか。

本当に、この能力とか言う奴は不思議であり、便利だ。

例えば俺の能力　解除する力なら、目標が例えどれほど強力な封印であっても、手を触れた場所は消し去ることが出来る。またどれほど強力な呪いであっても、触れれば解除できる。それは先日の紅魔館での一件で分かった。

また、俺の意識を対象とした状態異常、例えば幻覚などの類は力を使っていなくても解除される……らしい。ここは紫の受け売りだが。

「確かに便利だよなあ。この能力って奴はどうも反則的だよな」  
不思議なのは、使用者と対象の間に霊力的な差がどれほどあるうとも、能力を行使することが出来るということ。つまり、持って生まれた『個』が、他者や世界をいとも容易く変えてしまうということに尽きる。

「強ければ強いほど、効果範囲や局面に規制がかかる……と、一概には言えないからねえ。とはいえ、万能な能力は多分存在しないし、能力だけじゃあ弾幕ごっこには勝てないのさ。だから多分、色々釣り合いが取れているんじゃないかね」

「そういうもの、か」

しかし紫の境界を操る能力なんかは、チート気味の能力の様な気もする。防御にも使えそうだし、攻撃にも使えそうだ。

「そういえば、なんで能力を使う前に走ったんだ？　もしかしてそれも、万能じゃないことに繋がる何かがあるのか？」

「あー、それはだね」

認識の差だよ　と、小町は言った。

「認識？」

「ああ、例えばお前さんが来た外の世界では、不思議な物事を信じないだろ？」

小町は人差し指を立てながら言う。俺は何となくその指の先に外の世界を思い描いてみた。

「うん。色々考えがある人はいると思うけど……多くは、根本的には信じてない、と思う」

俺だって、「あつたらいいな」くらいだった。

つまりそれは、無いということ的前提にしているのと同じだと思う。

「そういう人がこっちに来て起こすのが、認識のズレさ。常識のズレと言えるかもね。特に、事故で来た人なんかは、ほぼ間違いなく起こす。人間一週間も居れば環境に慣れるとは言うが、問題はその前。向こうの常識を持っている人には、こちらの常識が通じにくいのだ」

「ズレ、か……」

現実の拒絶や逃避なんかとはまた違うのだろうか。

「一気に常識を壊すようなこと　例えば、得体の知れない物に襲われでもしない限りは、この世界を認めようとはしないだろう。頭が固いつて言うんじゃないが、『自分の常識』がある程度まかり通る世界の方が、居心地が良いからね」

そこまで聞いて、閃いた。

「つまりその、常識のズレが起こると、能力や霊力が通じにくくなるって言うことか」

襲われ、目の前で行われたならともかく。

例えば今の小町の能力の様に、本人が知らない状況で距離を操り、先へ行こうとしても、本人の常識がその移動を無意識のうちに否定するということなのか。

「そういうことさ。だから、あたいは一応移動する前に走ったんだよ。ワープよりも高速移動の方が受け入れやすいだろ？」

「なんとなくわかるような気がする」

「そう、外来人に能力を及ぼすのは意外と難しいのさ。自分一人ならなんとかなるんだけどね。……とはいえ、この世界の理はお前さんたちの常識を変える。どうやら走らなくても大丈夫だったみたいだしねえ」

それはつまり、俺はもうこの世界の常識を受け入れている、ということなのだろう。

特別受け入れやすかった、という訳ではないだろう。こっちに来た途端に襲われた様なものだし、常識を打ち砕くには十分すぎる。

幽霊を一度見たらその後も見やすくなる　と偶に言われるが、それは自分の常識外の存在を『在る』と脳が理解するからなのかもしれない。

「……と、ほら、長話をしている間に、お迎えが来たみたいだよ」

小町が顔を上げ、白玉楼へと続く長い階段の先を仰ぎ見た。俺も小町の視線の先を追う。

階段の上から、二、三段、いや十段くらいか？　段を飛ばしながら誰かが恐ろしいほどの速さで駆け下りてくる。

「器用だねえ。これも修行の内、ってことか？」

小町が感心した様な、呆れたような、そんな顔をした。

薄らと人影が見えてきた。

目に映える緑色の服。ボブカットの白髪が、人影が飛ぶのに合わせてふわりふわりと揺れた。

「もしかして、あの人が……」

「そう、魂魄　妖夢。半人半霊の庭師にして、西行寺　幽々子の忠実な従者さ。」

「半人半霊？」

俺はもう一度、飛び降りてくるが如く階段を下りる彼女を見た。

彼女のすぐそばで、何かが……揺らめいた？

「彼女は半分人間。そして、もう半分が幽霊なのさ。ほら、あの周りを漂っているアレがそうだよ」

小町の指さす方を見た。

見間違えでは無かつたらしい。

彼女の周りを、ゆらゆらと、人魂の様な白い何かが漂っていた。

本体？ である人間の体に合わせて、その半霊も一緒に動いている。つまり、一心同体ということなのだろう。

「驚いたかい？」

「勿論」

常識云々とかそういうのでもない。

驚くものは驚く。

仕方ない。

「だろうね」

言つて、小町はまた階段を見た。

相当な長さの階段も、残す所百段と言ったところか。緑色の少女は段々と速度を緩めて

俺たちの二十段ほど上で、ぴたりと足を止めた。

あれだけの速度から、器用なものだ……と、思う。

でも、そうじゃない。

「おい！ その庭師、お前さんたちの御客人だよ」

小町が、階段の上で仁王立ちする少女に声をかけた。が、少女は答えない。

俺を見ている？

「……小町」

少女から目を離さずに、階段を上ろうとする小町を引きとめた。

「どうしたんだい明月、そんな顔して」

不思議そうに振り向く小町に、頭を振るだけで答える。  
立ち尽くす少女の顔は見えない。

しかし、

その手がゆっくりと、刀に伸びていくのを見た。

「小町、早速だけど。力になってくれないか」

「どういう」

白刃が、薄い日の光を受けて一瞬、煌いた。

「まずは 飛んで避けろっ！」

## 二十八章：剣戟纏う二振りの刀

突風。業風。

それは剣の閃きでは無く、最早弾丸のそれであった。  
風の唸りが、俺の真横で雄叫びをあげる。

「っ！ これはどうということだい！」

一振りの剣の向こうに、小町の姿が見えた。

まさに一瞬。段上で身を屈めた少女は、二十段を飛び降り、先刻まで俺のいた場所を断ち切った。

空間さえも と思わせるほどの一閃。

すんでの所で避けることは出来たが、もし少しでも遅れていれば、俺が二人になっていた所だろう。

「小町ッ！ 説明は後だ、今は」

膝をついたまま繰り出された妖夢の二撃目。横薙ぎに振るわれた刀を大きく後ろに飛んで避けた。

「こいつを何とかする！」

二十段上から飛び降りたのにもかかわらず、妖夢はすぐさま体制を立て直し、後ろに飛んだ俺に迫る。

やはり、狙いは俺か！

上段から放たれた剣を、左にかわす。続けざまに振るわれた逆袈裟を、後ろに飛ぶ。

間髪いれずに一太刀。更にそれを、横に飛んで避ける。

「くそっ……！」

ナイフと違って、刀の攻撃範囲は広い。

更に、無意識に刷り込まれた恐怖のせいなのか、いつもより大きな避け方を取ってしまう。

後退一方、体制を整える暇も無い。

加えて。

閃。

閃々。

閃々閃光の如く。

刃の閃きは、止む事無く降り注ぐ。

流れるような動き、無駄を限りなく排除した、合理的、機械的なまでの鋭さ。

風は、刃に遅れて乗る。それほどまでに、彼女の斬撃は迅いのだ。

気を抜けば、一刀のもとに斬り伏せられるだろう。刀を取り出す暇さえない。

このままでは、まずい　そう、思った瞬間。

「明月！」

妖夢の背中越しに、小町の姿が見えた。それは瞬く間に陽炎のように揺らぎ、次の瞬間には誰もいなかった。

そして、その光景に目を疑う俺の隣には既に　小町の姿があつた。

「……！　距離か！」

俺たちが移動したときもこんな風に一瞬のうちだったに違いない。彼女一人なら予備動作もなく、一瞬の内にここまで飛ぶことが出来る。

「こんなことなら、鎌を持ってくれば良かったね……！　素手で刀を相手にするのは厄介だが　」

苦い顔をして俺の前に立った小町に、妖夢が襲いかかろうとしていた。本命は俺だが、邪魔するのなら誰でも……と言ったところか。それは確か、紅魔館の時もそうだった。

妖夢は刀を上段に構え、一気に振り下ろす。

目で追うのがようやくなそれを、小町は体を僅かに傾けただけで避け、黒塗りの草履で刀を踏んで抑え込んだ。

「やるしかない、かねえ！」

気合一声、高らかに声を上げ、前のめりになった妖夢の、がら空きの鳩尾へ掌底を叩きこむ　！

下から上へ。前面から　後方へ。

決りこむような打撃をまともに喰らい、妖夢は一步、二歩と後ろに下がる。小町の顔は、確かな手ごたえを感じたようだった。

「　駄目だ！　それじゃ止まらない！」

動作の止まった小町に向かって、俺は必死に叫び声をあげた。

体の損傷じゃない、今の妖夢を動かしているのは、ただ単純な命令。

まるでその声に反応するかのように、後ろへよろけた妖夢はかかとで土を強く踏みしめ、小町に向かって斬りかかった。蹴りあげた砂埃が舞う。

「今のを喰らって、まだ動くかい！」

小町は舌打ちをすると、くると回りながら後ろに飛ぶ。妖夢の刀が、すれすれのところを切り裂いた。

「なら、出血大サービスだ。しばらく銭と遊んでろ！」

着地と同時に、小町は懐に手を突っ込む。

直後。まるで雨が降り注ぐかの様な騒音と、色鮮やかな壁の様なものが見れば、見え切れないほどの小銭が一面を覆い尽くし、緑色の少女の姿をその壁の向こう隠していた。

小町はなおも銭をばらまきながら、俺の隣まで下がる。

「これで暫くは出てこれないだろう。今のうちに作戦会議といこうか」

一体どこからそれほどまでの量を、と言いたくなかったが、今はそれどころではない。

とにかく、手短かに状況を説明しなければ。

「妖夢は今、誰かに操られている。手っ取り早く治すには、どこでもいい、俺が彼女に触れさえすればいい」

銭の嵐の向こうを警戒しつつ、一気に捲し立てる。

ちらと見えた、妖夢の困惑した表情。間違いなく、以前のものと同じだ。

「さっきのとおり、打撃はほぼ無意味。気絶させるくらいじゃないと、一瞬動きを止めるくらいにしかない。性質の悪いことだが、操られている方の体力なんかお構いなしみたいだ」

咲夜のときもそうだったが、確実に決められるという一瞬の時は、同じく操られている者を巻き添えにしようとお構いなしらしい。

それに、彼女たちはただ操られているだけだ。出来れば悪戯に傷つけたくはない。

「妖夢の狙いは基本的に俺だ。だから小町は、妖夢の動きを封じてもらいたい。あの銭投げ、もっと狭い範囲に出来ないか？」

小町は一瞬難しい顔をしたが、すぐに頷く。

「一応アレも公費なんだが……命には代えられないね。ただし、それなりに時間がある」

「わかった。その時間は俺が稼ぐから、そっちに集中していてくれ」  
一際大きい鉄の音がして、振り向く。

もうすぐあの銭の弾幕も破られるだろう。

「でもお前さん、素手で大丈夫なのかい？」  
がながんと、叩きつけるような鉄の音が近づく。

小町は心配そうに、俺の顔を覗き込んだ。

俺はそれに、無理やりな笑顔を作って、返す。

「なに、刀なら　ずっと持っているさ」

言い終わると共に、目の前を覆い尽くしていた銭の大軍が真つ二つに割れた。

耳障りな鉄の音が鳴り響き、その真ん中から、白と緑の弾丸が迫る。

「小町、後は任せた！」

「ああ、そつちも気を付けな！」

小町はふわりと浮かびあがり、妖夢の攻撃の範囲外へ。

もうこれで、俺を助ける者はいない。しばらくの間は一对一だ。

本物の剣士と。

刀を構えたまま、妖夢は一直線に此方へ向かってくる。

少しの距離など、あっという間に詰められるだろう。だから早く、早く取り出さなければ

「いや、違う、それじゃ駄目だ！」

焦るな。

焦れば焦るほど、形は崩れていく。

深く息を吸い込み、そのまま止める。

敵の構えは上段、ならば振り下ろされる軌道を予測しろ。そして、そこに刀を現せればいい。

抜く必要はない。

目の位置より少し低め、やや右寄りに右手を。

右の手に柄と鐔をイメージする。

余分な力を込める必要はない。それを、握る。

目は開いたまま、目の前の脅威を見据える。

柄の先、反りながら真直ぐ。刃をイメージする、

白銀に輝く刃、人殺しの力、守るために求めた力。

名は無い。  
しかし。

だからこそ、何処にでも在れる力がある。

眼前に、一振りの刃が迫っていた。

無機質な、機械的な一撃。

命を刈り取るうとする一撃。

刀の動きが、やけに遅く見えた。

コマ送りの様に迫るそれは、死の淵に見る走馬灯のそれが、果たして

強く強く、明瞭に明確に、

求めた力を、描き出す。

空気を切り裂くような、鋭い音が響いた。

まるで鈴を打ち鳴らしたかのような、澄んだ音。しかしそれでいて、あらゆるものを断ち斬るよるな鋭さがあった。

瞬くよりも早い、刹那。

七十五分の一秒に過ぎない、ごく短い間の音。

それでも俺には、何よりも長く、何処までも響いていく音のよう

に感じた。

遅れて、右腕に伝わる衝撃。

何も無かったはずの右手には、しっかりと、

夢現を操る刀が握られていた。

呆けている暇は無い。

刀を取り出し、受けることが出来た。だがそれは、当然成されるべきこと。いま大事なのは、先手を打つこと。

目の前には妖夢がいる。この距離なら、いける　！

俺は空いている左手を、妖夢に向かって伸ばそうとする、が

「うわっ！」

妖夢は瞬時に刀を払い、後退し、俺から距離を取った。突然現れた刀に、動きの隙さえ見えなかった。

隙を見て能力を解除しようとした、俺の目論見は見事に外れた。

万事うまくはいかないらしい。

「……？」

さらに、予想外のことが起こった。

距離を取った妖夢はいきなり切りかかることもせず、俺の様子をうかがっているのだ。いつでも飛びこめるように構えてはいるが、その姿は明らかに俺の行動を観察している。

「まさか……」

違う。

紅魔館の時と明らかに違う。あの動きは、俺の能力を考慮に入れた動きだ。解除するためには、手で直接接触することが必要だ。

操作に、ある程度の指向性を与えることが出来るのか　？

躊躇うようなしぐさを見せていた妖夢だったが、再び腰を落とし、飛びかかるように突撃してきた。

袈裟切りで繰り出されたそれを刀で防ぐ。そして、矢継ぎ早に繰

り出される斬撃。

その動きは明らかに、俺の手を警戒したものであった。

集中して、目でようやく捉えられるほどの速さの斬撃が、休みなく繰り出される。刃と刃が打ちあう音。剣戟の音が、絶え間なく響く。

「これ、じゃあ……っ！」

唇をかみしめ、次々に打ち込まれる刀を受ける。

防戦一方だ。

さつきみたいに左手を出せば、今度は一瞬のうちに斬られる。手も足も出ないとは、まさにこのことだろう。

この刀も弾幕を出せる。それを使えば一時的に離すことも出来るだろう。

しかし。

それを使うには、鍛錬が足りなさすぎた。

間をおかずに繰り出される斬撃の間を縫って放てるほど、俺はこの刀を使いこなしていない。

さっきの、刀を取り出すのだってそうだ。今みたいに、敵が真っ向から勝負を仕掛けてくれるとは限らないのだ。

そんな状況であれだけの時間をかけられるはずが無い。瞬時に取り出せなければ意味が無い。

俺は。

迷いに囚われて、進む事をしなかった。

刀の恐怖に負けて、刀を知ることをしなかったんだ。

目を逸らした。

力を知ることが、力の使い方を理解することではなかったのか。恐ろしさを知ることが、初めて分かることがあったはずだ。

迷い、悩みながらも、勧める道はあった。ただそれを、見ないようにしたただだったんだ。

その結果が、今現れている。

誰かを傷つけるとか、傷つけないとか。そういうやり取りというのは、相手と対等か、それに近い実力を持つて初めて言えることだったのだ。

今のこれは闘いじゃない。

相手の一方的な暴力だ。

これでは、自分の身さえ守れない。

絶望的なまでの実力差。そして、自らの失態を痛感し、顔を歪ませる。

その一瞬、目の前から、妖夢の姿が消えた。

背筋に走る悪寒。前へ一歩出て、すばやく半身で後ろを向き、胸を狙う刀をすんでの所で防いだ。

ぎゃり、という今までにない嫌な音が鳴る。付け焼刃の剣術では、今の一撃は捌ききれなかった。初心者の受けに付き合っただけの程の刀だ、刃こぼれはしていないと思うが、それでも良く無い兆候に変わりは無い。

隙を見せたことに舌打ちを衝いて、また一歩後ろに下がる。

今はそれどころじゃない、悔んでいる場合ではない。

なんとか今を凌ぎ、この先へ進む。

その為に俺はここまで来たんだ。

前進と共に繰り出された斬り上げを、辛くも捌き、思う。

段より降ってきた初撃は弾丸だった。

二撃、三撃、繰り返す閃々をかわすのではなく、刀で受けて感じる。

速くなってきた。

確実に、着実に。

刀の閃きだけではない、体捌きもそうだ。今の動き、狙いを読めてなかったら斬られていた。

今こうして打ち合っている中でも、段々と速くなって行くのを感じる。目の動きが追いつかなくなっている。

いや。

いや、違う。

彼女の動きも確かに早くなっている。だがそれ以上に

「つつ！」

防ぎきれなつた刃が掠めた。左手に走る鋭い痛みに呻く。

俺の動きも遅くなっているんだ。

妖夢の一撃は、想像以上に重い。

刀を受けるたびに、その小さな体格からは想像もつかないくらいの衝撃が両手に伝わる。それを何度も何度も捌くのだ。刀自体の重さも加わり、最早、掌の感覚は無くなってきていると言ってもいい。目で追いきれなくなってきたのは、集中力の欠如。

実践と素振りでは全く違う。

相手の動きを見ること、それに対する此方の動き、流れ、場所に合わせた体捌き、全てを考えに入れ、動かなくてはならない。

これが、斬り結ぶということなんだ。

白銀の髪が揺らめく。

それに呼応するように、白銀の刃が迫る。

逆袈裟。

袈裟。

胴。

刺突。

気力、体力共に限界だ。

霞む。

脳に酸素が行き届いていない。

荒い呼吸を吐き、受ける度に取り落としてしまいそうになる刀をなんとか握りしめる。

妖夢の刀を受けるたびに、後ろに下がる。気持ちで押し負けている。

圧力に飲み込まれそうになる。

目の前にいるのは、一人の少女では無く、刃そのもの。

目標を遂行するために繰り出される斬撃。

機械的な鋭さは、素人の俺でも読み易い太刀筋だ。だからここまで受けてこれた。しかしそれ故に 押し潰すような圧力を持っている。

霞んで行く景色と、思考の中、揺れる剣先を逃すまいと、必死で見つめた。

そして。

刀と刀の擦り合う、冷徹な音を。

鋭い音を。

そんな研ぎ澄まされた刃の音さえも切り裂くような。

強く響く声が聞こえた。

「 明月！ 妖夢から離れな！」

その声に、急速に意識を取り戻す。目が覚める。

クリアになつて行く視界。きつと唇を結び、妖夢を見据えた。右  
上段。

振り下ろされた妖夢の刀を、受けずに避けて、空いた右側面に滑  
り込み、駆け抜ける。

空を斬つて迫る追撃に悪寒を感じながらも、ただ、その場から離  
れるために走る ！

「今日死ぬか、明日死ぬか。一里先でも見えやしない。なら、今日  
得た分の金は、今日の内に使うのが華。そら、全部持つてきな！」

投銭「宵越しの銭」

空から降り注ぐ、雨の様な、滝の様な、華やかな銭の弾幕。

大量の金、銀、銅。煌びやかな弾幕が、洪水のような激しさで妖  
夢の体を包み込んで行った。

銭の竜巻が、妖夢の姿を完全に閉ざす。

「 今だ、明月ッ！」

「！！！」

銭の竜巻に向けて、飛びこむように。

狙うはただ一瞬。

刀を下に構え、

土を蹴り、駆ける。

「うおおおおお！！」

竜巻の前が割れ、妖夢の姿が再び現れた。逆袈裟、斬り上げ。体にとりつく銭を斬っていたのだらう、丁度振り終わりの体勢。

最後の気力を振り絞り、更に加速した。銭の嵐の中に突っ込む。あと二歩で手が届く。

視線が交差して

妖夢は銭の嵐の中、突撃してくる俺の姿を認めると、斬り上げた剣を予想もつかぬ速度で斬り返した。

振り上げた刀は水平に、銭に阻まれ火花を散らしながらも、左から胸を打とうと襲いかかる。

「なら、こうするまで！」

両手で持っていた刀を左手に持ち替え、迫る白刃を正面から受けた。

両の手で振るわれた刀の重さが左手一本にかかる。銭の壁で失速したとはいえ、それでもかなりの衝撃があった。ねじ切れてしまいそうになる手首と、鈍い音を立てる刀。

それでも構わず、右手を伸ばした。

今この瞬間を逃せば、もう後が無い。これが最後の力だ。助ける。

妖夢を、そして俺自身を！

妖夢は身をよじり、後ろに下がろうとする。しかし、分厚い銭の壁がそれを阻む。

そして、

右手が、伸びて、

緑色の服。

あと少し。

前に踏み出し、  
右手を突き出す。  
詰める、詰める。

触れた。

瞬間、妖夢は憑き物が落ちたように、その場にへたり込んだ。手に持っていた長刀が、カランという音を立てて地面に落ちる。

「わ、私……」

ぼかんとした顔で、掌を見つめ、体を見て、最後に俺を見た。  
解除成功。

「なんとか、なった」

俺は操り人形の糸が切れたかのように、妖夢と同じくその場に崩れ落ちた。これぞまさしく、緊張の糸だ。

座り込んでいる妖夢を見た。見たところ、何処にも怪我はない様子だ。

体を操られることによって、肉体的な無茶もきくようになってしまった。例えばさっきの小町の一撃のように、だ。終わってしまったえば精神的に禍根を残さないのは救いだ、体の方への負担が怖い。

でも、それも無いようなので、とりあえず一安心。安堵のため息をついて、空に少しづつ巻きあがって行く銭の先を仰ぎ、そこに小町の姿を認める。

近づいてくるその姿に向かって手を振り、闘いが終わったことを告げた。

「 本当に、申し訳ありません！」

妖夢はこれ以上ないくらいの角度で、頭を下げた。背に括りつけた二刀が揺れる。

「もう良いよ。操られていたんだから、しょうがないさ。それより怪我はない？ 俺はその方が気がかりだけど」

俺は両の手を突き出して、必死に頭を上げさせる。

この件に関しては、犯人以外に恨みを持つつもりはない。

「はい、体に異常はありません。……ですが」

しかし妖夢は、それでも顔を曇らせるのであった。申し訳なさそうな眼が俺を見つめている。

「いえ！ やはり土下座を」

妖夢はふるふると頭を振った。俺は狼狽しながらもそれを引きとめる。

「いやいやいやいや、だからそこまでしなくていいって！」

「では頭を」

「まあ、そこらにしときなつて。お前さんら、何回そのやり取りをする気だい。日が暮れるよ？」

見かねた小町が、呆れ顔でとうとう口を挟んだ。

「そうそう、ここに来るまで随分時間がかかったし、そろそろ向こうに行ったほうがいいと思うんだ」

小町の後押しを得て、俺も話を逸らす方向に持って行く。そう。

かれこれ三回ほどこのやり取りを繰り返しているのだ。

そして今まさに、妖夢が頭を下げて、本当に申し訳ありません、のくだりが繰り返されようとしていたのだった。今回は何とか阻止

することが出来たわけだが。

「……そう、ですね」

妖夢はようやく落ち着きを見せる。しかしまだうなだれている。生真面目というか、本当に真直ぐな性格なんだろう。

「ええと、とりあえず自己紹介をしておくよ。俺は八代 明月。ここに用事があってここまで来ました」

「はい、主から承っています」

妖夢はさつと居住まいを直し、俺の目を真っ直ぐに見つめた。

「申し遅れました、私は魂魄 妖夢。西行寺 幽々子様の剣術指南役兼、白玉楼住み込みの庭師です。以後、お見知り置きを」

極めて礼儀正しく、妖夢はお辞儀をした。先ほどまでの沈痛な面持ちとは打って変わって、どこか風格を感じさせる態度であった。

名乗りを上げるときは居を正す。つまりこれは、主の面目、家の面目を立てるという意味合いもあるのだろう。

やはり真面目と言わざるを得ない。

「……今回の件に関しては、その」

やはり生真面目と言わざるを得ない。

「ああ！ そっぴや小町はここで帰るのか？」

俺は妖夢の声を遮るように大声を出して、小町を振り返る。

「え？ ついてくよ？」

予想外の言葉が返ってくることとなった。

「……え？」

さも当たり前のように言い、不思議そうな顔をする小町。

「当然だろう？」

しかも言葉にした。

いいだろ？ と小町は妖夢にも問いかけた。妖夢は少し逡巡したが、結局頷く。

「あー。うん、もういいです……」

諦めて口をつぐむ事にした。

幻想郷から来て、三途の川床で彷徨っている幽霊を思い浮かべた。

多分それは、妖夢の周りを浮いているのと同じような奴だと思っ  
ふわふわと頼りなさげに河原を飛び回る幽霊。

心の中で謝罪する。

「それでは、案内しますのでついてきて下さい。と言っても、まっ  
すぐ行くだけですけど」

妖夢に促され、心の合掌を止めて頷いた。

妖夢が宙に浮き、次いで小町が浮く。そして俺は

まあ、浮く訳も無し。

そうこうしている間にも、二人は階段を上がっていく。  
置いて行かれてはかなわない。階段に足をかけ、二人を追いかけ  
る。

浮くことも無し。

自分の足で、だ。

「小町、なんか速くない？」

何故か先頭に立つはずの妖夢より速い小町に、疑問を投げかける。  
歩いて登るのではない。駆け足で俺は階段を登っている。

「ほら、あたい『せんどろ』だからさ」

振り返って、満面の笑みを浮かべた。

字が違う。

「ちよいと小町さん、俺、見ての通り一般人でさア、飛ぶことなん  
ぞでいいのかよ。そこんとこどう思われます？」

「頑張れとしか言いようがないさねェ」

そして、くるりと前を向いた。

「ちよい待てい！」

無視された。

無駄話をしたせいで少し息が上がる。

救いを求めて、ちらと妖夢を見た。

心配そうにちらちらと俺を見ている。

良い子だ。

子、と言うには多分、俺より年上だけど。でもいい子だ。

見た目は幼い少女、けれど経た年月は……というのが、この世界の妖怪たちの理だ、と決めつけた。妖怪とは違うが、閻魔様もそうだったし。妖夢は幽霊だけど、多分あつてるだろう。

そもそも、経た年月で老けるのではなく、魂や体で老けていくんだ、と思う。思い込んでおく。

だから見た目で、良い子だ、と言っておく。

でも速度は落としてくれないのね。

段々息が上がってくる。

ここに来て、身体能力は向上したし、基礎体力も上がった。そのおかげで刀も使えたわけだし、それなりに闘うことも出来た。

回復力だつて上がっている。

しかし、ほぼ極限状態になるまでさつき闘ったばかりだ。

流石に、辛い。

それに、俺は思うのだ。

この階段という奴は、どこか根源的な疲労の要素を秘めているのではないかと。

他のどんな複雑な運動よりも、『階段を上る』という単純にして身近にある運動。しかも、ただ単純というだけでなく、マラソンや走り込みとはまた違った何かがあるような気がしてならぬのだ。

この、階段を上るといふ単純明快な運動のどこに、絶望的な疲労があるのか？

俺はその答えを見つけあぐねたまま、ふと上を見やる。

長く続く階段。今ようやく、遙か向こうに頂上が見えたような気がした。

大きな音でもなく派手な音でもなく、ただただシンプルに  
ぽきん、と。

心が折れる音を聞いた。

## 二十九章：西行寺

無駄に長い階段を駆け上り、薄茶色の地面と、紅く色づく木々の間をしばらく駆け抜けて行くと、ある大きなお屋敷に辿り着いた。

白玉楼。冥界の主、西行寺の持ち屋だという。

全体を見回して、伝統的な日本家屋、と感じた。いつかどこかの観光地で見たような武家屋敷を、そのまま限りなく大きくしたような屋敷だった。

聞けばこの屋敷は、相当古くからここにあったという。だということに、屋敷の何処にも老朽化を感じさせる所は無かった。

ここが冥界だから　なのだろうか？　時間が止まっているというより、元より生がない。だから、年を経ることも無い。

妖夢の案内を受け、大きな門をくぐる。

綺麗に整えられた石畳の上を歩く。こう言う所は、なんとなく草履やげたを打ち鳴らしながら歩きたいと思う。

そんなことを考えながら、これまた広々とした玄関を上がる。見事な漆塗りの框がやけに印象に残った。埃一つ積もらず、曇りも汚れも無い鮮やかな縁甲の上を歩く。

三人分の足音が、軽やかに響く　様に聞こえた。

しかしよく聞けば、規則正しく聞こえるその中に、一つだけ、雑音が混じっていた。

見れば、足元もおぼつかない。ふらふらと、頼りなさげな足取りで板張りの廊下を歩く。加えて、息遣いも荒い。冥界の静寂さの中で、それは一種異様なものにさえ思われた。

前を歩く二人が何か話している。が、その話に加わることも無く、ただよるよると後を突いていくばかりであった。

そのうち襖の開く音がして、とある一室に通された。

襖を滑らせる枠、こう言う所には良く埃が溜まるものだが、塵一つ落ちていない。掃除が行き届いている証だろう。畳の目も綺麗で、

いぐさのささくれ立ちも無い。これも冥界だから、というよりは、しっかり整備されているからのように思える。

妖夢に促され、障子側、奥に座る小町の隣の座布団に座った。

「それでは、幽々子様を呼んできますのでしばらくお待ちを」

そう言っ出ていく妖夢を見送り、背もたれに体を委ね

そこでようやく、俺は顔を上げることが出来たのであった。

「お、ようやく生き返ったね」

緩慢な動作で振り向く。

俺の顔を見て、小町は吹き出した。

「……………」

多分、相当ひどい顔をしているのだろう。なんか悔しいので見続けてやろうか。

手をかざし、必死に俺の顔を見まいとする小町。

何も言う気にもなれず、このまま見続けるのも癪なので、ただ天井を見上げた。息苦しい時は下を向くか、上を向くかに限る。

無駄に長い階段を無駄に速い駆け足で登った拳句の果てに、登った先から御屋敷までの間も走った。

長い距離ではない。長い距離ではないのだが。体力を使い切るのには十分だった。

「でもさ、思ったより早くつけて良かったじゃないか。時は金なり、偶には齷齪するのでもいいだろう？」

どの口がそれを言う。

というか、なぜこういうときだけ急ぐ。もっと急がなければならぬことは多々あるはずだ。

いや、もしかしたらあの速度が常なのかもしれない。意外と飛んでいくというのは速いものだ。

ただその速さは、俺にはない。飛ぶのがどれほどの体力消費かは知らんが、俺の場合は体力が一気に減って行くのは確かだ。

「……はあ」

ああ、水が欲しい。

この際熱々のお茶とかでも構わないから、何か飲み物が欲しい。床の間の掛け軸の下にある、生け花の花瓶を見た。

「おいまさか、あそこから水を飲むだなんて言わないだろうね!？」

「……しないってば」

腰を浮かし、真剣な顔で覗き込んでくる小町に、明確に否定して返す。

人としてのモラルは持っている。

「なんだ、そりゃ良かった」

小町は本当に安堵した、といった顔でまた座布団に腰掛けた。

「あのね……」

俺は恨みのこもった目を小町に向けた。しかし、そんなものどこ吹く風という様子で、小町は目の前の漆塗りの机を弄っているのであった。

ひきつった顔を送った後、嘆息し、小町から視線を外した。そして、部屋をぐるりと見回す。

ここが白玉楼の客間、だろうか。それにしても広い。

外から見た限りでも広かったが、中はそれ以上に広がった。部屋数も相当のものだろう。旅館と言っても何ら差支えが無い。まあ、実際昔の武家屋敷なんかはかなりの広さを持っていた所もあったよ。うだし、今の時代の建物が狭すぎるのかもしれない。

博麗神社でさえ俺の部屋よりは遥かに広がったのだし。我が家の広さは、あの簪の少女の仮住まいの小屋と同じくらいだろう。

そしてその屋敷よりも広いのが、庭だという。

おそらく門から入った時に少し見えただろう。が、俺は地面しか見えなかったので分からない。

どうもこの部屋は庭に面しているようなので、障子を開けば見ることは出来そうだが。

立ち上がりかけて 結局止めた。今のこの体力で、風情など味

わうことが出来ようか？

そのうち、見る機会もあるだろう。その時は、じっくり景色を見た  
いものだ。

白玉楼に来るまでに見た、紅葉し、鮮やかに色づいた木々を思い  
出す。……大半は見れなかったが。

しかし、こうして地獄、冥界と訪れて、自分の持っていたイメー  
ジがどんどん崩れていくのを感じる。

特にここ。冥界はとても明るくて、清浄だ。

死者「暗いという、固定観念に縛られていたせいで、特にそのギ  
ヤップから来る驚きが凄い。

死者の世界で言うのは変かもしれないが、確かに生を感じるのだ

机を弄る手を止め、小町は顔を上げた。

「そういやお前さん、ここに弟子入りしに来たんだよな？ そした  
ら、神社の方はどうするんだい？」

「あー！ そうだ、確かに。どうすればいいんだろう」

なし崩しというか、半ば無理やりここに来た様なものなのだ。

紫のことだ、霊夢に一言言ってくれてはいるとは思っのだが、確  
かにこの後のことは全く相談していない。

例え弟子入りを許可されたとしても、ここに逗留出来るかどうか  
も分からないし。

「神社からここに通う訳にもいかないしな……。ここに居させても  
らえれば一番ありがたいけど、そうしたら神社の方と連携が取り辛  
くなるし」

「ここに留まるにしろ、いったん相談しに帰らないと駄目ってこと  
だねえ」

「そうなるかな。……はあ、こう言う時に紫の力が欲しくなるよ」

「人間楽してばっかじゃ駄目になるよ？」

小町は俺を見て、含み笑いをした。

「死神なら、楽しんでいてもいいのかね？」

言い返すと、小町は頭を掻いて笑った。

地獄の死神という点から見れば説得力はあるが、小町に言われたところで効果はない。

「……ま、とにかくこの主に話を通さない限りはどうにもならんね」

そう言っつて、小町は背もたれに深く腰掛けた。

「そついや、その主　西行寺っつていうのは、どついう人なんだ？  
今俺が知つてゐるのは、女性とつことと、冥界の管理をしてゐるとつことだけ。

そこから想像すると出てくるのは、凜としてゐて、どこか近寄り  
がたい　例えばあの閻魔様の様な。そついう姿をイメージするの  
だが。

何分ここにおいては、俺の想像とつものものは全く役に立たない。

「そつだねえ……」

小町はあごに手をあてて唸る。

勿論、想像外の中にはこの江戸っ子氣質のサボり死神も入る。

陽気な死神なんて、思いもしなかつた。まあ、気楽でいいけれど。  
節度さえ守れば、とつ条件はつづくが。

「一言で言えは、変なお人だね。なんだか説明するのが難しい、そ  
ついう人さ。管理職にありがちな、恐ろしいとか、お固いとか、そ  
ついつた性質じゃあないんだが。あれこそ、柳の下の幽霊　つて  
奴なのかね」

あごに当てた手を下ろし、胸の前で腕を組む。小町自身、自分の  
説明に納得がいかないふうに見えた。

確かに良く分らない。とつことはつまり、良く分らない人  
なんだろう。

「いやま、礼節に厳しい人なら、しゃんとしないとイケない、と思  
つただけだから。そつまで深く考えなくてもいいよ」

「……お前さんも、やっぱり根は真面目なのかねえ」

「はは、怒られたくないだけなのさ」

しみじみと俺を見る小町に、笑いながら返す。多分、瞳の裏に去来するのはあの人であろう。

そういえば、何とかの管理人とか、上級の役職とか、そういう人たちは皆礼節に厳しいと、そう思い込んでしまつのは何故だろう。小胆な故か。

「俺もあまりに固すぎる人はなるべくなら近づきたくはないけどね。ちよつとは手を抜きたいと思つてしまつ」

「だろう!?」 そう、お前さん聞いておくれよ、あの御方つたら酷いのなんの……」

机を蹴りあげそつな勢いで身を起こし、熱弁をふるう小町。

「だから節度が」 そう言い掛けたところで、障子に映る影に気付いた。

部屋の中に差し込む光が切り取られた様に薄くなる。

しかしそれも、ほんの一瞬のことだった。

細い指が差し込まれ、障子が軽い音を立てて滑らかに開く。庭に面している障子に開いた隙間から、柔らかな午後の陽ざしと、少しの風と共に、誰かが部屋に入つて来た。

小町もそれに気付き、体を捻つて障子の方を向く、俺は突然の光に目を細めて、その誰かを見定めようとした。

「西行寺 幽々子……さん？」

誰か、は後ろ手に障子を閉める。日差しがゆっくりと絞られていき、部屋の中の光が段々と薄くなって、誰か、の顔を明瞭に映した。

そこにいたのは、紫だった。

「あ」

あんぐりと口を開けた状態では、あが一番発声しやすい。

紫はそんな俺を見て、手を振り、にこやかに微笑んだ。そして小

町の姿を見定めると「あら、サボリ？」などと口にして、机の対面に腰掛ける。

「いや、迷子の外来人を届けにここまで来たのさ。これも仕事の一環だ。迷える魂を導くのが船頭の仕事。うん」

「動かない船なんてただの置物よねえ。邪魔で仕方ないと思わない？」

どこから取り出したのか、紫はいつの間にか湯呑みを持っていた。一口飲む。

「三途の川の無限なら、小舟一艘くらい小さなもんだよ。それに、あたいはちゃんと仕事もする」

俺はそんな二人のやり取りを、呆けながら聞いていた。

絶句とまではいかないだろう。簡単な単語だが、「あ」という言葉くらいは出た。だが、こうした無益なことを考えるくらいには、放心しているのである。

心が何処かに飛んで、客観的にこの場を見ているよう。

疑問、というより驚きというべきか。

「な、なんで紫がいるのさ」

そんな言葉を、ようやく口にした。

「あなたが来るのがあまりにも遅いから、探す道すがらここに来たのよ。死神なんて連れて、何処に行っていたのかしら？」

我ながら、なんとも間抜けな質問をした。

確かに、送った筈の人がいなければ探すのは当然だし、行き先からも連絡が来るだろう。

今言うべきは、そこではなくて。

「白玉楼まで普通に来られるなら、最初から一緒にここ来ればよかつたじゃないか！！」

そんな言葉を、ようやく口に出来たのだった。

「ああ……………それはね、一応人間が入るには順番があるの。物事、筋道を立て、道理に従い、順序良く行かないといけないのよ。冥界のど真ん中に突然生身の人間が現れるなんて、普通じゃないでしょ

う？ 危険よ。凄く危険」

「……うーむ、確かにそう考えれば納得できるような  
出来ない様な。」

俺はこの世界のことをほとんど知らないから、実際のところは分からない。だから、色々知ってそうな紫に言われると、信じてしまいそうなのだ。

がしかし、一瞬眼が泳いだのは見逃してない。

「それで、どうしてこんなに遅くなったのかしら？」

紫は小町と俺を交互に見比べながら、言った。

あからさまとは言わないが、話が変わる。

ということとは。

つまり、順番云々は瑣末なことなんだろう。本当に重要なことから、俺が見抜けるような嘘はつかないだろうし。

多分、気まぐれか何かで連れてかなかっただけだろう。弟子入りするならちゃんと正門から入って云々とか、案外、そんな簡単な理由かもしれない。

ただ、その気まぐれのせいで

「迷った拳句の果てに三途の川を渡って裁判にかけられそうになる寸前で気付いてもらって冥界まで案内してもらった」

早口で捲し立て、一息に言いきった。ついでに紫のお茶を強奪しようとして手を伸ばしたがかわされた。

簡潔に、事実だけを並べたのだが、良く考えると間抜けな話しの様な気がする。

「迷った？ まっすぐ行くだけなの？」

首をかしげる紫に、頷き返す。

紫は難しい顔をして黙り込んだ。

「お前さん、重度の方向音痴なのかい？」

真っ直ぐ行くだけ、という事実を今初めて知ったらしい小町。おそらく、複雑な道のりを歩いて来たとも思っていたのだろう。

驚きがありありと見てとれる。

「いや、俺はそこまで酷くないと思っただけ……」  
事実、迷宮の様に入り組んでいた俺の家の周りさえ、迷ったのは二回だけだ。

地図の把握するのも早い方、だと思っている。

「明月」小町は俺の肩に手を置いて、首を振る。その目は、雄弁に『何か』を物語っていた。

「は、はは……」

乾いた笑いしか出ない。

本当に、そこまで酷くはないと思うのだけれど。

「それで、今に至るのね。船頭はサボリ、と」

紫は断定するように言った。

まあ、まさしくその通りだけど。

「……内緒にしてくれよ」

「ええ勿論、私もあの人にはあまり関わりたくないですから」

微笑みながら答える紫に、小町は安堵の表情を浮かべた。

のだが、傍から見ると約束の成立自体が危ういように思える。

「結果的に、小町が付いてきてくれて助かったんだけどね……。そ

の、実はさつきっ」

そこまで言って、突然何かに口を押さえられた。

見れば目の前にスキマが出来ていて、そこから紫の指が出ている。

何事かと思つて紫を見る。

「その話は、皆揃つてからにしましょう。……ほら、主も来たみたいだし」

その言葉に合わせたように、す、と襖が開いていった。

微かに香る、花の匂い。

鼻孔の奥に沁み込んで行くような、柔らかな匂い。彼岸で嗅いだ、無遠慮なほどの匂いではない。

どこか懐かしい様な。

吹けば消えて　そう、微かな動きでできた風にさえ、消し飛ば

されてしまう様な。

そんな香り。そして

蝶を。

桜の色に似た蝶を幻視した。

桜の花びらの中で、ゆらゆらと舞い踊る蝶。

一面に散らした薄紅と、踊るように浮かぶ、ひとひらの蝶。舞い落ちる桜の花弁と溶けて、解けて。

今は秋だ。

勿論、桜なんて咲いてないし、蝶々なぞ飛んでいるわけがないのに。

実際俺の目に映ったのは、薄い青色の和服の、桜の花模様と、彼女の桜色の髪だったんだろう。

幻を破るこの瞳の中に、それでも確かに見えた。

そう、思ったのだ。

「お邪魔しているわ、幽々子」

「紫？ ……ということは、『お客様』が到着したのね」

彼女はくるりと部屋を見回す。軽くウェーブがかかった、肩まで届く髪が揺れる。

紫を見て、小町を見て。最後に、俺を見た。

薄紅の瞳が、桜の花びらよりも少し紅い目が、俺を見据えた。声を出すことも出来なかった。

彼女は、そう、西行寺 幽々子は、微かに。

幽かに、笑った。

幽々子は、丁度俺の目の前に座った。静かな衣擦れの音、揺れる前髪。俺は彼女の一挙手一投足、余すところなく見続けていた。

目を奪われた。

西行寺 幽々子は、美しかった。

立ち居振る舞いとか、身につけているものとか。

きめ細やかな肌の綺麗さとか、顔立ちが整っているとか。違う。

そういうものではない

確かにそれらは美しさを構成する要素であろう。実際、彼女の振る舞いは優雅だったし、顔立ちも良い。

でも違う。

言ってしまうばそれらは誰でも持ちうるものなのだ。

そうじゃない。

西行寺 幽々子の美しさは本質が違う。

ありふれた言葉にするならば

この世のものではないこそその、美しさ。



出来た気がした。

「私は、西行寺 幽々子というのだけれど。あなたの名前は？」

その声で、俺はやっと我を取り戻した。

幽々子を中心に、視界が急速に広がって行くのを感じる。

良く見れば、幽々子の右斜め後ろに、妖夢が正座をしていた。おそらく幽々子と一緒に部屋に入って来たのだろうが、俺には見えていなかったらしい。

呆れるほどの集中力だ。

「八代明月、です」

自覚するともに恥ずかしさがこみ上げてきたので、俺は少し伏し目がちに言う。

「明月、ねえ。誕生日が満月の日だったりするのかしら？」

「え？ い、いえ、そんなことは無かったと思いますが」

「そう？ まあいいわ。よろしくね」

呆氣にとられる俺を尻目に、幽々子は微笑みながら手を差し出す。握り返した掌には、やはり温もりがあった。

「さて、皆揃ったことだし」

紫がそう切り出そうとしたところで、

「おやつにしましょう！」

元気のいい声と、ぱん、という手を叩く音が聞こえた。

やや間が合つて「はい？」と。

にこやかに笑う幽々子ただ一人を除いて、その場にいた全員が口を揃えて発した。

疑問の四重奏である。

特に示し合わせた訳でもなく、ただ自然に、口から漏れ出たのだ。

「幽々子、いくらなんでもそれは……」

見ればあの紫でさえも頭を抱えている。

小町はそこまで驚いている様ではないが、言葉を失っていた。

今の時刻は確かにおやつ時だが、そういう集まりではない、と少なくとも俺はそう思っていたのだけれど。

小町の言ったことの片鱗を感じ始める。

「あら、でもあなたが持たせたのはそういうものでしょう？ 妖夢、お茶」

悪びれる様子も無く、幽々子は後ろに控えている従者に声をかけるのであった。

当然、他三人のことなど眼中にも無い。

「ゆ、幽々子様。お茶は良いのですが……また、間食ですか？」

半分腰を浮かせた妖夢が、しどろもどろになりながら聞いた。幽々子はそれに、満面の笑みで頷きを返した。

妖夢は諦めたように溜息をついて立ち上がり、襖に手をかけて振り返った。

「幽々子、おやつは何か良いですか？」

「お茶だけでいいわ」

妖夢はその返事に首をかしげながらも頷き、一礼して部屋を出て行った。

確かに、おやつのお時間におやつが無いというのも変だ。蓄えが無いのを見抜いた、という訳でもないだろう。

それに幽々子は、何故か俺を いや、正確には俺の腹のあたりを見ながら言ったのだた。

そして、待ってましたと言わんばかりの様子で、幽々子は手を差し出した。

勿論。

俺に向かって、である。

「……？」

一瞬、沈黙が流れた。

何故俺に向かって？ 本当におやつが無いならなら、横のスキマに頼めばいくらでも出てくるような気もする。

「もう、忘れちゃったの？ 懐よ、懐」

「あ！」

それを思い出したと同時に、さっと血の気が引いた。慎重に懐をあさると、手に着物ではない別の布の感触が伝わってきた。

そう。

出発前に、紫に手渡された謎の包み。懐にしまっていたのをすっかり忘れていた。

すっかり忘れてしまうほどに、緊張していたということなのだろうか。それにしても、結構大きさがあるのに。

「これ……でいいんだよね」

おそろおそろ風呂敷包みを取り出し、幽々子に細心の注意を払いながら渡す。

幽々子が笑顔になるのを見て、言いようのない不安が広がって行く。

「なんだい、それ？」

小町が興味深げに風呂敷を見つめる。

中身はまず間違いなくおやつ系の何かだよ、小町さん。

ただ……一つ問題があるのだ。

「中身は、それはそれは珍しいお菓子よ。偶々手に入ったから、どうせなら一緒に食べようと思ったの」

紫が、嬉しそうに風呂敷を解いている幽々子を見ながら言った。心なしか紫も嬉しそうである。

この二人は仲が良いのだろうか？ 多分、そうだとしたら長年の友に違いない。かたや亡霊、かたや妖怪だし、交友は長いと見て間違いないだろう。

ただ、おかげで嫌な汗が出てくる。

そして意外にも、小町もその珍しいお菓子に興味を示していた。甘いもんは嫌いだ、とか言いそうなものなだけだ。偏見か。

やはり、女の子なのだなあ……。

と、意外な一面の発見にうつつを抜かしているわけにもいかず、目の前の三人を見るたびに、そして風呂敷が解かれていくたびに、不安は募る。

散々 動き回った。

散々 暴れまわった。

結果、その風呂敷の中がどうなっているのか。

紫は、ある程度なら動いても問題ないと言っていた、と思う。

ただ、斬り結ぶことを想定に入れていたかどうかは甚だ疑問だ。

というか、まず入れてないだろう。

形が崩れるものだったら完全にアウトだ。

九回裏、点差三点、二死満塁のチャンスで打った打球がセンターフライでしっかり取られてゲームセットくらいにはアウトだ。

しかもそれが今シーズン最終試合で、その一勝で逆転負け、優勝を逃すというアウト。

やりたくてやったわけじゃない。やらなきゃいけなかったからやった。

それに、本当に危険なものなら俺なんかには渡さずに自分で渡せばよいのだ。そもそも、俺に預けた意味が分からない。

弁護の言葉をいくつか考える。責任の所在は俺だけにあるわけでは無いから、言い逃れは出来そうだが、それでも嫌な汗はどうしようもなく流れる。

嚴重すぎると思えるほど、その何かは幾重もの風呂敷で覆われて

いた。既にその大半はほどかれ、蝶々が何匹も折り重なっている。そしてとうとう、最後と思しき風呂敷に幽々子は手をかけた。そつと開いていく。

目を逸らしたくなるが、俺は見届けなくてはいけない。  
この行く末を。

包みが開かれ、そこにあつたのは。

ひよこだった。

「つて、ひよこっ!?!」

小町が、叫び声を上げる俺に驚きの目を向ける。幽々子は箱の蓋を取ろうと躍起になっている。が、特にそれらは気にならない。

目がおかしくなったのかとも思って、何度も瞬きを繰り返し、目を擦った。しかし、何度見てもそれはひよこでしかなかった。

白い箱に、可愛らしいひよこが描かれた蓋が取られ、幽々子がその中身を一つ取り出し、うっとり眺める。

それはやはり、何処からどう見ても  
岡銘菓 子  
であつた。

なるほど、確かに「それはそれは珍しい」お菓子だろう。幻想郷に居ては絶対に手に入らない物だ。

それを手に入れることが出来るのは、外と自由に出入りが出来る紫だけ。

「へえ、もしかしてこれ、外の世界のお菓子かい?」

小町もそれを一つ箱から取り出し、しげしげと見ている。ビニ-

ルで個別包装されたお菓子なんて、やはりこの世界にはないだろう。「そうよ。外の世界でちょちょい、とね。明月にはなじみ深いものかしら？」

「食べたことはあるけど、なじみ深い、というほどではないかな。都心に住んでるし、お土産代りに買うこともないし」

答えて、ふと幽々子を見た。ビニールの包みが一つ既に開けられている。

もう食べたのか、と思いきや、掌にそれを載せて、相変わらずうっとり眺めていた。あまりに嬉しそうで、よだれでも出しそうな勢いだ。

幽々子がそれを目の高さを持ちあげた所で、まるで示し合わせたかのように襖が開き、妖夢が部屋に入ってきた。手に持っているお盆から、五つ分の湯気が立ち、微かにお茶の香りが漂う。

「幽々子様、お茶をお持ちしました。……なんですか、それ？」

お茶を並べながら、妖夢が不思議そうな顔で幽々子の掌のひよを眺めた。

いつの間にかお菓子がある、しかもそれは自分が見たことのないもとなれば、その反応も至極当然だろう。

俺が口を開こうとしたその時、幽々子は手の中のひよこを妖夢に向けると

「ひよ」

無邪気な子供の様な笑顔を浮かべて、楽しげに、そんなことを言った。

流石にそれは 反則だと思う。

見れば妖夢も、呆気にとられたような顔をしていた。お茶を配る手が止まる。

ああ……これで。

俺が合う前に抱いていたイメージは、徹底的に、引き臼で摺り潰

したように、粉々になったのであった。

……多分、良い意味で。

予期せぬアクシデントにも負けずに、お茶とひよ　が全員に行き渡った。

妖夢も幽々子に促され、今度は俺の右隣に座った。やはりひ　子が気になるようで、色々な角度からそれを眺めている。

両手に花　なんて邪念が頭をかすめたが、かぶりを振ってそれを払う。今はそんなことを考えている場合ではない。

今から話すことは、件の襲撃に繋がる話なのだ。

お茶を飲む手を止め、紫が口を開く。

「じゃあ、今ここに来るまでに何があったか。説明してくれる？」

紫は、俺と妖夢を交互に見た。

「ああ。　白玉楼の階段前で、妖夢に襲われた。十中八九、例のヤツだと思う」

「例のやつ、が何かは分かりませんが、体の自由が利かなくなったのは明月さんを見てからです。それより前は何ともなかったんですけど……」

申し訳ない、と妖夢はまた頭を下げた。

「私から、事情は軽く説明するわ」

紫は、今までに起きたことを掻い摘んで説明した。

俺を狙う謎の敵と、人を操る能力。予想外の『神隠し』事件。

小町と妖夢は真剣な面持ちでその話を聞いていたが、幽々子はあまり興味が無いようで、　よ子をどのようにして食べるかに夢中になっていた。

実際彼女に被害は無いし、関わり合いの無い方が彼女自身のためにもなるだろう。いくら妖夢が操られていたといえど、狙いは俺だけだ。

出来れば、巻き込まれない方がいい。

「……では、私の体もそいつに操られたと言うのですか」

紫の話聞き終えて、妖夢が口を開いた。

「ええ。妖夢、何か思い当たる節は無い？ そうね、例えば……誰かに触れられた、とか」

「触れる？」

「誰かを意のままに操る。強力な能力なのは確かだけど、おそらく何か条件があるわ。相手に効力をもたらす力なら、触れるのが一番それらしいと思わない？」

紫の言葉に頷き返す。確かにそれはもつともだ。

もしその操る能力が、触れる以外で発動できるなら、紅魔館で会話したパチュリーにかかってないのはおかしい。状況を見たわけではないが、おそらくかなり近くに居たはずだ。

ほぼ確定だと思うけれど、咲夜とレミリアから、もう一度詳しい状況を聞き出さなければならぬかもしれない。

「そう言えば！」

俯いていた妖夢が、いきなり顔を上げた。

「先ほど人里に買い物に行ったのですが、その時誰かとぶつかりました！もしかしてあれが……？」

「可能性は高い、と思うわ。それより以前に接触していた可能性も否定は出来ないけれど」

「姿を見せないなんて、なかなか陰湿な奴だねえ。それとも、何か見せられない理由でもあるのか」

「本体の力は意外と弱い、とか？」

思い付きで言ってみたが、この可能性もある様な気がする。敵の目的は俺の抹殺とはいえ、他人を介する手段では確実性に欠ける。現に、運が良かったとはいえ二回の襲撃を退けたわけだ。

「このこと外界の境界を破るのは簡単なことではない。何らかの能力を使ったならば、その限りではないけど……いつか闘う敵を下に見るのは良くないわ」

紫は憂鬱そうに顔を顰めた。

境界を歪ませること、それはこの世界の崩壊にも繋がる。紫

の懸念は、そこにあるのだろう。

こつちに来てから、始めに学んだことの一つ。

外の世界の文明と袂を分かつしかなかった妖怪は、俺たちの世界の常識では存在しないことになる。外界に出てどうなるかは俺には分からない、しかし、最悪の状況を想像するのは難くない。

「備えあれば憂いなし、って奴だね。地獄からも帰れないんじゃない、いずれそいつを懲らしめないといけないんだろう？」

そう、備えは必要だ。

例えそれが俺の日常と遠くかけ離れていたとしても、だ。帰るためなら、なんだってやるしかない。

「そこで、妖夢にお願いがあるんだ。いや、妖夢さん、お願いがあります」

俺は座布団の上に正座をして、妖夢へ体ごと向き直る。

「ど、どうしたんですかそんなに改まって」

妖夢はいきなりの事に驚いた様子で、おたおたとする。

構わず、両手を畳につけ頭を下げ、土下座をした。

「俺に――！」

満身の思いを込めて、口に出した。

「剣術を教えて欲しいそうよ、妖夢」

はずだったのに。

対面から呑気な声があがり、折角の俺の思いはかき消されてしまった。

がくりときた。

畳についた両手がすべり、体全体が畳につく。なんとも間抜けな姿勢だ。

「幽々子様？ え、え？ 一体どういうことですか？」

声の主は矢張り幽々子だったようだ。

少しだけ頭を上げる。妖夢は酷く動揺しているようで、今だ倒れ伏す俺と、おそらくは呑気な顔をしているであろう彼女の主に、おろおろと交互に目をやる。

「言った通りよ。その外来人の剣術指南役」

おそらくは妖夢の困惑ぶりなどお構いなしに、にこやかに、平然と言っているに違いない。

「ですが幽々子様、私はまだ未熟です！ 剣術を教えるなど出来ません！」

「だからこそよ。これは修行の一環だと思いなさい、妖夢。他者へ己の道を示すことで、自らの信念をより確固たるものとする。いい機会だとは思わない？」

「うう。で、ですが……！」

妖夢が一瞬口ごもった。その合間に、幽々子は更に言葉を続ける。「妖夢が少しでも強くなってくれば、という私からの思いでもあるのよ。二人で修行するのも良いじゃない。お互いを高め合うライバル！ 青春だわ！」

「ううう、幽々子様のお命であれば従わないわけには参りませんが……」

妖夢はそれでもまだ渋っている。しかし、先ほどより揺らいでいるのが分かる。

話の流れが変わったことを察知して、俺はさつと身を引いて再び土下座の体制を取った。

「妖夢さん、お願いです。俺はどうしても、力と、意志を身につけなければならぬんです！」

今度こそ、満身の思いを言の葉に込めた。ここでまた、立ち止まるわけにはいかない。

確かに、妖夢のあまりの困惑ぶりに、内心心苦しくも思う。

もし俺が何かを習っていたとして。誰かが俺に教えを請いに来たら、俺だって今の妖夢と同じ態度を取るだろう。

未熟者である俺に教わっても、それはその人のためにはならない、と。

でも、今頼ることが出来るのは、目の前にいるこの少女しか居ない。

彼女が、何を思っ て未熟と言ったのかは、俺には分からないけれど。

彼女ならきつと、大丈夫だと思っ のだ。

毅然とした態度で、自らの「役目」を名乗った彼女の瞳の中には、確かな物が宿っ ているように見えたから。

「いや、そ、そんな……。と、とにかく頭を上げてください！」  
おろおろとする妖夢の様子が、見なくてもわかった。このまま続けていてはおそらく、話にならない。

素直に頭をあげると、そこにはやはり、困惑の極みにいる妖夢の表情があつた。手をぱたぱたと振っ ている。

妖夢は助けを求め るような目で、主にちらちらと視線を送る。しかし、

「よ、う、む」

諦めなさい、という言葉を含んだ言葉が返っ てくるのみ。

「うっ……」

「よーうーむー」

「何故紫様まで!?!」

「ようむー」

「あ、あなたには関係ないでしょう!?!」

後ろの二人からも、同じような声が上がった。片方、特に俺の真後ろから聞こえたそれは完全に遊んでい るように思える。

「妖夢」

そして、もう一度。彼女の主の、驚くくらいに真剣な声かして。

がくりと肩を落とし。

とうとう、目の前の少女は渋々頷いたのであつた。

「……わかりました」

「あ、ありがとうございます！」  
妖夢のか細い声とは対象に、俺の声は嬉しさのあまり少し大きくなる。

溜息を一つつくと、妖夢は姿勢を正し、真面目な顔つきになった。意志の強い瞳が、再びその目に宿るのを感じる。

「一つ、約束して下さい。 例えいかなる状況に陥ったとしても、刀を振るうことを躊躇わない、と。自らと、自らの守るべき物の為に」

紡がれるのは、重い言葉。

胸の内を切り裂く、刀の如き言葉。

だがそれを、俺は受け入れなければならない。目を逸らすことは出来ない。

意志無き力なんて、俺の欲しがっていたものではない。目を逸らして得た力に、何の意志が宿ると言うのか。

傍らに置いてある、自らの力に目を遣った。鞘にしっかりと収まった刀はしかし、少し動かすだけで白刃を覗かすことが出来る。

刀は何も言わない。

目を閉じ、大きく息を吸って。深く長く、心の内を出すように、ゆっくりと吐いた。

目を開く。

妖夢の目が、まっすぐ俺をとらえた。逸らさず、正面からそれを受け止める。

「わかりました。その約束、破らぬことを誓います」

決意を込め、明瞭な声で。遙か遠くまでにさえ聞こえるように、言った。

妖夢は軽く頷くと、満足げな顔で、少しだけ微笑んだ。

「話はついたようね」

緊迫した空気を和らげるように、優しい口調で紫が言った。

相変わらず、表情は読めない。でも気のせいかな、何処か嬉しそうな顔をしているように思えた。

「じゃあ、これで話はお終いかい？ そんなやお八つの続きに、あたいはひ　子をも一つ頂こうかねえ」

小町は　子の箱に手を伸ばし、一つつまみとった。みれば、開封済みのビニールが既に三つも置いてある。

しかしよくよく見れば、俺の対面に座っている人はその倍以上を空けていた。何時の間に食ったものか、不思議だ。

そういえば、亡霊に食事は必要なのか？

そして、何故　はこんなに人気なのか？

皆美味しそうに食べているし。いや実際、確かに美味しいけども。緊迫した空気から一転、和やかな雰囲気に戻ってきた所で、妖夢がまた口を開き、

「そういえば、明月さんはどこに泊まるんですか？　白玉楼なら部屋はありますが」  
首をかしげながら尋ねる。

「あ」

ひよこを口に入れようとしたところで、手が止まる。口を開いた状態では、あ、が一番発声しやすい。これはついさっき学んだことだが、無駄知識が生かされた、という訳だ。  
まあそれはいいとして。

泊まる場所の問題の事を、完全に忘れていた。

荷物のことといい、我ながら度忘れにも程があると思う。

「あら、それならもう解決しているわよ」  
どうしようか、と考えようとしたところで、思わぬところから声  
が上がる。幽々子だった。

紫と顔を見合わせて微笑み、それを　妖夢に向ける。直感で何かを感じたのか、妖夢は体を強張らせた。

「妖夢が、博麗神社に行くの」

西行寺 幽々子は、ごくごく自然な頬笑みを浮かべてそれを口に  
し、言い終わると、誰の反応を気にすることも無く、ひよ を口に  
し、幸せそうな顔を浮かべた。

一瞬のことだったのだろう。

しかし俺は、その静寂を遙か長く、まるで永遠に時が止まったかの  
ように錯覚した。

それもそのはずで、当事者たる魂魄 妖夢は、口を大きく開けて、  
何も言えずに固まっていたのだから。

きつとその場に、咲夜がいたのかもしれない。止まった時間は、  
始まりと同じくらい唐突に流れ出した。

「な、な、な ……!!!」

声にならない、悲痛な叫び声と共に。

「うん、美味しい。紫、最高の手土産だわ」

「そう？ なら良かったわ。人里の物だと、あなた大抵は食べてし  
まっているから新鮮じゃないと思って。奇をてらったのが功を奏し  
たみたいね」

そんな妖夢を尻目に、紫と幽々子は二人だけの仲良し空間を作っ  
ている。

「ゆ、ゆゆ幽々子様。そ、それは……そう、幽々子様の身の回りの  
ことはどうするんですか!」

そんな二人の間に割り込むように、妖夢が身を乗り出して抗議す  
る。

「それくらい私だって出来るわよう」

頬を膨らませる幽々子。

「お屋敷の仕事と、庭の手入れはどうするんです!？」

「それは私の式神にやらせるわ」

幽々子の代りに紫が平然と答えた。

「そういうことだから、ね？ 妖夢」

勢いよく抗議していた妖夢が、見る見るうちに威勢を無くしていく。

流石にこれには、同情せざるを得ない。というか、俺のせいで妖夢に迷惑がかかるのは避けたい。

「いや、幽々子さん。そこまで甘えるわけには……」

隣に座っている妖夢が俺を見る。建前上、口には出さずとも、助け船を期待しているのが分かった。

「遠慮しなくていいのよ、明月。妖夢だって、別の環境で暮らすことは精神の鍛錬になるし。それに」

幽々子はそこで言葉を区切ると、俺を見据えて、怪しげな笑みを浮かべた。

「……それに？」

「あなたにとつても、一番良い状況じゃないかしら？ 紅白の巫女のすぐそばにいれるし、人里にだって簡単に足を伸ばせる。敵の情報収集だって、その方がやりやすいんじゃないかしら」

「ぐっ……！」

まさにその通りだった。

霊夢たちのそばにいれば、少なくとも結界に関しての進展は容易に掴める。また、霊夢は強い。かなり心強い。

情報収集。この点もまさしくそうだ。正確な距離は分からないが、紅魔館にしろ人里にしろ、冥界にある白玉楼から行くより、神社からの方が近いだろう。

それに、香霖堂もある。

「明月さん……」

縋るような目で俺を見ないでくれ、妖夢。

天使と悪魔の闘いは、天使側の劣勢に傾いているのだ。

「人里にも、結構色々な資料があるしねえ。稗田の所とか、寺子屋

とか、見るべき場所は多々ありそうだけど」

小町までもが、そんなことを言った。

天秤がゆっくりと、しかし着実に傾いていく。

「どうするの、明月。それでもやっぱり遠慮する？」

幽々子の笑みが俺を捉えた。

隣には、一縷の望みを俺に掛ける妖夢の姿がある。

どうすればいい。

一体どうすれば、円満に解決するのか。

「う、うう……！」

唸る。

目を瞑る。

眉間にしわを寄せる。

首を捻る。

腕を組む。

組んだまま、人差し指で指で二の腕を叩く。

悩んで、悩んで、悩み抜いた末、俺は。

積極的な肯定も、積極的な否定もしない、『沈黙』という一番卑怯な手を使って、この場から逃げ出すことにした。

「……それじゃあ、妖夢。いつてらっしや〜い」

沈黙を肯定と取り、幽々子はなにやら満足げな顔で妖夢に手を振った。

白玉楼の剣術指南役兼庭師の少女は、がっくりと、力なく肩を落とした。

その様を横目で見て、ずきずきと心が痛んだ。

「……夕飯の支度だけでも、済ませてから行きます……皆さん、食べたいか食べるんでしょう……」

立ち上がる衣擦れの音で書き消えてしまいそうなほどの細かい声を出して、妖夢が立ちあがった。

襖に手をかけた妖夢を引きとめるかのように「あ、そうそう、それ  
なんだけど」と、紫が口を開いた。

「霊夢に、明月と妖夢の分の夕飯作っておいてって言っちゃったの  
よね〜」

「え？」

二人分の声が重なる。

二人分の視線を受けて、紫はきまりが悪そうに微笑んだ

「だって明月、こんなに遅くなるなんて思わなかったんだもの。こ  
の時間なら、本当はもう帰路に着いている頃よ」

確かにそこはほぼ全面的に俺が悪いけれど。

「ば……ばんなそかな」

馬鹿な、と言おうとしたのだが、驚きのあまり舌が回らなくて、  
変な言葉が出てきた。

ということとはつまり。

夕食時には俺たち二人が来ることになっていて。

「ぶつぶつ文句を言っていたけど、あの子のことだから、きつと三  
人分……四人分かしたら？　の夕食をきっちり作るんでしょうね……。  
皆で食べる、温かい料理。一番おいしい出来たての料理。それが、  
貴方達が来ないなんてことになったら」

今から急いで帰れば、多分間に合うだろう。

しかし、ここで夕食を食べていったとなれば……。

「嗚呼、しかもそれがもし！　もしあなたたちが夕飯を食べてきた、  
なんてことになったら！」

紫はわざとらしく声をあげ、泣き崩れるようなしぐさを見せた。

「あの子はきつと、なんてことのない様な子を浮かべるでしょうね  
……。でも、裏でそつと誰も食べてくれなかった手作りの料理を処  
理するんだわ。ああ、嗚呼！　なんて不憫なんでしょう」

小芝居の演技に拍車がかかって行く。かかるにつれて段々ライ  
ラしてきた。

幽々子にしなだれかかる紫と、それを優しく包む幽々子。笑いを

こらえる小町。

「……明月さん」

軽く俯いて、この状況を黙って見ていた妖夢が、突然口を開く。  
小さな声だったが、異様な雰囲気を感じていた。

「は、はい」

その雰囲気から気圧されながら、なんとか答える。俯いているせいで、表情が読めない。それが、やけに恐ろしく感じた。

「待たせるのもなんですから、もう出発しましょうか」

そう言っ、妖夢は襖をあけて、部屋の外に出て行ってしまった。  
返事をして、慌てて立ち上がり、廊下に出る。妖夢は、一人です  
んずん歩いて行ってしまっていた。

俺は、一度部屋の中を振り返った

「小町、色々ありがとう、助かったよ」

「なに、いいってことさ。また会えたら、その時は宜しくな」

小町は快活に笑って、手を振った。俺もそれに手を挙げて答える。  
いつてらっしやい、という他二人の見送りの声に返事をしながら  
襖を閉め、先を歩く妖夢の元へ急いだ。

妖夢の足取りはかなり早く、廊下を渡り、玄関を出て、門をくぐ  
ったところで、ようやく追いついた。

俺が近寄ると、妖夢はぴたりと足を止めた。背に負った二刀がか  
たりと揺れる。

「明月さん！」

「は、はい！」

突如発せられた大声に驚き、反射的に返事をする。

妖夢がゆっくりとこちらを振り向く。先ほどの咲夜云々ではない  
が、その様がやけにスローに感じられた。

振り向いた妖夢の顔は。

笑顔だった。

寒気を覚えるほどの、笑顔だった。

「ここから博麗神社までかなり距離があることですし、走ることにしましょう」

あくまでも穏やかな。

その浮かべる笑みにふさわしい、優しげな口調で妖夢は言う。

「は、走る？ もしかして、ずっと走るんですか？」

おそろおそろ、聞き返してみた。

それは流石に、体力的に無理があるのではなからうか。

「勿論ですよ。じゃないと、本当に日が暮れますよ？」

きっぱりと言い切る。反論は許さない、といったふうだ。

「私が先頭を走りますので。明月さんについてはきて下さい。……道、知らないんですよ？」

「は、はい」

俺に出来ることは、もう返事をする事だけだった。

きつと、変なことを言えば叩つ斬られる。

それだけの圧力が満ちていた。

「それじゃあ、遅れないように。行きますよ！」

言うのが先か、走り出したのが先か。

分からないほどの速さで、妖夢は、脱兎のごとく駆けだした。

あまりに一瞬の出来事だった。

俺はただ茫然と、走り去る妖夢の姿を眺めて。

眺めて。

眺めて。

あることに気付く。

「道、知らないんですよね？」  
彼女は確かに、そう言った。

思い至ったのが先か、走り出したのが先か。  
妖夢の背中にあるはずの二刀がもうぼやけている。

俺は、もう見えなくなってしまいそうな妖夢の背中を追って、持  
てる力の最大限で、土を蹴り、駆けだした。

### 三十三章：酒宴と妖二人

酷くぼんやりしている。

眼を開いて、最初に思ったのはそれだった。視界だけでなく、頭もそうだ。真綿を敷き詰めたかのように真っ白で、何が何だか分からない。

起きぬけに、目を開いたせいかもしれない。

どうやら自由に動かせる右手で、その綿を取り除こうと目を擦った。真っ白に染まっていた視界が、段々と明瞭さを取り戻していく。反対に、視界が戻れば戻るほど、頭の中は真っ白になって行った。脳みそだけ何処かに飛んで行ってしまったのか。それとも、俺の頭の上を浮かんでいるのかもしれない。なんて。

そんな馬鹿なことは無い。

きつと眼が良く見えないせいだ。

更に強く腕を押し当て、眼を擦る。そうすると、白さは消えて、段々と、真っ暗な何かが移りこんで行くのだ。

気付けば、真白な綿はすっかり何処かへ行って、その代わりに、墨汁を溢した様な暗闇が広がっていた。

後悔した。

こんな物を見せられるくらいなら、さっきの方が幾らかマシだ。だがしかし、いくら目を瞑ろうとしても、何故かその光景が目から離れなかった。いや、頭から離れていないのか。

どうせ他にすることも無い。そう思って、残ったもやを擦り、暗闇の細部を確認することにした。

墨汁一辺倒だと思っていた空間は、実はそうでなかった。ところどころ、暗闇が深くなっていたり、少し浅くなっていたりするのだ。いくつかの浅い黒の線が、真正面にだけ垂直伸びている。

良く見よう、そう思った瞬間に、その垂直線は目の前にあった。

俺が移動したのか、それとも、直線が移動したのか　良く見たいだけだったので、瑣末な問題は捨て置くことにした。眼を凝らす。

おぼろげだった輪郭が、段々と見えていく。浅い闇が、灰色に変わり、少しずつ白くなっていく。

垂直線は、曲線を帯びた棒だ。

丸く細長い棒が、手が入るくらいの隙間を空けて等間隔に並んでいるのだ。

黒い床から、黒い天井まで、一直線に。

灯りが差し込まない暗い何処かの空間に、等間隔に並んだ丸い棒が並んでいる。

俺の脳みそが知る限り、こう言うシチュエーションが起こりそうな場所といえば　。

牢獄、か？

初めて後ろを見る。

するとそこには、たった今あつらえたかのように、薄汚い壁があった。

それなりの高さに、それなりの広さがある。この様子で行けば、おそらく三方はこんな壁だろう。見なくても分かるし、見たところでどうなるわけでもない。

やはり、ここは牢獄だった。

結論付けると、興味は壁に注がれる。後ろの壁にはひび割れやシミが見える。なのに、年月はあまり経ってないと直感した。

新しく出来たはずの物が、故意に崩された。そんな気がする。

壁の中心には、俺の影が少しだけ映りこんでいた。そこから、壁の端に向かって、どんどん闇が濃くなっていく。

光は、俺の後ろ。

つまり、牢獄の正面から差し込んでいるらしい。先ほどは、光な

んて見えなかったのだが　？

ふと気になって、二回目の、後ろを向いた。  
整然と並んだ、丸く細長い、黒い棒の向こうに。

やはり、光があった。

たった今、そこに置かれたように。

始めは薄く、頼りなく。

そして、限りなく明るく。

牢屋の中にいる俺を憐れむように、光は、見つめるたびにその光度を増す。

もっと近くで見たい。

けれど、細くて丸い棒が、しっかりと俺の目の前に立っていて、いつの間にか動かしていた左手を合わせて両手でゆすつても、叩いても、動きやしなかった。

それどころか、無駄な行為をする俺をあざ笑う看守の様に、その黒い棒はますます黒さを増していき、あるはずの俺の手まで、段々暗くなっていく。

そんな馬鹿な話は無い。

檻の暗さが、人を蝕む？

そんなはずは無い。

だってこれは、人が作ったものだから。何時だって人を飲むのは、自然の闇くらいなものだ。

ただ、例外があるとすれば

不意に、笑い声が聞こえた。

無駄な思考を嘲笑する声かと思って、きよろきよろと周りを見る。もしかして、ここには他に何かいるのか？

だが、やはり何も無い。牢獄だ。薄汚い壁と、細くて丸くて長い棒と、真っ暗な地面と天井と、俺がいるだけ。

もう一度、声がした。  
あざ笑う声ではない。  
本当に楽しそうな笑い声だった。

声は、光の中心から発せられているのだ。  
何故かそう思った。

いや、きつと。

その笑い声が、暗い面など何一つ持たない、楽しさ、喜び、そういった幸せに満ちたものだったからであろう。

聞いている者がその中心に居なくても、それをそばで聞いているだけで、幸せになれる。

そうした、笑い声だった。

だから 手を伸ばした。

ここは少し、暗い。

しかし、手を伸ばせば伸ばすほどに、その光は段々と遠ざかって行く。

そして、遠ざかるにつれ、光は一艘その輝きを増していくのだ。

眩しくて、だから欲しくて。焦りにも似た感情で、必死に手を伸ばす。

届かない。

鉄格子が邪魔をして、前に進む事は出来ない。しかもそれは、手をあらん限り伸ばせるくらいの間隙があいていて、余計に苛立ちを募らせるのだ。

物云わぬ看守は冷たく笑う。

実際、何だか寒くなってきた。

寒いのだ。

鉄格子のひんやりしたそれとは違う、骨の芯を凍らすような寒さ

が襲ってくる。

もしかしたら、光が遠くなっていくから？

暖かさが離れていき、牢獄の冷たさが増しているのか。

そう言えば段々、周りが暗くなっていく。

光は遠ざかれば遠ざかるほど輝きを増していき、ここは段々と暗  
かりが増えていく。

なのに、俺の体は確りとここにあるのだ。

周りは闇に飲まれていくのに、俺の体だけは溶けない。

残る。

暗闇に残る。

嫌だ。

それだけは嫌だ。

どうせなら、全て溶けてしまえばいい。

一人が残るなんて、絶対に嫌だ

。

迫る。

鉄格子さえも闇に飲まれてしまつて。

目の前には、微かな光だけがある。

一点。

ただ一点の光。

最後の望みをかけて、手を伸ばした。

酷く。

酷くぼんやりと　　いや、真っ暗だ。

眼を開いて最初に感じたのはそれだった。

真っ白な綿の様な霞みも無く。

目の前には、真っ暗な何かと、その中で微かに光る何かがあるのみだ。

何が、あつたんだろう。

眼前の光景から受けた驚きが薄れ、ようやく意識が戻ってきた。

どうやら何かを抱え込むように、うつ伏せに寄りかかっているらしい。腹から下がだらりと下がっていて、膝が木の板の様な物に触れている。

……木の板。

そう言えば、今寄りかかっている物もどことなく木の匂いがある気がする。それに、なんだかごつごつして顔が痛いし腕も痛い。ついでに言えば腰も痛いし、起き上げれば多分色々な所が痛むだろう。それになんだか、体がとてつもなくだるい。

体は棒のようで、手足は鉛のように……いや、言葉的には逆か。しかし、現状どっちも当て嵌まっているのは確かだった。真実は棒のように固まっていて、手足には鉛が詰まっている。

痛みと、だるさ。

一体俺に何が起きたのか。頭を挙げれば一目瞭然だろうが、だるくてしょうが無いので、真っ暗な視界のまま記憶をさかのぼることにした。

一縷の光に目を遣り、今までに思いを馳せる。

鬼に襲われ いや、そこまでさかのぼる必要は無い。

確か、そう。

紆余曲折を経て、白玉楼に辿り着き、ひよ を食べ、亡霊姫と会  
って、妖夢 。

「……妖夢だっ!！」

思わずあげた叫び声が、真つ暗な何かに反響して耳を貫いた。し  
かし、ふさぐ両手を動かす力も無い。

とにかく妖夢だ。

ああ、そうだ!

白玉楼を出て、少し行つたところで『修行』だと言われ、ものす  
ごい速さで走る妖夢を必死に追いかけたのではなかったか。

階段を半ば落ちる様にして駆け降り、幽冥の境を抜け、

森を突きぬけ、林をかいくぐり、畑を飛び越え、人を擦り抜け、

息も絶え絶えになり、置いて行かれることの恐怖と闘い、今にも

消えそうな後ろ姿を追って、

幾度足を止めそうになつても、それでも、走るのを止めず、

走って、走って、走って、走り抜いて 。

俺は、博麗神社に辿り着いた。

らしい。

記憶は無い。

綺麗さっぱり抜け落ちたと言うより、元より存在しなかったと言

うべきか？

全く記憶が無い。

かろうじて、何処とも分からない道、一応人が通れる用にある程度整備されたそれを走っていたことだけは覚えているのだ。

だが、そこから先、今までの記憶は無い。

死に物狂いとは、その時のことだったのだろう。記憶が飛ぶまで走るとは、昔なら想像も出来なかった。それも、今の体のおかげか。「妖夢、速度を落とすどころか振り向きもしなかったからなあ……」

一人ごちる。虚しい声が、また何かに響いた。

俺への怒り、というより、やけくそに近い物をあの背中からは感じた。

その背中を、霞んだ目で見ながら追って、使命感と、恐怖と、空腹に耐えながら、見失うことなく、半ば気絶しながら博麗神社に辿り着き、賽銭箱の近くに寄った所で力尽き、倒れ

今に至る。

と言う訳らしい。

なんのことはない。つまり、さっきまで見ていた物は夢。

現実に牢屋などあるはずもなく、俺がそこに囚われていることは無かった。

黒のイメージは、おそらくこの眼前。鉄格子は、さっきから顔の真ん中に走っている、賽銭箱の蓋の木の柵。大きさは少し違うが、隙間は丁度同じだ。多分この偽物の鉄格子と中の暗さから牢屋を連想したのだろう

暗闇の中光は、賽銭箱に一つだけある硬貨。一つだけ、というのが哀愁を誘うのだがまあ、それは置いておこう。

終盤から感じた寒さは、そのまま外の寒さ。まだそこまで寒くはなっていないとはいえ、外で寝るには厳し過ぎる。それに今も若干寒い。

そして、光から聞こえてきた笑い声は  
鉛が詰まったかのように重い頭を上げた。

眼を差すような、夕焼けの明るさは無く、目に入るのは薄暗い風景。俺はどれほど寝ていたのだろう。もう、日は落ちているらしい。周りを見渡すと、暗闇の中に微かに浮かぶ輪郭と、何処から漏れ出る煌々とした灯り。

想像通り、そこは博麗神社だった。

そして、聞こえてくる笑い声。どこまでも楽しげで、幸せそうな声。

勿論、夢の中で聞いたそれと同じものであった。まだ、耳奥に残っている。あの暗い牢屋で聞こえた唯一の光だった。覚えているのも、当然だ。

その声は、その灯りの中から聞こえてくるらしい。  
何を言っているのか良く聞こうとして、そちらに意識を向ける。

楽しげな声と、灯りにのって。

美味しそうな夕食の香りが、俺の鼻に届いた。

途端、獣の呻きの様な、低く鋭い嘶きが聞こえた。  
妖怪の仕業かと、辺りを見回す必要はない。  
俺の腹から聞こえたものだ。

つまりは、そういうことらしい。

寒い。

凄く、寒い。

寒くて寒くて、凍えてしまいそうだ。

……とにかく、目が覚めた以上ここにいる理由は無いだろう。

投げ出していた両手を動かす。やはり、鉛を詰め込んだように重いが、体力だけじゃなく気力も関係しているだろう。夕食を食べれば、少しは回復するだろう。

食べられれば、の話だが。

両手を賽銭箱の蓋に掛け、上体を起こす。

体のあちこちから鋭い痛みが走り、思わず体を丸めた拍子に、左肘を賽銭箱にぶつけた。軽く悶絶するとともに、酷い虚脱感に襲われた。

だが、おかげで少し頭も冴えた気もする。酷く空虚な感じは残るけれど。

気を取り直して。

右手で賽銭箱を掴んで、杖代わりにしながらゆつくりと足に力を込め、立つ。足が自分の物ではないようで、力を入れるたびに頼りなく揺れる。そうして揺らめきながら立ちあがる様は、まるで幽鬼のようにさえ見えたかもしれない。

立ち上がったと同時に、背中からするりと何かが落ちるのを感じた。賽銭箱を後ろ手に掴みながら、振り返って拾い上げてみれば、厚手の毛布だった。

多分、霊夢がかけてくれた物、だと思う。

わざわざこれをかけてくれたということは、俺は彼女の呼びかけにも反応しないほど、深く眠って いや、気絶していた。と考えるべきだろう。

これが無ければ、汗で風邪でも引いていたかもしれない。

心の中で例を述べつつ、毛布と、段の下に脱ぎ捨ててあった靴を手に持って、灯りの漏れる方へ歩き出した。

「あれ？」

漏れ出る灯りを頼りに、博麗神社の何処かの部屋の襖を開けた俺の目に映ったのは、予想外の光景だった。

部屋の中心にあるのは、大きな囲炉裏。縁に四つ分のお茶と、囲炉裏の傍らには、小さなちやぶ台が置かれていた。

その囲炉裏を囲むように、少女が二人座っていた。二人は俺が入ってくるのを見て、こちらに目を向ける。

見知らぬ少女であった。

「あ、ようやく起きたのね」

声が出た方を見ると、奥の襖から霊夢が顔をのぞかせていた。手に色取り取りの野菜を盛った笹を持っていて。

「丁度良いわね。今から夕食にするとところだったのよ。それとも、香りに誘われたのかしら？」

霊夢は笹を卓袱台に置く。その間も、見知らぬ二人の少女はずっと俺を見ていた。

「かもしれないね。で、それより……」

奥にいる二人を交互に見る。

「こちらの方々は？」

「ああ、それは」

霊夢が口を開こうとしたとき、右側にいる少女が勢いよく手を上げた。

「はいはい。私は伊吹 萃香！ 今は失われた、鬼、さ。宜しくね」

伊吹 萃香、と名乗った二本角の少女は、相好を崩した。

薄茶色の、背中まで届く長い髪を後ろで一つに束ねている。束ねた所からは、水色の立方体が、両手には、それぞれ黄色の球と赤の三角錐が鎖に繋がれていた。袖のない白いシャツと紫色のスカート。そして、一際目を引くのは、ねじれながら、天を向く 二本の角。

「そんなにじろじろ見てどうしたんだい？ ああ、やはり鬼は珍し

いか。そりゃ仕方ないね。なにせもう、いなくなった筈の敵だもの」  
「いなくなった？ 俺がここに来て初めて会ったのが鬼でしたが…  
…？」

忘れもしない。

逃げて、向かって、逃げて。

恐怖と、後悔と。

あの時、ここの恐さを思い知った。化け物が人を襲う、そういうことが当たり前にかかる場所で、俺がいた世界とは比べ物にならないほど危険な所だと。

箆を置いた霊夢が立ちあがりながら、ポカンとした顔で俺を見て。

「アレは鬼じゃないわよ？」

さも当たり前のように、そんな言葉を口にした。

「え」

鬼じゃ、ない？

どこからどう見ても、文献や絵巻に出てくるような鬼の姿をしていたのに？ 赤い体と、筋骨隆々な体躯、天を指す角。

「じゃあ、アレは一体なんなんだ？」

動揺しながらも霊夢に尋ねる。訳が分からない。アレが鬼じゃないとしたら、なんだと言うのか。

「それが、どうも妖怪でも無さそうなのよね。上手く言い表せないんだけど……」

喉の奥に何かがつつかえているというふうに、霊夢は顔を顰めた。彼女が何を気にしているのか俺には分からないが、妖怪退治の専門家として何か感じる所があったらしい。

「妖怪じゃない……」

「多分、だけどね。調べようにも、倒したら跡形も無く消えちゃったから、結局良く分からなかったし。……まあアレの正体がなんだろうと、鬼じゃないのは確か。鬼はそこに居る、伊吹萃香」

霊夢に指を差された萃香が、俺に向かって楽しそうに手を振った。

本物の鬼が目の前に居る。

恐ろしい生き物だと、幼いころから知っている。現代でも数多ある物語にも登場する鬼は、人を喰らい、人を攫い、人に仇なす存在として描かれてきた。

『いないもの』として認識していても、人の心の中には、そうした鬼の恐怖がこびりついている。

それは深く深く、記憶の底に刻まれた恐怖。言い聞かせじゃない、鬼が居た時に刻みつけられた恐怖。幻想郷があるのなら、昔は本当に鬼や妖怪がいたのだ。

ならば、昔から続く鬼と人の関係もまた真実。

人に仇なし、人を攫い、人を喰らい。

退治する者と、退治されるものの関係。

食われる者と、食うものの関係。

しかし。

鬼と名乗った少女、目の前にいる、幼く見えるこの少女は

「いくら見たことないからって、他の奴と間違えちゃ駄目だってば。私が鬼。今度から覚えておいてねー！」

萃香は笑いながら、傍らに置いてある瓢箪を掴んで口に運ぶ。ちやぽん、という音が瓢箪から聞こえた。

良く見れば、鬼の少女は顔を赤く染めていた。おそらくあの中には、酒が入っているのだろう。それも、とびきり強い奴が。

そうして、屈託のない笑みを浮かべる萃香からは、敵意や、悪意を感じることは無かった。

だから。

毒気を抜かれてしまったのだろう。

そんな萃香に向かって、笑い掛けることが出来たのだ。

「いえいえ、萃香さん。彼はおそらく、ここで目に映る物全てが、珍しいのだと思いますよ」

奥に座っていた黒髪少女が、鬼の少女に向かって口を開いた。そちらに視線を移し、改めて少女を観察する。

肩にかかる程度の長さで、頭に赤い頭襟を載せている。

白いブラウスに胸元の黒いリボン、黒いスカートを着ている様は一見すると何処かの制服の見える。

しかしおそらく彼女も、普通の人間ではないだろう。

慣れた、という訳ではないが、なんとなく最近は人間と妖怪の違いが分かるようになった気がする。

本当の所、博麗神社に集まってくるのは、ほぼ普通の人間ではないと言う点を一番考慮に入れたのだけけど。

萃香の不思議そうな顔を横目に、黒髪少女はちらと俺を見て、

「ね、明月さん？」

含み笑いをする。

そら、やはりだ。

大概には名前を知られているのだ。そして今までの経験から、それは人間ではない。

「確かにそうですね」

冷静に言う俺に、黒髪少女の方が少し驚いたようであった。

「むむ、驚きませんね。使い古しの台詞でしたか」

「出会い頭に名前を知られているのは、何故かよくあることらしいので。ただ、不思議ではありません」

その言葉を聞いて、黒髪少女は顔を曇らせた。からかうつもりだったのだろうが、これにはもう耐性が出来ている。

だが、何故名前を知っているのかはわからなかった。何かの能力なのか？

「知ること、そしてそれを世に知らしめること。数多の事件の真相を暴き、広く世に放つ。それが私の仕事ですので」

黒髪少女は、意気揚々と言った。

「何が真実よ。ただのパパラッチじゃないの。しかも低俗極まりない」

胸を張る黒髪少女の脇を通り過ぎながら、台所からやってきた霊夢がバツサリ切り捨てた。途端に口をとがらせる黒髪少女。

つまりはジャーナリストの様なものらしい。

「失礼な。私はいつも、『清く正しく』がモットーですよ？」

「あーはいはい。コレは射命丸 文ね。自称新聞記者だそうよ」

「そんな適当な。酷いですよ霊夢さん！ 私はですな……」

反論する黒髪少女に投げやりな返事をしつつ、霊夢は手に持った大鍋を、梁から吊るされた自在鉤にかけた。

つまり今日は、鍋ということらしい。

鍋に張られたお湯から、白い湯気が立ち上る。

やはり、囲炉裏といえば鍋料理だと思う。強く思う。俺は実際に経験したことは無いが、いつかはやって見たいと思っていたことの一つだ。

囲炉裏にくべられた薪が爆ぜ、鉤に吊るされた鍋がぐつぐつと心地よい音を立てる。

最高のシチュエーションではないか。

場はそろった。となると気になるのは、鍋だ。

何鍋だろうか。

寄せ、鴨、すき焼き、牡丹、もつ、チゲ、ちゃんこ、水炊き

他にもかなりの種類がある。奇をてらえば闇鍋なんかもある。

ここは山間のようなだし、山の幸や野菜が特に美味しいだろう。個人的には肉が食べたいものだが、ここの肉供給はどのくらいの物かわからない。

まあ、鍋が出るのなら全く問題は無い。鍋料理は何でも美味しい。締めは無いが出るだろうか。それを考えるだけでも、興奮が抑えられないというものだ。

俄然……生きる気力が沸いてきた。

「……ですから、私はれっきとした新聞記者なんですよ。明月さん  
黒髪少女は、急に振り返って俺に同意を求める。

「へっ？ ……ああ、はい。さ、流石ですね」

夕食に気を取られ、全く聞いていなかった。

曖昧な返事を返したが、黒髪少女が満足げに頷いている所を見ると、一応は誤魔化せたらしい。

その代わり、霊夢が変な顔で俺を見ているのが気になった。

「そうそう、新聞もありますよ。明月さん一部どうですか？」

黒髪少女 いや、射命丸 文の手には、いつの間にか丸めた新聞紙が握られていた。

「じゃあちよつと一つ」

幻想郷の新聞とは、一体どのようなものか。結構興味がある。そもそも新聞というものが広まっていること自体驚きだった。果たしてどのようなことが書いてあるのだろうか。

丸めた新聞紙を受け取った。大きさは普通の新聞というより、速報のそれに近い。

長らく丸めてあったと思われる反りに悪戦苦闘しつつ、新聞を開き、ざつと眺める。

まず目を引いたのは、特徴的な新聞名だ。文々。新聞 ぶんぶんまる、と読めばいいのだろうか。

そして、その横にある写真。おそらくこの新聞のメインだろう。魔理沙が何処かのドアを蹴破り、今まさに侵入しようとしている、というような写真であった。

「これは……」

どう見ても、犯罪の証拠写真である。

「中々良い写真だと思いませんか？ 何日も粘った甲斐がありましたよ。おかげでとても動きのある写真が撮れました」

「ま、まあ確かに動きはありますが……」

つまり、これが世に出回ったということ。

本当に、魔理沙は 大丈夫、なのか？ 要らぬ心配なのかどうかさえ分からない。いつか刺されそうで怖い。

俺にはどうすることも出来ないの、心配はひとまず置いておき、記事を眺めることにする。

内容はやはり、魔理沙の泥棒についての記事だった。そして、狙われたのはやはり紅魔館らしい。盗まれているのは主に書物のようだ。

パチュリーの、あの諦めとも抗議とも取れる、なんともいえない表情を思い出した。

「……その、中々に刺激的な記事でした。うん」

思った通りの感想を述べ、文に新聞を手渡そうとしたところで、霊夢が記事を一瞥した。

「あんたそれ大分昔のじゃない。どうせ読ませるなら新しいのになさいよ。というか、良く未だに持つてるわね」

囲炉裏の火を調節しながら、少し呆れ気味に霊夢が言った。

「そうなの？」

手渡そうとした新聞をまた開き、日付の所に目を遣った。

しかし、曆が違う。精々わかるのは、月と日くらいだった。

新聞から目を離し、文を見る。

「なにぶん急だったもので、今はそれしか持ち合わせが無かったんですよ」

サンプルということと、文は頭に手を遣りながら言った。

「そっぴや、ブン屋がなんでここにいろの？ ネット切れ？」

絶え間なく酒を飲んでいた萃香が、不思議そうに口を開いた。

最初からここにいたので、連れ立ってきたのかと勝手に思ってい

だが、どうやらそうでもないらしい。

「いえ実は、ここ最近起きている外来人事件について、霊夢さんに取材しようと思って来たんですよ。ところが、けんもほろろに断られまして。仕方なく、人里一週して羽休めにここへ」

「要は、夕食だけ食べに来たってこと」

えへへ、と笑う文に、下準備を終えた霊夢が、立ち上がりながら軽い批難の目を向けた。食費が……とぶつぶつ言いながら、再び台所へ消えていく。

こうして色々言いながらも、霊夢はなんだかんだで色々してくれる。そういう性格らしい。

どことなく微笑ましい。

「それで、萃香さんは何故ここに？ 暫く姿が見えませんでした。まさかここでお会いするとは思いませんでしたよ」

「あの天人が戻った後も、天界に居させて貰ったからね！。ちよくちよくこつちにも来ていたんだけど、今回もちよつと気まぐれに降りてきたんだよ」

天人に天界。またも、耳慣れぬ言葉が聞こえてきた気がして、二人を見る。

確かに、地獄があるならあってもおかしくないが、目の前にいる鬼の少女はそこに居るといふのだ。

鬼が天界というのも、なくは無い……のだろうか？

「そろそろ、戻ってこようかなあ」

何気ない一言のだったが、その言葉を聞いて、文の表情が少しだけ強張った様に見えた。

「こちら側としては、出来ればそのまま天界に居てくれた方が有り難いのですが……」

「だからさ、そっちに今更迷惑はかけないって。そんなに心配？」

「ええまあ、私個人というよりうちの社会が、ですが」

「ふーん、色々大変だね、そっちは」

萃香はあまり興味が無いと言った風に、また瓢箪を傾ける。

なにやら良く分からない話が交わされたようだ。鬼が天界からこちらに帰ってくることで、不都合があるらしい。

しかし、俺にはあまり関係のないことだ。

それに、二人を見てみると、そのことで仲が悪いとか、そういう様子も見受けられない。特に気にする様な事でもないし、詮索する様な事でもない。

この二人、仲が良いと見えるが、話しぶりを聞くと上司と部下の会話のようにも思えた。それも、退職してしまった上司と元部下だった人の会話の様な。

「それでその、さっきの話で気になったんだけど。外来人事件って何？ 今ここに明月がいるのと関係あるの？」

萃香が、俺を指さしながら言った。どうやら、事情を知っているわけではないらしい。むしろ、文が事情を知っているのがおかしいのだろう。

私も詳しくは知らないのですが、と前置きして、文が語り始めた。「ここ最近、迷い込んでくる外来人が増えているらしいのです。しかも、死んでいる状態で。私の知っている限りでは……」

文はスカートから手帳を取り出し、ぱらぱらとめくった。

「人里で二件。妖怪の山で二件。四件が確認されていますね。発見された場所は、人目のつかない場所から、町の往来まで 昼夜も問わず、ですね」

「死んでいる、ねえ……。紫の仕業じゃ無さそうだけど、だとすると誰だろうね」

萃香は酒を飲む手を止めて、文に向き直る。

「紫さんにもお話を伺ったのですが、途中ではぐらかされてしまいました。でもあの様子だと、他にも被害者がいるようです。何の意図で隠しているのかは分かりませんが、ジャーナリスト魂が燃えてきますよ！ 事件の裏に隠された真実を暴く、これぞ報道！」

一人悦に入ったように、文は手帳を持った手を震わせた。

きつとここに霊夢がいれば、「あんたのはただのパパラッチ」な

どというに違いない。何となくそう思う。

「で、明月はそれと関係があるの？」

萃香は文に苦笑いを返しつつ、俺に尋ねた。

「そうだなあ……」

どう返事をしたらいいものか、迷う。

紫が事件の事を伝えなかったということもあるし、何処まで口に出来るだろう？

少し考えた後「どうなんですかね？」と、分からないふりをした。

「そう、今回の目的は明月さんに話を聞くことでもあったんですよ。事情を隠した事に気付いたか、手帳をぱたんと閉じて、文が鋭い目をこちらに向けた。

「俺に？」

「そうですね、まあ取材ですね。今回の事件に関してと、それと外の世界についてのお話も伺えたら、と」

「と言ってもですね……」

実際、外来人の事件に関して分かっていることなど少ししかないのだ。それを話したところでおそらく記事になど出来ないだろう。

それに、外の世界のこと、果たして俺がどれだけのことを知っているだろう？

流行り物など分からないし、日常のことだって 由来や原理など知らずに使ってる物もある。情報と物が溢れたこの時代、俺が知り得ることなんて極僅かなことしかない。

とはいえ、語ることでできるものなら、拒む理由もない

「まあ、分かる範囲なら良いですよ」

「そうですね！ ありがとうございます。いや最近、ネタになる様な事件が無くてですね……」

文は眉根を寄せて、手帳をぱしぱしと叩いた。

あの中に、魔理沙の新聞のようなネタが詰まっているのだろう。どうしても恐ろしい兵器の様に見えてしまう。

「ほらほら、仕事の話はこれで終わり！ お待ちかねも来たよう

だしね！」

そんな会話を断ちきるように、萃香が何かに目を遣りながら声を上げた。

お待ちかね、とは

彼女の視線の先には、これでもかと盛られた、肉の山があった。

「おおお！」

腹の音が鳴ると共に、口からも声にならない歓声が出た。

この腹の減り具合に、肉はとても良い。しかも、激し過ぎる運動をした後でもある。

まさに完璧だと言える。

大盛りの肉を持った霊夢の後ろに、大皿の野菜を持った妖夢がいた。

湯呑みだけあって姿が見えなかったが、なるほど、夕食の準備を手伝っていたらしい。つまり彼女は、都合二回今日の夕食を作ったことになる。

難儀な話だと思う。俺のせいでもあるのだけれど……。

少しだけ、会うのが怖いというか。

萎縮してしまうというか。

あんだけ走ったし、遺恨も無いとは思っただが。

そんなことを考えているうちに、妖夢と目が合った。

「あ、明月さん！ 起きたんですか？ 今日は牡丹鍋だそうですよ！」

妖夢は、楽しげに微笑んだ。

特に怒りを感じさせない様子に、俺は胸を撫でおろした。どうやら、杞憂だったようだ。

やはり良い娘である。

そんな妖夢はというと、俺の目の前、囲炉裏の一番手前に腰掛けて、大皿に盛った野菜を鍋に移し始めた。やはりここは、妖夢の席だったようだ。

そして、囲炉裏の左側に霊夢。

一番奥に射命丸 文が。  
右側に伊吹 萃香が座っている。  
俺は。

「どうしたんですか明月さん？」

立ち往生している俺に、文が気付く。

「ええと……どこに座ろうか、と思って」

ひきつった笑みを返した。

驚くほど大きい囲炉裏でもない。俺が座るには、何処かの一角を空けてもらわなければならぬ。

気付いた霊夢が「じゃあ、ここ空けるわ」と、ずれようと腰を浮かしかけて、

「いや、明月はここだって、ここ！」

割り込んで、萃香が右隣をばんばんと叩きながら言った。萃香と文の間だ。「私もそれでいいですよ」と、文も体をずらした。

初対面の人の隣というのも少し気が引けるが、折角会ったのだし、偶にはそういうのも良いかもしれない。

鬼と同席するのも二度とないだろう。

「じゃあ、俺はそっちに座らせてもらおうかな」

笑顔で頷く二人を見て、そちらに行こうとしたところで、

「……ちよつと待って」

真剣な顔をした霊夢の言葉に、足を止めた。

「ど、どうした……？」

今までにないくらいの表情だ。

一体、何が彼女をここまで真剣にさせるのだろうか？

固唾をのんで、次の言葉を待った。

「明月、貴方 酒は飲める？」

驚くほど真剣な顔の霊夢が発したのは、驚くような言葉だった。

酒？

「どういうこと？」

「常人より弱いか強いかな。今問題なのはそこだけよ」

疑問に答えずに、霊夢は短く言葉を切った。

なんともいえない威圧感に、とにかく、訳も分からぬまま答えることにした。

「一般がどれくらい分からないけど、多分、普通より上くらいには飲める……と思うけど。それが何かあるのか？」

「そう……それなら、いいんだけど」

俺の答えを聞いて、霊夢は少し安心したかのように、表情を和らげた。しかし、まだ何か心に残るものがあるらしい。

「大丈夫だって、そんなに飲ませないからさ」

けらけらと笑う萃香。

しかしその一言が余計だった。霊夢の眼光が鋭くなり、見る見るうちに表情が険しくなる。

「あんた達ねえ……早苗ん時もそう言って大惨事になったんでしょうが！ 結局面倒見る羽目になったのは私だったし！」

「あ、あれはさあ……ほらなんというか。歓迎みたいなもので」

萃香は、鬼の様な霊夢の表情に、顔をひきつらせて弁解にもならない言葉を発した。

「歓迎の記憶までふっ飛ばさせてどうすんのよ！」

「ご、ごめんってばあ。あの後も散々謝ったじゃない……」

鬼が人間に説教されている図と言つのも新鮮と言つか、斬新過ぎる面食らう。しかも内容が酒がらみとくれば、また驚きだ。

余程の事、おそらくは相当の惨劇が起こったのだろう。先ほど出てきた名前、確か 早苗だったか？ 被害者兼加害者はおそらくその人だろう。

「まあまあ、落ち着いてください霊夢さん」

先ほどまでの酔いは何処へやら、すっかりしよげてしまった萃香を見かねてか、文が肩を怒らせる霊夢を宥めようとした。しかし、

霊夢は萃香から視線を外すと、今度は文も睨みつける。

「『達』って言ったのが聞こえなかったのかしら？」

「すいませんでした」

反省しているのかはともかく、文も凄い速さで頭を下げた。

「ほら、もう夕食にしましょう。先ほどから明月さんの催促も聞こえていますし」

妖夢がちらりと俺を見ながら、場を収める様に言う。言葉通り、先ほどから俺の腹の虫はなり続けていた。

まったく……、と霊夢はこぼすも、ひとまず怒りを収めたらしく、席に着いた。

「じゃあ、取り敢えず俺はその間に座らせてもらおうよ。酒は……飲み過ぎない程度に」

霊夢の反応を見つつ、俺は萃香と文の間の一角に座った。回ってきたお皿を受け取る。

「あそうだ、明月さんご飯要ります？」

妖夢が自分のお茶碗にご飯をよそりながら、思い出したように尋ねる。

米櫃から立ち上る白い湯気と、白米の輝くような白さがとても美味しそうだ。唾を飲み込み、大きく頷く。

「いるいる！……てあれ、他の人の分は？」

見れば、お茶碗は妖夢の分以外に一つしかない。

「皆さん大酒のみですので」

「成程」

事件の犯人格が二人と、それに付き合っただけの他の人の面倒を見れるくらいには強い霊夢、ということか。

多めに盛られたご飯を受け取りながら、一人納得した。

「じゃ、これで皆大丈夫ね。……では、頂きます」

「頂きます」

霊夢の後に続き、皆が口を揃えて言った。

何だか色々合ったがこれで、鍋の始まりということだ。

「さて、肉肉」

ついさっきまで怒られていたはずの萃香は、もう笑顔を取り戻していて、大盛りの肉をどんどん鍋の中に入れていく。その様は、まさに放り込むと言っても過言ではない。

「あ、ちよつと！ 野菜にかぶせるな！」

「いいじゃない、減らし口はたくさんあるんだしさ」

「取り敢えずコレ寄せときましよう。妖夢さん、菜箸ありますか？」

「あ、はい！ どうぞ」

なんだか、いきなり騒がしくなった。流石鍋だ。

わいわいと、仲間たちと楽しく騒ぎながら食事を共にする。

やはり良い物だと思う。

「ほら明月！ 野菜野菜！」

そんなことを考えて、目を離していた隙に、萃香が俺のお椀に大量の野菜を入れた。

「ちよ、ちよつと！ これまだ煮えてないですよ！」

「そう？ なあに、生でも食べれるから大丈夫だって」

無責任なことを言いながら、萃香はまたけらけらと笑った。

「おっと！ 肉がいい感じですね。では私が一番箸ついでに毒身を文が伸ばしかけた箸は、肉に届くことなく闖入者に払われる。

霊夢だった。

「それは私が目を付けていた奴だから。他のにしなさいってばあああ！」

空中で箸を闘わせる二人。隙あらば片方が肉に向かい、それをもう一方が阻止する。

「霊夢さん、これはどこで取れた牡丹かご存知ですか？ 何を隠そう和が妖怪の山で獲れた物なのです。だから私には、毒身の義務があるのです！」

「あんたの山じゃないんだから、そんな義務を感じる必要は無い。寧ろ私とその役を買って出る！」

二本の箸が、鍋の上少しの所で、華麗な空中戦を繰り広げる。

「肉はたくさんあるんだし、別に争う必要は無いんじゃない……」  
俺は無駄だと知りながら、口を開く。

案の定、二本の箸がその動きを止めることは無かった。せめぎ合い、膠着状態に陥った二本の箸。

その瞬間を見計らったかのように、もう一本の箸が、丁度良く煮えた肉に伸びた

「ああっ!？」

が、弾かれる。やけに良い音がして、まるで刃が触れ合ったような錯覚を覚えた。

萃香の箸の出した攻撃は、いがみ合っていたとは思えない連携で、二人の箸に阻止された。

そしてまた、泥沼の様な争いを始める。萃香も交えた、三本の闘いだ。

「ちよつと、私が獲ってきた牡丹ぐらい食べさせてくれてもいいじゃない〜!」

意地になりつつある二人の争いに、萃香もやけになりつつ加わった。多分萃香は、肉が食べられれば順番はどうでもいいのだろう。

しかし、今やただ肉を取ることさえできない。

今更だが思う。

行儀が悪いにもほどがある。

そして段々、收拾がつかなくなってきている。

萃香に入れられた生煮えの野菜を戻そうとした俺の箸も、二人に遮られるとは思いつきもなかった。

「人間の割に中々やりますね……私のスピードについてこれるとは」「そつちこそ、天狗の名前は伊達じゃないってことね……」

何故二人とも、そこまで熱心になれるのか。このままでは、鍋から野菜を取ることさえかなわない。

「あ、この肉美味しい！」

そんな空気も、妖夢の放った一言で、一気に崩れることとなった。呆気にとられた表情を浮かべる霊夢と文。邪魔がなくなり、ここぞとばかりに肉をかき集める萃香。

「？ どうしたんですかお二人共」

呆然とする二人を、妖夢は不思議そうな顔で眺めた。

勝利の軍配は、妖夢に上がったらしい。

何時の間に肉を取ったのかは俺にも分からなかった。

がくりとうなだれながら、二人はそれぞれ、良く煮えた牡丹を皿に移した。意気消沈しながらも肉には手を伸ばす所、流石と言うべきかなんというか。

妖夢は、未だ訳が分からないと言った様子で俺を見た。説明するのも何だし難だし、苦笑を返すにとどめる。

「あ……でも美味しいですねこれ」

「本当。やっぱりこの時期のはいいわね」

落ち込んでいた二人だったが、肉を口にした途端笑顔が戻ってきた。相当に美味しいらしい。

俺も、激戦の後の残り、最後の一枚を皿に移した。どうやら大半を隣にいる小鬼にかっさらわれたらしい。鬼は攫うのが理だとも言うのか。

油が程良く乗った一枚を、口に運んだ。

「ッ！！」

味噌の味と、猪の肉がかなり良く合う。絶品だ。

猪の肉は何度か食べたことがあったが、やはり獲れたての新鮮な奴は味が違う。それにおそらく、ここは自然も豊富で環境もいい。つまり、育ちがいい。

長く味わう様にして、腹に収める。途端、腹がまた大きく唸った。「おわかりまだまだあるからねー」隣でその音を聞いたらしい萃香が、俺に向かって微笑んだ。酒を一口飲んで、囲炉裏を囲む皆の姿を順番に見つめて、

楽しげに笑った。

想像していたもの、そして以前出会った鬼とは、全く違う鬼の姿。不思議だ。

今まで持っていた、鬼に対するネガティブなイメージが、ほんのわずかな時間で綺麗さっぱり無くなっている。

妖怪と鬼を区別していたわけではないけれど、それでも、あの体験は強烈過ぎた。鬼に特別な怖れを持っていたのは確かなことだった。

それなのに　今ここに居る鬼は、こんなにも楽しそうに笑うのだ。

その様は、本当に無邪気で、楽しそうで。ここに居ることが、幸せだと言つようで。

俺も、自然と笑みがこぼれた。

一つの囲炉裏を囲み、友人たちが食事を共にする。そこには種族の垣根など無く、半人半霊の剣士もいれば、鬼もいて、新聞記者の妖怪もいて、驚くことに、妖怪退治が仕事の人間もいる。

そうした、有り得ない様な出来事がここでは起こる。起こることが出来る。

誰もが誰もを受け入れて。

人と、

妖が、

外来人の俺さえも

こうして、一緒になって笑うのだ。

夢のような郷。東の果ての、幻想で。

人里離れた山の中、更けていく夜の中。

神社に灯る明かりは強まり、

楽しい笑い声は一層響いていく。

宴の始まりから時は立ち、夜は一層その暗さを増していた。

囲炉裏に掛けられた鍋はすっかり空になっていて、所々に煮崩れしたと思われる野菜の欠片があるばかり。替え玉も無くなり、締めうどんも平らげた。ご飯も三杯近く食べた。

宴も終わり、後は片づけをして寝るだけ。と言いたいところだったが。

「あんだ、まだ飲むの……？」

何本目になったか分からない一升瓶の酒を徳利に移す萃香に、霊夢が呆然としながら言った。

霊夢は部屋の襖をあけて、一歩足を踏み入れた状態のまま硬直している。鍋の中身が空になり、酒宴となったしばらく後、寢床の用意をするから、と言って出て行った霊夢。おそらく、自分が帰ってくる頃には宴も終わっていると思っていたのだろう。

「間違えた、あんたらまだ飲むの……？」

ところがどっこい。

萃香が傾けた徳利を受けるのは、文だ。そしてそのまま、自分の御猪口にも酒を注ぐ。確かにこれなら複数形にするのが妥当だ。

そしてそんな二人に、霊夢は呆れたような、驚いたような顔を向けているのだった。

それもそうだろう。

飲み始めたのは、鍋が始まってすぐ。それから今に至るまで、ずっと飲み続けているのだから。

当然部屋のそこかしこには、空になった一升瓶が大量に転がっている。銘柄や強さ甘さの区別なく、それはもう死屍累々と言った方が良さそうな様である。もしかしたら、香霖堂の店内の方がマシかもしれない。

これほどの量が神社にあったことにも驚きだが、これだけの量を消化してしまうことには更に驚き、改めて鬼の凄さを思い知った。

案外、鬼の顔が赤いのは酒のせいかもしれないとさえ思う。

そして、それに付き合うことが出来る文も凄い。流石に萃香程の量は飲んでいないが、酔い加減も萃香程ではない。上手くセーブを効かせているあたり、策士かもしれない。

そういえば、彼女の種族は何だろうか？ 結局のところ、新聞記者をやっていると言うことしか分からなかった。あとで霊夢に聞いてみよう。

「全く、心配して損したわ。一体どういう体してんのよ、あんたは」  
霊夢は二人に向けていた呆れ顔を、

文に酌をして貰っている 俺に向けた。

つまり。

かくいう俺も、『あんたら』の一人だ。

「なんだかここの酒が美味しくて、つい」

俺は酒を一口飲んで、頭を掻きながら笑みを返した。

向こうで飲んでいる酒とは少し違う味わいがする。より自然に近い昔ながらの作り方、とえばいいのだろうか？ 少なくとも、現

代で飲もうと思ったたら一苦労すると思う。

「そういうことを言っているんじゃないんだけど……本当に大丈夫なの？」

「うん。不思議なことに、それが全然平気なんだよ」

この二人の間に座ることを、霊夢があれだけ心配した理由が、実際座って見てよく分かった。グラスが空いたと見るやビールを注ぎ、御猪口が空いたと見るや日本酒を注ぎ。次から次へと酒が注ぎたされていくのだ。

あまりのペースの速さに、すぐ潰れてしまおうと思っていた。……最初は。

ところが、全くの予想外だった。いくら飲んでも、酔いが回ってこないのだ。平時では飲み過ぎという量を遥かに突破しても、最初一杯を飲んだ時と同じくらいの感覚しかない。

そんな調子で飲み続けていたところ、現在、霊夢に呆れ顔をされていると言っ訳なのである。

「確かに、明月は凄い飲むねえ。人間でここまで飲める奴はまずいない。まったく、大した奴だよ！」

萃香が、初めて会った時よりも更に赤い顔で笑いながら、俺の背中をバシんと叩いた。

少し痛い。

それを見た文が少し笑いながら口を開く。その顔も赤く色づいていた。

「鬼と付き合う人間なんて普通はいませんけど　確かに、霊夢さんより飲めるとは思っていますでした。外の世界でもさぞや名を馳せたのでは？」

「それが、こっちに来るまではこんなに飲めなかったんだけど。……

…不思議だね」

やっぱりここの酒が美味しいせいか　と言って、笑顔を文に返す。

こうして話しているだけで自然と笑ってしまうのは、やはり酔っ

ている証拠だ。しかし、件のことについて語るの避けるくらいの判断力はまだ持っている。

文もそれを見越した上なのか、不思議ですねと言って、ただ笑顔を返すだけであった。

しかしおそらく、全てを黙っているわけにもいかないであろう。「まあ、そつちはそつちで盛り上がって……。私はもう寝るわ。

布団は別の部屋に敷いてあるから、適当に使って」

霊夢は、すっかり酔っている俺たち三人を一瞥したのち、部屋の隅に向かって歩く。そこには、大量に転がる一升瓶と、その中に埋もれる様にして眠っている、魂魄 妖夢の姿があった。

妖夢は小さな寝息を立て、半霊をまくら代わりに、何故か一升瓶を抱えながら眠っている。

初めて目にした時から常々疑問だったのだが、あの半霊と言うものはどういう風になっているのだろうか。感覚とか、質感とか……。あと、寝るのか？ ……今度妖夢に聞いてみよう。

そんなことはともかく。

鍋の具が少なくなってきた頃から、妖夢は少しずつ舟をこぎ出し、鍋も終わり、酒がメインになる頃には、すっかり寝入ってしまったのだった。

その時点で布団なりなんなりを用意して、別室に寝かせてやろうと言う話にもなったのだが、家主のやる気のなさによって、こうして今まで放置されていた、と。そのままでは風邪をひいてしまうかもしれないので、賽銭箱で寝ていた時にもらった毛布をかけておいた。

しかし、部屋の端まで転がっているとは思いつかなかった。途中で姿が消えたのはこう言うことだったのか。納得だ。

「妖夢ー、朝よー。おーきーるー」

霊夢が声をかけ、叩いたり揺すったりしても、一向に起きる気配は無い。それどころか、何やら寝言まで呟き始めた。

余程の深い眠りに入っているのか……。いや、夢を見るのは浅いほ

うだけだったか？ それにしても、半霊は寝ているのかどうかが気になって仕方が無い。

そんなことはともかく。

目の前で手をかざしても、口を広げて遊んでも、御経を読んでも、妖夢はピクリともしなかつた。最後のは別の意味でピクリともしなくなる可能性があつたが、聞いているのかいないのか、やはり反応はない。

霊夢は一度妖夢から身を離すと、一瞬何かを考え、そして諦めたように再び妖夢に近付くと、そのまま体を抱きかかえた。体から毛布が滑り落ちるが、一升瓶は抱えたままだ。枕代わりの半霊はというと、抱えられると同時に浮かびあがり、人間の体について行った。「あー……、代わろうか？」

妖夢を抱きかかえていた姿が重くてつらそうだったので、見かねて声をかける。しかし、霊夢は頭を振ってそれを断つた。そしてそのまま、部屋の外の暗がり消えていった。

多分、妖夢を寝かせに行った後は戻つてこないだろう。果たしてここに居る三人でまともな片づけが出来るだろうか。

その様子を黙って見送つていた文が口を開いた。

「明月さん、大丈夫だとは言つていましたが、そろそろ寝たほうがいいのでは？ いくら酒に強くても、睡眠を疎かにしてはいけませんよ？」

「それは、明日の取材に響くから？」

返した言葉に、文はその通りです、と頷いた。

「外来人から話を聞けるなんて、千載一遇のチャンスですからね。相手もベストの状態でなければ、まともなお話を聞くことも出来ません」

「普通だとまともな話が無いかもしれないぜ。そしたら、一寸狂つていたほうがまともに話せるかもしれない」

「大丈夫です、狂つた話をし始めたら空の上にも連れて行きますから」

文が、掴んで持ちあがるような動作をする。本当にやりそうだから怖い。

「それ多分、話できなくなるって……離せとは言えるかもしれないけど」

「離しますか？」

今度は落とす動作。

「いや結構。それに、話せることは地上でちゃんと話すから」

両手を使って御すると、文はそれでいいんです、と満足げに笑った。

ちよつとした冗談のつもりだったが、やけに不穏な会話になった気がする。

「その代わり、人里の案内は宜しく」

「ええ、それは任せてください！ 伊達に新聞記者やってるわけじゃないですからね。神社でぐうたらしている何処かの巫女さんより役に立つと思いますよ」

文は得意げに言うが、俺は今の言葉が霊夢に聞こえなかったかと言う点に関心がいった。意外と聞こえていたりするものなのだ。

しかし、暗がりから御札が飛んでくるようなことは無かった。少し残念。

「とにかく、頼りにしているよ。特に食事関連ね。……昼飯おごってくれるんだよね？」

「は？ 何時そんな話が出ましたか！？」

目を剥いて驚く文に、薄い笑みを返した。

勿論そんな話は俺の創作である。

「……ま、まあいいです。その代わり、お偉いさんを問い詰める記者の様に取材させてもらいますからね！」

無然とした表情をしながらも、文は食事の件を了承した。意外と言ってみるものである。

しかし

「お偉いさん……汚職事件……御食事券。なるほど」

中々に高尚なセンスを持っているようだ。

「ちよ、ちよっと待ちなさい！ 私はそんなギャグを言ったつもりは無いわ！」

「あ、敬語抜けた」

俺が指摘すると、文はしまったと言わんばかりの表情をしたのち、口に手を遣つて、咳払いを一つした。

「と、とにかく、明月さんはそろそろ寝たほうがいいです。絶対に腕を組み、断定するように言われた。

「んー、確かにそうだね、明日に期待するとして、そろそろ寝るよ。時計と言う概念がこの部屋には欠如している。そのせいで、先ほど霊夢が部屋の戸をあけるまで外の暗さに気付かなかった。もう寝るには遅すぎるといふ時間だろう。」

「……なんだか、随分打ち解けたね。明月もいつの間にか敬語抜けてるし」

俺たちのやり取りを笑いながら眺めていた萃香が、御猪口を傾けながら、まじまじと俺たちを見る。

そういえば、気付かないうちに二人への敬語が抜けていたし、文や萃香とも普通に話していた。相手から言われるか、余程の事が無い限り、初対面の人とは敬語を使って話すようにしているし、少し距離を置いて話すようにしているのに。

食事を共にする、というのも大きいけど、鍋だったのが決め手だったかもしれない。それと、酒だ。

一つ囲炉裏を囲む、酒を酌み交わす　打ち解けるには、この上ないこと。

日常とかけ離れた空間で、日常とかけ離れた者たちと会話し、友人となる。忌避し、最初は恐れていた者たちと、酒を酌み交わす。

最初思い描いていたものとは遥かに違う。俺は、非日常に染まる前に、日常に戻ろうとしていたのではなかったのだろうか？

なのに、心の中は暖かさに満ちていた。不思議な充実感と、満足感と。

でも、決して忘れてはいけけない。俺の帰る日常は、ここに無いことを。

自分に言い聞かせるように、心の中で呟く。

日常は、外にしかない。  
ここは、幻想の世界で。

俺のいるべき場所は、外にしかない。

御猪口にあつた酒を一息で飲み干し、腰を浮かせた。少しふらついたが、すぐに体勢を立て直す。

「それじゃあ、また明日。萃香は」

「私は多分、その前には帰っているかな。だから、さようならだね」「そっか……」

俺がここに居る限りは、会うことも出来るけれど。

何時帰るか分からないなら、やはりここは、さよならなんだろう。

「じゃあ、さようなら」

「うん、さようなら」

別れを口にして、萃香のわきを通り過ぎて、空け放しになっていた襖に手をかけて。

手をかけて、足を止めた。

異世界に来たとはいえ、友人には変わりがない筈。

ならばやはり 友人に言う言葉ではなかった。

俺は部屋を振り返り、萃香に向かって、短い言葉を発する。それは、可能性の約束だ。

「……また機会があったら、飲もう。今度は、夜が更けるまで」

萃香は一瞬、驚いたような表情を見せて、

「勿論！」

すぐに、嬉しそうな顔で頷いた。

萃香は鬼で、俺は人で、外来人で。

でもこうして今日、酒と一緒に飲んで、笑い合っことが出来たら、それは一度だけのものじゃないはずだ。

だから彼女は、何時でもここに来て、霊夢や魔理沙を相手にしながら、時には他の誰かも混ぜて。

酒を、楽しむのだろう。

二人笑いあつた後、俺は部屋を出て、寢床へ向かう。

後ろからはまた、文と萃香の楽しげな声が聞こえてきた。

鬼と人との関係。

こういうのなら、全然良い。

ここでの仮住まいである博麗神社の一室、俺の部屋。

中々に広さのある一室で、住まわせてもらった当初から自室の様に気に入っていた。無論だが、外界にある俺の部屋より遥かに綺麗

だし、遙かに広い。

物が少ないのは確かだけれど、それを補って尚あまりある広さと綺麗さと何よりも風情があった。

しかも、寒くも無く、かといって熱くも無く、丁度良いひんやりした温度なのだ。おかげで布団に入って寝がえりを打つとあの何とも言えぬ気持ちよさが楽しめる。

酒で火照った体には丁度良い。今夜はよく眠れそうだ。

などと。

何時もより上機嫌でそこに戻ってきた俺を待っていたのは。

並べられた二つの布団と。

片方の布団で眠る、魂魄 妖夢の姿であった。

## 三十一章：人里に学ぶ

宴から一夜が立ち、翌日。

酒をたらふく飲んだにもかかわらず、逆に平素よりも速く起きた俺は、妖夢の作った朝飯を食べたのち、霊夢の要請で境内の掃除をした。

適度に働き、適度にサボリ。そして時刻は周り、正午。  
俺は文と連れ立って、多くの人で賑わう人里を歩いている。

そう。

昨日の話　である。

鍋をつついていている途中、霊夢がため息交じりに漏らした言葉から始まった気がする。

食材が切れた、とか。いや、酒が切れそう、だったか？　どちらも言っていた気もするがとにかく、そういう話だった。

それもそうだ。

そもそも、昨日の夕飯は三人分で事足りるはずだった。それが何故か五人が増えて、更に献立は鍋だ。

減らなかつたのは米だけで、備蓄の野菜類は全て各人の胃の中に収まっただろう。更に言えば、酒宴となったのちのおつまみとして、干物やら漬物やら　結構な量が出て行ったはずだ。

そんなことを愚痴りながら、霊夢はあからさまに俺たちを見つめてきたのだった。ただで飲み食いしたのだから食材くらい買ってこい、という隠しきれない意志が現れていたのは言うまでも無い。

結果、妖夢がその標的になったのだった。

しかし本人にも思う所はあつたらしい。

「しばらくの間泊めてもらうなら、炊事洗濯などは出来る限り手伝いたい」とのこと。

本当に、生真面目で良い子だ。そのおかげで、霊夢や萃香や文にからかわれていたのだが……。  
それはともかく。

話は進み、今日一日を、妖夢が博麗神社に慣れるための日とすることになったのだ。当然、修行は出来ない。俺としては出来るだけ早く修行を始めたかったのだけれど……師匠にそう言われては頷くしかない。

となると問題になるのは、俺の行動だろう。

空き時間を妖夢に付き合うか、いやいや、それはかえって邪魔になるか、と思索していた所　それなら取材がてら人里を見に行かないか、と文に提案されたのだ。

霊夢の許可も下りたので、俺は二つ返事で了承した。

俺、妖夢、文の三人で人里まで下り、そして門の入口辺りで妖夢と別れて。

俺は文と一緒に人里観光をしている。

「あそこが酒屋ですね。で、その角を曲がると、中々良い居酒屋があります。……あ、その向こうに見えるのは夜中でもやっている居酒屋ですね」

隣を歩く文が、通りに立ち並ぶ店を次々に指さす。

「夜中って言うことは、妖怪も入れる……ってこと？」

「そういうことです。人里とは言いますが、妖怪も普通に買い物に来たりもしますし、今言ったように妖怪のために店を出している所もあります。ですが、ここで人を襲うことはできません。ここは、妖怪の賢者によって守られていますからね」

「なるほど、何かあったらその賢者が動く、と言う訳だ。襲われたくなかったら、ここに居ろ、と」

つまりそれは、人里の外ではいつ襲われてもおかしくは無い、と言うことにもなる。ましてや夜中に外に出たら、相当の危険が伴う。「そういうことです。それに、ここ人里には、賢者とは他に人間を

守る者もいますから、今日の幻想郷では、人が襲われることはほぼ無いですね」

襲われる例外は、不用意に夜中外を出歩いていたり、危険な場所に足を踏み入れたりする者だけらしい。こちらも弁えていれば、危険の九割は回避できるだろう。

「なるほど。まあ、大体の仕組みはわかったよ」

俺が頷いて見せると、文はおあいご用です、と胸を張った。

懇切丁寧な文の説明のおかげで、人里とそれを取り巻く環境については大体を理解出来たと言えるだろう。流石新聞記者。環境や情勢には強い。

だが、一つだけ不満が残る。それは

「でも、折角里に来たんだから酒関連以外の店も教えて欲しいんだけど？」

頷いた姿勢から、顔だけを回してじろりと文を覗き込む。

門をくぐってから今に至るまで。

道中には様々な種類の店があつたのだが、何故か文の説明の比重は九割酒に傾いていた。

そもそも、居酒屋を紹介されても軽々しく入れない。一人で入る勇気も無ければ、財布の中身も無い。ざららと賽銭箱に手持ちを入れた日が恨めしい。

いや、俺の持っている通貨が通じる筈も無いんだけど。

「あ、やはり駄目ですか」

「わざとだった!？」

嫌がらせ以外の何物でもなかった。

文は曖昧な笑顔を返すと、

「わかりましたよ、では」

今度はちゃんと、居酒屋以外の店の案内を始めた。

流石は新聞記者、だった。色々な店を知っているし、説明するの  
も上手い。

最初から言ってくれれば尚良かった。

そうとも、折角人里に来たのだから、面白そうな所を紹介して貰わなければ損だ。特に飯屋。

勿論それ以外にも、俺の興味を引く店はたくさんある。

そう、驚くほどたくさんあった。

幻想郷は狭い。

その狭い幻想郷の中にある、たった一つの人間の里。それが今、俺たちが歩いている所だ。

文の話によると、基本的に人間の生活に必要な物はここで全て揃うらしい。そして、全てがそろうと言われるからには、ここ人里は俺が思い描いていたものより、遥かに近代的だった。

江戸から明治にかけての庶民の町並みを、そのまま切り取って持って来たような感じ。しかも、片田舎の風景ではなく、何処かの城下町を連想させる規模と風景だ。旅行で行った京都の、太秦にある有名観光地を思い起こさせる。

表通りに軒を連ねる、数々の店。細工、茶屋、八百屋、酒屋、小物屋 他にも、色々な種類の店があり、何処も人で賑わっている。全てがそろう、と言う言葉にも納得だ。

今歩いているのはこうした店が立ち並ぶ大通りだが、少し小道に入れば、平屋に長屋、居住区があるらしい。歩きながらちらりと覗いてみたが、その佇まいに何故か心が躍った。

もっとも、はしゃいでいたのは最初からなのだが。

人里に入る門には、門番と思しき人物が二人立っていた。でも俺たちが普通に入れたし、多分あれは暴れている妖怪とかが入り込まないようにするためのものだろう。先ほどの話で、大体の事情は理解したし。

それに、あの時の怪しさは俺の方が上だっただろう。今思い返してもはしやぎすぎだった。

いや、それも仕方ない……と思う。こうした町並みで人が本当に生活している。今でもこうした風景は何処かで見られるのかもしれないけれど、やはり珍しい物だ。

それに、この世界でもちゃんと大勢の人間が生きていることが分かった、ということもあった。

心細さとは少し違う。

この世界でも、ちゃんと暮らしがあるということを知った。生活があることを知った。

行き交う人。

家族や友人、色々な人がいて。もしかしたら中には、妖怪もいるかもしれない。でもそんなことは関係なく、ここには生活があつて、生きている人がいる。

やはりここは、一つの世界なのだ。

そう、理解した。それだけでも、ここに来た意味はあつたと思う。勿論、珍しい町並みを見るのも楽しい。そう驚くべきことに、人里は和一遍では無いのだ。目を見張るような屋敷があつたかと思えば、如何にも洋風な建物があつたりする。

道行く人の服装も独特だ。和服の人もいれば、ドレスの様な洋服を着ている人もいるし、チャイナドレスの様な服まで見かけた。

和洋折衷と言うより、国際的だと言つた方がいいのかもしれない。外から受ける影響もあるだろうが、妖怪から受ける影響もあるのかもしれない。

立ち並ぶ店の説明を聞きながら、そこらを歩く人を眺めた。

大半は人間だと思つけど、もしかしたら妖怪も居るかもしれない。何せ、隣にいる文も、見た目は普通の少女に見えて、その実天狗と言つ妖怪なのだから。

……まあ、文に限らず、他の妖怪も見た目は人間っぽいけれど。しかも会う妖怪会う妖怪女性である。

そんなことを思いながら文の顔をじつと見ていたら、文は視線に気づいたように顔を向けた。

「どうしました？」

「……や、なんでもない」

なんとなく気恥ずかしくなつて、首をかしげる文から視線を逸ら

した。

「……？　そう言えば明月さん、なんだか眠そうですね？」  
逸らした俺の顔を、文が覗きこむようにして見る。  
しまった。

そっちの話に持って行かれるとは予想外だった。

「ああそれはまあ、色々あったんです。深いワケが」

「色々……？」

俺の乾いた笑みに、文はますます首をかしげる。しかし、これに  
関してはもう何も言うことはない。俺の苦労話になるだけだ。

「まあ、今は良いです。飯屋に着いたら、根掘り葉掘り聞かせても  
らいますからね！」

文は不敵な笑みを浮かべているが、俺は絶対に昨日の夜のことは  
話さん。話してなるものか。どう転んでも惨めなのは俺だ。

「あーそうそう、それで、その飯屋は何処にあるんだ？」

何でも人里で上手いと評判の店らしい。我ながら露骨な話の逸ら  
し方だが、気になっているのは事実だった。

「そうですねえ……」

文は立ち並ぶ店をきよろきよろと見回し、そろそろ着くと思いま  
すよ、と言った。

「しかし、ただ飯と言つのは良いもんだねえ」

「ただじゃないです。情報と引き換え、ですからね」

「分かってるって」

頷いて見せる俺に、文は疑わしげな視線を向ける。

外来人である俺に紫が接触していると考えるのは当然だし、口止  
めされていると踏むのも当然か。

実際、何処まで話せたものやら。

文が紫からどこまで話を聞けたかにもよるが、それを面と向かつ  
て聞くことは出来ない。では。

「明月さん、何か考え事ですか？」

文の声に思考を打ち切り、なるべく自然な風を装って答える。

「何を食べようか迷ってたんだ。定食屋だったらメニューも多いだろうし」

「なるほど、それは確かに大きな問題ですね。何を食べるかによって午後の調子も決まってくると思うものです」

これだから侮れないのだ。一瞬の思考にも反応してくる。

果たして今のも誤魔化せたかどうか。話は続いているが、会わせているだけかも分からん。

「ちなみにお勧めとかある？」

「確か、店のお勧めは」

情報に関しては、店についてその場で何とかするしかないだろう。という訳で、今は食事のことだけを考えることにした。

未来のことも重要だが、今の腹減りも重要である。

「いやあ、満足満足、と」

若い店員の、毎度と言う威勢のいい声を背中に聞きながら、暖簾をくぐって伸びをする。

とても満たされた気分。

文お勧めの店と言うだけあって、出てきた料理はかなりの美味しさだった。これなら毎日通ってもいいと思わせるほどだ。

伸びをしたまま、手をかざしながら空を仰ぐ。

少々の雲。突き抜ける青空とはいかないが、逆に日影が適度な涼しさを持っていて心地よい。

往來に行く人も増えていて、人里はにぎわいを一層増していた。

「まさか、甘味まで奢る羽目になるとは思いませんでしたよ……」  
そんな、活気あふれる昼下がりとは対照的に。

会計を済ませて出てきた文が、うなだれながら、からりと店の戸を閉めた。

「どしたんそんな顔して？」

文は答えず、財布をふるふると振る。

なんでもないと。

「違います！ 予想以上の出費だった事を表しているのですよ！」

「ああ、そっち」

その可能性は確かに否定しきれなかった。

「まあでも、知る限りのことは教えただからさ」

取り繕う様に言ったが、しかしそれを聞いた文の表情が更に曇る。

「うう、確かにそうですね。情報量が出費に見合っていない……」

腹も膨れて、満足げに笑う俺とは対照的に、文はがくりと肩を落とした。そして食べた物を確認を初めて、終わった頃には額に手を遣って溜息をついた。

定食屋での取材と言うのは中々良いかもしれない。肝心な所を突っ込まれた時に、水なりなんなりを口に含めば一瞬の間が出来る。

まあ、そんな小細工を通じる相手ではなかったんだけど。

そんな感じで、一進一退のやり取りを演じ、小一時間の取材兼食事を終えた、結果。

事件の詳細に関してはほぼノータッチ。

俺の件に関しては、大まかな事情を話す、という範囲に収まった。紫が事件の詳細を隠した意図を読める範囲で推測するならば。

やはり、事件の概要が広まることを恐れた、ということかもしれない。

今回の件は、幻想郷の境界に関する事だ。話を聞く限りでは、ここ境界は紫と博麗の巫女、つまり霊夢とで出来ているらしい。余計な混乱を防ぐのもあるだろうが、話を大事にすると余計な物も集まってくる可能性がある、ということだろうか。

そう考えると、今回の事件に関して軽々しく口を開くことは出来なかった。

俺は不慮の事故によってここに迷い込み、何故か帰れないと言う話をして、その裏に居るだろう人物が俺を狙っていることについては触れていない。

勿論、事件の裏に居る人物の心辺りも聞かれたけれど。

知らない、と。ただ一言で済んだ。

嘘をついた。

勘ぐるような文の表情はまだ覚えている。しかし、それ以上、追及される、ことはなかった？

嘘。

嘘？

その一言が、心の中に引っかかった。何か腑に落ちない。

嘘、を？

俺は文に背を向け、往来からも背を向けた。

そうだ。

何故、気付かなかった？

少女の時だつてそうだ、嘘について　今回も、嘘をついた。

俺は、今まで。

ここに来るまで。

嘘をついたことがなかった。

それを信条に？　いや違う。それを誇りにしていたわけでもない。ただ当たり前のように思っていた？

そんな 馬鹿な。

驚きは、嘘をついたことじゃない。嘘をつかなかったこと。生きるために絶対必要だ、とは言わない。だが、相手を思いやる嘘だつてあるはずだ。人間関係を築くなら、嘘を使わなければならぬ時もあるはず。

物心つく前に、酷く怒られた？ いや、心的外傷になるほどの事があつたとしても、この年まで些細な嘘の一つもつかないわけがない。

じゃあ何故。

必死に思いだしても、俺の頭の中に嘘をついた記憶はない。両の手で押さえても、胸中に問いただしても、その記憶は出てこなかった。

記憶の中を探る。奥深く。思いだそうとするたびに、鮮明になつて行く思い出。忘れていたわけではない、そう思わせる。なら、一体何故？

何故俺は、嘘をつかなかつた？

「明月さん？」

背中越しにかけられた文の声に、目を覚ました。雑踏が戻り、涼やかな空気が戻っていく。

「お腹でも痛めました？」

軽い調子で、声をかけられる。

「いや、なんでもない！」

慌てて振り返り、平静を装う。変な心配をかけさせる必要はない。しかし文は、俺の顔を見て心配そうに表情を変えた。

「……本当に大丈夫？ 顔が真っ青ですよ」

気付かないうちに、よほどひどい顔をしていたらしい。

「なに、大丈夫だって。活きが良過ぎる白玉が腹の中で暴れているだけかもしれない」

大きく深呼吸をして、笑って見せた。

気にした所で、今どうにかなるわけでもない。嘘をついたことが無いだなんて　きっと、ただの思い違いだ。

そう、無理やり納得する。

考える時間はまだある、誰かを心配させてまで思いつめるべきじゃない。

「あー、そうそう。これからどうするんだっけ？」

努めて明るい口調で、話題を変える。

決して出まかせではない。実際、俺にこの後の予定はなかった。

「……予定では、稗田家頭首にお話を伺うつもりです」

まだ心配そうにする文だったが、話を続けてくれた。

「明月さんは、私が取材している間、町を見て回りますか？　もしくは、多少退屈かもしれませんが、同行しても構いませんよ」

この町にも興味はあるし、出来れば見て回りたい。

だが、この大きさ。いくら方向感覚が正確な俺でも、迷うことは必至だろう。それに、時刻も今一つ把握しきれしていない。

となれば、選択肢は一つしかない。

「お邪魔でないなら、ついて行く」

迷わず返事をした。

一人になつた所を、往來で襲われるようなことがあるかもしれない。万が一を考えると、一人になることは避けたい。

「じゃあ、行きましょう」

「……あ！　ちよつと待って」

ふと思いつ出した事があり、歩きだそうとした文に声をかけた。文は立ち止まって振り返り、不思議そうな顔で俺を見る。

「昼飯ごちそうさま。かなり美味しかった」

御馳走して貰ったのに、お礼を言っていなかった。しかし、流石は

新聞記者である。環境や情勢にも強ければ、土地にも強い。

文は、一瞬狐に抓まれたような顔をして、それから、柔らかく笑った。

「腹が痛くなるほど食べちゃ駄目じゃないですか」

「良い店を教えたせいだな」

「ただに限りなく近い状態で飲み食いしておいて、こともあるうに私のせいですか？ ……ほら、もう行きますよ」

「ち、ちよつと待って！」

呆れたように溜息をつき、先に歩きだしてしまった文に遅れないように走って、隣に並ぶ。ちらりとのぞいた横顔は、まだ少しだけ笑っているように見えた。

「……変な所律義なんですよ」

「何か言った？」

呟くように、文の口が動いたけれど、その内容を聞き取ることは出来なかった。

「いいえ、なんでもないですよ。……そうだ、稗田家について少し話しておきましょうか？」

歩きながら、文は顔をこちらに向けた。

結局さっきのことは言ってくれないらしいが、まあ別にいいか。

稗田家と言うのも気になる。

「ひえだ……？」

文はこくりと頷くと、右手の人差し指を上げる。

「人里の知識人、とでも申しますか。稗田家は、幻想郷縁起という、幻想郷の歴史書の編纂をしている家系です。現党首は九代目、稗田阿求ですね」

「稗田阿求、か……。歴史家の家なんだな」

「特筆すべきは、歴史家と言うよりも、その能力にあります。彼女は、見聞きした物を絶対に忘れない」

その能力があれば、確かに物事を記録するには役立つ。忘れな  
いと言うことは確かに重要だ。一度見た景色さえも、写真の様に引

き出せるとなれば、妖怪の姿も、ありありと映すことが出来るのだらう。

しかし、なんとなく心に引っかかるものがある。くしゃみが出そうで出ないような、もどかしい感覚。

「そして、稗田家の当主は変わらないのです」

「代わらない？ それはつまり、生きながらえている……妖怪ってこと？」

俺の疑問に、文はかぶりを振って答えた。

「いいえ、違います。彼女は、閻魔と契約し、死ぬたびに転生を繰り返しているのです。稗田家当主として生まれるために。勿論本人ですから、能力は受け継がれますし、そうして記憶も受け継がれる」

「……転生」

思わずつぶやいた言葉に、文が反応した。

「驚かれましたか？」

俺は、文に向かって首を振る。

信じがたいような言葉だが、信じないわけにはいくまい。何せ俺は、閻魔をこの目で見て来ているのだから。ならば輪廻転生もあるのだらう。しかしまさか、転生先を指定することも出来るとは思わなかった。

それよりも、さつきから気になってしょうがないことが一つある。何処かで、何処かで聞いたような気がする。とてももどかしい。

ひえだ、ひえだのあきゆう。稗田の。

「なあ、稗田って　　」どうしてもわからず、文に声をかけようとした時、

「さて、見えてきましたね。明月さん、あれが稗田のお屋敷です」  
文が、少し先にある、立派な屋敷を指さしながら言った。西行寺と比べると見劣りはするが、それでも人里では嫌でも注意を引く程の、大きな屋敷がそこに建っていた。

洒落ただだ住まいの門をくぐり、侍女と思しき人物に訪問の用件を述べると、事前に話通っていたのか、すんなりと上がることを許された。

侍女の案内を受け、屋敷の廊下を歩く。見ため通り、中も伝統的な日本家屋の造りであった。白玉楼に無かった、年月を感じる床や天井がなんとなく落ち着く。途中なんども人とすれ違った辺り、どうやら何人も召し抱えているようで、それなりの地位であることをうかがわせる。

ただ、文とすれ違う時、時々恐ろしがるような目を向ける人がいるのが少しだけ気になった。仕方のないことだと分かってはいるのだが、何となく気分が悪い。

「こちらで御座います」

船頭を務めていた侍女が、一つの襖の前で立ち止まる。そしてそのまま一礼すると、忙しなく何処かへ去って行った。

ここに、転生を繰り返し、長い時を生きている歴史家がいる。ちよっとした緊張を覚えてもいいはずなのに。

俺は門をくぐってからずっと、稗田という名前について考え続けていた。

歴史家。稗田。どこかで聞いたことのあるフレーズ。確かに知っているはず。

出来れば、会う前にこのもやもやの正体を知りたかったのだが。

「失礼します」

そんな俺の心情は知る由も無く、文はためらい無く部屋の襖に手をかけ、開いた。

仕方ない。

後に続いて、部屋の中に入ると。

二人の女性がそこに居た。

頭に角ばっていきそうな帽子を被った、銀色に所々青みがかった長い髪の、濃い青と白の服を着た女性と。

花飾りを付けた紫色の短髪、花柄をあしらった黄色い着物に、緑色のベストの様な着物を重ねている。下は赤い。色鮮やかな服装の少女。

四つの目が一斉に此方を見る。

「おや？ 天狗のブン屋じゃないか。ここに用事とは珍しいね。君は歴史を読むより、歴史の一部を個人的に切り取ることを生業としていたと思っただが」

そのうちの一人、青い服の女性が、文の顔を見て口を開いた。

「時には歴史に学ぶのも、記事を作る上では役に立つのですよ。まあ、昔と同じような物は作っても新鮮味も無いし、売れないので適度に改変します。……それより、用事があるようなら少し待ちますが？」

文の視線を辿ると、座っている二人の間にある机に、書物がこれでもかと積み上げられていた。

一体何に使うのだろうか？

「いや、私の方の用は今終わった。そちらの用事があるなら私が出ていこう」

青い服の女性は、花飾りの少女に一礼すると、積み上げられた書物の一部を抜き出して、そばにあった風呂敷に包み始めたが、

「いえ、これも折角なので、出来れば同席頂けますか。色々と聞いていただきたいこともあるのです」

「うん……？」

女性は不思議に目を細めるが、立ち上がりかけた腰を落とした。

文が礼を述べる。

文の目的は、反対側に座っている花飾りの少女から話を聞くことだろう。つまり彼女が稗田阿求。ちなみに、今回は見た目に騙され

てはいない。入って一目見た瞬間から、幻想郷見た目逆の法則をあてはめ、推理した。

その結果当てることは出来たと思われるが、もう片方の女性は一体何者だろう。

纏う雰囲気少し他の人と違うし、閻魔とも違った厳肅さがある気がする。それに、文が話を聞く程の人となると、それなりに重要な人なのではないか？

「まあまあ、とりあえず座ってください。話はそれからしましょう。」

進む思考を中断して、花飾りの少女に促され、俺たちは机を囲むようにして、敷いてある座布団に腰掛けた。

花飾りの少女、稗田家現当主、稗田阿求　で、あろう人が静かに口を開く。

「お久しぶりです、射命丸さん。確か、夏の異変以来でしたか？」

「そうですね、あの時は確か、地震の歴史についてお話を聞かせてもらったかと」

「神社の件に関しては、お役には立てませんでした……。今日も御役に立てるかどうかわかりませんが、何でも聞いてください」

花飾りの少女は、少しはにかみながら言って、視線を俺に向ける。

「こちらの方は、取材の御供ですか？」

「お供というか、当事者の一人だと私は思っていますけど。ね、明月さん」

文がまた疑わしげな目を俺に向ける。それを見た他二人が、不思議そうな顔をした。

「……なんだか、隠すのが面倒になってきた。」

そもそも、文が紫に接触したのはいつなんだろう。もし俺が来る前の話ならば、状況はだいぶ変わってきているのではないか？

唯一の成功例である俺が出たことで、犯人がようやく動き出したのだ。ならば、天狗である彼女にも協力を仰いだ方が、手掛かりを見つけることが出来るのではないか。

いや。

やはりここは、慎重になっておくべきだろう。関連性を匂わせて、別アプローチで捜査させると言うのも良いかもしれない。なにしろ、俺たちでさえ犯人の目的は判明していないのだ。

文の視線を流しつつ、二人に向き直った。

「初めまして、八代 明月と言います。不慮の事故で、ここに迷い込んでしまった外来人です。今は帰る方法を探す傍ら、博麗神社に居候させてもらっています」

一応事情は伏せつつ、軽い自己紹介をする。外来人、と言った瞬間二人の顔色が変わったのは言うまでも無かった。

「外来人、ですか……！？ 実物は初めて見ましたが、やはり私達と変わり無い姿なんですね……」

花飾りの少女が、目を丸くして少し前かがみになりながら、俺の事をじつと見つめた。文の言うことが本当なら、俺の姿もこうして記憶されてしまうのだろうか。

「ほら阿求、私達も自己紹介しなくてはならんだろう。それに、あまり人をじろじろと見るものではないよ」

「あつ、す、すみません、つい……」

蒼い服の女性が諫めると、花飾りの少女は俺に謝り、少し顔を赤らめながら身を引いた。それを見て、青い服の女性は微かに笑いながら、口を開く。

「私は上白沢慧音。ここ人里で、歴史の教師をさせてもらっています。それで、こつちが」

蒼い服の女性 上白沢慧音は、花飾りの少女に目を向ける。

「稗田 阿求です。稗田家の現当主で、幻想郷に関する歴史書、幻想郷縁起を執筆しています」

花飾りの少女、稗田阿求はそう言って、ぺこりと頭を下げた。俺もそれに倣い、頭を下げる。

見立て通り、此方の少女の方が稗田阿求だった。見ため十三、四の少女が当主と言うことだが、まあそういうこともあるだろう。

「阿求とは、私の寺子屋で使う授業用の書物とかで、色々とお世話になってる」

もう片方の女性、上白沢慧音は、どうやら学校の先生らしい。先ほど感じた雰囲気はそう言う事だったらしい。机の上に置かれている書物も、先ほど包んでいた本も、授業で使う教科書のようなものだろう。

慧音が言い終わった時、部屋の襖が開いて先ほどの侍女がお茶を持って現れた。

侍女は軽く一礼して部屋に入り、それぞれの前にお茶を並べ終わると、また一礼して屁りから出て行った。

「……では、丁度お茶も来たようですし、そろそろ本題に入らせて頂きます」

侍女がいなくなったのを見計らって、文がポケットから手帳とペンを取り出し、表情を引きしめた。見つめる二人の表情も、少しだけ固くなる。

「いよいよ取材開始だ。果たして、有益な情報が得られるだろうか？」「今日聞きに来たこと。それは先日の、外来人に関すること。じや、ないか？」

慧音がちらりと俺に目を遣りながら、文に向かって尋ねた。

文はその通りです、と頷き、視線を俺に向ける。

「なんだかこうして注目を受けると、事件を引き起こしたのが俺のように思えてくる。実施は被害者側だが、渦中に居ると言う点で変わりはないのだろうか。」

「人里で、外来人が死んでいたこと。その件についての詳細と、以前に同じようなことが無かったか、それを聞かせて頂きたいのです」「分かりました。ではまず、事件の詳細から話しましょう」

阿求は何かを思い出すように目を瞑り、一呼吸置いて、目を開く。「四週間前くらいでしょうか。民家が密集しているとある地域で、

一人の男性の死体が発見されました。見つけたのは近所に住む村人。夕方過ぎ頃、ふらりと外に出た所、道端にうつ伏せになっている見慣れぬ人を発見した、とのことだ。」

「その、発見された男性はどのような……？」

「村人は、その人を見つけた時、死んでいるとは思わなかったそうですね。見知らぬ服装をした人が、家の前でうつ伏せに倒れている。何が何だか分からないけれど、外傷が無かったそうだから、気絶しているんじゃないかと、揺さぶってみたり、とにかく起こそうとして。しばらくやってもなにも反応が無いので、そのうち恐ろしくなつて、近所の人に頼んで医者呼んだ所、死んでいることが分かった。」

「しばらくの間、人里はその話で持ちきりだったな。この世界の外があるのは周知の事実だが、そこに住む人、外来人を見たことがある人なんてそうそういない。それが、死体となつて発見されたとなつてはな……」

「確かに、私も明月さんを見るまでは、直接話をしたことはなかったですからね。」

文は頷きながら、手元の手帳にペンを走らせている。

慧音は教師だと言っていたし、外来人のことについて村人から色々尋ねられたのかもしれない。もし色々と相談される立場にあつたなら、村人間の話についてはかなり詳しいはずだ。

今は文の取材中だから口を慎んでおくべきかもしれないが、当時の男の状態についてはもっと細かく聞いておきたい。

「その、上白沢さん。発見された当初の男の状態とか、男の特徴とか、何か知っていることはありますか？」

「男の特徴、ですか。」

慧音は一瞬、考えるようなしぐさを見せる。

「男に外傷が無かったのはさっきも出ましたが、男の表情は何か、この上なく恐ろしい物を見たかのような顔だったそうですね。魂消る……と言いますか。そうとしか言えないような状況です。竹林に

いる医者なら、詳しい死因も分かったかもしれませんが……村の医者  
の話では、体の内にも外にも、死に繋がる様な物は無く、寧ろ健  
康そのものであったと」

体に傷は無く、魂が消えるような状態。そう、魂魄が乖離したよ  
うな

「ん？」

待て。

待て待て。

複雑になりそうな思考を解きほぐす。

答えはいたって簡単なものだ。難しく考える必要はない。  
なぜならば。

とてもよく似ている状態を、俺はよく知っているじゃないか。

体……に宿る生命力が、極……端に少ない

あの時の言葉が、脳裏に鮮やかに蘇る。

常人では有り得ないほどの生命力、イコール霊力の低さ。それと、  
魂が消えたような人里の死体。

つまり、それは

「か、上白沢さん！ いや、稗田さんでも！ 人里に出たもう一人  
の外来人の死体はどんな様子だったんですか！？」

「うわっ！？ どうした急に？」

慧音から驚きの声上がる。

発見に浮かれてつい、机をひっくり返さんばかりの物凄い勢いで、  
前のめりになってしまった。

「す、すいません……」

三人の驚いた顔を見て、慌てて腰を落ち着ける。しかし、心の中の  
興奮は収まらない。

「それで、もう一人の死体の話でしたよね？」

「は、はい！」

阿求が一つ咳払いをして、俺のせいで途切れてしまった話の続きを始める。

「二人目の死体が発見されたのは、最初の被害者が出てから一週間程でした。今度は町の往来　それも、人も増える昼時の事でした。何の前触れもなく、瞼を閉じた一瞬に、何も無かったはずの所に死体が現れた。あの時は、大騒ぎになったと聞いています。なにせ、その死体は　およそ人と呼べるものではなかったと聞いています」

言葉を切り、阿求は亡くなった人を悼むように目を伏せた。

「私は、その場所に居合わせたんだが　あれは、酷い物だったよ。あの場に阿求がいなくてよかったと思う」

そう語る慧音の表情は渋い。それだけで、その死体がいっただいどんな様子だったのか、おぼろげに理解する。少なくとも、忘れることの出来ない少女にトラウマを待たせるには十分だと言うことだ。肉体と言えるものがほぼ無かった。外来人と分かるくらいのものを残して、バラバラにでもなっていたか。

想像しただけで吐き気がする。そして、それが自分にも訪れていたかもしれないと思うと、言いようのない寒気を覚えた。

「すみません。嫌なことを思い出させてしまったようで……」

気にすることは無いですよ、と慧音は微かに微笑んだ。

「でもおかげで、一つ分かったことがあります。二人ともありがとうございます」

魂の消えたような、外傷の無い死体。

そして次に現れた、人とは呼べないような有様の死体。

閃きは確信に。

紫の言葉は、一言たりとも間違っていないかった。

俺が、唯一の成功例だったんだ。

移動だけじゃなかった。

ただ外の人間をこちらに来させるだけなら、死ぬことも無かったはずだ。この結界に、人を殺す作用はないと。例えそれが無茶な転移であろうと、精々出る場所が指定できないくらい。

体から靈力を抜き取り、死ぬ一歩手前の状態にすること。

そして、その状態でも生きていられる肉体に改造すること。

十五人の実験を経て、十六人目である俺でようやく、犯人が行った人体改造は成功した。

結果として俺には、常人ならざる低い靈力と、身体能力が備わった。

……馬鹿げている。

沸々とこみ上げてくる怒りは、何時かのように頭を、白くどす黒く染め上げる、憑き物ものようなものではない。

冷静さと、確かな怒り。

勝手に体を弄られたこともある。ただ運良く生き延びただけで、俺だって下手をすれば死んでいた。

しかしそれ以上に。

個人の下らない理由で、無残にも失われた人々の事を思うと、悔しくて仕方が無い。

俺の前に来た人々は皆、実験により命を失ったんだろう。

人里に現れた死体。

一人は、靈力 生命力が消えて、魂が無くなってしまった。

そしてもう一人は、肉体の改造に耐えきれなくて、無残な死体となった。

それが、十五人も続いたんだ。

外界から無理やり連れてこられて、恐怖におびえ、結果、何も分

からずに死んでいった。もしかしたら、死ぬことさえわからなかったかもしれない。最後に見たのは、あの黒い、暗い。もしそうだとしたら。

なんて、惨い死。

犯人は、十五人もの人を殺め、その上尚、何を求めて俺を襲うのか。十五人を殺すほど、犯人のやることに意味はあるのか。そこに何がある。

他人の命を奪ってまで、この世界で何がしたい？

ここはそんな場所じゃないはずだ。決して、誰かの命を奪うために、不思議なことがあるわけじゃない。

いかなる理由があっても、犯人を行為を許す気にはなれない。

そして知らなければならぬ。犯人の目的を。理由を。殺した意味を。

でなければ、死んだ人々も浮かばれない。

元より意のままに死ぬつもりはないが、敵の正体を知るまで、尚更死ぬわけにはいかない

「明月さ〜ん。今の言い方だと、取材が終わったかのようにも聞こえますが〜？」

ふと、隣から恨めしそうな声が聞こえた。

思考を中断して見れば、文が渋い目をして俺を見ている。

「あ……。ご、ごめんっ！ もう黙っているから、続けて続けて謝りつつ、その場から一歩退いた。

どう考えても話し過ぎた。今回はあくまでも文の取材だと言うのに……。

「いや、いいんですけどねえ。おかげで、確信も持てましたしね」  
不満げな様子は残る。が、それ以上の収穫を喜ぶような素振り。はて、なんだろうか。

そう言えば、俺が話している間も、ペンの音が絶えなかったような気がする。

「あ」

その事実気付いた途端、文の顔が不敵な笑顔に変わった。そう。

どう考えても、話し過ぎだったのである。

これでは自分から、二つの事件と関連性があると言っことをばらしたようなものだ。

迂闊。折角嘘をついてまで、匂わせる程度にとどめておこうと思っただのに。

「ま、そういうことで。それではお二人とも、話の続きを」

一步後ろで押し黙る俺を尻目に、文はもう、取材の続きを始めていた。二人に話を聞いては、手元のノートに、かなりの速さでメモを取る。あの中に、俺の話したことも書きこまれているのだろう。

……まあ、言ってしまった物は仕方ない。もうどうにでもなってくれ。そもそも、嘘をつくこと自体が無理だったんだ。

発見の衝撃が大きかった。それに、文には情報をまた一つながしてしまっただが、此方が得たものもそれなりに大きいし。

案件一を放棄して、思考を切り替える。文の取材が終わるまで、まだ時間もあるだろう。貴重な話をまとめるには良い時間だ。

### 犯人の目的。

外界から無作為に人を売れて来て、魂と肉体に改造を施す、その目的。

一つずつ疑問を氷解させていけば、何か見えてくるような気がする。

まずは　そう、何故外の世界でそれをやらなかったか。

犯人が改造に使った手段は霊的な力。ならば、科学的発展を遂げた外界では、力が制限される、ということが考えられる。

しかし、例えば紫の力は外界に干渉できるものだし、一人の人間に効果を及ぼさせるのなら、その人間の目の前で相手の認識を一気に書きかえる様な事をやってしまえばいい。例えばあの、呑みこまれた闇のような。

妖怪などいない、と。

その世界を、一気に崩れさせるような実体験。

つまり、わざわざここに来させる意味はないのだ。あんなものが目の前に現れれば、誰だってこの世ならざるものを信じる。まあ、このこと向こうで力に多少の違いはあるかもしれないけれど、僅かな違いと行っても良いのではないか。

なら何故、この世界である必要があったのか？

その答えはおそらく、俺の体に起きたことと繋がり、犯人が俺を襲いに來ることと繋がるだろう。

俺が初めてここに来て、紫に襲われた時。

紫は、犯人の狙いを、乗っ取りだと言ったはずだ。

俺の体を乗っ取り、自分の物にする。

つまり、だ。

相手には、実体が無いのではないか？

魂の上に、相手の魂を上書きする。

超微量な俺の靈力を消し去って、犯人が俺に取り憑く。

体はその為に調整され、取り憑いた後犯人が使いやすいように、身体能力の改造をされた。

多分、その説で多くは通るだろう。

しかし、分からないことがまだある。

相手は実体が無い　と、だが、パチュリーが会話した人物と、妖夢がぶつかった人物には、ちゃんとした姿があった。

幽霊、ではなく、亡霊、と言うことか？　しかし、亡霊には姿がある。取り憑く事が出来るのか……？

今一つしつくりこない。だが、幽霊よりは亡霊に近い存在、という定義にしておく他はない。それ以外、俺には思いつきもしない。誰かに詳しく聞く必要があるか。

加えて言えば、肉体を求める犯人が、何故俺を殺そうとするのだろうか。折角取り憑きやすい体になっているのに、死んで魂が消えたら肉体も死んでしまっし、それでは意味が無い。それは、人里に現れた外傷の無い死体が示している。

更にもう一つ。

仮に肉体を得たとして、犯人はその体で何をする気なのか。15人の失敗を出して尚、肉体を欲しがる理由。どんな理由があるかと許す気にはならないが、これも知らなければならぬことに違いない。

結局、犯人のやったことについては理解したが、肝心の中身が分からないままだ。依然として敵の正体も掴めなければ、居場所さえも掴めない。相手の出方待ちでは、事の進展を図るのも難しい。それに、下手を打てば俺が死んでしまっ。

何か、相手の事を知る手がかりがあれば良いのだが。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4833g/>

---

東方夢月録

2010年10月18日22時17分発行